
たいらのみよこ

宇治総

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たいらのみやこ

【Nコード】

N1930E

【作者名】

宇治総

【あらすじ】

仁和三年（887）一月七日未明。上鳥羽は鴨川の舫に、一艘の小舟が着けられた。船を降りた青年は北へ、平安京を目指して歩き出す。土師季満が貧しい膳をかこい、菅原道説が使庁の甍を仰ぎ、泰佑が密議をこらす、平安京　　たいらのみやこへ。

Helio Miyako I

仁和三年 一月七日 辛巳 未四刻

初春。

根雪が泥にまじっている。朱雀大路はなけば泥濘の河と化している。

雪が降っても雨が降っても、晴れてさえいなければ、たいてい大路はこんな調子であった。上鳥羽で船を降り、初めて上洛をはたした若者に青雲の志があったとすれば、まず洛中のこんな様子にころを挫かれてしまう。

平安京の玄関口である羅城門の姿、うけあつて言うが、たいそうみすばらしい。唐風のみやびな佇まいも、こまめな補修があつたればこそその麗容なのだ。あちこち丹が剥げ、素手で剥いでしまえるような木材は残らず取り外され、若者の生まれるずっと前に、暖房の具にされて久しい。七十年前に大風で倒壊し、再度建てられた二代目ということだが、それにしてもこの寂れようはどうしたことであるろう。

肉を削がれ、瘦け、雪の烏帽子をかぶつた羅城門は、見るだに寒々しかった。京の看板とも言えるこの楼門を、他ならぬ京自身が見限っていることがいやでもわかつてしまう。

けだし玄関というものは、そこに住んでいる人間のみが関心を持つものである。初春の羅城門の下に宿る人々は目下のところ、震えるのに忙しくてそれどころではないのだ。玄関への関心はおるか、彼らは明日食べるものにも事欠いている。食べるものに事欠いている人々よりも、もう二度と食べる必要のない人々のほうがはるかに多いのは、羅城門の家族達にとって、はたして幸せなことなのかどうか。

羅城門をくぐり、大路に出た若者は、よりもよつてすぐ左へ折れてしまった。九条大路くじゅうじょうという、京のどんづまり。もしそのまま朱雀大路を北上したなら半刻ほどで、大内裏だいだいりは朱雀門に詰める衛士に誰何すいかされたであろうし、右折しても物売女ひたぎめの一人にくらいすれ違つたことだろう。が、右京うきやう、別してその南部はほとんど人など住んでいない。

寒いのだろうか、若者は背中を丸めて歩きながら、しきりに両の二の腕を撫なしている。

平安京の東、青龍に見立てられて流れる鴨川はまさに龍のごとく、時々思い出したように氾濫はんらんしては洛中の人々を攫さらっていく。

その犠牲者は老若貴賤らうじやくきせんの別なく……とはいかない。高級住宅街ともいえる左京北部、さらにその北東部には、鴨川に寄り添うようにして立派な堤つつまが築かれており、いとやんごとなき方々に、貴船は高た淤加美神かあかみのかみの気まぐれが及ばないよう、細心の注意が払われている。

かくして水は低きにしたがって流れ、おおまかに京の北東部から南西部へと、生活の跡を洗い流して殺到した。ために右京は水がたまり湿地のごとく、家々の基礎は腐り、流されてきた死体は腐り、そこに住まう人々の心はいよいよ腐つた。

淤加美おかみとは龍の謂いである。青龍も貴船の龍神も、お金持ちにだけ便宜をはかってくれろということにかけては、人と変わりはないようだ。若者は年季の入った草履を泥まみれにし、小袖一枚のみがその震える体を包んでいる。先刻より歩きながらしきりに折烏帽子おれえはしを押さえているのは、髻もに結びつける小結こむすが擦り切れてなくなつてしまったからだつた。右京に足が向いたのも、あるいは彼もまた龍に嫌われる、貧しい人間だつたからなのかもしれない。

四半刻しはんこくも歩いただろうか、若者はねばる泥を蹴散らしながら、菖蒲小路やぶみちを折れた。あたりに散見できるのは崩れた築地塀つじけい、相たおれてなかば土と化した小柴垣こしばがき、朽ちた家屋、死体。所々には田や水菜畑まである。洛中に畑があるなどと、若者は夢想だにしなかつたに違いない。これが京？ ああ、おれはなんでこんなところに来てし

まいったんたろう。彼は鼻をつまみながらそう考える。故郷のほうか、どれだけましだっただろ、老いた両親は気を揉んでいないだろか、と。

右手から物音を聞いたような気がして、若者は首を振り向けた。黒ずんだ簀子縁を挟んで、くたびれた小屋がひっそりと建っている。見たところ、元々はもう少し大きな屋敷であつたらしく、腐つた木材の山が裳を引くようにして小屋に連結されている。

遮るものない庇の下、薄暗い一間には、当然のごとく誰の姿も見えない。

きつとカラスに違いない。若者は声に出して言うと、足早にその場から立ち去つた。京には人界の怨みが凝つて鬼がでる、という噂は、どんな田舎者の耳にも入ってくる典型的な京の風聞であつた。内裏には狐狸、洛中には鬼 京に行くことのできない人々はみな自分にそう言い聞かせて、ひそかな憧れを諦めた。

ふいに草履の鼻緒が切れて、若者は泥のなかに頭から突つ込んだ。

さて、若者の見出した件の小屋、実は人が住んでいる。

若者の見た一間には、ちゃんと二人の人間が座つていた。彼らの座る板の間には、一つずつ折敷が置かれ、その上に飯と汁、申し訳程度に魚が二尾のついている。

稗粟の固粥は盛り切り、青物の汁に、煎汁を取つたあとのふやけた鰯には醬が塗つてあつた。貧しい食卓で、土器が足りないのか、鰯の坐す警座はなにかの葉っぱでできている。

こんな破れ屋に籠が好むような金持ちが住まおうはずもない。京の多くの人間がそうであるように、この家の主、土師季満もまた、数多い貧乏人の中の一人であつた。

囲炉裏の弱火に足の裏をかざしながら、飯をかき込んでいる。その背中は華奢で小柄、咀嚼する顎はあくまで細く、やや険のある切れ長の目にとがった鼻梁は女のごとくで、こころもち太めの眉を除けば、男らしい造作はまるで伺えない。

「……年の初めくらいな、餅さんあつてもええ思わへんか、尾筒丸」

尾筒丸と呼ばれたのは、どう見ても五、六ほどの童であつた。飯をいっばいに頬張つて返事もできず、応えを待つて箸を止めている季満に向かつて、彼は迎合するようにウンと頷いた。

「そやろ、たまにはええモン食べたいし」

季満は箸を置くと、部屋の隅に置かれた小さな厨子へと這つていった。荒れ果てた室内には、それ以外のどんな家具も見当たらないかびの匂いが漂っている。良くいえば開放感に富む、悪くいえばうら寂しい部屋である。

「確かこないだ実丸にもろたやつがあつたはずやが……」

あつた、と季満は華やいだ声をあげた。手には長方形に切られた紙切れが五枚ほど。

「ちよう遅なつたけどな、こら近いうち元旦のお祝いができるかもわからんえ、尾筒丸」

尾筒丸は飯を咀嚼しながらウンと頷く。

「さ、今夜はお仕事、お仕事。ようけ食べてせいだい気張らな……盛り切りやけど」

ふたたび這つて戻ると、季満は飯をほんの少しだけ土器に移し、その上に鯛を一尾のせて立ち上がった。そのまま部屋の北側の隅まで歩いていく。

部屋はどこもかしこも傷んでいたが、なぜかその一角だけが特にひどい。床も壁も水をぶちまけたように真っ黒で、ふやけた板目は乾く様子もない。その腐った板床の境目あたりにそつと土器を置くと、季満は誰もいない空間に向かつて小さく声をかけた。

「……ミツキメもな、一緒に餅さん食べような」

ほんまに、年の初めくらい餅さんあつてもええよなあ。季満はそう言つと振り返り、溜息をつきながら簀子縁に出ていった。羽を休めていたカラスがギヤアと鳴いて飛んでいく。

鈍色の曇天から、白いものが降ってきていた。

「なんだ、餅もちくらい言うてくれればいくらでも用意したものを」
ところ変わって左京、一条近衛大路は検非違使けびいし前。

菅原道説は藁蓑かりぎぬを狩衣かりぎぬの上うへにまといながら、たまたま一緒になつた知り合いの坊令ぼうれいと話はなしていた。

坊令ぼうれいとは京識けいしの一役職である。京識けいしとは京戸けいこ、つまり洛中に住まう人々の戸籍の管理を主に、庶人もろびとの苦情、訴訟の受付、軽犯罪の取り締まり、橋の修繕などの環境改善、その他諸々の雑役ざつえきをこなす行政機関のことである。

「しかし、坊令ぼうれいたるお前が餅ひとつ用立てられぬというのも……」
道説は濃い眉を寄せた。使庁しじょうの前でつい話し込むうちに、灰色の天蓋てんがいからはいつのまにか雪が降ふってきていた。

「去年の収穫ととひが振るいませんで、家人一同、青くなっております」
「まさか全て駄目だめになつたわけでは……なつたのか」

はたして坊令ぼうれいは目を伏せる。彼の唇が青いのは、寒さの為ためだけではないようだ。

「……仕事は終わったのだらう、ちとそのあたりまで付き合え」
道説は坊令ぼうれいを伴ともつて近衛大路を左に折れ、大宮大路おのみやおおじを南へ歩き出した。彼の家は六条にある。

(なんぞ売れるものでもあつただらうか)
と、道説は心中で頭をひねっていた。

背後で重い足を引きずっている彼、坊令ぼうれいの仕事は要職にして激務であつた。そのぶん禄ろくも魅力がある。

坊令ぼうれいは左右京識けいしが一人ずつ、各条に置くもので、彼らは各々三坊から四坊の広大な敷地に住む住民を、一保四町いほよしよちにつき一人の割合で選任せんにんされる保長ほちやうとともに管理・督察とくさつすることが求められる。

ちなみに一坊は四保、一保は四町、一町は四行八門しよくはちもんという制度によつてさらに三十二に分割され、一戸主いちこへしという単位に区切られる。庶人もろびとや下級官吏はおしなべてこの一戸主という空間に家屋を持つていたので、単純に一町を三十二世帯と考えると……彼ら一人の持ち

回りは約千五百世帯から二千世帯あまりということになる。

もちろんこれよりも大きな屋敷を持つ官吏もおり、すべての町に人が住んでいるわけでもない。あるいは京識から人手の都合もあることだろう。実際は確実にこれを下回るであろうが、それらを差し引いても恐ろしい数字である。彼らの涙の味がなんとなく想像できてしまう。

各保長を尋ねまわるだけでも日が暮れる上に、保長は担当区域内に発言力を持たなければならぬ都合上、その多くは官位を持つ者が任じられる。彼らも好きでやっているわけではないので、往々にしてめんどろな職務を怠ける者が出てくる。無位の坊令がそれを咎めても無視する。怒鳴りつけて追い払う。それくらいならまだかわいい方で、これも役得と勘を違えたものか、勝手に町内の人間から金品を供出させ、従わない者をそしらぬ顔で京識に讒訴するなどという者まで出てくる始末。

こういった不埒者ふちちものに対して、京識も罰則強化や巡回頻度を増やすなどの方策を取ってはいたが、旧来の薄給うすくちではとても勤め手はつかない。ために無位とはいえ、彼らには少初位しよそいという最下位の官位に相当する禄と、二町の田地が支給されていた。田地は国司こくしや博士級の専門家を除けば、五位以上の位階を持つ者にしか支給されない。

「去年の冷夏、あれか」

「はい、日照が足りなかったものかと」

道説の位階は正七位上しよしちじやうじやう、もって左衛門少尉さゑもんしやうじゆうを任じている。当然田地の給付などなかったが、日の光に左右されぬ禄を頂いていた。実のところ田地給付を少しだけうらやましく思っていたこともあったのだが、こんなことがあっては考え物である。相手が天照大神あまてりすあのみかみでは文句も言えない。

「実が入ってない？　そうですね、それは残念でしたね」

で終わりなのだ。

沈鬱ちんうつに黙りこくったまま、二人は四条に入った。このあたりは官民雑多で、目に飛び込んでくるのも築地塀あり、籬まがき、板塀ありと様

々である。着ぶくれた庶人の子とおぼしき子供が数人、柳の枝を振りまわしながら小路から走り出てくるのを、立ち止まってやり過ぎる。

「……ようやっておるようだな」

町内の小径を覗いてみて、特に荒れた様子もなく、塵や汚物が散乱していることもない。坊令と保長が正常に機能している証拠である。

「あの折、道説さまが来てくださったお蔭です」

坊令は謙遜して言った。左京四条は彼の担当であった。

「ほかの坊令もみなお前のようであつたなら、な。少しは洛中もましになるうよ」

以前、この坊令が困るのを見かねて、道説はさる屋敷の傲岸きわる保長を大喝一声したことがあつた。相手は大屋敷の家司で位階は従六位、道説よりも位が高かつたのだが、道説は検非違使を兼ねる衛門尉として保長の罪状をまくしたて、

「従わぬのならこの場で縛り上げて市獄に引つ立てるまで、即刻

お役目の引き継ぎをなされよ」

と、几帳の帷がはためかばかりの大音声で彼を恫喝したのだつた。

実のところ、検非違使にそんなことをする権限はない。洛内の武力警察組織とも言えよう検非違使庁は、その職掌を強盗や殺人などといった、重犯罪の取り締まりに限っていた。

くだんの保長もそのことを知らないわけはなかつたのだが、ただ純粹に恐ろしかったのであろうか、とにもかくにも、彼は及び腰で職務をおろそかにしないことを誓つた。が、案の定、のちにこのことを使庁に訴え出、ために道説は検非違使の職権をみだりにしたとして叱責を受けている。

「検非違使と京識はその職分がまるで違つ、お互いにその責を超えた関わり合いを持つことは癒着である」

というのが佐の言葉だつた。

「四条はまだよい方なんですよ、道説さま。九条では鬼が出るとのもつぱらの噂ですから」

九条は東寺、西寺の聳そびえる洛中最南部である、北部の繁華はんか殷賑いんしんに比べるべくもないが、少なくとも左京にはそれなりの人は住んでいた。

「夕刻になると羅城門から声が聞こえるのだそうです。いわく、鳥が啼なくような、かん高い声が」

「あそこに宿る浮浪人うかれびとではないのか」

「はあ……それがここ最近、片付ける者もないのに、その浮浪人やら死体やらがどんどん減っているというのですよ。にも拘わらず声は途絶えない。これは鬼が喰らっているのでは、などという話に」

「ほう」

道説は弾んだ声を出さないように気をつけた。つけたつもりだったが、坊令にはとうに顔色を読まれてしまっていたようだ。

「……道説さま、まさか」

「おお、そうと聞いて行かいか。鬼というのはこれで斬れるものかな」

あっけなく看破かんぱされて開き直ると、道説は蓑みのに隠れた衛府太刀えいふだちをかるく叩いた。この男、生来嘘というものがつけず、したがって演技のたぐいも苦手なのだった。

「お前とて腕に覚えのないわけではあるまい。よし、今宵こよいは付き合え。おれから駄賃だちんも出してやる」

(ちようどよい口実ができたな)

と、道説はほくそ笑んだ。ただ援助を申し出ても、この堅物はきつと固辞こじして受け取らないに違いないのだ。

「あ、いけません！ 季禄きりくの余りもまだ」

「なにをぬかす、いまさら言うても遅いわい。おれと知遇ちぐうを持つたが運の尽きと思え」

すっかり葉の落ちた街路樹の柳が、憔悴せうすいしたように路みちへしなだれ

かかっている。すでに二人の足は六条を踏んでいた。大笑しながらここで待てと坊令に言い置くと、道説は六条坊門小路へ折れていった。

（夏の祿が残っておったはず、絹の一疋も渡せば足りようか）

「百鬼夜行に遭わねばよいがな、淑野！」

道説の呼びかけに、坊令はうなだれて返す言葉もないようだった。

（なにが百鬼夜行だ、冗談のつもりか）

と、青年は思った。舌打ちをしたくて仕方がない、といった表情である。

暗い一間に六人の人間が顔をつきあわせていた。高灯台の小さな明かりを挟んで、身なりのよい、冠をかぶった男が五人の男に正対している。

寄り添うように一つところに固まっている者達は、年格好がちぐはぐで、一見してなんら共通点のあるようには見えない。板の上には円座のひとつもなく、酒肴の一献もない。およそ明かりの届く空間には、人間以外のなにもなかった。

「我らこそ庶人どもに見られれば、鬼よ霊よと騒がれるでしょうな」

左端に座っていた年輩の男が、冠男に阿ってそう言った。

「こたびの件、隠密裏にことを運ばねばならぬのは、前に説明したとおり。庶人に見咎められるくらいなら、鬼に取って喰らわれるほうを選ばれよ」

冠男の言葉はどこまでも冷たい。一蹴された男の縮こまる気配が、闇の中でも手に取るようにわかった。

「……あとは各々方、報酬に見合うだけの働きを見せていただくのみ。この上なにか尋ねたきこともないのなら、わたしはこれにて失礼させていただきます」

「待った」

青年が苦り切った声を上げた。この男、先刻からなにが気に入ら

ないのか、いつかな仏頂面ぶつじやうめんの消えることがない。黙だまっていてさえそうと知れるほどの圭角けいかくが、目鼻立ちもさだかに明かさぬ小さな灯明とうみやう越しにも十分に窺うかがえる。

「書き付けが欲しい。あんたのと、あんたの言う尊ごんき御辺ごへんとやらの、両方」

「騙かたりである、とでも？」

「おれだけが言うんじゃねえよ、この五人を代表して言ってるんだ」

青年かおの貌かおには、生来のものか自信から来るものか、ふてぶてしいものが刷はかれていた。請こわれて来たのだ、という態度を露骨に示している。

「ことが成ったあかつきには、俺を官人に取り立ててくれるつてよ。証拠が欲しいんだよ。お前の走狗そうくになるのじゃぶさかじゃねえが、俺は狡兔ことうを狩ったあとで煮られるつもりはねえ」

「……それはこの場の総意、と受け取って構わないのか」

はたして、強気かぢの青年をのぞく四人は視線をそらす。総意そういといえはまったたくそのとおりであったが、冠男かんなんがそれを聞いたあとどう出るか、彼らはそれが気になるのである。

「我らは五人の腕利きを必要としている。しているが、このほかに選を漏れた者どもが、お前達の背後せきごにおることを忘れぬがいい。そしてこの件に当たる五人は、一つの生き物のように団結して動いてもらわねばならない。一人の言質げんちは、五人の言質と見なす。陰陽おんよう師しとして取り立てることがあるとすれば、それは五人ともに。適かなわぬときは五人ともども去つてもらおう」

お前達の代わりはいくらでもいる、言うとおりにしない者が一人でもいるなら全員お払い箱だ 要約すれば、そういうことである。「もとより、我らに異存いぞんはござらぬ。そこな若者の言動は、多分おほむねに才気走つたものと解釈してください。我らはすでに一蓮いちれん托生たくしょう、必ずや仰せの通りに動くこと、確約いたします」

右端で腕を組んでいた初老の男が、立て板に水を流すがごとくま

くしたてた。自分より明らかに年の若い男に、躊躇ちゅうちゆも見せずめかに額ぬかず
いてしまう。恥も外聞も考慮しないふるまいではあったが、それを
補ってあまりある威厳のようなものが、伏した瘦骨せうこつから立ち昇のぼって
いる。

「……お互いのために、そうなることを願っている。速やかに行
動されよ」

冠男はそう言いながら立ち上がる。滑るように部屋から出ていく
その背中を、青年の舌打ちが追いかけていった。

Hello Miyako II

一月八日 壬午 子四刻

みずのえうまねのしじく

雲ひとつない夜空に、薄氷を切り抜いたような弦月が貼り付いている。

吸い込めば肺も凍てつこうかと思えるほどの、冷たい夜気が満ちている。深更の羅城門を前に、季満はがたがた震えながら、しきりに足踏みを繰り返していた。

手には小さな麻袋と、紐に下げた瓶子がひとつ。

「足に霜が降りそうや……」

足駄の齒の石段をたたくかつかつという音が、羅城門にぶつかつて無音の闇に響きわたる。低い石段を上ってしまつと、おぼろな弦月が甕に隠れ、あたりが急に暗くなつたように感ぜられた。

「死体があらへん……」

(しっかし、こら鬼が出てもおかしくないな)

目の前には手垢にまみれ、無数のひつかき傷をつけられた六本の丸柱。軒下に設えられていた五つの扉のあらかたは、すでに毀たれて薪の代に持つて行かれてしまつている。洛中と洛外を吹き抜いて分かつ、そこは奥行二丈六尺の闇の世界であつた。

首をすくめ、肩を縮こまらせてそろそろと歩きながら、季満は門の中に向かつてぱらぱらとなにかを撒き始めた。三回に一回は自分の口の中に放り込んでいる。

左手の麻袋に入った雑穀ぶつのそれは、麻の実であつた。

「いや……すごい臭いやな」

ぱりぱりと麻の実を食べながら、季満はかたちのよい眉をしかめた。

門の中はさほど広くもないというのに、夜更けであるという理由だけでは説明のつけようもないほど冥い。

といつても足下に月光が差し込んでくるので、鼻をつままれてもわからない、というほどの真の闇ではない。そこそこに散乱している骨の欠片かけらや、想像したくもないなにかに纏まとわった頭髪のかたまり、かつて人間であったもののなれの果て、死の顕現けんげんであるそれらが、空気を黒い粘質ねんじつのものに変えてしまっている。

元は白かったであろう石床や、漆喰壁しつくいかけの下部も、へどろを塗り込めたような汚らしい色合いに変貌している。清掃の手も絶えて久しい様子である。羅城門周辺にただよう異臭が、門内の白を汚けがして新しく塗りつけられた、その丹にの由来を物語っている。死者の穢血おけつと腐汁　羅城門は呪われた塗料に彩られて、鬼門へと生まれ変わりがつあつた。

「死体もなし、鬼も……見えへんな」

季満は手首に下げていた小さな素焼きの瓶子を取ると、その中身をかるくあおつた。口をゆすいでその場にぺつと吐き出し、また瓶子を少し傾けて両手を念入りに洗う。

それが終わると、季満はいったん門を通り過ぎ、南側から再度入ってきた。

「吐菩加身とほかみえみため依身多女波羅伊玉いはいたまじきよめたまつ意喜餘目出玉」

ゆつくりと神咒かじりをつぶやきながら腕を左右し、少しずつ瓶子の中身をあたりに振りまく。幾度か同じ事を繰り返し、瓶子が空になる

と、
「木気は將まさに克らん、土気は疾とく去らん、急ぎ急げ律令りつれいの如く」
足下に一枚の符ふを置き、今度は麻の実を撒きだした。これもなくなるまで繰り返す。

時は丑うし二刻にこくをまわっていた。

俗に「草木も眠る」と言われる時刻に近づきつつあった。深更である。風のそよとも吹かぬ、木枝のさやとも鳴らぬ、静寂につつまれた羅城門に、季満のかん高い声だけがいや増しに響く。

やがて手持ちの具がすべてなくなってしまうと、季満は一度背伸びをし、瓶子と麻袋を床に置いてうずくまった。

（楽な仕事やったな。延然えんねんの坊さんぼん、妙な言いがかりつけなんだらええけど）

「今年今月今日今時、時上直府、時上直時、時下直府、時下」
ばき、という物音に、季満は祭文さいもんを止めて飛び上がった。木の枝を踏んだような、乾いた音である。

（外か？）

次いで天井からどん、どん、という重い音がし、二、三のくぐもった声が聞こえる。凍りついたまま、季満は首だけを仰向あおもむけた。どうも楼うしひ上に誰かいるらしい。

（上か。誰か、やのうて、なにか、かもな）

西側の天井の隅に、ちょうど人がひとり通れる程度の穴があいており、極めて雑なつくりの竹の梯子はしがかけてあった。水干すいかんの袖をからげ、足駄を脱いで裸足になると、季満はそろそろと竹の節ふしに足をかけた。

みりつと危うい音がする。

羅城門の楼上へ上がるのは初めてのことである。季満の家はここからさして遠くない位置にあるのだが、羅城門に近づくことはあまりなかった。鳥羽や宇治うじへ向かう用事もなく、左京に行くにしても縁起が悪いので、普段は避けて通っている。

（たしか毘沙門びしゃもんはんがいやはるんやったか）

話によると、楼上には唐からから渡来したという、兜跋毘沙門天とぼつびしゃもんてんの木像が安置されているのだそう。毘沙門天はまたの名を多聞天たもんてんとい、仏教においては四天王や十二天のうちにかぞえられる重要な神様である。

仏敵ぶつてきを退治する武神であることから、鎮護国家ちんごこっかのために安置されたようだったが、どうもあまり御利益ごりやくのほうは期待できそうにない。

二階には明かりがあった。板目に白く埃ほこの目詰まりした床に、油あぶ皿ひらに取っ手をつけた手燭てしよくが置いてある。

人がいる。

「誰だ」

男が振り向き、身構える気配を感じる。するどく誰何すいかされて、楼上に首から上を出したまま、季満は動きを止めた。若い男の声には聞き覚えがあった。

「……佑たすく？」

問いかけに応ずる声は、男の肩の向こうから飛んできた。泣き叫ぶような身も世もない絶叫とともに、男が季満に飛び掛かってくる。

「季満、降りろ！ 降りろ！」

男 佑は埃をまき散らして季満の目前で転ころげると、立ち上がりながらそう言った。どうも飛び掛かってきたのではなく、後ろにいた何者かに突き飛ばされたようだ。

「なんや……あら」

こつんと手燭が蹴られた。火が油にのって床にわだかまり、佑を突き飛ばした張本人を闇に浮かび上がらせる。

毘沙門天の木像を背に、奇妙な格好をした大柄な人間が立っていた。

顔を案摩あんまの雑面のような布で覆い、黒い、これまた舞人まいびとのような装束しょうそくに身をつつんでいる。最前からむせび泣くような声が、高い位置から降ってきていた。背が異様に高い。少なくとも季満の倍はあるだろう。

「季満はやく ！」

「佑、後ろ！」

梯子に掴まったまま、季満は懐の中の符を一枚、握り潰して面男めんおとこに投げつけた。丸められた符はたよりなく弧をえがき、佑の耳の後ろあたりではんと弾ける。

「…………！」

破裂音に佑は片耳を押さえ、彼に肉薄にくはくしていた面男は、音に驚いていったん後ろに飛び退したった。濡れた布面の下端から、よだれとも血ともつかないなにかが滴したっている。うーうーと唸うなっている隙に、季満は梯子から楼上へと飛び上がった。

「行けと言うのに！」 佑が刀印とういんを結んで季満の横へ並んだ。

「……こんなとこでなにしてんにゃ、お前」

「お互い様だろう。季満、下でなにかしたか」

「……した言えばしたけど」

鋭い舌打ちが季満の言葉にかぶさった。「緩くともよもや許さず縛縄」

面男が悲鳴をあげる。床を侵す火を一顧だにせず、びつこを引くようにして二人のほうへ歩いてくる。声だけを聞いていれば、まるで助けを求めているかのよう。

「不動の心あるに限らん、臨兵闘者皆陣裂在前」

忙しく早九字を切ると、佑は袖をはためかせてなにかを引つ張るような仕草をした。途端に面男の左腕が、なにもものに掴まれたように持ち上がり、空中に縫い止められる。

「行け、季満。門から出る」

「あほゆづな、これ見といて置いてけゆづんか。それに仕事が」

「やれるものならお前が来る前にやってる！」

「こつ言われては、季満としては黙るしかない。」

泰佑は陰陽寮という、式占、造曆、天文占筮などを司る機関に所属していた。二年足らずで寮を飛び出した季満とは違い、正規の陰陽師ではないとはいえ、彼はその中の陰陽得業生という地位にいる。陰陽得業生とは、陰陽博士に師事して陰陽道を学ぶ、十人の陰陽生という学生から選ばれる成績優秀者のことである。平時は陰陽生と一緒に勉強に励み、また教師である陰陽博士の補佐をして教鞭を取ることもあった。ために官人である陰陽師たちに劣らぬ「藝」を持っており、どちらが術の達人かといえ、はつきりいつて季満とは比べるべくもない。

佑を放っていくこともできず、季満は彼の言葉を無視してその場にとどまった。

面男は暴れていた。虚空に固定された左腕を基軸に、泣き叫びながら手足を振り回している。ちょうど欲しいものが手に入らない子

供がだだをこね、腕をつかむ親に向かつて無茶苦茶に打ちかかっているかのような、不気味と滑稽こっけいが入りまじった眺め。

（生半可なまはんかな呪が効くとも思われへんし、長々と加持かじしてる時間もあらへん。いや、そもそもこいつは）

佑の舌打ちが耳を打った。面男はあるうことが、自由にならない左腕に噛みつき、食いちぎろうとしていた。かじり、引つ張り、またかじるといふ、とても人間の所行とも思えぬ行為を、飽かず繰り返している。血の飛沫ひまつがあたりに散り、床の小さな火の池に落ちて焦げたような音をたてた。

「佑、こいつ、鬼なんか？」

「……わからない。議論している暇はない、お前だけでもはやく」

食い破られた布面がはらりと落ち、繊維質のなにかが轢断れきだんされるような、いやな音が響いた。ひろい足が火の床を踏み、暫時さんじ明かりが小さくなる。その火が旧に復すか否かという瞬時、片腕をなくし顔をあらわにした男が、倒れかからんばかりの勢いで季満へと殺到してきた。

「お、オンバザラギニ」

「くそつ、爾時大会有一明王是大明王有大威力」

季満のたどたどしい陀羅尼たらいにを遮って、佑がすばらしい滑舌かつせつで経を誦ずする。

男の顔には目も鼻もついていなかった。

異様にながいが手が、季満の頭頂を擦過さっかして振り抜かれる。頭のうえにのつていた折烏帽子おれえぼしが、つかみ取られるようにして消し飛んだ。しゃがみこんで一撃をかわした季満の顔に、男のあごの先から滴つたなにとも知れぬ汁がばたばたと散る。

強く死臭がおう。男の顔には目鼻はおるか、唇や頬の肉も欠けおちたようになくなっていった。黒い衣装の襟元からはかすかに、あらわになつた鎖骨が垣間見える。いずれも鋭いもので削いでおとされたふうはうかがえない。死体をそのまま放置して、野獣にすれば

まればかくもなるうか、といった態である。

そのまま横飛びにとんだ季満の髪を、男の右手が捕らえた。

「いやっ……ハラネンハタナソワカ！」

ぐんと髪を引き寄せられ、後ろ首に噛みつかれるのと、被甲護身の陀羅尼が完成するのとは同時であった。ほんの数瞬だけ季満の肌は甲のごとくになり、男の黄色くよごれた歯の侵入を阻む。

「痛い痛い！ 佑、助けてえ！」

なかば狂乱におちいつて季満が叫ぶと、ふいにからだに覆いかぶさっていた重みが消えた。

「おおっ！」

佑が誦経を中断して、驚きの声を上げる。

突っ伏した季満を背にかばって、水浸しの単衣をまとった、振り分け髪の女童がこつせんと現れた。童子の頭突きをもらった男はもんどりうって二丈も吹き飛び、甲をつけ、邪鬼を足に敷いた毘沙門天の足下にまるんだ。

童子の単からにじみ出る水が、床の一角を領していた火をせめぐ。血の焦げたような臭いが、闇にまじってあたりに漂った。

「ああ……おおきありがとうな、ミツキメ。来てくれたんやな」
ミツキメと呼ばれた童子は、目をつむったままアーとつぶやいた。
「季満、それは？」

佑があっけに取られたように言う。

「佑、この子オが見えるんか。ああ、血イ出とる……」
後ろ首にあてた手のひらには、血がついていた。大した傷ではないようだったが、ミツキメが間に合っていなかったらどうなっていたことか。

火が消えてしまったために、男の姿は目視できなかったが、とりあえず奥からは泣き声も物音も聞こえてこない。当たり前前の静寂がいつの間にか還ってきていた。

「やったんかな。ミツキメ、ようやったなあ。もうええよ」
季満がそう労うと、童子はまばたきの瞬間にふっと消えてしまっ

た。床を浸す大量の水だけが、まぼろしではなかった証として残っている。

二人は闇の中で、安堵の溜息をついた。

「なんやようわからんけど……なんとかなつたんかいな」

「季満、どうしてここへ？」

ずるりとくずれるように尻餅をつくとき、佑が呆けたようにそうつぶやいた。明かりが消えたばかりなので夜目が利かず、ようやくお互いの体の線が把握できる程度である。それでも季満にはなんとなく、佑が笑っているように感ぜられた。

「そろこつちの科白……ゆつても始まらへんな。延然の坊さんに頼まれたんや」

「延然って、東寺の、延然上人か？」

「うん、その延然坊主。いやあ、佑がいて助かったわ。おれ一人やったらそいつのえさになつとつた。で、そつちは？」

「おれはね、仕事さ」佑は再度、しかし今度は疲れたような溜息をついた。「……年始に奉つた具注暦に誤りがあったとかで、官師たちはここに、三日のあいだ、昼も夜もなくてね。それでおれにお鉢が回ってきた」

「……あいかわらず融通がきかへんな、あの力ミは。黙つときゃ気付かへんやろに」

具注暦とは陰陽寮が作成する、一年の吉凶趨勢を刻み込んだ暦のこと、正月に行われる御歴奏の折、帝に奏上されるならわしとなっている。

暦の作成は陰陽寮の仕事の主なものの一つで、時間がかかった。その製法も複雑怪奇にして専門的で、作業に当たる人間には、陰陽道だけではなく数学的教養や天文占星の豊富な知識も要求される。

「四部と博士、官師、暦生は総出、天文と陰陽の学生からも手の空いた者は全員駆り出されて、昨日も徹夜さ。もう一度、初めから全部やり直してみるらしい。季満もいたら今ごろ……居眠りして咎もらってただらうね」

言葉には力がこもらず、中途であくびが交じった。彼自身もこの数日の間、膨大な作業を任せられて文机ぶんぐくえの前に座っていたのだろう。あるいは徹夜明けの身で、門の調査を押し付けられたのかもしれない。

「えげつないな、カミは。おのれが言い出したこと学生にやらせくさって」

「勘違いするなよ」内容とは裏腹に、佑の声はいつそう柔和にやわになった。「お前を疎そつとんじてこんなことをやらせてるわけじゃないんだ。それだけは、きつと誤解してほしくないと思ってる」

陰陽寮は、禁中諸事きんちゆうしよじをつかさどる中務省なかつくさのしやうに属している。言ってみれば朝廷専属の機関であり、市井いちせいの怪奇現象の調査など行わないのがふつうであった。たいていそういうときはほとんどの場合、京に点在する民間の陰陽法師おんやうほうしのもとへ駆け込むか、京識を經由するなりして東西寺、延暦寺えんりやくじを初めとする洛内外の諸仏刹しよぶつせきへ祈祷調伏きごうちうぶくの依頼が行く。寺まで話が行ったとしても、たいていは前述の陰陽法師に下請けに出されることがほとんどなのだが。

そういったときに現場へ赴おもむくのが、季満のような人間達であった。が、市井いちせいにわか陰陽師が増え、あるいは名を上げるのを快く思わない者も当然いる。

季満の言うところの「カミ」、陰陽頭弓削是雄おんやうのかみゆげのこれおもそのうちのひとりである。二年ほど前に陰陽頭に就任しゆじんした弓削是雄は、これまで誰も、すくなくとも表立って手をつけなかった「民間の怪異調査」に積極的に取り組みだした。

季満が寮を飛び出した半年前くらいから、それはとみに繁しげくなっている、と季満は勝手に思っていた。季満にしてみれば、無償むしやうの、それもその道に長けた専門職がしゃしゃり出てくるのは営業妨害の極みであり、また心情的にもいやがらせとして受け取ってしまいがちである。

さる理由から、季満は弓削是雄に大きな恩義があったのだが、このところ心証しんせうは悪くなる一方だった。おかずが一品減れば「陰陽

頭はアホや」と公言したし、仕事の報酬が少なければ「弓削是雄はトントンキヤ」と喚わめいてはばからなかった。

「どうやるな、おれの背中と腹がくつつくの、待っとなのとちがうか。腹が減りゃ尻尾ふって帰ってきよる思とんにやる」

「このあいだ」

佑が言葉を切った瞬間、いきなり肩を突かれて、季満はそのまま後ろ向きに転倒した。

「なにすんにや」

「動くな、季満」

人の変わったように切迫せきほくした声が、頭上でささやかれた。佑の輪郭かくが視界を占める。背にかばうように季満の前に立つたらしい。

毘沙門天像のある奥からかすかに、すすり泣くような声が漏れてくる。

ひよろりとした影が立ち上がる。男の声に語りかけるように、佑がゆっくりとなにごとか呪を誦しはじめた。なにか人間以外のものが互いに会話を試みているような、先刻の殺伐とした空気とは無縁の空間。

佑が低く「オン」と唸る。男はそれを合図に、なんの前触れもなく右手の連子窓れんじまどに突っ込むと、丹塗りの格子をぶち破って外に飛び出ていってしまった。二人はあわてて破れた窓に駆け寄る。

「くそっ、まずい、洛中に」

佑が痛恨を叫ぶ。へし折られた楼上の勾欄こうらんが階下に落ち、かわいた音が九条大路に響いた。

Hello Miyako III

一月八日 壬午 丑三刻
みずのえつまうしのさんかく

(てきとうに羅城門を覗いたら、さつさと帰ろう)

道説みちときは朱雀大路を下りながら、そんなことを考えていた。

人外の時間と言われる丑三刻。おぼめく弦月げんげつの薄明かりの下を、二人の男が歩いている。

呼吸をしているだけでも寒い。鼻息が襟元えりもとから入ってきて冷たい。大路を薄く覆った雪が音を吸うのか、二人がめいめい雪を蹴立てる音も、張本人たちにすらほとんど届いてこない、そんな凍てつく無音の夜である。

「なんだか嫌な予感がいたします……頼りにしておりますよ、妙法先生……」
うほうせんせい

間接的とはいえ、道説が寒い思いをするもとなった左京識坊さきやうしきぼう令、藤原淑野ふじわらのよしのがつばやいた。手燭てしよくを持っているのに道説の前に立つとしないのは、あるいは怖いからなのだろうか。

「くそ、なにが妙法先生だ……ええ寒い、羅城門を往復したらさつさと帰るぞ」

自分で言い出したことながら、道説は早くも興味を失いつつあった。文字どおり張り切って持ち出してきた檀弓まゆみも、今では握る手指てゆびが冷たいだけの無用の長物に思える。

道説は寒いのが苦手であった。

出かける前こそ、鬼退治などという子供じみた道行きみちゆきに、たしよ胸がときめかないでもなかったのだが、元々は餅代もちしろに困る坊令ぼうれいを助ける方便にすぎない。この世に生を受けてより廿七年じふしちねん、妖しよ物の怪よと周囲が騒ぐことはあっても、彼自身がそういったものを実際に目にしたことはなかった。正直なところ、その存在も信じてはいない。

「ああ……見えて参りましたよ。私はもう生きた心地も」

「情けない声を出すな、お前に来いなどとは言わぬわい。そら、あの柳のあたりで待つておれ」

門が見えてくるにつれて、淑野の及び腰は、とても普段の彼を知る者には見せられないような有様ありさまになっていた。血の気が多いというわけではないが、淑野はけっして臆病ではない。なんらかの圧力がかかれば、節せつを曲げるよりは折れるのを待つような男である。

（その淑野をして、かくのごとき醜態しゅうたいを晒さらしめるとはなあ）

示された柳へと歩き去る、そのごまった背を見送りながら、道説は奇妙な感慨かんがいをいだいていた。実際にいる、いないではなく、彼はあると思ひ込んでいるものにかくも怯えている。彼自身が頭のなかで生み出した何者かに、彼は脅おびかされているのだ。

道説はしばらくのあいだ、大路の真ん中に仁王立ちになって、腰のやなぐいに入った矢の弓摺羽ゆじりうに指を走らせていた。

（いもしないものが、こうもたやすく人を惑わせるとは不思議なものだ。それともそれは真実存在するのに、おれだけが感じ取るこゝろができぬのだろうか）

彼は自分と人との違いについて考えるとき、直接的な関係のあるなしにかかわらず、その原因を自身の学の無さに求めることが多い。自分は無学の武骨であり、ほかの多くの人々はそうではない。よろずそういふうに、独り決めに決めてしまうところがある。

（たとえば兄上がこの場におられたなら、おれのようになにを感ずることもなく、この青い雪の大路に突っ立っておられるだろうか。いや、きっと淑野と同じでないにせよ、何らかの感慨をお持ちになられることだろう）

ふだんはあまり感傷的になることがないこの大男も、床とこに入って寝付けぬ夜や、こうして静寂の中に佇たたずんでいるときなど、ひとりこんなことを考えては鬱々うつうつとしているのだった。

「道説さまあ……行かれないのですしたら、もう帰りませんか……」
「やかましい、人が深遠なる考察に思いを」

中つ腹になつて振り返つた道説の背後、暗い簾を下ろしたような羅生門から、かすかに低く物音のするのが聞こえた。反射的にやなくいから征矢を引き抜き、弓柄に添えながら、道説はもう一度振り向く。

「……浮浪人か」

物音の止んだあと、二人はめいめい同じ姿勢のまま凍りついていた。

「道説さま、本当に行か」

しびれを切らしたような淑野の言葉は、中途から悲鳴になった。門のどこかから、なにかが壊れるような音がする。一拍遅れで上から降ってきた木ぎれが石づくりの基礎に当たり、死者も跳ね起きんばかりの騒音が大路に響きわたる。

「何者か」

道説は檀弓を構え、矢をつがえて軽く引いた。

彼から五丈ほど離れた位置で、細長い人影がすつくと伸び上がった。酔漢のようにふらふらと重心を揺らしながら、もぐもぐとなにか意味不明の言葉を呟いている。

「……これは左検非違使少尉、菅原道説。名乗れ、不審の者」

さくさくと雪を踏む音が近づいてくる。道説の名乗りに数瞬、音は止まり、ややあつてそれに倍する間隔でせまってきた。次いで地面を強く蹴る音がし、闇夜の弦月がふつと翳る。

「応！」

道説は一挙動で弓弦をぎつと引き絞り、かんと射放つた。鷹羽を矧いだ槓葉尻の征矢は、消えた月をめざしてひようと飛び、宙にあつた襲撃者の体をあやまたず貫く。

不審者は見えない壁に阻まれたように垂直に墜ち、泥雪のなかにぐしゃりと崩れた。

「おお、射たり！」

「……つい射してもうた」

背後からの淑野の讃辞に、道説は困つたように呟いた。相手にあ

きらかな襲撃の意図があつたとはいえ、道説の行動は考えた末のものではなく、単なる条件反射にすぎなかつたのだ。

「検分するぞ、淑野。来い」

「道説さま、後ろ！」

淑野の切迫した声せつぱくが、道説になかば無意識の回避行動を取らせた。とつさのことだったので半身をずらす程度ではあつたが、それが彼の命運を分かつたわ。首をえぐるはずだつた一撃は逸れそ、かろうじて道説の右耳を干切るにとどまる。

「ありやあつ！」

裂帛れつぱくの気合いが羅城門に反響し、内裏おうちにもとけよとばかりにこだました。

道説はいつものまにか、不審者の体をはさんで反対側におり、携えていた弓は腰に吊つていた白刃へと変わっている。道説はすばやく正対し、猫のように敏捷な動きで飛び退ると、太刀を上段に構えて不審者の出方を待った。一拍おいて、宙を飛んでいた檀弓が薄雪のうえに墜ち、それを合図に不審者の右腕と頭がぼとぼと落ち、最後に体が膝から崩れ落ちた。

(危なかつた……淑野が知らせてくれなんたら死んでいた)

「お……お見事……」

呆けたように言いながら、やはり及び腰で淑野が近づいてくる。

右耳が火で炙あぶられているように熱を持っている。心臓の鼓動にひとしく、耳が動悸うごめきしているかのようなのだ。首が妙に寒いので手を当ててみると、手のひらにはべっとり血がついていた。

「道説さま、お怪我を？」

「いや、大した傷ではない、この程度で済んで幸いであつた。

なにか拭くものはないか」

受け取った楮紙じゆしでていねいに太刀を拭き、足下の雪で手についた血をぬぐうと、あらためて道説は不審者の検分に取りかかつた。耳からはいまだに血が滲にじみ出ていたが、熱を感じるだけで、痛みらしい痛みはない。いまさらのように追いかけてきた高揚感で、道説は

かるい躁そうに陥おとっていた。

「……………これは、なんなのでしよう」

「……………先程まで動いておったのだがな」

淑野の手燭てんに照らし出された男は、どう控えめに見ても死後数週間を経ていたように見える。黒い服のうちから立ち昇る悪臭に、二人は近づけていた顔を上げた。

「これが件の鬼くだんなら、この界限かいわいの騒ぎも収まるうが」落ちていた檀弓たんきゆうを拾い上げ、弓弦を外しながら、道説は明るい口調で言った。

「ま、よいさ。今日のところは帰って、様子を見ようではないか、淑野」

かたわらの背をばんと叩く。淑野はつんのめって派手に転び、黒服の男の胸に飛び込んでいった。

手燭を落としてしまったせいで、帰りの道行きにはたいそう難渋なんじゆうすることになった。

一月九日 癸未 巳一刻

車くるまの走る音が近づいてくる。

右京みぎみやうは八条大路はちじょうだいぢう、ちようど西堀川にしほりがわを渡りきつたあたりである。

泥根雪ぬねゆきのたまる路みちには、ぽつぽつと庶人もろびとの姿が散見できるが、小走りに駆けながら鞭むちをふるう牛飼童うしかいわらわは、牛を急せかせることにばかり集中している様子だ。頭に籠かごをのせた市女いちめふうの女をひき殺しかけるも、すでに十分な焦燥せうそうに曇っている彼の眉は、それ以上動くことはなかった。

(この時間にあれほど急いで、いったいどこに行こうというのか)ちようど近くにいた、藁筵わらむしろをかぶった童子どうしを抱え上げると、道説は荒々しく車輪くるまわを鳴らしながら走りくる網代車あじろくるまをやり過すした。土まじりの濡雪ぬれゆきが盛大せうだいに撥ね散らかされ、大男おおおとこの指貫さしめきに奇妙な文様もんようを残のこしていく。

童子は頭上に持ち上げられて、背中をつままれた甲虫かぶとむしのように手

足をばたつかせていた。車は去り、そのあとを数人の舎人と搦を小脇にかかえた童が、まこと決まり悪そうにそそくさと追う。庶人たちが雪よりつめたい視線を、せめて彼らに送るかと思えば、慣れているのか誰も意に介そうとしない。

湯巻き姿の年増女が、最前から抗議の視線を送っているのにはたと気付く。道説は手に抱えていた童子を「たかいたかい」と上げ下げしたあと、神妙に彼女の足下へおろした。

「……ちとものを尋ねたいのだが、土師季満はじのすえみつという呪い師まじなを知らぬか」

「……へえ、存じまへんが」

「……そうか。その、なんだ、その子供が車に轢ひかれるやもしれぬと思うてな」

皆まで聞かぬうちに、女は子供の手を引いて足早に去ってしまった。

(土師季満、聞かぬ名だなあ)

ふたたび大路を西に歩き始める。紹介人は菖蒲小路あやめこうじを左に折れる、と言っていた。

(それにしても、この荒れようはどうしたことだろう)

これほど右京の隅まで来たのは初めてであった。かねてから知り合いに聞いてはいたのだが、耳に聞くのと目で見るのでは全然ちがう。

家々を始めとする背の高い建物がほとんどなく、田やら畑やらがやたらと目立つその界限かいわいは、とても洛中とは思えぬほど見晴らしがいい。連日の曇天どんてんから一変して、今日は朝からすがすがしい快晴の陽光が降ってきているのだが、あちこちに夢のあとのように残る家屋の残骸に、それが濃い影を落としており、二度目の滅びを見せつけられているようでもすがすがしくない。

においにも閉口していた。腐った木材が日の光に炙あぶられて、蒸むれたような異臭を放っている。鼻をつまんでふと目をそらせば、はだれ雪の中から顔をのぞかせた死体と眼が合う。見たくもないような

ものに限って、あまり雪は積もっていないのだった。右京においては日が射そうが雪が降ろうが、よく見えるか見えないかの違いではないようだ。

菖蒲小路を左に曲がると、はたして紹介人が言っていた家が右手に見えた。

崩れた建材の山に埋もれるようにして、傾いた小屋が建っており、その上を数羽のガラスがギヤアギヤアと飛び回っている。小路に面した縁向ここの室内は薄暗く、屋根に穴でも空いているのか、天井から一筋の光が射している。人の姿も気配も感じられない。

（さあて、参った。ここの家主も雪のすきまから「こんにちは」でなければよいが）

小屋の入口をさがして、道説は敷地内を徘徊した。すでに気持ちの上では「探索」ではなく「搜索」である。

ややあつて、北側に面した簗子縁に狭い階があるのを見つけた。その下には歯のちびた足駄と小さな沓がひとつずつ。どうやら外で横になっている可能性だけはなくなったようだ。

「土師季満どの、おられぬか」

道説が声をあげる。奥から足音が聞こえてきたときには、言いしれぬ安堵が湧きあがった。この男の性格上、こういったかたちでもし死体でも発見すれば、四角四面に京識へ戸籍の添削をはかるであろうし、死体を埋めてささやかな供物のひとつも捻出するだろう。せつかくの自由時間を見知らぬ人の供養で費やすのは、木石のうえに立烏帽子をのせたような道説にとつても気の進まぬことなのだった。

ぎしぎしと危うい音をたてながら現れたのは、まだ十にも満たぬらしい童子であった。赤青二色の袖括りのついた、虫青がさねの半尻をまとい、珍しい茶色の髪を振り分けにしている。

「季満どののご縁者かな。ご主人はおられるかな？」

道説が上体を折ってにっと笑うと、豊頼も愛くるしいその子供は、一見して男女の区別のつけづらい、ととのった面立ちに怯えの色を

うかべた。そのままきびすを返し、元きた道を戻っていつてしまふ。道説は中腰のままひそかに傷ついた。

「はいはい、お客さんどすかあ？」

ややあつて、先程よりも少し重い足音とともに、かん高い声から奥から飛んできた。

廊下を踏み抜きそうな勢いで駆けてきた人間は、思つてもみなかつたほど若い。声からして意外であつたのだが、本人のいでたちはさらに予想を上回つていた。

年はまず廿を数えないであろう。白い、というよりも幾度も水をくぐつた末に脱色してしまつた感のある、垂首の水干に、粗末な脛丈の小袴をつけている。かなりの小柄で、身丈はどう見ても五尺に満たず、せいぜい四尺と五、六寸程度しかないだろう。

「やあや、ようお越し！ 土師季満ゆうもんどす。ま、ま、上がととくれやす。尾筒丸、なんか飲み物出してえな！」

寒いのかしきりに足踏みしながら、ぺらぺらとまくしたてると、満面の笑みで奥へ声をかける。くたびれた折烏帽子の下には、にわかにかに男とは思えぬほど繊細なつくりの貌があり、やや太めの眉だけがその中であつて辛うじて、男性的ななにかを主張していた。

（なんともなやかな少年だ。これほどの若輩が呪い事などできるのだらうか）

白鬚白鬚の導師服が、英知の後光をはなちながら、威厳たつぷりに現れるのを予想していた道説にとつて、目の前のちびはなんとも頼りないものに映つた。

一方、季満のほうも笑みを浮かべながら、

（なんや大きいのが来よつたなあ、相撲人かいな。お足持つてりやどつてもええけど）

などと思つていた。

季満が四と半尺なら、道説の身丈は六尺に余つた。雲突く大男である。道説は階の下に立っているのに、頭の位置は季満と同じなのだ。

菊がさねの狩衣は無紋、色気のない灰色の指貫に、柄に鋏を打つた黒漆の衛府太刀を吊っている。態は見ようによつては官人ともとれたが、この巨人が冠をかぶつて笏を持つてゐる姿などとても想像できない。にわかには金持ちなのか貧乏なのか判別がつきかねた。

「御免」

短く言つて藁沓を脱ぐ道説の貌は、凜とした男らしさに満ちている。濃い眉の下の瞳はいささかも濁つておらず、漆黒と純白が相住まつて強い意志を感じさせた。鼻も口も頬も、影の落ちるほどに彫りの深いつくりになっており、季満は一瞥して、

(こつというのをツラダマシゆうんやるな)

などと得心していた。こつという人間は往々にして考えることが単純で、嘘をつかない。懐具合はさておくとしても、客としては扱いやすい部類にはいるだろう。

季満を先導に、道説は湿つた床板を踏み抜かないよう、そろそろとあとを追つた。

通された部屋は薄暗く、がらんとしていた。中央に小さな囲炉裏があり、先程の童子が鉄瓶を火にかけている。どうも食事中だったようで、童子の膝元には平折敷が二つ置いてあり、雑穀とおぼしき灰色の汁粥と、ゆでた水芹のようなものがのつている。こんな家に住んでいるのだからまさか富裕ではないにしても、この屋内の食糧事情はさうとう逼迫しているようであつた。

部屋は傷んだ板壁で覆われていたが、西側だけは開け放たれており、簀子縁の向こうには道説が歩いてきた菖蒲小路が見えた。かつてはついていたであろう蔀戸は、今や影も形もつかえない。

「……そこを通つた折、この部屋にはだれもおらぬように見受けられたのだが」

太刀を外して座るなり、道説は向かいに座つた季満の、背後の小路を示した。季満は折敷を脇へどけながらにやりと笑つた。

「さあ、気のせいやおへんのどすか。あ、この子才は気にせんといとくれやす。ささ、ご用向きを伺いますえ」

「……うむ、まあ、よいか。名乗りが遅れたが、左衛門少尉さえもんしょうじゆう、菅原道説すがはらのみちとせと申す。以後」

「菅原やお？」

季満がこころもち身を乗り出し、なにか忌まわしいものでも口にするような口調でわめいた。

「いかにも、菅」

「ちよう待て、それに……なんやと、左衛門少尉やお？」今までそのかんばせに浮かんでいた丁重な笑みは、べろりと皮を剥ぐようにして猜疑さぎに満ちたものへと変貌した。「まさか……こないだの羅城門で鬼退治した左衛門検非違使少尉ゆづんは……」

「……まあ、おれだが、どこでそれを」

「おん前っ！ お前か！ おれの仕事横からさらっていきくさったんは！」

季満が立ち上がったつてももの凄い剣幕でがなり立てた。となりに座っていた童子が飛び上がり、大きな目を見開いてそちらを凝視ぎやうししている。

「待て待て、聞き捨てならぬ。あれは」

「やかましわ！ あともうちよいで仕留められるとこやったのんに、高札こうさつなんぞ立てよるから全部お前の手柄になつてしもたやないか！ どうしてくれんにや、もう食べるモンのうなつてんねんぞっ！」

「淑野しよのめ……」

高札を立てることを提案したのは道説ではなく、淑野であった。

鬼退治が成功したにせよしないにせよ、九条界限かいわいに住む人々に、お上がなにかしらの対策を講じているということを知らしめ、もって人心の安堵をはかったほうがよい、というのが淑野の考えであった。いかにも京識の役人らしい考えかただと道説は関心したのだが、まさか自分がやりましたなどと騒ぎ立てるつもりもなく、「使庁しちよう、鬼退治せり」とのみ記すようにと言っておいたのだったが、

（この様子だと、まず職名までは記されたようだ。淑野め、どう

してくれよう)

左衛門檢非違使少尉という役職までわかってしまえば、対象人物は一気に数人まで絞り込めてしまう。どのみち実名を出しているよなものだった。

「年始めやゆづのに餅も食べられへん、魚も食べられへん、お前なんかおれに恨みでもあるのんか！ もうおしまいやあ！ 明日にやカラスのえさやあ！」

「これ、ちと話を！」

「あもおー！ さかなあー！」

季満は両手で顔を覆って板の間をのたうち回っている。かたわらでは童子が眼に涙をためて、下唇を突きだしていた。この場でどのような弁明をしようと、道説が悪者にならずに済む道はなさそうだった。

「ええわかった、おれが悪かった！ 餅でも魚でも用立てるから、ちと話を聞け！」

季満の動きがぴたりと止まり、両手のうちから「ほんま？」とくぐもった声が聞こえた。

「ああ、ほんまだ。それ、そこに直れ。用事があつてきたのだ」
言質を取るや、季満はてのひらを返したようにおとなしくなった。何事もなかったように道説の向かいに座ったが、口の端がこまかく震えているのを道説は見逃さなかった。

(今のは演技か。見た目によらず食べぬ奴よ)

「お仕事の話ならいつでもどこでもや。ほんで、用事って？」

季満の軽々しい受け答えに、道説の渋面はいつそう深まった。顔の彫りの深いこの男がそうしていると、その長身とあいまって、どこかの仏刹で邪鬼を威嚇している神将像のように見える。

「まず確認しておくが……お前は呪い事を生業とする者か？」

「うん、そうや。言っとくけどおれほどの達者はそうは」

「なにか説明のつけられぬ凶事、たとえば特定の家にだけ病が流行るだとか、そういう事件を解決しうる手立てを、お前は持っている

るといふことだな？」

「おお、そらオハコや。やあお前運ええなあ、ほんまに」

「今から依頼を説明するが、このことは他言無用ぞ。それと話し終わるまでな、黙っておれ」

「……………」

渋面を向け合った二人のあいだを、尾筒丸のくさめが通り過ぎていった。

Hello Miyako IV

一月九日 癸未 戌四刻

「なぜ素直に失敗したと言えぬのだ、吟師。別当の心証もさだめし悪しかろうぞ」

「てめえの仕事はちゃんとやっただって言ってるだろう」

吟師と呼ばれた青年が中っ腹になって言い返した。「いちいちついてくるんじゃない、クソじじい」と言いながら、簀子縁に腰をおろす。

(よりもよってあんな時間にうるつくとは、邪魔が入りさえしなければ……)

吟師の視線は未練がましく羅城門の方角へ向かう。彼はほかの四人の仲間と共に、四条は錦小路に面した屋敷に住まっていた。

あの日、五人に大事をはかった冠男。別当は、吟師たちを野放しにするつもりはなかったらしく、大袈裟とも思えるほどの見張りを饒別に、左京のとある屋敷に彼らを引率したのだった。気味のわるいくらいに行き届いた屋敷で、生活の質はすべて保証され、無口な年増女どもがなにくれとなく世話を焼いてくれる。が、別して夜間の自由は制限された。

「……吟師、呑むか」

「失せる」

皆から呼師と呼ばれている、白髪初老の男が、最前からなにかしら用事を見つけては話しかけてくる。いいかげん耐え難くなって放った言葉は、吟師自身も驚くほどの剣呑な響きをともなった。はたして呼師は黙って去っていく。

吟師はここ二日ほどのあいだ、眠っていなかった。

はやく皆に、あの男に自分の能力を認めさせなければ、という思いが、吟師には特に強かった。呼師には再三にわたってそれを指摘

されている。若者は熱血を抑えよ、行動する前に考えつくせ。老人の繰り言も、彼にとつてはまったく余計なお世話だった。

（頼まれもしないのに勝手に代表を気取って、年寄りには仕切りたがりだから困る。おまけにひとの名前まで勝手に……）

名前を隠す必要がある、と提案したのは呼師だった。彼は自分たちの上司となる冠男を別当と称し、自らをふくむ五人に、それぞれ呼師、言師、歌師、哭師、吟師と便宜上の名前をつけており、皆もとくに異論をはさんでいない。が、思えば彼に命名をまかせてしまった時点で、すでに主導権を握られていたのだらう。別当が決めるでもなく、誰が言うでもなく、最年長の呼師はごく自然に皆の意見をまとめる代表となっていた。

「吟師、ほれ、呑め」

舌打ちして首だけ振り向けると、ちょうど吟師の背後に呼師が座るところだった。手には瓶子と須惠物の杯がふたつ。

「じじいは及びじゃなくとも、こいつは歓迎だらうが。そら」

吟師は黙って瓶子をふんだくると、中身を直接あおった。ややあつて激しく咽せ、それを眺めていた呼師は、あらかじめそれがわかつていたかのように、しゃがれた声で笑った。

「それは本物の酒ぞ、飲み慣れぬ喉にそうやすやすと入ってゆくものか」

呼師は瓶子を奪い返すと、あらためて二つの杯に酒を満たした。

白木の簀子と酒の白が、夜気に浮かびあがってよく映える。

「……この寒中に、風雅なものだのう」

呼師の言葉に、とくに目立った感情はこもっていない。が、吟師はおのれの訝りを看破されたような気がして、うそ寒い心持ちになった。

簀子縁の前にひろがる庭には築地塀を背景に、立ち枯れたように花を散らした梅にまじって寒椿が植わっており、根本に置かれた岩の足下には、これまた寒咲きの牡丹が淡紅色の顔をのぞかせている。屋敷の広さといい、地下人風情にはおいそれと真似できないよう

な贅沢である。自分が住むわけでもない屋敷にこれほどの金をかけられる、というのは、とても尋常のことではない。

「なんでおれにつきまとう。ほかの連中は好き勝手にやってるじやねえか」

呼師が向けた杯を手に取り、吟師はおそろおそろ口をつけた。

別当の「五人が一つの生き物のように」という言葉は、初日を除いて守られることはなかった。吟師のしくじりに危機感を抱いたものか、めいめい好き勝手に飲み食いしたあとは、独断独力で策を練っている。

「才能というものはな、ぜんぶ外側に向いてなけりやならねえのよ。お前さんは若いから、それがどうもわかっておらぬ。お前さんの口に出したことのうち、半分はお前さん自身を追い詰めておる。おれにはそれがもつたいなく思えてなあ」

「繰り返したいがいにしる、じじい。要はおれもてめえも官人になれりやあ済む話だろうが」

「……やっぱりお前さん、かたぎだな。わざと悪しざまに装っておるだろう。せんから思っておったが、考え方が甘つちよるい」

かん、と簀子が鳴った。吟師の叩きつけた杯が四つに割れ、ちようど酒のおかわりを持って部屋にはいつてきた女が、阻まれたように立ち止まる。

「酒は置いてな、あたらしい杯を持ってきておくれ。これも片付けてもらおうかね」

呼師がいかにも人畜無害そうな、穏やかな声をあげた。

かがみこんで割れた杯を拾い集めながら、女が咎めるような視線をついと吟師に向けた。吟師は反射的に眼を逸らし、次の瞬間には噛みつかんばかりに睨まえる。こんな反射的な威嚇は実のところ、杯を割ってしまったことへの恥を裏返したものに過ぎない。

忿懣を怯えの紗に隠して女が立ち上がるころには、なるほど呼師の素っ破ぬいたとおりの、装った悪し気のすっかり落ちた、人の善さそつな青年がしゅんとしているのだった。

女が足早に部屋を去っていくまで、呼師はその様子を興味深げに眺めていた。自分の杯に酒を注ぎ、それを吟師に手渡すと、

「別当はのう、本当のところ、五人も必要としてはおらぬのよ」「寒椿を眺めながら呟いた。吟師の貌に取り繕ったような陰が浮かんだ。

「なんででめえがそんなことを知ってる」

「なんでだろうなあ。まあ、それはよいのさ。お前さんが気にしなけりやならねえのはな、この先おれと仲ようやってゆけるかどうか、ということさ」

「なにをぬかしやがる……」

杯をあおり、庭に振り向けた頭は、妙に重い慣性をともなって揺れた。吟師の頭の中にある整然とした規矩準繩きくじゆんじょうが、にわかになその鋭利な角を丸め、その直線をゆがめる。節を曲げられぬ一本気な、ともしれば狭量とも受けとられがちなその性格から、往々にして他人の意見を容れ難い吟師であるのに、

(本物の酒とやらに当てられたのか、頭が……)

「おう、酔っておるな、若者。どうだ、本物は靦面てきめんに効こうが」

「酔ってなんかいねえ」

「人も苦手、酒も苦手では、世の中つまるまいよ。思うさま呑める機会などそうはないのだ、酔え酔え、吟師」

もう一枚割ってやるうかとも思ったのだが、すぐにばからしくなつて止めた。火照ほてった頬に夜気が心地よい。白髪の老人に酌をさせながら、吟師は二つの瓶子が空になるまで、機械的に杯をあおった。「おお、おれの分まで呑んでもうたわい。よう呑んだのう、ただでよかつたのう」

呼師の笑う顔も、目鼻立ちがはっきりしない。庭の牡丹が巨大に膨れあがつたり縮んだりしている。雲のうえに座っているかのよううごに、体の平衡へいじゆうを取りかねた。

「じじい、酒菜さかなは」

ふいに簞子が迫ってきたあと、やけに近いところで鈍い音がし、

吟師の意識はそこで途絶えた。

一月十三日 丙戌 子二刻

(まさか佑の紹介やったとはなあ)

左京は五条大路、季満は両腕を抱きかかえるようにしてごごまりながら、路脇の側溝に沿って東へ向かっていた。

こここのところ天気は小康を保っており、雪はあらかた溶けてなくなっている。去年の末にはまとまった量の雪が降っており、季満の破れ屋を押し潰さんばかりであったのだが、今年は幸先がよさそうだ。

(でもまだ降るんやろな)

春の頭とはいえ、所詮はひとつのつくった暦の区切りにすぎない。見上げれば、楕円形の十三夜月はときどき不規則に翳った。白い色が薄まったり瞬いたりしているのは、雲が出ていているということだろう。いつとき止んでいた雪も、近いうちにまた降り出す。

季満は堀川を超えたあたりで立ち止まると、葵の方角 やや北よりの東の空を仰ぎ見た。檜皮の甍越しに、低く北斗が見える。

(あれは止んだら終わり。もう二度と降ってきいひん)

季満の眼の先には、柄杓の柄から数えて三つ目、廉貞星が強く瞬いている。

思えば、今年に入ってからからは奇妙な予感がしていた。奇しくも先日、菅原の人間が尋ねてきたことも関係があるのかもしれない。

(菅家判官ねえ、菅原の武官なんて聞いたことあらへんな)

大路から室町小路を左へ折れる。あたりには人影の一つもなく、家を出てから牛車に一度すれ違っただけだった。

貴族の夜は長いが、庶人は陽が落ちればすぐに床へ入ってしまう。明かりのない時間に起きているということは、灯油代がかかるということだ。季満も仕事のない日は、こんな時間まで起きていることはない。

(依頼は参議の娘はんか。初めての上客やないか、こら気張つていかんと)

宣風坊をつらぬき、四条大路にさしかかったところで、前方にぼんやりと篝火が焚かれているのを見つけた。錦小路の辻あたりに、袖のほそい水干に太刀を吊った舎人が二人立っている。

(あれやな。しつかし、なんでお家で話さへんにやる)

道説の話では、詳しい話は参議の自宅ではなく、別の場所においてということである。成功したあとの報酬にばかり気を取られていた季満は、いまさらのように依頼の内容に考えを巡らせた。

(ええと、たしか父親だか親戚だかがけつたいな病気になつたとかゆうてたか)

依頼がその通りであるなら、誰はばかることなく自宅で話せば済むことである。ということは、本当は別の話があり、自宅では障りのある内容だということなのか。

(あかん、全然考えてへんかつたなあ。だれぞ呪い殺せなんて言われたらどうしょ)

途端に怪しさがむくむくと鎌首をもたげたが、すでに引き受けてしまった以上は、まさにいまさらであつた。急に歩みの遅くなつた季満に、そうと知つてのことが舎人の一人が近づいてくる。

「土師季満どの?」

「え、あ、そうどす」

反射的にそう答えてしまった。もう引き返すこともできない。いつそう夜気が身に滲み入るようで、季満は肩を抱いて身震いした。

「見たところ、武器の類は持つておらんようだが、一応ことわつておくぞ」季満を誰何した舎人の片割れが近づいてくる。「おれたちは次の間で控えている。妙な禍言を呟きでもしたら、いいか、明日にはお前は鴨川に浮いていることになるからな」

「……へえ」

道説ほどではないが、がっしりとした体つきの舎人である。こんな男に掴みかかられたら、ひよわな季満などひとたまりもないだろ

う。

(こいつ、呪いの類がきらいなんやろか。誤解されへんようにせな、ほんまにぶちこまれかねへんな)

「それくらいにしとけ。季満どの、案内する。ついて参られよ」

そう言つて舎人は西門をくぐる。前後を帯刀した男に挟まれて、季満はようやく軽々しく仕事を引き受けたことを後悔し始めた。

門をくぐつてすぐのところには牛車が駐まっております、たいそう狭苦しかった。牛飼いの態をした少年が、軛を背負つたままの牛の背を梳つている。

(牛車があるゆうことは……ひよつとして、本人が来てるのんか) 舎人の緊張も頷ける。季満はお付きの女房かなにかが話をしてくれるものとはかり思つていたのだった。

(そついや参議つて、四位以上の殿上人やあらへんか。なんで地下人の道説が取り次ぐんや?) 先導する舎人に従つて、階で足駄を脱いで中門に上がり、渡殿をのしのと軛ませて北側へ向かつた。屋敷自体はそれほど大きなものではないようだ。夜目にはなにも知れぬ、葉を落とした樹が庭に窺えたが、池は見当たらない。

やがて屋敷の北東あたりの殿にはいり、嚴重な土塀を巡らせた一室の前で、舎人は歩みを止めた。あごで「中へ入れ」という仕草をする。

「へえ、お邪魔します……」

入口は開け放つてあつたが、入つてすぐのところへ几帳が置いてあり、部屋の中が見えないようになってる。もう一度声をかけてから、季満は几帳を避けてそろそろと室内に踏み込んだ。

「土師季満どの？」

いかにもお蚕ぐるみの子女といったふうな、細く可憐な声が出た。一丈四方ほどの部屋の中に、板の間を隠すようにして薄縁が敷かれていた。奥の一角だけ厚畳が置かれて一段高くなつており、その

上に薄紅と緑の重ね袂をまとった少女がちょこんと飾られている。かたわらに置かれた、二台の高灯台に照らし出されたその顔は、

(せいぜい十代のなかば、てどこやるか)

檜扇に隠れて眼から下はうかがえないが、やや垂れ目ぎみの大きな瞳がなんとも愛くるしい。見える範囲で言えば十分美形と言えようが、

(ことういう目元美人にかぎって、下は案外歪んだりりするもんやと、ちよつと底意地の悪い感想を季満は抱いていた。

「はい、お初にお目にかかります。土師季満ゆう者どす」

「ご丁寧にどうも、わたしは橘珠子といいます。お若いので

すね、おいくつですか？」

妙にゆっくりとした口調で、珠子は歌うように言った。

「はあ、ええと、十八どす」

「まあお若い」

(若いのを術の未熟やゆうふうに考えてくれれば、この話はご破算になるかもしれへん)

「やあ、若いのは自慢にやらへんのどす。呪いや祈禱やゆうもんは、はつきりゆうて歳食うててなんぼゆう世界なんどすさかい、私なんてまだまだ未熟で全然」

「道説さまはたしか御歳廿七、十歳も離れていらしてはいますか。忘年の交わりというものですわねえ。あら、まあいけない、十じゃなくて九だわ、わたししたら」

珠子は季満の話をそっちのけで、ひとくさりしゃべったあと檜扇の向こうで笑った。彼女の話す速度は異様に遅く、季満のざつと三倍くらいの時間はかけている。

「わたしは十四です。季満どのより歳下ではありますが、もう子供ではないのですから、季満どのもわたしを小さい子供のようにつかつてはいけませんことよ。季満どのは道説さまのご朋輩ですか？」

「はあ、まあ、そうどす」

「まあ、本当に忘年の交わりなのですね。道説さまはあんなに大きくていらつしやるのに、季満さまはたいそう小さいのですねえ。お顔も全然ちがうわ。わたしも小さいのだけれど、季満どのと同じくらいかしら」

(……なんなんや、この子オは。本題に入る前に灯油が尽きてまうわ)

お愛想で浮かべていた笑みが、しだいに引き攣つかってくるのを感じる。正座で畏かしこまっているのが馬鹿らしくなってきた、季満は珠子が檜扇で顔を隠してくすくす笑っている隙に、足を崩して立ち膝をついた。

「あのう、お姫ひいはん。道説から聞いた話では、お父上さまがなんやよろしゅうない病にかからはったとか」

檜扇のうへの双眸そつぼが、いつとき眩しげに細められた。十四という歳に若干そぐわないうような光を放っている。

「季満どの、近くに」
檜扇を手早く閉じると、珠子はささやくような小声で季満を呼んだ。

季満は一瞬、気を吞まれた。貴族の女が意図的に素顔を見せるという行為は、たとえば結婚を承諾するとか、相手の男に体を許すといったふうに、相応の理由があるときにだけにしか成されないものであった。意味がわかってやっているのか、無知のなせるわざなのか、季満には判じかねたが。

「ごめんなさいね、几帳の向こうに家人がいたので、話せませんでした」

白粉おしろいと紅でうすく粧われた珠子の顔は、ぞっとするほどに美しくった。顔を構成する部位の全てが、おのおの奇跡的と言えるほどに整っている。

やや小づくりのすらりとした鼻梁、桜桃の唇、ほっそりとした顎あごの姿形などは、もはや芸術と言ってもよい水準にある。歳若いせい、その神々しい美貌にはいまだ若干の幼さが刷はかれてはいるが、あ

と二、三年もすれば、彼女の自宅に牛車の群が列をなすことになるだろう。

「季満どのは、道説さまからどのようなお話をお聞きになったでしょうか」

「かすかに白檀ごまくだんの香かが薫かる。季満は不覚ふかくにも動悸せうけいを抑えることができなかつた。

「え、ええと、さる知り合いの女性が、親類の病で困つたはつて呪いの類かもわからんからお助けしたつてくれゆつて」

「……申し訳わけございません。すべてわたしの謀事はかりごとです」

「はあ……は？」

季満の間の抜けた声に、珠子はふかぶかと頭を下げた。ぬばたまのような瑞々しい黒髪が、薄縁の上に落ちてわだかまつた。

「道説さまがお会いになつてくれませんもので……」

珠子は几帳のほうをちらちらと見ながら、訥々と語り出した。

ことの発端は、道説の甲斐性のなさにあつたようだ。

道説の兄と珠子の父はかねてより、位階こそ違えどたいそう仲がよかつた。歳も両者の交流をさまたげるほどには離れておらず、折にふれてお互いの家を訪問することも繁しげくあつたという。

たまたま道説の兄が参議の家を訪なつたとき、酒の席で道説の話題が出た。廿じゅうにを大きく超えた歳で艶聞えんぶんのひとつも聞こえてこぬのはいささか朴念仁ぼくねんじんに過ぎる。どこかに良縁のひとつも転がってはおらぬものかと問わずがたりに語り出した。始めこそ、身内みうちの甲斐性のなさに苦笑する話のタネに過ぎなかつたのが、杯を重ねるうちに、それが解決しなければならぬ重大ごとのように思えてくる。

「それで後日、なかば冗談まじりにわたしのところへ話がきたのです。歌のひとつも交わしてはみぬか、と」

珠子ならまだ幼く、どう転んでも笑い話で済まされるだろうという目算も、あるいはあつたかもしれない。あまりこういつたたくい話に免疫のない珠子には、はたして父が本気であつたのか否か、

しかとは判じかねた。

「不謹慎ですが……本当のことを言うと、少しおかしくも思っていたのです。廿を大きく超えて独り身であらせられる殿方というのは、ちよつと聞いたことがありますので」

普通ならず、男の方から便りがあつてしかるべきのだが、しかし数日待つてもそれらしい歌は届かない。父のお膳立てを袖にすることもできず、とにもかくにも珠子は座興のつもりで歌をしたため、道説宛に送った。

「……還つてきたお返事は歌ではなく、文でした」

その内容は、まず兄が無礼をいたしてまことに申し訳ない。兄と珠子の父の心配りにはたいへん感謝している。しかし自分は無学で愚詠のひとつすら満足にひねることができない。お返事のできないことを心からお詫びしたい云々、という詫び状のごときものだった。

『わたくしのごとき輕輩けいはいに関わり合はうは、貴女の御為にも、御家の為にもならぬことです。構かまえてご放念されたく、ぜひ貴女のほうからお父上にお話しをされて、この件は終わりにしていただきとう存じます。道説が身は、道説が所存でいかようにもいたしますゆえ』

「わたしも父も、興味本位で面白がつていたことをたいへん恥づかしく思いました。道説さまにしてみれば、まったくの余計なお世話だったのです。それで、わたしはお詫びの文を送りました」

(……筋金入りの朴念仁やな)

それから二人の文のやりとりが始まったという。道説の文は一貫して短く、珠子の文は回を追うごとに長くなる。いつしか珠子はその木訥な文に、常ならぬものを抱くようになり、その返信に多大な熱情をこめるようになっていった。

是非いちどお会いしたい、と切り出したのも、珠子のほうであった。

「道説さまは難色を示されましたが、何度目かのお願いの末に、これに応じて下さいました」

(自分より十以上も年下の女にここまでさせるゆうのんは、こらもう救いようのあらへん甲斐性なしやな)

女の珠子が道説を訪おもなうわけにもゆかず、なかなか会談は実現しなかった。文通を重ねるあいだにも、珠子の脳裏にはまだ見ぬ貴公子の面影が浮かんでは消える。ぼんやりすることが多くなり、いきおい学問も手につかず、見かねた父のはたらきでようやく、菅原兄弟たちが橘邸たちに足を運ぶ段となった。

「……ほかのどのようなお姿でも、これほどまでにわたしの心を掴むことはなかったでしょう。ああ……あの毘沙門天びしゃもんてんの生まれ変わりのごとき、雄々しいお姿、抜身の太刀のような凜としたお顔、心の臓をとるかすあの低いお声。かくあれかすと望んだどのような貴公子も、現身うつしみの道説さまには及びませんでした。お座りになって庭をご覧になられているだけでも、一枚の絵のようにお映はえになられるのですもの。季満どのもおわかりになられますわよね？」

「……はあ」

(だいぶ変わった好みなんやなあ、この子オは)

珠子は相貌に血をのぼらせて身悶みもたえしている。季満は呆れ返っているのを隠すのにたいそう苦労した。

道説に会ったのは、それが最初で最後であったという。会談はごく短く、道説は四半刻も留まることなく、屋敷を後にしたらしい。

「お慕したいしておりますと、わたしは道説さまにお伝えしました。ですが、道説さまはわたしのことは好かぬと……」

『貴女のことには嫌いですが、今後すきになることもなかるうと思われまます。ですからどうか貴女も、わたくしのことをお嫌いくださいいますよう。せめてそのように努めてください』

このようなことを、道説は冷たく言い放ったそうなの。

「そののちはもう、文のお返事も絶えてありません。ただ、この件を除けば、わたしの相談事には変わらさず、親身に乘って下さるのです。それで、いけないことは知りつつ……」

こついうところはやはり歳なりで、いかにも子供っぽい。が、珠

子だけが責められるべきではないだろう。乙女心を無下にした道説の咎も、また明白なのだ。

珠子は傍らの二階棚から分厚い紙の束を取り出すと、厚畳を降りて膝でいざつてきた。

「季満どの、かようなところまでご足労いただいたのも、なにかの縁。後生一生のお願いでございます、どうかこの文を道説さまのもとへ。今までお送りした文があなたの方に一瞥もされず、破り捨てられて火にくべられたのやもと思うだけで、わたしはもう生きてゆく気力も失せてしまうの」

季満が後退れば後退ったぶんだけ、珠子はにじりよつてきた。背中が入口の几帳にふれる。文字通り進退窮まった季満に、

「お願いします。道説さまのご友人であられる季満どのをおいてほかにお願いできる人はいません。お願い」

そう言つて珠子は拝む。

（まあ……ええか。もともとあいつが蒔いたタネなんやし、あいつに丸ごと投げたつたらええにやわ）

「わかりました。土師季満、お文とどけさしてもらいます。

ただし、その、わたしからもひとつお願いが……」

麗貌に喜色をみなぎらせる珠子に、季満はやんわりと手のひらを突き出した。動きを止めた少女の、大きな瞳が困惑気にまたたく。

「ええ、なんてゆうたらよろしおすやるなあ。そのう、実は年末にいろいろ物要りで、ちよいとばかり年明けの寒さが身に堪えるんどすわ。こんなときソデの下にあつたかいモンでも入つとつたらなあ、なんて……」

この際、仕事の内容などどうでもよかつたのだが、期待していた報酬まで消えてしまうことだけはなんとしても避けたかつた。今現在、季満は無一文にひとしい。珠子の出方次第では本当にカラスのえさになってしまう。

「まあ、気がつきませんでした。ごめんなさいね」

最前から小首を傾げていた珠子が、思い立ったように火桶を季満

の前へ押しやり、炭を数片、火の中へ足した。

「あおう、そうやのうて」

「そのような薄着で、お寒いのも無理はありませんね。道説さまもこの寒中のみぎり、お健やかにお暮らしかしら……」

「……………」

その後、言葉を尽くして窮状を訴えたものの、珠子はついで隠諭に気付くことはなく、季満は結局「お駄賃ください」と少女の膝元に額ずくはめになったのだった。

Hello Miyako V

一月十五日 戊子 午三刻
つちのえね うまのさむく

「泰佑と申す方がお見えですが」

「入って頂け」

下僕は肩をすぼめて、もと来た道に戻っていった。その背の見えなくなつてから、ふと自分の声音に当たり散らすような響きを見出した気がして、道説は仏頂面をさらに深くした。

手には分厚い文が広げられている。

「佑も食べるやるか、もいっこ焼こか」

道説の向かいに、火桶を抱えるようにして座っていた季満が、水の懐から丸餅をひとつ取り出した。

「……火桶は貸してやるから、家へ帰って食べ。季満」

「あかんあかん、ちゃあんと読み終わるんを見届けた上で、お返事もろてこい言われてんにや。そうはいかんえ」

小袴で餅をごしごしと拭き、火桶の上の網に乗せる。見届ける云々と言つても、季満の視線は最前から焼き餅に釘付けだった。

立烏帽子の頭をうつむけて、道説はふかい溜息をついた。

（かような成り行きになろうとは）

弱りきつた視線を膝の上に落とす。みつしりと書き込まれた細文字ははせる火花のごとく、膝の上に乗っている紙の束は、季満の餅をふくらませている火桶に劣らぬほどに熱い。道説は文字通り、珠子の文を持てあましていた。

「この寒いにお熱うてうらやましいこつちやなあ、道説。なんて書いてあんにや？」

殺人的な一瞥とともに、道説は季満に読んでいた文を突きつけた。

「お、おい、ええのんか、無関係のおれなんか……」

「無関係が聞いてあきれられるわい、これを持ってきたのはどこのどいつだ」

「おおこわ……ああつ、おれの餅オ！」

道説は文と引き替えに、火桶の上でふくらんでいた餅をさらっていった。

「なんなんや……おれは巻き込まただけやで……もいつこ焼こそつぼうを向いて餅を食らう道説を尻目に、季満は手渡された文に眼を落とした。薄い斐紙あやがみにしたためられたそれは、ざっと十枚ほどはあるうか。

流麗な筆致しじで、まるでなにかの文様もんようのように細く小さく隙間すきまなく書き込まれており、なるほどこれをすべて口に出したとしたら、さぞや大変な内容になるだろう。渡された方が面食らうのもうなずける。

『 白昼の太陽も夜ごとの月もさだかには認められず、眼をつむっても見開いていても、見えるのは道説さまのお顔だけ。この苦しみだけは神仏も頼みにはなりません。経を誦すしようにも声が詰まって口には出せず、草木を慰なぐさみにしようとも涙で眼まなこは見えず、貴方さまに見捨てられたこの身を憐はかなんで、時雨ときぐる袖をただただ絞るだけの日々。闇を照らす炎をうしなつた蝶の、その胸を焦がす燃え残つた冷たい青い炭に、かくも苦しめられましようとは。貴方さまの指にはじかれた蝶は、彼岸みぎわの汀みぎわにたゆとつて、救いの一枝いっしの浮かべられるのを待つて、ただ震えているのみでございませう。永き三冬さんとうの底で、陽をおおう雲の切れるのを待つかたじけなく枯椿かたじけなくを、どうか哀れあはれと思し召し下さいませ。なにとぞいま一度だけ、珠子に貴方さまのお顔をお見せ下さいませ。貴方さまがひと言、そうせよと仰おほつてくれたなら、珠子は貴方さまのお気に染まぬところを変える為の、どのような努力もいといたしません。貴方さまにひと言、そうせよと言われたなら、珠子はたとえ鳳ほうであるうと籠かごであるうと、道説さまの御意ごいに叶うどのような姿にでも変じましよう。』

最初から最後までこんな調子である。

「こ、この子、ほんまに十四なんか……？」

「……………橘広相さまの御息女だ、才媛ぞ。歌ひとつ作れぬおれごとき無学は言うに及ばず、そのあたりの地下女風情などと、ゆめひとしなみに考えぬことだ」

「橘広相つて、あの文章博士の橘かいな」

直接国政に携わる参議であり、ほかに左大弁、勘解由長官を兼ねる橘広相は、京ではつとに名高い碩学であった。位階も殿上人たる従四位上で、朝廷では中納言に次ぐ重職にある。正七位上の道説などでは及びもつかない、文字通り身分は天と地ほどの差があった。

「ほならお前、出世する絶好の機会やないか。このたまこちゃんとよろしゅうやって、四位様に後ろ盾になつてもろたらええにやわ」

「出世する」のくだりから、道説はきつい軽蔑の視線を季満に送っている。

「位と契れとぬかすか、季満」

「いや……………そやかて、あんなに可愛らしいのんに勿体ないやんか。なんでつれなくすんにゃ」

「嫌いだからだ」

「……………お前、嘘つくのへつたくそやなあ。はつきり顔に書いてんで」

季満の脚にはさんだ火桶が、ぱちぱちと拍手のような音をたてた。あたかも主人の愚直を指摘した、季満の言をそうして肯定しているかのようだ。

「……………嫌いなはずがない。どうして嫌える、あの人にはまだ一度しか会つておらぬのだぞ。嫌いになるなどと、好きになるのと同じくらい、それは難しいことだ」

道説はあっさり折れた。が、軽蔑の色こそ失せても、つがえられた鏝のような視線は力を失つてはいない。両者ともそれきり、その場に相応しい言葉も浮かんで来ず、餅が焦げるのにも取り合わずに睨み合っていた。

「泰佑どの、参りましたが」

下僕の声に、二人は同時に視線を切った。

「道説さま、お取り込み中でしたら、日を改めますが」

下僕になにごとか言いつけて下がらせると、佑は折り目ただしくそう言った。

貌の起伏に乏しい、細目がちな彼の容色。取り立てて特筆すべき徴のない、佑の面立ちは良くも悪くも凡庸なものである。が、美形というわけではないにしろ、なにをするでもなくただ立っているだけでも、その姿には不思議な華があった。まるで何年も前からそこに植わっていた樹木のような、いつどこにいても不自然や不快を感じさせない、天性の存在感とでも言えようか。季満のように垂首に着崩さない、かっちりとした縹色の水干に、その色のよく映える白い小袴をつけている。

動もすると冷たい人間に映る彼の、その人柄の良さに満ちた穏和な声を聞くにつけ、季満はいつも、

（見たことあらへんけど、帝の侍従って、きっとこんなふうなんやろな）

などと思ってしまうのだった。

「いよう、佑。むさくろしいとこやけど辛抱してな」

「やかましい、誰の家だと思ってる。佑どの、ご足労をかける、よういらした。ま、ま、座られよ」

道説は立ち上がって中腰になると、下にも置かぬ丁寧な口で円座をすすめた。無位の者と対するにしては、その物腰はばかに丁寧で、すっかり恐縮した佑としばしのあいだ、彼は円座をめぐってぺこぺこ頭を下げ合っていた。

「へえへえ、結構なおもてなしだなあ。おれは床に直座りやゆうのになあ、尻が寒うてかなんわ」

「うるさい、寒いのならその火桶のうえに座っておれ」

季満の茶々はすげなく一蹴された。佑は道説のすすめによつやく折れ、やや居心地悪げに円座のうえであぐらをかいた。

「季満がいるとは思いませんでしたが……その後、これはお役に

立ちましたでしょうか」

「うむ、まあ、なんだ」板の間に放られた紙の束に視線をおよがせて、道説は言葉を濁した。「それより佐どの、羅城門の件だ」

「なんの話や？」

道説が言葉を切つて季満を睨まえた。

「な、なんや」

「……そら、どこかの三流呪い師があと少しで仕留めそこねたとかいふ、あの鬼の話だ」

「……………」

（なんちゆう陰湿な……佐から話聞いたんか）

あの深更の鬨の顛末を、道説はとうに佐から聞いていたのだった。佐は庭に目を向けて、烏帽子の中に手をいれて頭を掻いている。「佐、なあんのお話やるなあ。おれも嚙つたんや、聞く権利あるよなあ」

「……季満、外してほしい。そもそもお前には関係のない話だったんだ。聞かせたくないことなんだ」

きっぱりとした拒絶の言葉はしかし、言おうような謝罪の藍で染め抜かれていた。いったいに彼はこんなふうには、自分の伝えたいことと聞き手に与える感情を、切り離して操ることができた。あの種の詐術と言つていい。彼の性は誠実ではあったが、道説のような人間とは違い、つねに実の前に誠の来ることのない、変種の誠実なのであった。

「佐どの、とくに不都合があまりでないのなら、おれはこれにも協力を仰ごうと思つておつたのだが」

季満を指さして、道説は困った顔をした。この男の困った顔といふのは実のところ、怒っている顔とたいして変わらなかつたりする。仁王が「阿」と言っているのと「咩」と言っているのと、その面

にたいした違いがないように。
「瘦せても枯れても貧しておつても、これも呪い師のはしくれ。

相手が鬼なら一応まがりなりにも専門であろう。万が一にも有益な

話が聞けるやもしれぬ」

「……おつそろしい力才してなにほざいとんにゃ、この生不動。
誰がはしくれや」

「あ、わかりました。わかりましたからお平らに、道説さま」

「咩」から「阿」へと変わりつつあった道説を、佑はそう言っ
ていさめた。

「……まあ、いい。しかし生不動などと……」

「お不動はんをお不動はんゆうてなにが悪いんや。羅城門の楼上
にお前みたいなのが住もうとつたら、そもそも鬼なんか出やへんに
やわ」

「季満！ 道説さまも抑えて！」

道説が猛然と腰を浮かせ、季満は板の間を這つてきゃっきゃと逃
げ回った。まさに主客転倒で、屋敷に招じ入れられて早々、佑は二
人のあいだに立つて仲裁をするはめになった。

「まったく……何事です、道説さま。せんにも言いましたが、お
取り込み中なれば日を改めます」

道説は巨体を縮こまらせて腰を下ろした。「申し訳ない、お恥ず
かしい」としよげる。

「季満、おれは道説さまに話があつてここに来た。道説さまがお
前にも聞かせろと言われるなら蔑するつもりもないけれど、うるさ
くするようなら外に出てやってもらうぞ」

季満は火桶の傍らまで這つてくると、口をとがらせてそっぽうを
向いた。「なんや佑まで、ただの冗談やろ……」とすねる。

佑は一度せき払いをすると、道説と季満のあいだの空間に向かっ
て軽く頭を下げ、それをしおに本題を切りだした。

「羅城門の件ですが、道説さまの言われるとおり、あれは死んで
からかなり時間の経った……それも別々の死体を切つてつなげたも
のでした。外法です。おぞましい所行ですが」

「そうか。いや、生きておらぬとは思っていた」左耳に手をやり、
囲炉裏の熾に目を落としながら、道説は呟いた。耳垂を千切られて

いびつになつた耳が、武骨な指のあいだに見え隠れしている。「斬つてもほとんど血が出なんだ、死身しにみが動こうとは到底信じられぬが」
「人為的に死体を切り刻んでいることから、いずれにせよなんらかの呪じゆによるものと思われれます。なぜ羅城門なのかはちよつと見当は……」言葉を濁したあと、佑の貌は官僚のそれへと変化した。「このことはすでに四部しぶへ報告してありますので、今後の対策は陰陽おんよう寮りょうでいたします。検非違使けひいしちやうは今後とも、構えて動かれぬように、とのことですよ」

(高札に使序の名を出したはずが……)

「佑、こいつ鬼退治したゆつて、高札立てよつてん。おかげで延え然坊主んねんぼうずがお足あしくれへなんだわ」

道説が、あとでこつそり高札を始末しに行こうと思つた矢先、それを見透かしたように季満が言いつのつた。言い終わつてから大男の渋面しぶめんにむかつて舌を出す。

「あ、それは……お名前など書かれてはおられぬでしょうか」

「いや、名前は書いてない……と思つのだが、相あいすまぬ、実はおれも見てはいないのだ。あとで人を遣やつて始末させる」

「わかりました。あ、いや、わたしが帰りに様子を見て参りました。大事なかろうとは思いますが、呪まじを仕掛けた者がそれを見てよからぬことを企くわてるやもしれませんので」

「お任せする。うむ、おれはどうにもこういう話には疎うとくてな、あの一件のあと、佑どのが来てくれたのは幸いであつた。おれと淑よ野しのだけであつたらそのあたりに埋いけてしまつていた」

あの日の明けた朝、佑は羅城門前で道説たちが放置していつた亡なき骸がらを見つけている。死体に刺さつた征矢せいやの矢柄に道説の名を見てとり、建春門けんしゅんもんは左衛門府の仗舎やじしやへ詰めていた道説に声をかけたのが、二人のなれそめになつた。

「いえ、元はといえはわたしの失態です。あの化物を洛中に逃がしたとあつては、どんな二次的な事件の火種になつたやもしれません。わたしも頭かみも、こたびの一件では痛感しております。畢竟ひつぎやう、肉

体の力に勝る術などないのだと。菅原道説さま、陰陽寮とすべ
ての洛人に成り代わりまして、泰佑がお礼申し上げます」

佑は居住まいを正すと、烏帽子をふかぶかと傾けた。道説は円座
のうえで飛び上がると、佑の烏帽子に押さえつけられたかのように
慌てて頭を下げ返した。

「そのようなことをなさる、止められよ！……や、これは面映
ゆい、戯れ言もたいがいになされよ。無学の徒を持ち上げるもので
はない」

盛大に照れる道説。彼がなぜ無位の佑に敬意を払うのか、季満は
なんとなく合点がいったような気がした。要するに、知識人ふうの
頭のよさそうな人間に彼は弱いのだらう。見ている限り、季満はそ
のように見られていないことは明かであったが。

「お、これ季満、なにか心当たりはないのか。死体が動くのだぞ、
なにかあるうが」

照れ隠しのつもりか、道説は季満に話を振ってきた。

「なんもあらへんわ。優等生にわからへんもん、落第生のおれに
わかるわけあらへん」

「ん、落第生？」

「あ、お話ししていませんでしたが」ようよう頭を上げた佑が、
季満のほうを見やって苦笑した。「この季満は、わたしと同じ学生
でした。陰陽寮を出て行って二年ほどになります」

道説の面にふたたび「咩」のいろが兆した。

「へえへえ、そのように見えませいで悪うございました。どうせ
おれは木っ端法師どす、佑はんとは違おすさかい」

焦げた餅を囲炉裏に放ると、新しい餅を火桶に乗せながら、季満
は捨て鉢な声をあげた。季満は職業柄、自分は見てくれでだいぶ損
をしていると考えていた。仕事の内容ではなく、見た目が頼りない
という理由で、門前払いを食うこともままあるのだ。

「あ、これ、怒るな、季満。おれは褒めようと思つたのだ」

「褒めてもろても腹はくちくならへんわ。あ、そうや、道説お酒

あらへん？ お前のお世辞よりそっちのほうがなんぼかええわ」

「……あるわけなかるう。あつてもだれがお前になど吞ませるものか」

道説がムツとした口調でやり返した。さらに応酬しようとした季満の言葉をさえぎって、佑が大きく二度、柏手を打つように手を鳴らした。

「い、いかがした、佑どの」

首をすくめる道説に、佑は黙って廊下を指し示す。さきほど佑の下がらせた下僕が、瓶子と素焼きの杯をのせた折敷を持ってやって来るところだった。

「……お礼を兼ねて、お土産に酒麴を持ってきたのですが」あきれたような微苦笑をうかべて、佑は道説を見る。季満を見る。「道説さまは先客の方と、ご歓談に夢中であられる様子。このうえはわたしひとり濡れ縁をお借りして、雪見酒としゃれこみましようかな」季満がごくりと喉を鳴らした。

「ほ、ほんまに吞めるんか。おれ、冗談でゆうたのに……」

「あつ……佑どの！ お志はありがたいが」穴の空くほどに瓶子を見詰めていた道説が、ややあつて我に返ったようにわめいた。「こたびの騒動は命じられたことではないとはいえ、道説が検非違使尉として成したること。ここで陰陽寮から酒など貰うては、賄のそしりを免れぬ。このような手回しは無用に願いたい」

検非違使佐の干柿のような顔が、道説の脳裏に浮かんだ。職務上不可欠な京識とのつきあいさえ、彼はくどくどと文句をたれるのである。この件が知れたら又候なにを言われるかわかったものではなかった。

「なに堅いことゆうてんにや、もろとけもろとけ。佑はええ奴やなあ」

下僕が床に折敷を置く前に、季満は瓶子に手を伸ばしていた。もはや自分のものとしてなんの疑いも持っていない様子である。

「失礼ですが、道説さまがそう言われると思って、ご家中の方に

お渡ししました。陰陽寮からの付届け、という名目が不都合であられるのなら、それでは一洛人からの寸志としてお納め下さいますようお願いいたします。

「こら、季満！　ご芳志、痛み入る。しかし佐どの、甕酒などさだめし値も張ろう。学生の貧しい懐を食い破ったとあっては、碩学を以て鳴る菅家が名折れ。だが、躰の行き届かぬ愚僕がぬけぬけと受け取ったものを、突き返すなどは非礼の上塗りにもなる。お恥ずかしきかぎりだが、ではせめて酒の代を立て替えるくらいのこととは、させていただけような」

季満の手をひっぱたくと、道説は背筋を伸ばして四角四面にそう言った。円座のうえの巨体が石の柱にでも変じたかのようで、一度こうなってしまうばもうこの男が折れることはない。鑿を当てればきつと石片が散ることだろう。

「いった……なんやごてくさぬかしよって、なんで人の好意を素直に受けとれへんにや」

「……頭の言われるとおりのお人ですね、硬骨の士だ」妙に満足げにひとつ頷くと、佑は折敷のうえの杯に瓶子を傾けた。庭の残雪を映し込んだような、雪白の液体が満ちる杯は二つ。「これを用意したのはわたしではなく、陰陽頭弓削是雄です。非礼と言われるのなら、殿上人の懐具合を、七位の地下人風情が窺うということにまさる非礼がありませんようや」

はたして道説はぐつと詰まった。熟練の石工が石を切るための絶好の急所に通じているように、道説のような男の、どこを押しどこを引つ張れば意のままに動くか、佑は熟知しているのだった。

「道説さま、季満の言うとおりです」佑は間髪おかずに言葉を和らげた。瓶子を持ち上げて振ってみせる。「これに入っているのは純粋な好意です。思うさま呑んで喜んで下されば、わたしも面目が立ちます。頭もまた喜びましょう。それこそが一番礼に適ったやりかたというものですよ」

「佑、ええことゆつた！　ほならおれもご相伴に……」

季満がそろそろと手を伸ばした杯を、道説がすばやく攫さらっていた。

「……思い違いをしておったようだ。佑どの、杯を取られよ」正座を崩してあぐらをかくと、道説はいかにも人好きのする、開けっ広げひろな笑顔を浮かべた。「贈り物ひとつ素直に受け取れぬ愚かな武弁べんに、今日はひとつゆっくりと時間をかけて、ましな頭の使い方のひとつなりと教えていただくこう。もしよろしければ、今宵は泊まっていつて頂けまいか」

「喜んで、道説さま」残った杯を取って目の前でかるく上げると、佑は最前から物欲しげにしていた季満にそれを手渡した。「季満にもお裾分けすそわをしてあげて下さい、滅多に酒など口にできない貧乏人です」

貧乏人よばわりされても、季満はいささかも気を害する気配がなかった。杯の中に自分の顔をうつして、お預けを食った犬のようにそわそわしている。道説は小さく溜息をついた。

「……これ、季満。あの破れ屋やでは寒かろうが。お前も泊まってゆくか」

「……ええんか？」

「酔いつぶれたお前を担かついでゆくよりは、泊めたほうが楽だ。文は明日書くから、今日はゆっくりしてゆけ。佑どの、いま杯を用意させる」

「あ、いえ、わたしは結構です。酒はあまり……」

「なんや、呑めへんのんか。甘いんま！ほんまに酒なんか、これ！」

季満はにこにこしながら、いかにも勿体なさそうに杯をついばんでいる。

「それが本当の酒らしいよ。よかったな季満、おれの方も呑んでいいよ」

「佑どのは呑めなんだか、それは気の利かぬ……申し出であった……甘いんま」

口では申し訳なさそうにしているも、道説もまた杯を傾けるのに忙しい。佑は膝を崩して斜に構えると、薄い笑みを浮かべながら庭を眺めていた。

ときおり思い出し笑いのように、その微笑は大きくなってはじき絶える。彼の表情からなにかを読むことのできる者は、部屋の中にはいなかった。大柄と小柄は甜酒たむさけに酔い、残るひとりなにかしは飽かず残雪を眺めながら、彼にしかわからない某かに酔い、忍びやかに笑っている。

「ほんまに今日はなんの日やろ。餅もある、酒もある。幸せやなあ、正月みたいやなあ！」

真実幸せそうな季満の声が、佑の背を押した。

Returning arrow I

仁和三年 三月三日 丁丑 巳四刻

大内裏は内裏の西、縁の松原と呼び慣わされる松林の中に、二十個ほどの烏帽子がよきよきと林立している。

「ここへ来たからというて、次にまた来なければならぬ、ということはない。なにか代料を取ることもない。ああ、これは特に気をつけられたい。前に幾度か例があつて」

お辞儀のような格好をした、丈の低い黒松に尻を預けて、菅原道説はよくとおる低い声を張り上げていた。

大男をやや遠巻きにして囲んでいる烏帽子の群、その下の顔はいずれも卍を数えまい。ほとんどは六衛府の衛士であつたが、多くを占める麻の衣の中には、陽光をはなかえす練絹の光沢もちらほらとうかがえた。まさか五位とはいわぬにしろ、おそらくは道説のような七位や六位の下官が、興味本位に顔を出しているのだろう。

「場所はこの松原を使わせて頂いておる。武徳殿を使つてもよいとお達しがあるにはあるが、もしどなたかにそう言われたとしても、特に固辞するように。これは道説が一存であるが、これを守らずんば魚腸の席に加うることあたわぬ。主催者の我儘とあきらめてもらいたい」

(淑野め、返すがえすもろくでもないことをしてくれたわい)

道説が羅城門の鬼を退治したという噂がたつてより、一月と半ほど。もともと数人の同好の士だけで内々にやっていた剣術のつどいには、うわべだけの名声を求めて来るものか、いまだに十、廿の志願者が絶えない。大勢の前で話すことが好きではなく、大人数に効率よくものを教えることも知らない道説にとっては、降つてわいた員数増加は迷惑きわまりない災難であつた。

「本日は挨拶まで。各々お役目に障らぬ程度に、ほどほどを心が

けて努まれよ」慣れぬ微笑を彫りのふかい顔に貼り付けて、道説は早々に話を切り上げにかかった。背後の黒松を後ろ手にしめし、「この妙なかたちをした松、みなは辞儀松などと呼んでおるが、大抵はこれの近くで適当にやっておる。この道説がおらぬこともままあるうが、仲間内で助け合つてやるもよし。虚空に向こうで太刀を振るつても力はつく。そのあたりは各々の裁量にまかせるが、松を損ずることだけは避けるように。各々方、なにか質問はあるうか」

「管少尉どの、ひとつお聞きしたいことがある」

声と共に手が上がり、てらてらした絹の長袖が、周囲の烏帽子をかすめてひらめいた。ややあつて人垣から押し出されるように、若い男が道説の目の前まで歩いてくる。

「じつを言えば今日この場で、前の鬼退治の腕を見せていただけようと思つておつた。残念なことに、本日は挨拶まで、とのことだが」隠そうとしても隠しきれぬ軽蔑の色が、男の貌をつかのまよぎつた。「そこもとの腕を信用して集つた我らに、せめて劍の極意のひとつなりとご講義ねがえまいか。お話如何によつては、辞儀松を目指す人足もさだめて繁くなるうほどに」

言葉の内容とは裏腹に、男の顔には敬意のかけらも見いだせない。まわりの者より格段に様子の良いところをみれば、まず官人であることは疑いない。絹の狩衣に金柄の細太刀などを吊つた態は、ひよつとすると五位以上の殿上人であろうか。

いずれにせよ、彼は武官には見えなかつた。

「ご説、ごもつとも。うむ、劍の極意と申されるか」微笑の裏から浮かんできた本物の笑みを抑えきれず、道説はえくぼを隠すようにして傍らの男に顔を向けた。「長恭どの、魚腸の説くところの奥義、必勝の極意をこの方に」

長恭と呼ばれた青年が、道説の含みに薄い唇の端をあげる。ひとつ頷くと、帝の寵姫もかくやという白い麗貌を人垣に向けた。

「お答えしましょう。魚腸劍における必勝の極意とは 常に弓

を手放さぬこと、これに尽きます」

高らかな声に、はたして二十数個の口腔がむなしく半開きになる。中天にかからんとする太陽の下で、どこからかカラスの間抜けた声が響いた。

「あの間抜け面ときたら！ 金柄どのもざまを見ましたね、妙法先生を虚仮にするからばちが当たったのです」

美貌の青年、藤原長恭がさもおかしげにそう言った。

数日前から雲ひとつない快晴が続いている。近頃では珍しいほどの陽気で、晩春にしてようやく衣内のぬくまる心地よい季節が巡ってきた。早々に魚腸を解散したあと、尻に根が生えてしまったように、道説は辞儀松にもたれかかったまま長恭と長話に興じていた。

（あの金柄どののような方が、たびたび来てくれればよいのだがなあ）

松葉を透かす、千々に切れた陽光に目を細めながら、道説は肺のしぼむほどに太い溜息をついた。剣術のつどい 魚腸に集まる人間は、少なければ少ないほどいいと彼は思っている。といっても別段、修練の質が下がるからとか、いさかが増えるから、などといったたいそうな理由はなく、

（めんどうだ。どだい人にものを教えるようにはできていないのだ、おれは）

つまるところはこれであつた。

「あのような軟弱者は、木陰で弓弦を鳴らしているのが関の山です。 剣は弓箭に如かず、妙法先生も奥の深いことをおっしゃる。なるほど、敵わぬものを常に念頭に置いておく、その謙讓の心を持つて修練に当たらねば、よろず驕りが生まれるのも当然。これは他のどのようなことにも言えますよ。まあ、黄金の太刀を吊っているような輩には、額面通りにしか受け取れぬでしょうがね」

長恭の好都合な解釈にはいつも感心させられる。これもまた特に深遠な意味などなく、道説はごく単純に「剣は弓箭に如かず」を地

で行っていた。撃剣よりも飛矢のほうが優れているなどということ
は、子供でもわかる簡単な理屈である。

前の金柄公卿のような輩は、志願者の中にたいてい一人はいた。
ありていにいえば冷やかしである。

武官文官を問わず、武芸において重視されるのは、ふつう「騎
と「射」であり、太刀は護身用、ないしはちょっと重い装飾品くら
いにしか認識されていなかった。

剣の先生まがいのことをやっている道説ですら、こと考え方にお
いてはその例に漏れないのだが、常に斬新でめずらしい催しを探し
ている若い公卿たちは、どうもそのように考えないらしい。ちよこ
ちよこと顔を出しては、やっかみ半分に難癖をつけ、溜飲を下げに
来た。

道説としては、頼みもしないのに露払いをしてくれるので大歓迎
なのだが、十人来れば九人去る、廿人来れば三人残る、といった具
合に、結局魚腸はじりじりとその構成員を増やしつつあった。

「妙法先生、今宵は宿直ですか」

太刀を抜いてえいやあと素振りをしていた長恭が、ややあって薄
く汗の光る白面を振り向けてきた。

（いまさら言つても詮ないが……面映ゆきかぎりよ、このおれが
よりもよつて妙法先生などと）

この呼称にも辟易していた。いくらやめると言つても長恭だけは
聞き入れないのである。いわく「弟子が師を先生と呼び習わすのは
けだし自然」なのだそうな。

「……なぜ『魚腸』なのだろうな、なあ、蘭夕郎」

「いきなりなんです、蘭夕郎はおやめ下さいと」

道説に苦手な呼称があるように、長恭にもそれはあった。夕郎と
は彼の役職たる蔵人の謂である。

「なぜ『さかなのはらわた』なのだろうな。それほどに生臭いか
ね」

「……さて、わたしにはなんとも判じかねます。と言つても、お

おかた物珍しい名前をつけてみたかったとか、そのようなところでしょう。それはだれもつけませぬでしょうよ、『はらわた』だなどと」

「魚腸」の名は、道説がつけたものではない。始めた当初は、もっぱら隠語の意味合いで「剣ノ妙法」とか、単に「妙法」と呼んでいたのが、とある人の鶴の一声で「さかなのはらわた」という珍妙な呼称になってしまったのである。

（てつきり「御朝」だとばかり思っておったな。もっとも、おれの剣にさよう雅やかな名など似合おうはずもないが）

「それで、おれが宿直だとどうかするのさ」

長恭の細い眉が困惑げに寄り、一拍おいて開いた。どうやら自分で振った話題を忘れていたようである。

「あ、はい。少し相談事が」

「そなたに解決できないことが、おれなどに解決できようかな、藤蔵人どのよ」

欠伸まじりに呻いた。道説の体は徐々に松の根元からずり落ち、ほとんど地べたに寝ころんでいるような態になっている。

歳こそ廿そこそこではあるが、父親が高位であるを以て、藤原長恭は道説よりも位の高い従六位上を授かる身であった。毛色の違いは氏索性だけでなく官職にも及び、内裏は校書殿にあって帝に近侍する、蔵人を任じている。衛門檢非違使尉などと比べてどちらが見栄えがするかは、誰の目にも明らかであろう。

そのうえ容姿端麗、詩歌を吟じては達者、舞楽に非凡な才覚をみせ、興ずれば今様まで謡って女どもの熱視線を一身にあつめた。ちなみに長恭の名は、彼の父が息子の麗質をことのほか喜んでつけたもので、唐は北齊の美貌の名将、蘭陵王高長恭に由来する。

腕っ節しか誇れるものない道説にとっては、はつきり言って完璧人間である。そんな彼が、似つかわしくもない剣術に熱を上げ、「妙法先生」を敬して格下にあらたまることが、道説にはしごく不可解に思えてならない。

「妙法先生には、懇意の陰陽師がおられるとか」

道説の頭の中にたちまち、泰佑の知者然とした肖像が結ばれた。

「まあ、おるが」

「……話が前後して申し訳ありませんが、わたしの相談事を聞いてもらえましょうや」

握っていた拔身を鞘に納めて、長恭は辞儀松に語りかけるようにして語り出した。

二、三日前、彼の父良世が朝議の果てたころ、太政大臣と左大臣がある話をしているのを耳に挟んだ。

朝議とは、八座の参議、および納言、大臣などの公卿が、大内裏は東の外記庁において日毎に執り行う閣議のことである。長恭の父である藤原良世は、正三位大納言という雲上の位をもって、国政に参与する資格を有していた。

「いわく、太政大臣が最近、立て続けに奇妙な夢をこらんになられるそうぞうで」

夜ごと、枕中に弓弦の音を聞くといい。弓鳴りは邪をはらうと謂われており、当初は大臣も吉祥のしるしかなどと樂觀していたのだが、日を追うごとにその音には、風を切るような鋭いものが混じるようになっていく。

それがどうやら矢音であるらしいことに気付いたのが、二、三日前、左大臣に話をした日のことである。

「どうも陰陽寮にことをお諮りになられたようなのですが、よりもよつてただの一人も手を空けられぬとのこと。大臣はそれきり夢解きなどなさるでもなく、あまりお気に留めておられぬ様子で、ひだりのおとこ、左大臣にお話をされたときも、なかばは冗談まじりであられたそうです」

話を聞いた左大臣が、せめてもと身につけていたお守りを大臣に渡したところで、良世は図々しく割り込んでこう切り出した。

「太政の君におかれましては、御憂悩ありのご様子。ここはひと

つ、それがしめにお任せ下さりませぬか。いやなに、一、三の策もござりますゆえ」

実はそんなものはどこにもなかったのだが、こういった出世の糸口を逃さずに掴まえてきたからこそその正三位なのだ。ほどなく良世にも陰陽寮の手を借りられぬことがわかり、はたして蹠踉と家路についた彼のかんばせは、

「真つ青でした。まったく、左大臣におかれては、さだめしご不快であられたことでしょう。父はいつもそれなのです。外では調子のよいことばかり吹聴して、自宅に一步踏み入ればたちまち、ああどうしたものか、とか、成らねばお咎めぞ、とかわめいてうるうるまごまご。ちつとも学習しないのです。わたしもああはなりたく

「……長恭どの、話がずれてきた」

「あ、申し訳も……」

これほどに父親をこきおろしておきながら、つまるところ長恭の相談の要とは、父親の吹いたほらを実現させることであつた。

(口ほどにもなく、父御を好いておるようだ。しかし……)

泰佑も、陰陽寮に属することに違ひはない。官師ではないにしろ、道説としては安請け合ひはできなかつた。

「聞くことは聞いてみようが、実を言えば、その懇意の法師も陰陽寮のひとでな。しかとは請け合えぬのだ」

いちど立ち上がつて尻を払い、邪魔な太刀を外して立てかけると、道説はふたたび辞儀松にもたれかかつて眼をつむつた。

「わたしも当たれるかぎりの伝を当たつてはみたのですが……正直、八方手詰まりです。どうにも陰陽師という輩は融通が利かない、理屈ばかりこねるし……」

融通が利かない、という意見には、道説も賛成であつた。

陰陽師の位はごく低い。七位がせいぜいの下官であるのだが、怪力乱心を語るものの常として、彼らはあまねく長袖者に受けが良かった。その人数の少なさも相まって、近年の僭上のふるまいにはや

や眼に余るものがある。

「で、急いだほうがよいのかな。明日あさつてにでも」

「相すみませんが……上巳が約定の日です」

「上……今日ではないか、それは！」

「まことに申し訳も……わたしも話を聞いたのが一昨日で、なにもかも父が！」

道説は耳を塞いで長恭の繰り言をさえぎった。

（ええ参った。今日いきなり尋ねて、そうそう都合よく引き受けてもらえようか）

「致し方ないが、事情が事情だ、そなたにも来てもらったほうがよからうな。しかし、それほど緊急事であるのに、陰陽師どもはなにを考えておるのだ。畏くも太政大臣の御懇請を無下にすることは、まさか多忙など理由にはなるまい」

「ええ、わたしも」

長恭が何か言いかけて、ふと口をつぐんだ。すばやく道説の傍らに滑りより、だらしなくくつろげていた肩を指で突く。

「なんだ」

「陽も昇りきらぬうちに昼寝かつ、菅家判官！」

黒松の幹に寄りかかっていた大男の体が、ひとたまりもなく地面に転がった。松林の梢が一斉に傾ぐかのような、耳を聳する大音声が松原をなぎ払っていった。

「やかましいのが来ました……」

長恭がうんざりと耳打ちをする。

土を踏む足音も聞こえぬほどの遠い位置から、大小二つの人影がこちらに向かって歩んでくるのが見える。前の怒声は大きなほうから放たれたもので、傍らの小さなほうは片耳を押さえ苦笑していた。

大きなほう

文室巻雄が大股で道説たちに近づいていく。齢八十に垂んとする老翁は、まったく老いを感じさせない機敏さで、

ま

ず長恭の烏帽子頭を平手で張った。

「ごぞかしや蘭籐め、悪口は儂の聞こえぬところでせい！」

声や眼のよさに加えて、まことおそろしきは地獄耳であった。

鶴のごとくに痩せてはいるが、道説に迫らんとする長身には、往年の筋骨の遺構がいまだに息づいている。高齡から役職を返上したために散位ではあるが、位階は従四位上の高位。やはり道説などは比べものにならない地位にいる。

「道説、もう終わったのか」

「おおそれよ、これ菅家判官、近頃は老松に尻を預けて太刀を振りおるか」

小さなほう

源定省の苦笑まじりの問いかけに、巻雄の塩辛声

が和した。

「あ、いえ、本日は新たな志願」

「だまらっしゃい。忙しきにかまけて顔を出さなんだら、たちまち怠けおる。若人が悪しき慣よ、主催者たる汝がそれでどうする」

巻雄は「忙しき」と言うが、彼は役職のない「散位」であった。ありていに言つてヒマである。ついでに言えば、彼はつい二日前にも辞儀松を訪なつてわめき散らし、彼の言う「若人」たちから盛大に煙たがられていた。

「まあ巻雄どの、かように道説も長恭も反省しております。続きは明日以降、剣においてなされればよろしいではありませんか。けだし若人というものは、言葉で説諭されても反感ばかりを生ずるものにございますれば」

そう言つて取りなす定省は、しかし長恭と同世代、立派な「若人」であつた。

「いかにいかに。甘うするとすぐつけ上がるも若人が慣ぞ、ここで厳しゅうしてやるのがこやつらの」

「ご説、逐一ごもつとも。わたくしも、これなる二人も、いまだ巻雄どののご指導が不可欠にございます。我ら三人、師にはいささかの含みも持ちとうはありませぬゆえ、さよう申し上げました。

あ、お言葉をお止めいたしましたして失礼を。さ、どうぞ続きを」

「うむ、まあ、よいわえ……」

はたして、定省の穩和おんわなうりざね顔に気を吞まれた巻雄は、皺顔しわがわをゆるめて言葉を濁した。こと言葉においては、定省のほうが一枚も二枚も上手であった。

（鮮やかなものだ。巻雄さまのごとき一刻者いっくものを、弁舌べんぜつのみであらも軽くあしらうとは）

叱られて縮こまったふりをしながら、道説は胸中で唸うなっていた。傍らを見やれば、長恭のうつむいた横顔は、小さく舌を突きだしている。

「道説、長恭、魚腸は盛況せいけいのようだな」

定省が大男を振り仰いでにっと笑った。

「は、いえ、大概は一瞥いちせつするのみにて」

「いまだ十名を数える程度ではございますが」道説をさえぎって、長恭が水を得たようにまくしたてた。「それも真に気骨きこつある土を選びすぎるがゆえ。みな妙法先生に心酔し、文弱を憂う好漢こうかんどもにて、一朝ことあらばただちに」

「あ、長恭どのハエが」

道説のたくましい腕が振り上げられ、長恭の華奢わしゃな背に叩き下ろされた。彼の頭ではほかに、長恭の長広舌ちやうこうぜつを止める手立ては思いつかなかった。

（よけいなことをべらべら喋りおって……！）

悶絶する長恭の抗議の視線に、「黙っておれ」と無言の一瞥を返す。

二、三の知人となんとなく始めた剣術のつどいを、周囲の人々がよってたかって大事おほいにしようとするのを、道説はかねてから苦々しく思っていた。魚腸の名も、武徳殿の使用御免も、彼にとっては重荷以外の何物でもなかったのだが、

（かと言って、高貴な方々のお骨折りを無下むげにするわけにもゆかぬ……頭の痛いことだ）

「おお、十人か。まだまだ少ないが、以前の四人に比ぶれば躍進やくしん

と言つてもよいな」

巻雄は我がことのように喜んでゐる。日々時間を持って余しているこの老人にとつてみれば、剣術のつどいなどまさに格好のヒマつぶしのタネであるう。

「巻雄どのもお忙しゅうなられますな、ご自慢の御佩刀も面目を躍如いたしましょう」

定省が朗らかに笑いながら、まこと無責任に調子を合わせた。真偽のほどは定かではないが、なんでも巻雄の佩刀はかの蝦夷の梟雄、阿弔流為の愛用した太刀であるのだそくな。もつとも、そのように吹聴しているのは当の持ち主だけなのだが。

「うむ、ゆくゆくは衛士どもを片端からひっぱってきてだな、弓馬に剣に、宮仕えの心得なども教えてやればと思つておるのよ。

かつては何殿の薨に妖狐を追い、その忠勇比類なきを謳われたこの儂だ。齡七十八を数え、お役目を返上したとは申せ、まだまだ後進に申し送らねばならぬことは山とあるでな」

ちよつと持ち上げると、たいていはこんな調子であつた。かつて彼が左近衛少将であつたとき、東宮の屋根に飛び上がり、御殿を尻に敷いた不敬の狐を斬り殺したという話は、ひろく人口に膾炙している。もつとも、それも廿年以上も前のことなのだが。

「……妙法先生、付き合つてはおれませぬ。参りましょう」

道説のほうへ頭を差し向け、長恭は聞こえよがしに囁いた。その白い顔はあからさまな険に翳つている。彼と巻雄の不仲もまた、道説の頭痛のタネのひとつであつた。

「蘭籐め、聞こえておらぬと」

「巻雄さま！ 長恭どのには道説がよう言つて聞かせます。こはなにとぞお平らかに」

道説のつたない弁解をさえぎつて、長恭冷淡にいわく、

「我らは小用につき、これにて失礼させていただきます。巻雄さ

ま、続きは老松同士、そこな辞儀松とでもこゆるりとなされませ」
はたして、巻雄の皺だらけの額にツノが飛び出た。

「長恭どの！ いや巻雄さま、若人が妄言にございます」

「道説、行け、ここはわたしが執り成ししよう」定省がすばやく、抜き放たれようとしていた巻雄の太刀の柄頭を押さえつける。

「……お前とはおちおち話もできぬ、巡り合わせが悪いのかの」

「ええ退け、定省！ 僭越ぞ！ 小童め、今日という今日は許さぬ！」

「はやく行かぬか、道説。巻雄どの、豎子が戯れかかっただけにござりませぬ、度量をお見せなされませ」

暴れる老人をいなし、押さえつける拳作が、妙に板についているように見える。どうやら巻雄の癩癩には慣れていようである。

「失礼を……」道説はきつちり二回、もみ合う定省たちへ頭を下げると、傍らでふてくされていた長恭の首根っこを掴んで引きずり出した。「そなたのおかげで気苦勞ばかり絶えぬ！ あいだに立つおれの身にもなつてほしい！」

「申し訳ありません……道説さま」

(この青年は……やはり理解できぬ……)

されるがままになりながら、美貌の青年が熱視線を送ってくる。それを痛いほど頬に感じながら、道説は朱雀門を目指して小走りに駆け出した。

大男の長大息に、遠ざかりつつある巻雄の癩声が和した。

Returning arrow II

三月三日 丁丑 午三刻

「……チュウや、喉、詰まるえ」

福々しい面の眉根を寄せて、延然はなかば呆れ気味にそう呟いた。
「飢えて、死ぬるくらい、やったら……そっちのほうが、なんぼか、マシどす。ゲホ」

「あほ、ここで死にでもされたら念仏あげるのんは誰や」

「ほうら、仕様のない子オヤ」と、小さな子供の食事のめんどろを見るようなかいがいしさで、延然は銚子の水を季満の椀に注いだ。当の季満は口いっぱい飯を含み、体をよじって咳き込んでいる。

季満の咀嚼音のほかには、東市の喧騒が届くのである。かすかに遠く人声があるのみである。といっても、それも気に障るほどの音ではなく、むしろこの境界の静けさを強調する一助ともなっていた。

鴻臚館にほど近いこの屋敷で、季満は延然に食事を馳走されていた。

「……あ、茗荷や」

鯉の熱汁の中に好物を見いだして、季満は白木の箸でそれを摘み上げた。

「そのな、庭で採れたんや。買ってきたモンやのうて悪いけどな」

笑うと、実に人の善さげな皺が目尻に寄った。齢五十ほどの延然であったが、そうしていると一回りほど老けて見える。座ついても季満を見下ろすほどに背が高く、ひよろりと痩せてはいたが、その体に不釣り合いなほど顔が大きい。異形ではあるが、それゆえの愛嬌であるとも言えた。

「仕事……おへんのどすか」

季満がぼつりと呟いた。顔は上げずに、飯に混ぜて炊き込まれた野良豆を箸で退けている。

薑の漬物に手を添えて、今し口に運ぼうとしていた延然の動きが止まった。ふたたび眉根を寄せたその貌には、先刻の呆れにくわえて、ある種の申し訳なさが刷かれていた。

「おへん。あのな、なにも意地悪しとる訳やないんえ。チユウだけやない、食うに困ってるもんはようけおる。こないだは阿坊が来たし、実丸も来た、平法師も来よつた」

「……平法師は大水で流されたやおへんどすか、去年」
「ん、そら一昨年やる？ 流されたんは二条法師や、こないだ枕元に立つたし」

「その二条が平法師どす。いつやつたか平氏の某に『勝手に氏を名乗つた』言われて、郎党に家潰されて、それから名前変えたんやつたらか」

季満も含めて、在所の定かでない陰陽法師たちはみな、親から貰つた名前を名乗ることはなかった。

無論、その多くは京の生まれではない。故郷では食べてゆけず、居場所もなく、たつきの道も見いだせぬ、そういつた者たちが、なんら信憑性のない「平安京」の噂を信じて洛内に押し寄せていく。

噂は噂である。黄金で葺かれた屋根を夢見た彼らのほとんどは、より貧しい夜盗かなにかに刺されるか、八方手に詰まって羅城門の下で末期を迎えた。生き残るのは、藝あつてどこかの屋敷に雇ってもらえる者。弁が立ち、他を騙すこと、掠めること、襲うことに良心のためらいを感じない者。法の網をかいくぐって生きてゆける小狡い者。よそから流れ込んだ悪で、京の治安は日毎に悪くなってゆくのだが、それに比例して、地方に流れる噂が華麗を極めるのはなんと妙な話であつた。

二人はしばらくのあいだ、お互いが見知っている法師の所在について確かめ合つていた。彼らの名前はいずれも至極適当につけられており、ころころと頻繁に変わった。「呪い師」などというものは、

たとえどれほど需要があろうとも、なかばは詐欺とほとんど変わり
はしない。人を騙して恬として恥じない彼らも、そのたつきの賤し
きに本名を名乗る不孝だけは忌避するのである。

いきおい、だれそれがどこそこでああなつただのと話し合ってい
るうちに、二人は次第に口をつぐみがちになっていった。知り合い
のうちのほとんどはなんらかの、それも恐らくは二条法師のような
理由で名前が変わり　もう半分はすでに鬼籍の者となっていたの
である。

季満は無言で、膳に取り残されていた焼大根をつつき出し、延然
は板のような両手をすり合わせながら「澆季末世やな。若いモンが
食うてゆかれへん、生きてゆかれへん。どこもかしこも真つ暗や」
などと呟いた。

「……拙僧にできることゆつたらな、こつやつてたまに御飯食べ
さしてやるくらいや。かんにんえ」

延然の志に偽りはあるまい。もともと仕事をもらいに訪れて断ら
れ、ちょうど食事どきということで馳走になっていたのだが、僧で
ある延然が食べるはずもない鯉が膳に出てきたことから、あらか
じめ季満のような者たちに食べさせてやる用意をしていたことは明
らかであった。

「……御馳走はんどした。　澆季ねえ。地べたが暗いんは、お
日様の出とらへんからや思うけど」

「なかなか穿つたことゆうやないか、チュウ」延然が興味深げに
小首を傾いだ。眉根に寄つたしわが少し緩んでいる。「そうやなあ、
地イの明かならんのは、天の晴れへんからつちゆうことが。まあ一
理あるわな、朝廷は確かに晴れてへん」

身にまとう僧衣こそ質素なものだが、延然は東寺の律師であつた。
律師とは僧官　僧侶のなかの官人であり、五位の者とひとしなみ
に殿上に伺候できる、法橋上人位という高位を持つ。

殿上とは、また天上の意味をも含む。内裏という名の天に昇り、
その内実に接する機会のある延然には、けだし皇風を覆う暗雲こそ

目に明かなのであろう。京戸を持たぬ季満ですら、公卿たちの生産性とは無縁の、奢侈に満ちた暮らしの噂くらいは聞き及んでいるのである。

「去年はなんとかお凌ぎやしたようやが……今度ばかりは聖上の御惱も思わしゆうないようや。こんなところで口に出すのも畏れ多いことやけど、こら近いうち御崩御なり御讓位なり、あそはすかもわからんな。もっとも、どなたはんが万乗の君におなりでも、すわ地イの明うなるなんてことはあらへんやろが……」

話すほどに、巨僧の貌は刻々と曇っていった。

今年五十六の宝算をかぞえる今上は、短い期間に二度、篤い病を得ている。去年の秋に時疫をわずらった折は、大比叡の座主である円珍上人の平癒祈祷によつて事なきを得ていたが、今年に入つてすぐに再び病み、その後の容態は詳らかになつてない。

よい噂が流れないということは、おそらくは延然の言つとおり「思わしゆうない」のであろう。どちらにせよ、雲上のできごとである。季満にはいまひとつピンとこない話ではあつた。

「天台密教を悪しゆう言うわけやないけど、こればかりは人知の及ぶとこやないんやな。お上人は今回も気張らはつとるようやが、たぶん駄目やろ。むろん拙僧ら真言密教がやつても同じや。天命ゆつやつや」

ひとつ溜息をつくくと、延然は懐を探つて麻袋を取り出した。「お食べな」と言つて季満に手渡したのは、一掴みの干した杏子だつた。

「あ、おおきありがとございます。甘い」

「……せんだつての羅城門のあれはな、それでちやらやで」

「……ちよう感心したつたらすぐこれや。しつかりしとるなあ、

この坊主)

加持祈祷の仕事を斡旋するこの律師を、世間では売僧とののしる人も多かつたが、そうして得た私財を残らず悲田院や施薬院に寄進していることを、季満は知っていた。吝で食えぬ強かな僧だが、その性は決して卑しいものではない。

「チュウや、いつやったか話してた、佑ゆう学生はんはどうな
や。なんやソツチの仕事したはるんやろ？」

自らも菓子をかじりつつ、延然は大幣を振る仕草をしてみせた。

「チュウ」は延然が季満につけたあだ名で、彼のいわくところでは
「雀みたいに細くて、チュウチュウよく鳴くから」なのだそうな。

「学生やからこそ、お足なんか取れへんのどす。あいつもたぶん、
そんなに持ってへんやろし」

一応、学生にも菜料などと称して給料が出たが、まさに雀のなみ
だであった。貴族の子弟であるならまだしも、他人に仕事を頼むほ
どの余録など残りようがない。

「ついこないだまではな、この斡旋事業にお足出してくらはる偉
いお人も、何人か居やはってな。今よりはお互いやり易うなってた
んやが、そうゆう有徳のお人はみいんな洛外へ飛ばされてしもた。
何々のカミやら何々のスケやら、適当なお役こうむってな、『はい、
もう帰ってこんでええよ』とこうや。 澆季やな、ほんま」

延然は結局、ふたたび溜息に落ち着いてしまった。

（澆季え、ほんま。これからどうして乗り切ったらええにやる。

お足ないし……）

まがりなりにも、延然は殿上人である。息を溜めるだけで済みも
しようが、万年貧乏で身寄りもない季満にとつては、冗談ぬきで息
の絶えかねない事態であった。この延然の借り屋へたびたび押しか
ける、というのも気が引けるし、どだい彼が常にここにいるという
こともない。

（もうなりふり構つとれん、たまこちゃんに頭下げるか……あ、

あの大男！）

季満の頭の中にたちまち、菅原道説の仁王然とした肖像が結ばれ
た。

（あいつや。あいつお人好しやし、泣いて頼めば恵んでくれるか
もわからん）

「そうそう、有徳のお人で思い出した。近々にな、讃岐守さまが

帰京されるそうや」

延然の喜色きしよくを帯びたひと言が、季満の貌から感情のいろを削そぎ落としていった。彼は言い終わるとすぐ顔を逸らし、「おおい、誰ぞ膳下ぜんげてえな！」などと奥に声をかけていたために、この同座人どうざにんの表情の変化には気付かなかつた。

「まだ任期も半端はんぱやから、お帰りも一時いっときのことやるけどな。あのお方にもひとかたならん援助をいただいたもんやが……なんやチュウ、けつたいな顔して。具合悪いんか」

「……けつたいな顔は生まれつきどす。おれ、ああゆう金持ちで学があつて、ほどこし好きな貴族はんは大嫌いや。おれらみたいな人間を見下しとる」

そのひと言が彼の癩かんに障つたのを、季満ははつきりと感じ取つた。延然の眉がこころもち聳そびゆき、しかしまばたきするひと間にも、それは平たいらかになつた。

「なんや、会あつたことでもあるんかいな」

常と変わらぬ平静の声は、なまじ癩声かんこえを出されるよりも、よほど延然の心のうちを明らかにした。彼の讃岐守に対する、その並々なみなみならぬ尊敬心を。延然は彼の名譽のために怒り、彼の名譽のために怒りを堪えた。

「おへん。絹きぬのべべ着て、牛車ぎしやのつて、遊び暮らして、貧乏人の血ちい吸うて生きとる。長袖者ちやうしゆじやうゆうんはみいんなそうや。おれはよう好かん」

激しかけながらも一方で、季満は食事の礼にこんな言葉しか返せない、おのれの貧しい性さがを呪つた。延然はなにか言おうとして口を開いたが、やあつて三度目の溜息をつくにとどまる。

「……拙僧せつそうもな、ひとかどの地位をいただいとる長袖者のひとりや。明日も知れんチュウが、食たらんに困らん拙僧らのことを、憎らしゆう思おもつのも無理からんことや。そやかてチュウや、他ならんお前らの為に、勘定かんじやうもできひんほどの援助をしてくらはつた讃岐守さまのことだけは、悪わるう言いわんでほしい。拙僧は売僧うりそうや、死ぬれ

ばきつと地獄に落つるやる。憎むんならな、地獄行きの拙僧を憎んでほしい。なあチユウや、お前らの身上を心底から憂えてくらはつたお人のことを、悪うゆうたらバチ当たるえ」

貧しさのゆえに、その貧しさを救わんとした富貴を悪く言つてはいけない、と延然は説いた。長い説諭の果てに、季満はお互いに論争的を外し合っていることに気付き、急速に頭が冷えていくのを感じた。延然の推察は誤解であつた。

「……すんまへん、言い過ぎました。やあなに、最近話し相手もおへんで、坊さんの説教が恋しゅうなつたんやるな。本心やあらへんよつて、かんにんしとくれやす」

季満はもう一度「御馳走はんどした」と言つと、杏子の残りを懐にしまつて立ち上がった。

「ぼちぼち去にます。もしかしたら家に仕事きてるかもわからんし」

言い終わつてしまつてから、皮肉に取られまいかと氣を揉んだのだが、季満のささやかな改心に氣を良くした延然は笑顔のままだつた。

「うん、来るとええな。　帰りしなに庫裡に寄つてな、お米があるさかいに、そこらのもんにゆつてちよう都合してもろたらええ」

思わず快哉を叫びそうになつた。

「そうそう、今日は上巳やったな。いっちょ染でもこしらえてやな、神さんに手エのひとつも叩きいな。仕事のほうもあんじょういくかもわからんえ」

坊主に「神様に柏手しろ」と言われるのは初めてだったが、こつてつまらぬ横槍を入れて氣でも変わられたら目も当てられないので、季満はとりあえず目の前の坊主に向かつて手を叩いてみた。

「神様仏様延然様、おおきありがとうございます。お足ができたらお供え物も奮発しますさかい。ナムアマミダボツ」

「あほ、仏僧に向こうつてええ加減な経文たれよつてからに」そう

言う延然の顔は笑ったままであった。「困ったらな、いつでも来るのんえ。お足以外ならなんでも相談に乗るよつて」

(お足以外ときた。ほんまにしつかりしとる)

「ほなら、おやかまつさんどした。讃岐ちよめはんはどうか知らんけどな、坊さんは極楽ごくらく行けるえ。おれが保証します」

延然の言葉が返つてこないうちに、季満は逃げるように部屋を飛び出していった。

Returning arrow III

三月三日 丁丑 未四刻

遠く東市の賑わいを背に、ほうほうの態で西洞院大路を駆けわたる二人の人間がいる。

「いやはや、市つてのア、あんなに込むのかよ。人混みに酔ってしもうたわ。 ええ腰いてえ」

二人のうちの老いたほうが、伝法にそう言つて後ろ手に腰を叩いた。が、言うほど痛そうにも、酔っているようにも見えない。

「……クソじじい、いつまで持たせやがる。ほら、あとはてめえで担げ」

片割れの若い方は、前をゆく老人の背に唾を飛ばしながら、肩に食い込んだ荒縄と格闘している。こころもち落とされたその肩には、振り分けに荷われた瓶が二つ、持ち主の歩調に合わせて揺れていた。「おれも同じものを担いどろろが。こんなじじいに前を歩かれてあげくに荷イ担いでくれるなんぞとよう言えたものだわい。それから吟師、歩け歩け」

(こいつについてきたのがそもそも間違いだつた……！)

二つ合わせれば、重さは五貫ほどにもなるうか。結び目をほどく作業はちつともはかが行かず、粗い繊維が数条、吟師の爪の中に入るのみであつた。

「クソじじい……これは一体なんだ。なんでこんなに重てえ」

吟師は西洞院川を渡りきつてしまうと、止めていた息を大きく吐き出した。連日の陽気はもちろん不快なものではなかったのだが、市も川も、こういつた晴天の下ではことさらに臭つた。前者は有象無象のいきれが、後者は北の一条からこの七条まで、はるばる流されてきた塵芥が、である。

吟師が呼師について屋敷を出たのは、まったくの偶然にすぎない。

彼には彼の用事があつたのだが、呼師が「市は初めてでこのう」などと心細げにしていたので、つい親切心が鎌首をもたげたのであるが、（あれは演技だったにちがいない。おれはいいように踊らされている……）

このような仇で返されるとは思つてもみなかった。

「耳を当ててみい」

呼師が立ち止まったので、吟師は瓶を平行に保ちながら言われたとおりしてみた。冷たい陶の肌の向こうから、さかんになにか細いもので引つ搔くような音がしている。

「……わからねえ。生き物か？」

「おお、活きのいいやつだ。たつぷり入つとる」

「夕餉の菜かね」

「おれは食わぬがね、蜘蛛なんぞ」

呼師のひと言を聞くやいなや、吟師は川へ駆け戻ると、それを勢いよく川面へ投げつけた。好天のために水量が減つて、うつつらと汚泥のあらわになつた川にそれは落ち、ごぼんと粘着質の音を立てる。

「ああ、ああ、勿体ねえ。ありや陸奥にしかおらんでたいそう値

が

「やかましい！ クソツじじい……てめえなんてモン持たせやがる！」

吟師は声をひっくり返してわめいた。輪になつて広がる波紋を恐々と見やる間にも、汀の草叢を縫つて無数の蜘蛛が殺到してくるような気がする。瓶の触れていた肩を狂つたように手で払い、合間あいまに両手の匂いを嗅ぎ、なにかが這い上つてくるのを振り払うように足をばたつかせるさまは、折しも繁華たけなわたる東市のはずれにあつてはたいそう悪目立ちした。

「なんだそりゃあ、新足の走舞か、吟師や」

「……………！」

道行く人々の好奇の目にさらされて、吟師は恥で真っ赤になつた。

呼師はまこと信じがたいことに、彼を遠巻くの衆人の一人になって無邪気に笑い転がっている。

「やあ、お前も多芸だのう、笑かしてくれるわい。　そら、そこな娘さんも遠慮のう笑うてよいぞ」

たまたま近くで遠慮がちに手を叩いていた壺装束に、呼師が老人特有の無遠慮さでからみだした。地面に届かんばかりの虫垂衣むしのたれきぬを透かし見るように顔を寄せ、「んん、かわゆい女子おなごだのう」などと鼻を伸ばしている。

「はあ、あのう、とても妙味があつて、面白うございました」

辺りにいた人々はじき往来に散つていったのだが、その娘だけはまったく取り残されたように、道の隅で所在なくもじもじしているのだった。苧麻かとうの紗しよの向こうの小顔には、八分のありがたさと二分の迷惑とが見て取れる。

（声をかけられるのを待っていたな）
と吟師は思った。

「連れの無礼は平ひらにお許ゆるしてください。すっかり耄碌もうろくしておりまして、他人とおのれの孫の区別もつかぬのです」

言葉遣いを一転あらためると、呼師へのささやかな復讐ふしうもかねて、吟師は娘の望むとおりに声をかけてやった。

「おうおう、おれと喋るときとは全然違つのだのう……」

「無礼ついでに言うのですが……ひよつとしてお困りではないですか？」

娘はそう言われるのを待っていたかのように、まったく素直に驚きの表情を浮かべた。あんまり予想通りの反応だったので、

（この娘、おれを引っかけるために演技しているのではないか）
吟師は条件反射で、つい邪推やすいをたくましくした。

「まあ、どうしましょう。そんな顔をしていましたか」

はたして、娘の弱り顔はいつそう濃くなった。その面立ちおもたも佇たたずまいも、いかにも柔弱じやくじやくといった感じで、こんなところにこんな格好で立っていること自体、なんだかひどく場違いな印象すら受ける。よ

くよく見れば、とても策の立ちそうな様子には見えない。

痛まぬ腹を探った猜疑心を、吟師はたちまち恥じた。こういうところは呼師の見立て通りの人の善さで、彼の中では邪推の詫びのしるしに、できるだけこの娘の力になってやらねばならないという、義務感めいた考えが浮かびだした。

「私にできることがあれば、力になりますか」

「まあ、これはご親切に。はい……あのう、少しものをお尋ねしたいのですが」

怯える小動物が、えさの乗せられた手のひらに恐るおそる近づくように、壺装束はおずおずと切り出した。

「あのう、季満どの方のお住まいを探しているのですが……お被いのお仕事をされていて、氏は失念してしまったのですが……」折も折、ちょうど尋ねようと思っていた者の名前が出てきた。

（季満って、あの季満のことだろうか）

彼の知っている季満と、目の前の身分卑しからぬ娘がどうしても結びつかない。仕事の関係であろうかと、吟師は腹の中で暫時いぶかしんだ。

「……氏は土師ではありませんか？ 陰陽法師の真似事をしてい
る、こう、小柄で、女のような顔をした」

「そう、そうでございます！ まあ、あの方もたいそう有名ですねえ。かように袖の摺り合った行きずりの方でさえ、お名前を存じなものですもの」

とたんに明るくなった娘の声には、皮肉めいたものなど毛ほども感ぜられなかった。どうもとんでもない誤解をしているらしい。

「九条まで足を伸ばしてみたのですが、それらしきお宅は見つかりませんで、弱り切っておりますところでございます。季満
どののお知り合いの方でございますようか」

「ええ、まあ。 それでは西京からこちらへお帰りになったところですか。さぞお疲れになったことでしょう」

身につけた卯花いろの袷からかすかに香るのは、白檀であろうか。

身なりのよい娘であった。お使いに出されるにすれば、少々幼すぎるような気もするのだが。

娘がどこから来たのかはさておき、普段あまり歩くことのないであろう少女の足で、あんな遠くまで行って帰ってきたのだから、見てくれの印象を裏切る程度には根性があるようだ。

吟師の労いわづらひに、しかし娘はうるたえたような声を出した。

「あら……西京？ ええと、いえ、そんなはずは……」

娘は、首から提げたお守り袋からいびつな紙片を取り出し、しばしにらめっこしたのち、「いいえ、やっぱり東で間違いございません」と薄い胸を張った。

「それは？」

「その季満どのの書付かきつけです。なにかあったらここを尋ねよと」

「……ちよつと拝見」

娘の手から紙片を摘み上げて、日の光の下に晒す。しわくちやになつた紙片には、

『左きよう ほり川小じむこう あやめ小じ左 九じよう下る

はり小じすぎて左』

吟師は眉根を揉もんだ。

(季満のやつ……左と右を間違えて書いたな)

左右の間違いを措くとしても、ひどい文章であった。道を知っている吟師でさえ、読解するのがいささか困難なほどである。これで案内になると思っっている季満も季満だったが、こんな書付ひとつで目的地を探そうとした娘も、そうとうぼんやりしていると云わざるを得ない。

「……私もちょうど、季満に用事がありましたので、もしよろしければ」

「吟師や、今日のところは止めやにしようや。 なんだかひと

雨来そうでな」

それまで黙っていた呼師が、足下に下ろした瓶をつま先で小突つきながら、やんわりと吟師の提案を遮かきった。それはまるで娘がいるの

を意に介さないような、無礼な声であった。

言われるまま空を仰いでみても、見晴るかす蒼穹せいこうには雲ひとつ見
いだせない。

「雨なんか降りようが」

「いやあ、降るさ。矢も降るかもなあ」

(……そうか、別当べっとうが来る日だった。忘れていた)

今日が特別な日であったことを思い出して、吟師はたと口をつ
ぐんだ。別当いわく、今宵けしやいは「巨悪の墜つる吉日」である。あまり
遠出をしてはまたぞろ心証を損ねかねない。

「あのう……」

「……すみません、急用ができてしまいました。簡単な絵図を書
いてさしあげましょう。呼師よびし。矢立やたて、あるか」

「そら。お前、優しいのう」

季満の書付の裏に筆をすべらせ、できるだけ安全な道のりを絵図
にしたためると、吟師はそれに懐から出した小袋を添えて娘に渡し
た。

「あのう、これは？」

「絵図を書いた代わりに、と言ってはなんですが、季満を尋ねる
ついでに、それを彼に渡してほしいのです。渡せば向こうはわかり
ますので」

「ええ……そのくらいなら喜んで」

やや困惑げに請け合うと、娘は袋の中身を警戒したものか、細い
手指でそれを揉み出した。

「中身は銀しろがねです。それと」娘がお守り袋に小袋をしまうのを
見計らってから、吟師はひとつ咳払いをした。「明るいうちに
用事をお済ませになって、お早くお帰りなさい。暗くなってしまう
ば、わけても西京は六条以南いなんなど特に危ない。おわかりですか、
貴方がこれからゆくところのことですよ」

吟師がふいに、娘に向かって弾指だんしした。娘は笠から下ろした紗しやを
はためかせて「きゃっ」と飛び上がる。

「そこは鬼魅が跳梁し、匪賊の跋扈する、四維八徳の忘れ去られた人外化生の世界です。貴方は見たところお金持ちそうだし、脚が遅そうだし、ちよつと食いでがなさそうだけど、とても食べやすそうな大きさだ。単衣の一枚だつて残らず剥ぎ取られて、そのあとは骨の一片だつて残らないでしょう」

おどろおどろしい科白に、娘はあわれにも真つ青になつてがたがた震えだした。

(よし、懸かりがいい。もう一押し)

「よろしいですか。急いで行つて、急いで帰ること。もし向こうで暗くなるようなら、季満に言つて泊めてもらうか、一緒についてきてもらいなさい。貴方の命をつなく瀬戸際ですよ。よく聞いておいでですか」

「はい、はい、お言いつけのとおりにいたします……」

小さな背を縮こまらせてお辞儀をすると、娘は逃げるように市のほうへ走つて行つてしまった。

「……ふうん、ここまでするかね。あの娘はどこまで行くんだえ」

黙つて娘の背を見送つた呼師が、ややあつてぼつりと呟いた。小袖の中に諸腕を引つ込めて、なにか懐でござごそしている。

「西京のどん詰まりさ。死人か貧乏人が、さもなきやならず者しかいねえ」

「まだ日も高かろうがい。白昼堂々追いはぎに遭うこともなからうしよ、呪にかける必要があつたのかの」

「すぐ行つて帰つてこれりゃあ、それに超したことはねえよ。ただあの娘ア……なんていうか、どんくさそうだ。多分いいとこの嬢ちゃんだろうし、絵図を見ながらでも道に迷うかもしれねえ。急がせるに如くはねえのさ」

吟師の言葉こそ、すぐに伝法なものに戻つたのだが、氣遣わしげな眼はいまだに、娘の消えていった路の向こうへ向けられていた。

「そら、吟師や。優しいお前にクソじじいが駄賃をやるうじやあ

ねえか」

なんとなく人を小馬鹿にしたような笑いと共に、呼師が若者に投げてよこしたのは、ひとの懐にあったとは思えぬほどに冷えた、ひとつの大きな桃であった。

「……ちよいと季節はずれじゃねえかい、よく市に売ってたな」
思わず礼を言いかけたものの、またぞろ小馬鹿にされるやもと思いとどまり、吟師はそれだけ言うつと桃をかじった。

「そう言やあ、今日は上巳じょうじだったかの。このまま鴨川にでも足を伸ばして、被いごとのひとつもしたいところだがなあ」
この日、三月三日は上巳せつじつの節日であった。人々は殿上てんじょう、地下ぢげを問わずみな河へ向かい、身についた穢れを人形ひとがたに移し込めて、水に流すのがならわしとなっている。

こんな行事がひとつでもあると、正しい作法やより効果的な手順を求めて、陰陽法師への仕事の依頼はとたんに増えた。庶人からの依頼ならまだしも、過去になにかよからぬことをしでかしたものが、こういったお被いの機会に大枚をはたいて御利益ごりやくにあやかろうとする、奇特的な公卿くぎょうもちらほらと出てくる。

（季満も今頃は、なにがしかの仕事にありつけているだろう。）

余計な心配だっただろうか）

「こんな汚え川に、瓶いっぱいの蜘蛛を流したんじゃあ、御利益なんぞあるわけもねえかのう。せめて意富加牟豆美命おほかむすみのみことによ、今宵の大事成就だいじょうじゆを願うておこうかい」

桃に歯をたてて啞え、地面に下ろしていた瓶を担ぎ直すと、呼師はふたたび歩き出した。意富加牟豆美命おほかむすみのみこととは桃の謂いひであり、黄泉平坂よみひらにおいて伊邪那岐命いざなぎのみことに賜たまわった神名のことである。

（そうとも、今宵は『巨悪の墜つる吉日』。それにしても……）

空は依然として雲ひとつ出る気配もなく、往來の激しい七条大路には、土埃がもうもうと立ちこめている。桃の夕ネを堀川に投げ込もうとして思いとどまり、やむなくそれを飲み下すと、吟師は今し砂煙に隠れんとする、呼師の小柄な背中を追った。

(口選って、なんだ?)

Returning arrow IV

三月三日 丁丑 酉一刻

(なんなんやろ、この取り合わせ)

「妙法先生、このような若輩で足りるのでしょうか」

「しつ、本命があらぬのだから仕方あるまい。これはこれでちゃんとやるのだ、憂うまいぞ」

右京は九条四坊、菖蒲小路に面した季満の破れ屋に二人の男が訪れたのは、四半刻ほど前のことであつた。各々の膝元には、出されたままぬるくなりつつある椀が、弱々しい湯気を立ち迷わせている。一見するだに、いささか不謹慎な興味の湧いてくる取り合わせであつた。かたや凜然たる偉丈夫、こなた絶世の佳人。着座してよりこのかた、二人ともぼそぼそと内緒話などに興じており、一向に本題を切り出す気配はうかがえない。

(えらい別嬪やけど、格好が格好やし、あら男やよなあ。ほなら道説のやつ、アツチのひとやったんやるか。ひよつとすると、たまこちゃんになびかへんのも……)

このように季満もまた、おのれの妄想をたくましくするのに忙しく、いきおい場の空気は最前から変わっていない。季満のかたわらで火箸を弄っていた尾筒丸が、退屈そうに欠伸をした。

「……これ、季満。そのだな、実は折り入って相談があつてだな」
幾度か声をかけるのをためらつたのち、道説がまこと似つかわしからぬ小声で、対面の季満に声をかけた。首から上だけは決意に充ち満ちているのに、その下は全く別の生き物のようにまごまごと逡巡しているさまは、滑稽を通り越してある種のもの悲しさすら漂っている。

よほど言いにくいことなのだ。はたして季満はピンときた。

(あー、こら間違ひあらへん。へえ、この大男がねえ……)

「あのな、道説。ええとな……アレや、力になつてやりとうても、そのなんや、やり方がわからんゆうか」

「ん、やり方がわからぬと？ そんなはずはなかるう、それで糊口を凌いでおるのではないか。いつも軽口を叩いてはおるがな、おれはお前のことをそれなりに買つておるのだ。なんと言つても学がある。佑が留守で進退きわまつておつた次第だが、もはやこうなつてはお前だけが頼りだ」

道説が改まつて烏帽子頭を下げる。隣の青年がそれを見て、不承ぶしようといつた感じでそれに倣つた。

（佑やて、いつの間呼び捨てにする仲になつたんや……あつ、まさか佑まで……）

季満がひとり赤くなつたり青くなつたりしているのを、極度の緊張のためと勝手に解釈したものが、道説は道説のほうで、

（おれのただならぬ様子を見て、この依頼が重大なものであることを察したに違いない。普段はおちやらけておつても、そこは勉強を積んだものことよ。さすがだ、土師季満）
などと思つたりしていた。

「うむ、お前の察するとおりだ。これは容易ならざることだな」
いちど咳払いし、すっかり冷めた湯をひとくち含み、かたわらの青年を示して、「この藤原長恭ふじわらのながよしどのが御父君、籐大納言つのだいなごんさまの御依頼だ。ことは公辺こうへんの安否あんびに関わる大事ぞ。さよう怖おじけるのも無理ならぬことだが、曲げて断つてくれるな。このとおりだ」

道説はもう一度頭を下げた。ちなみに彼の頭の中には、長恭の父の尻ぬぐいなどという些事ちさはすでにない。自らに課した「大臣おとどを禍まが事ことから救う」という、やや誇張された使命の重さが、彼をして緊張の極みに陥おちこらせしめていたのであった。

（と、トウノダイナゴン？ コウヘンのアンピ？ なんやわけわからんけど、この二人の間にやそれだけの障害があるゆうことなんやるか。わあ、おれ自信ないえ、どうしよ……）

とても喜捨きせを請えるような雰囲気ではない。季満は困りはててし

まった。

「土師法師はじのほうしとやら、妙……道説さまがかように申されておるのだ、返事はどうした」

それまで瞑めいして腕を組んでいた長恭が、その双の花瞼かけんをひらいた。「長恭どの、そのように申すものではない。これはあくまで、この土師季満に対する仕事の依頼なのだ。受けるも断るも、この男次第ぞ。その選択肢だけは奪ってはならぬ」

「妙法先生……」

二人は見つめ合っている。季満は両手で顔を覆おおっている。

(うへえ、こんなところで雰囲気ださへんで欲しいなあもつ)

やや頭に血の上はった季満には、二人のまなこの中に星すら見えるようであった。尾筒丸は三者のこころの機微きびなど一向に解さず、火箸を握ったまま船を漕いでいた。

「もうし、季満どのお、ご在宅でしょうか」

室内の一種異様な空気を断ち割ったのは、細く、やや間延まのびした女の声であった。

「あ、はいはい！ お客さんどすかあ」

渡りに船とばかりに、季満はぱっと立ち上がり、お熱い二人を尻目に玄関へ走った。廊下の向こうからは相変わらず「もうし、もうし」と細い声が続けている。

(間がもたへん。ええとここにお客はんがきてくらはったな、仕事の依頼やつたらとりあえず)

あの二人には帰ってもらおう、と季満は断じた。

救いの主は階たかの前まへに立って、破れ屋の中を興味深そうに眺め回していた。笠からおろした垂衣たれきぬの丈が長すぎるせいで、遠目には円筒が直立しているようにも見える。

「たつ……！」

来客の顔を一瞥いちへつするなり、季満は凍りついた。

「ああ、疲れた。やっと着きました、もう歩けません」

垂衣を割って出てきた顔は、うら寂さびれた九条界限くじょうかいがいにはまことそぐ

わない、白く華やかな貴頭きげんのそれである。

「もう、季満どのの書いてくださった書付かきつけは間違っておりましてよ。これがわたしでなかったら、路みちに迷って泣いていたかもしれませんでしたわ。ああ疲れた」

珠子たまこはやれ「足がいたい」だの「のどがかわいた」だのとぶうぶう文句をたれながら、湿った簀子縁すのこえんに腰を下ろすと、首にさげたお守り袋をかき回し始めた。

「ま、まあ、お姫ひいはん、ようお越しやした。で、なんかあつたんどすか？」

季満は及び腰で聞いた。珠子のような貴人あてびとが牛車ぎしやにも乗らず、舎人ねりのひとりも連れず、まして治安の悪い右京九条を一人歩きするなど、尋常のことではない。カモがネギとナベを背負おそって「今が旬しゅんでござい」と叫んで回るような妄拳やんけんである。

「もう、季満どのが文ぶみを取りにきてくださらないものだから、わたしがかうしてやってきたのではないですか。ほうら、もう六通も滞たごっていましてよ、もう」

小さい子供みたいに足をぶらぶらさせながら、珠子は牛のごとくに「もうもう」とわめいた。ぱんぱんに膨ふくれ上がったお守り袋から出てきたのは、飛矢も防げようかという紙の束たばである。

「あ、へえ、こら申し訳も……。そやかて、わざわざおみ足をお運びにならへんでも、お家うちのひとにお使いを頼まらるなりなんなり……」

「まあ、このような文をほかの誰の手に委ゆたねられるものですか、恥ずかしい。もう！」

珠子はふたたび牛になった。

(あかん……奥に入れたら修羅場や。ここはひとまずお家まで送
つて)

淋漓りんりたる汗を迸はならせながら、季満が懸命に頭をまわしていた矢先、「季満、相あいすまぬが客なら引き取ってもらうてくれ！こちらが先だ」

という声とともに、床板の軋る悲鳴じみた騒音が近づいてくる。とっさのことではかに手段もなく、季満は窮余のうちにやむを得ず、ちようど角から姿を現した大男に飛び掛かった。

「おん前っ！ お前って奴はっ！ なんでこつも空気が読めへんにやこのデカブツ！」

捨て身の突撃は、八工でも退けるかのように苦もなく打ち払われる。季満はもんどりうって廊下にまろび、あえなく黒ずんだ床板に接吻した。

「これ、何事だ。ひとをデカブツ呼ばわりしおつて」

「えっ……道説さま！」

「たっ……！」

少女の顔を一瞥するなり、道説は凍りついた。

「謝礼もさだめて大きなものとなるう。どつだ」

「ふうん」

「……先程のやつは謝るわい。だいたい妙な想像をするお前もだな」

「ふうん」

「………それ、そのなんだ、お前には苦況にある友を助けようとか、そういつた気高い心持ちは」

「あらへん」

「………」

日が傾きつつあった。薄暮の仄朱い夕陽がすでに、簀子縁から室内のなかばまで忍び入ってきており、ためにそれを背に受けるかたちとなった道説の目鼻立ちは、その彫りの深さと相まって闇に沈んだような態となっている。

季満はこころなしへこんだ烏帽子頭を撫でさすっていた。

珠子の到着よりほどなく、季満の不謹慎な誤解は解けていたのだが、その代償に道説より落石のごとき拳骨をお見舞いされていた。季満にしてみれば勝手に家に上がり込まれ、廊下を舐めさせられた

あげく、家主たるおのれのおつむりを一撃されるといふ、まるで
ら犬にでも噛まれたようななりゆきである。弱りきつた大男を仏頂
面で眺めるのも存外に楽しく、

（ええ気味や、もうちよいそうして縮こまっとれ）

などと、季満は心中ほくそ笑んでいた。

「土師法師、あまり妙……道説さまをなぶらぬことだ。後々ため
にならぬぞ」

長恭が脅しめいた科白を吐いたが、そのあからさまな威嚇をこめ
た麗貌は、道説をはさんで反対側、季満から見て左手にちよこんと
座つた珠子に向けられている。

最前から、両者は道説を巡って牽制し合っていた。目下、季満な
ど眼中にないらしい。

「道説さまがお困りになられているのですよ。季満どのがお力を
貸して差し上げるのは、ご朋輩としてのつとめというものです」

檜扇で口元を覆いながら、珠子はまるで親が子供に言つて聞かせ
るような口調でそう言った。が、その眼はやはり向かいの法師では
なく、二つ隣の美貌を睨み返している。かたわらの道説にびつたり
とくつついて、彼の衣の袖をほそい指で弄っているさまは、なにか
の大樹の根元に寄り添って生える、小さな茸を思わせた。

二人ともやはり、道説の言う「友の苦況」の意味が解っていない
ようである。彼は依頼の説明のあいだ中、しきりに吃り、ずれても
いない烏帽子に手をやり、その隙ひまを縫つて長恭の補足や珠子の
疑問が入ってくるたびに、まるでおのれが責められているかのよう
におどおどするのであった。

（自分が悪いことしたわけやあらへんのんに、つくづく単純な奴
やなあ）

拳骨の痛みと共に、道説に対する怒りはじき雲散していった。も
ともとそれほど執念深い性格でもないうえに、相隣る美形の無言の
対立に困りはて、虐げられた駄馬のように悄然としているさまは、
笑いと同じくらい哀れを誘う。仕事がなくて困っていたのは事実で

あつたので、季満はようよう仏心を出して、

「まあ、お姫はんもこう言わはつてることや。おれもそんなにヒマやあらへなんだけどなあ、ええわ、特別に引き受けたる」

などと大威張りに言った。

はたして秣を鼻面に近づけられた馬よろしく、道説は俯けていた顔を上げた。

「よう言つた！ うむ、お前ならそう言つてくれるものと確信しておつた。 どうだ長恭どの、これでお父君の面目も立とうが」

まさに喜色満面といった顔で、道説はこの仕事の成功をいささかも疑つていないように見える。このあたりは季満の思つた通り、かなり単純で、彼はおのれに無いものを持つものは、おのれにできないことを必ずやつてのけると頭から信じていたのである。

（なんや、見たこともないくせにえらい自信やな。ひよつとして皮肉ゆうてるんか）

などと、季満が邪推するのも無理からぬことであつた。

道説に肩を叩かれた長恭は、「ええ、助かりました」などとあいまいに微笑んでいる。が、その面を季満に振り向けたときには、すでに感情らしいものは吹き消えてしまつていた。

「土師法師、妙……道説さまがかように仰せなら、ひとまずはお前を用いてみようが」そう言つ長恭の目が、一見の法師に対する尽きせぬ不信感を物語っている。「失敗は許されぬものと思え。わたしが許しても、大臣の家中が許さぬであろつゆえに。 自身の命もかかるのだ、全身全霊でことに当たれ」

冷たく言つた。いかに好意的に受けとろうと試みても、それはとても激励の言葉には聞こえなかつた。

（なあんやこいつ、鼻持ちならんなあ。顔がええ分、性格が悪うなつたんやろか）

さすがにムツとした季満が、なにか失礼に当たたらぬ範囲で言い返してやるうかと言葉を選んでみると、ふいに珠子がいわく、

「お頼みするほうがそれでは、半身半霊がせいぜいでしょうね」

ぎりぎり長恭の耳までとどく程度の、それはまことに絶妙な声量であった。それでいてその小声にもかかわらず、隣の道説がさつと緊張を露わにするほどの毒が、しっかりと配合されていたりする。

「……そういえば妙法先生、そちらのお子はいつたいどこから入ってきたのでしょうか。異なることです、誰も呼びもしない女子が、こうして我らの密談に膝を合わせるとは」

最後のほうには、冷笑と苦笑と嘲笑を混和したような、ひとの神経を逆なでするのにこれ以上はないとも言えようほどの、権高な嗤いが加わった。

珠子の白い顔にたちまち血が上る。道説の袖がかわいた音をたてて裂けた。

「まあ、なんて憎たらしいひとなの！ わたしは季満どのに「ええ止め、止め！」それまで苦虫をかみ潰したような顔をしていた道説が、裂けて又になつた袖を振り回しながら、いよいよ堪えかねたようにわめいた。「長恭どのも珠子どのも、いい加減にされたい！ 長恭どの、おれは他ならぬそなたのため、ひいてはお父君のため、お上のためを思えばこそ、呪い師捜しに骨を折つたのだ。気に入らぬのならそう言わっしやい、もはやおれは指一本動かさぬゆえ！」

破れ屋を吹き飛ばしかねない大声に尾筒丸が飛び起き、長恭は真っ青になり、珠子はいかにも子供っぽく、勝ち誇つたように鼻を鳴らした。そちらをぎろりと一瞥して、道説つづけていわく、

「珠子どの。ここで会つたは偶然ゆえ、あえて咎め立ていたすものではないが、我らはいま大事を凶つておる真つ最中なのだ。黙つて聞いておられるのならまだしも、横槍を入れるおつもりなら即刻出て行っていただく。そもそもやんごとなき身になりながら、供も連れずにかような京の終を一人歩きするなど、識者の声たかき橘家が娘にあるまじき不見識。御父君が聞かれたらなんと嘆かれよう

「う
殿父がいたずらをした小児を叱つてみせるような怒声に、珠子の

目からみるみるうちに涙が溢れ出した。

(……今日はめんどろな客がようけ来よるわ、ほんま)

季満は欠伸を手で隠すと、かたわらの尾筒丸を膝に抱き寄せて溜息をついた。刻一刻と暗くなつてゆく部屋のなか、しばし珠子のすすり泣く声だけが重苦しく響く。

ややあつて、大男が音を上げたように長大息を吐いた。みたび頭を下げながら、

「……季満や、騒がしくしてすまぬ。この長恭どのもな、今こそお父君の身を案じて尖つてはいるが、本当は性根のよい男なのだ。さきの発言が気に障つたなら詫びるゆえ、この依頼だけは蹴つてくれるまいぞ。頼む」

(ほんまにこいつつて男は……)

返すがえすもよほどのお人好しである。話を聞いたかぎりでは、この仕事の依頼の出所は道説ではなく、隣の藤原長恭親子であることに疑いはない。にもかかわらずその仲介をしただけの道説が、佑の代役さがしに奔走し、進んで事態の説明を買つて出、無位のものに三顧の礼を取っているのだ。それに比べれば、当事者たるかたわらの青年など、まるで他人事のような態度と言わざるをえない。

依頼されるほうとしてはいささか忿懣もある。が、思うに長恭の態度は不遜ではあるが、単に道説の接しかたが別して誠実に過ぎるだけなのである。位あるものが下々に対して取る態度としては、なるほどたしかに、長恭のやりかたはおしなべて「普通」であった。

(要はあれやな、ええ奴なんや、道説ゆう男は)

初めて季満のうちに、なんとはないやる気が湧いて出てきた。もし依頼をしくじつても、きつとこの男が体を張って庇ってくれるであろうし、たぶん喜捨にも快く応じてくれることだろう。

「ええつて、おれにまかしとき。ほづら、たまこちゃんもいつまで泣いとんにや。道説はもう怒つてへんえ」

「……たまこちゃん？」

(しもた、口すべつた　！)

お守り袋から取り出した斐紙あやがみでちゃんと鼻をかむと、珠子は赤く潤うるんだ瞳を季満に向けた。そのかたちのよい眉根まゆねが訝いぶかしげに寄せられている。

「あつ、ええと、あ、道説がそうゆうとりまして、お姫はんの居いやはらへんところで。つい移うつってしてもて……」

「すつ……！」

向かいの道説みちせつが瞠目めくして腰を浮かせる。とつさの失言を取り繕繕う言葉が、新たな失言となってしまうた。どうやらもう二、三発の拳骨は覚悟しなければならなくなったようであった。

「まあ……たまこちゃん、ですか。それでしたら、面と向かつて言いってくださってもよろしいくらいですわ。あ、そうですね、それならばわたしも道説さまのことを、「道説さん」と呼びしてもよろしゅうございませうか」

「う……こつ……季満……！」

先程までの泣き顔はどこへやら、珠子はたちまち真っ赤にのぼせ上がった。長恭のまるで別人を見やるような猜疑さいきの目を横面に受けて、道説は腰を浮かせたり沈めたりしながら、こちらもやはり真っ赤あかになっている。

周章狼狽しゅうしょうろうたいしながらも、道説は季満の虚言きよげんを訂正することはしなかった。これも彼一流の人の善よさのなせる業わざか、こんな状況に甘んじているのも、さきほど珠子を泣かせてしまったことに対して、おそろくは小さからぬ罪悪感を抱かかっていたためであるう。火を噴ふきそうな顔かほをしていても、結局、彼は彼らしさから逃にれられないようであった。

「あ、たま……お姫はん、もう外も暗くろおすやろ、お家までお送りしまっさかい」

なるべく道説のほうを見ないようにして、季満は珠子を促うながして立ち上がった。そろそろ同座人どうざじんの目鼻立ちの判別はんべつがつきづらくなる時刻ときになりつつある。

「あ、はい、季満どの、よろしくお願いいたします。わたしの命

の瀬戸際せとぎわですのぞ」

「はあ、瀬戸際せとぎわって」

「それではごめんくださりませ、文のお返事、お待ちしております
す み、道説さん」

扇を袷あじの袖そでにしまつと、珠子は笠で顔を覆いながら「きゃっ」と
赤あかくなつた。季満の顔の青さとはまこと対照的であつた。

「……これ、季満や、た、たまこちゃんをお送りしたら」薄闇の
なかで、道説の白目の勝つた瞳ひとみが不穏な光をはなつ。「必ずここへ
戻かへってくるのだぞ。具体的な話もあるゆえな……！」

季満は返事もせずかへ事もせずに廊下へ飛び出していった。

Returning arrow

三月三日 丁丑 戌二刻

「季満や」

手燭の向こうの小柄な背に向かって、道説はなるべく親しげに聞こえるように声をかけた。

まるで壁のように鬱蒼と生い立つ、檜の木叢を左手に、道説、長恭、季満、ついでに尾筒丸の四者は、三条大路を東へと歩んでいる。明るいうちに通ったならば、あるいは木間を縫って神泉の禁苑が垣間見られたかもしれないが、夜闇のうちにあってはそんな趣味も期待できそうにない。

見上げれば、夜空に秀でた樹頭の端々が、昏雲にうかぶ三日月を千々に切り刻んでいる。あたかも頭上に掲げた十指のあいだに、それを見るかのように。

(あるいは百鬼夜行とは、かくのごときものことなのだろうか。この両手をあげた巨人が立ち並ぶかのようなさまが、夜道をゆく人びとをして、人外化生などと誤解せしめるのであるうか)

季満のいらえがなかったので、道説は檜のような長身を傾がせて、ふとそんなことを考えていた。

(あの羅城門の鬼。佑の言うことだ、なにやら不思議のことわりで動いていたのであろうが……)

面妖ではある。あるが、やはり彼には今ひとつ胃の腑に落ちてこないものがあった。いや、落ちてくるものがなかった、と言ったほうが正しいのかもしれない。

(畢竟、あれは人であったし、斬れば動かなくなった。残った死体にツノが生えているわけでもなし。……こういう乾いた、即物的な考えに落ち着くおれは、やはりどこかおかしいのであるうか)

大宮大路は芥川に差し掛かるころには、彼は緩やかな鬱に入って

いた。例の学のなさからくる反省に加えて、鬼と対峙したあの経験から自らに突きつけられた、彼が内心あがめる「精神的」と信ずるものごとへの無感動。巷間あやしおそろしと言われていることどもに、皆とひとしい感情を抱けないことに　突き詰めて言えば、周りの人間と比べてずれていくことに、道説は言いようのない情けなさを感じるのであった。自らの余人に秀でた体軀でさえ、その例には漏れなかった。

「季満や」

一段、優しい声をかける。手をつないだ尾筒丸がちらと振り返っただけで、やはりいらえはなかった。

「土師法師！　妙法先生がお呼びだ」

即座に背後の長恭が大声をあげた。道説愛用の檀の大弓を弓手に担ぎ、季満になかば無理矢理押しつけられた頭陀袋を馬手に持ち、あまつさえ背にぎつしりと征矢の収まったやなくいを負い、その顔は闇の中でさえそうと知れるほどに不機嫌である。前を歩いていた三者は一緒になって飛び上がった。

「な、なんやなんや。これはおれのや、やらへんえ」

見れば、季満と尾筒丸はなにか食べているようであった。こちらを向いたなり、かすかになにかを咀嚼する音が聞こえてくる。自分はいいつの夕餉の時間も奪ってしまったのだと、道説はさらに心を暗くした。

「すまぬなあ、食を採る時間もなかったのだなあ。尾筒丸も相すまぬなあ……」

なかなか鬱の晴れぬ道説は沈んだ声を出して、盛大に季満を気味悪がらせた。尾筒丸は慰めのつもりか、手に持っていたなにかを道説に差し出した。

「……なんや、気色わるいえ、道説。さっきのならもう怒ってへんし」

数刻前、道説は虚言を弄した季満を戒めるため、「ちよつと小突いて」いた。季満は「あたまにヒビはいった！」だのとひとしきり

のたうち回ったものだが、無論みずから招いたことなので、その後とくに腐る様子も見せていない。齒のちびた足駄あしたを引きずりながら、暢気のんきに鼻歌など歌っているさまからは、緊張の一片すら窺えなかつた。かかる大事を控えて、まるで遊山ゆざんにでも出かけるかのような落ち着きぶりである。

「季満や、ひとつ聞きたいのだが」尾筒丸から頂戴したなにかを口に含んでみる。それは干した果実かなにかのようだった。「その……なんだ、術とか呪とかいう類のものはだな、なにかこう、特別な知識なぞがあるのであるうか。いや、いるに決まっておるではないか。ええ、つまらんことを聞いた」

後半しどろもどろになって、道説は投げかけた質問を勝手に完結した。いきおい情けなさはいや増した。

「さあ、あつたほうさええやろが、なくても別にええやろ、使えりゃあ」

この季満の深遠なひと言に危機感を抱いたものか、長恭がやや性急に、

「土師法師、確認しておくが、この依頼を受けたは見込みあつたことなのであるうな。妙法先生のお手前だ、このようなことは言いたくはないが、わたしはお前に全幅の信頼を寄せてなどいない。

まして今のごとき発言を聞けば尚更だ」

ひと息にまくしたてた。季満はそれを聞いても、特に気分を害するそぶりは見せず、振り返ってにっと笑うだけであった。

「二人とも、しろうとはんやな。こんな仕事はな、その氣いになつたら道説でもできるえ」

言われた二人は、同時に「なに！」とわめいた。無論、両者の意味合いはそれぞれ違ったのだが。

「馬鹿にするな。なにも知らぬおれでも、陰陽道おんやうだうなるものがさよう簡単なものではないことくらい、聞き及んでおる」

きっぱり言い切ったあとで、ひよっとすると季満は自分を慰めてくれたのであろうかと考え直し、道説はあわてて「いや、そう言う

てくれるのはありがたいが」と付け加えた。

「陰陽道ゆうのんは、白いもんを黒いゆうたり、黒いもんを白いゆうたりすることや。簡単やろ」

はたして、道説と長恭は闇の中で顔を見合わせた。お互い、どのような顔をしあっているかは手に取るようにわかる。ここへ来てようやく、道説は季満の能力に対する疑念に遭遇していた。

「……あ、疑ごうとるなあ。よしよし、ほならおれが特別に、お前らしろうとはんに術のイロ八教えたる」

「……妙法先生、本っ当に、これで、大丈夫なのでしょうか」

「しつ、もう後には退けぬ。　　うむ、頼む」

「あほ」

「なに？」

「トンチキ」

「………」

「生不動」

道説がふたたび「ちよつと小突こう」と拳を握りしめると、季満は尾筒丸を盾にあわてて後退った。

「待った待った！　ほうら効いたやろ、おれの術は　　」
季満の弁解は、本日三発目の拳骨によって遮られた。

堀川院ほりかわのいん　それは隣と合わせて一保四町いちほしちようもの敷地を専有する、古こ今未曾有の大豪邸であった。

いつ途切れるかもわからぬ長大な築地塀つじしべいは、道説のとき巨人が伸び上がったも、手の届かぬほどの丈たけがある。犬行の幅しるゆきもこのあたりだけは特別製のようで、四人がめいめい手をつないで並んでも余るほどの広さがあつた。

洞々たる堀川の流れに、寂光じやくかうはなつ三日月の姿がおぼめいている。上巳じよつしの月の似姿にすがたを背にして、四者はそれぞれの思惑のうちに、口を半開きにして立ち尽くしていた。眼前には篝かがりの明かりに照らされて暗夜あんやに聳そびえる、大仏刹だいぶつさつのとき八脚門やっあしもんが大口をあけている。

その奥に競つて群れ建つ花閣。内裏もかくやと思われるその壮麗。
（うつむ……言葉もない。これほどの巨大な邸宅を、一体なんのためにこしらえたというのである。大臣は家の中で道にお迷いになられたりせぬのであろうか）

（堀川院！ 入るのは初めてだ、さすがに緊張してくる。 文
武百官の頂におわす、太政大臣がお暮らしになるにふさわしき、なんと
という希有壮大なる御殿よ）

（いった……今度こそあたまにヒビ入ったか思たわ。血イ出てへ
んやらな……）

（……………）

「ややあつて、長恭の話を取り次いだ舎人が戻ってくる。」

「御前は只今、隣の私邸におわしますので、どうぞそちらへ向かわれますよう」

心持ちうなだれた長恭の代わりに、道説がいらえる。

「あ、さようか。 隣というのはどちらであろうか」

「この屋敷の向こうがわの」舎人は八脚門の向こうを指さし、「
油小路を挟んで隣のお屋敷にございます」

「さようか。 そのお屋敷も大きゆうござろつな」

「はい、大きゆうございます。とても」

なんとなくうんざりとした道説の口に、妙に若い舎人はにこやかに返した。

「皆、ここではないそうだ、いま少し歩かねば」

「道説、尾筒丸が足いたいゆうとる。負ぶったつてくれへん？」

「……………それ、負ぶされ、尾筒丸」

名残惜しげな様子なましろおの長恭をしんがりしんがりに、一行は堀川小路を来た道のまま上り、二条大路を折れて堀川院を迂回した。右手側の長大な塀は一向に途切れず、石灰質の白っぽい塗壁が、三日月の仄明りをおぼろに反射して、自ら発光しているかのようである。その頭上を飾る、八弁花をあしらった無数の軒丸瓦だけでも、道説ごときの禄ではほんの側辺そくへんを用立てることすら適うまい。

(宿る軒もなく路傍におろくをさらす人々もいれば、このような家宅に起き伏しする人もいる。住む世界が違えば、けだし住む家も違うのであろうが……)

釈然としないものを胸に、道説は油小路を曲がった。

「いやあ……真つ暗やな。ここ」

季満のうそ寒げな声がある。左右を背の高い塀に固められたその小路は、確かに暗い。九条の湿気ったような暗さとは性質の異なる、清潔で無臭の、乾いた暗黒がそこに伸び開けていた。

(ここには貧しさが無い。あれほどに京を席卷する、あのひとの臭いが)

堀川院とは似ても似つかぬ、簡素な棟門で道説たちを迎えた男は、自らを藤原佐世と名乗った。大臣の家の家司であるという。

「御前は騒がしゅうされるのがお嫌いじゃによつて、私語は屹度つつしんでいただく」

季満たちの名乗らぬうちに、佐世は高慢ちきにそう言うと、そのままきびすを返して中に入っていつてしまふ。四人は声を出す機会を逸したまま、仕方なしに家司の背を追った。

(な、なんや、こら……)

敷地内に一步ふみ入れるなり、季満は絶句した。前に垣間見た堀川院に比する、さぞやきらきらしい御殿が立ち並ぶものと思えば、門口をくぐった先にあつたものは、

「なんとという諧謔……」

長恭の呆けたような呟きが聞こえる。

夜目にもあきらかな、そこは深閑たる森であつた。少なくとも、季満には森にしか見えなかつた。

本来なにがしかの建物が建つていてしかるべき空間は、すべて丈のまばらな檜葉やら杉やらの樹木が乱立しているか、さもなければどこから拾ってきたものか、身の丈ほどもあるうかという奇岩怪石が、苔のむすます無造作に転がっていたりするのである。

振り返つてよくよく眼をこらせば、それらを囲む築地塀も異常を極めた。丈も高いが、厚さは尋常のもの三倍は下るまい。なにもかもが冗談のような佇まいであった。

（わからん、金持ちのすることはようわからん……）

檜葉の芳しい薫りを吸い込めば、知らずおのれが山奥にでも迷い込んだような気さえしてくる。太政大臣というひとのとなりを推察するには、この判断材料はいささか衝撃的に過ぎた。

「御前ご腐心の槇林じゃ。先に堀川院を見たものはみな一様に、そうして肝を消しおるわ」

蛇行気味に配された磔を律儀に踏んで、先に立つて歩く佐世がちよつと得意げな声を出した。

「護法の依頼ありとは申せ、この御前の槇林に足を踏み入れるは名誉のことぞ。前に卒せられた在中将や河原大臣などは、ことのほかこの景色を嘉せられての。風雅の名声世にたかき名士は、けだしものの良さというものがわかるものじゃで、せんだつてなどは聖上が行幸なされるという、まことめでたき」

私語はつつしめなどと言っておきながら、先導する佐世の自慢話は声高に続いた。もつともこの深々たる森の中にあつては、佐世の文人質の声など出す端から樹間のうちに消えていくのであるが。

「それ長恭どの、在中将がその磔を踏んだやもしれぬぞ」

「……妙法先生、私語は屹度つつしまれませ」

道説が冷やかすような声をあげると、長恭はつんと顔を背けて、わざわざ示された磔を避けて通つた。

「なんやよつちゃん、あんな女たらしが好きなんか」

「よつ……！」

長恭が絶句する。

「この長恭どのはの、かねてより在原業平卿に私淑しておつてな。聞くところによれば、彼の御方の卒せられた折などはもう」

「静かに！ 御前はもうお休みかもしれぬのじゃぞ、私語はつつしまつしやい！」

にわかには雄弁になつた道説を、佐世がそう言つて遮つた。最前から静かにしると言つておきながら、その実だれよりも大きな声を出していることに、どうも彼自身は気付いていないようであつた。私語を咎めるといふよりは、自分の話に耳を傾けないことに腹を立てたよつであるらしく、はたしてそのように言い放つた舌の根も乾かぬうちに、

「河原大臣などは、この洛中に忽然と現れた山居のごとき妙趣に、いたく對抗心を燃やされての。それ、左京六条は河原院などは、あれはその最たるものよな。わざわざ海から水に草に運んできて塩を焼いて「陸奥の眺望こそ風情」などと、出し惜しみせぬのはよきことじゃがの、風雅というものは金をかければよいなどというものでは」

長広舌はじきに再開された。

棟門より続いてぐねぐねとのたうつ贅は、できるだけ長く森の中を散歩させる意図があるのか、わざと遠回りするように配されているらしかつた。一行は佐世の長話を右から左へ流しつつ、敷地内をさんざめき歩き回つたあげく、おそらくは敷地の中ほどに広がる、一泓の池のほとりに至つた。

「うつむ……坊令泣かせよな」

道説が唸つた。池に湛えられたゆたかな水は、東側の築地塀に切られた暗渠より流れてきていた。大胆にも西洞院川の流れを強引に引き込んだもののように、細い川が池の南端からもう一筋、築地塀に伸びているのは、小路から奪つた流れを返すためのものらしい。流れ水の絶えた区画は塵芥によつて、さだめし猖獗を極めていることだろう。

「これが大臣の、お家、どすか」

その池になかば乗り出すようにして、大臣の屋敷はあつた。

「なんやその……えろう、細い、どすな」

月明かりの弱いのに加えて、敷地中に植わつた樹木がいちだんと闇を濃くしているのだが、その眼の利かない中であつてさえ、屋敷

の小ささ、ささやかさは明らかであった。

屋根が檜皮で葺いてあるのは、檜葉の木叢を見渡せば不自然はない。が、貴族の寢殿がおしなべてそうであるような入真屋ではなく、建物はすべて木訥な真屋造りで構成されており、母屋の端に対屋がひとつだけついているほかは、雑舎がひとつと唐風の四阿がひとつ、屋敷の伸ばした隻腕のごとき釣殿が池中に臨むのみである。

華美を極める堀川院とまこと対照的な、それはあまりにもささやかな屋敷であった。

「大なるものが、輝くものがよいとは限らぬのよ。　そこもとのごとき若輩にはまだわからぬのかの」

佐世は訳知り顔で嘯くと、さつさと対屋のほうへ歩き去ってしまった。正面の母屋には、塗りのない、白木の地の剥き出した五級階が設えられ、そのかたわらにぼつんと植えられた一本の紅梅の若木が、彩りの薄い景色のなかにあつて、文字通りの紅一点を供している。行きずりにそのような光景を垣間見れば、芸術などの方面にはとんと貧しい季満でさえ、なんとはない趣を感じるような気がしてくるのであった。

一行は対屋の孫庇で履物を脱ぎ、やたらと体格のよい舎人に庇のうちへ招じ入れられ、板の間で椿餅と白糟酒を持てなされた。佐世は屋内に入ったきり姿を見せず、舎人も無言のうちに饗応を終え、灯台に油を足すと、「ここでお待ちを」と一礼して、母屋に続く透渡殿へと消えていってしまふ。

「食べてもええのんかな。ええよな。出されたもんな」

「……む、頂け」

四人だけになると、道説に形ばかり許しを得て、季満はさつそく供された椿餅に躍りかかった。

「甘……」

ほのかな甘味のあるのは、甘葛の煎じ汁かなにかが練り込まれているのである。粗食に慣れきつた季満の貧しい舌にとって、それは例えようもない美味に感ぜられた。

「甘いなあ、甘いなあ。もうのうなつたなあ」
そうしてたちまちおのれの分を食らうてしまつと、今度は物欲しげに道説の餅を見やるのであつた。隣には尾筒丸がやはり同様の手続きを経て、大男の手元を凝視している。

「……………」
道説は無言で餅を二つに割り、二人に分け与えた。

「驚きました……大臣の私邸がかほどのものであつたとは」

道説の杯へ瓶子を傾けながら、長恭は呆けたような顔をしている。この屋の「妙趣」とやらに余程の衝撃を受けたものか、青年の目は最前からうろつろと遊いでいた。

「前の御殿も、ここも、おれがごとき小身には居心地が悪い。このような屋に住もうておつたら食も喉を通らぬ」

大男は深呼吸と長大息の緋い交ぜになつたような息をついた。庇の半部が開け放たれているために、辺りには屋外となんら変わらぬ樹の香りが立ちこめている。板の間に座していなければ、まるで野辺に会しているかのような心持ちになつたことであろう。

「よつちゃん、それ、いらへんのん？ おれ食べよか？」

「……土師法師、そろそろ仔細を聞かせてもらおうか」

「へえ、仔細つて？ それ食べへなんだからおれに」

「この護法の仔細だつ！」

「長恭どの静かに！ 大臣が屋ぞ！」

「よつちゃん」呼ばわりがよほど気に食わなかつたものか、青年は突如弓を放り出して爆発した。その面にはもはや「不機嫌」などという形容は中らない。燃え上がる双の眼には憎しみすら見て取れた。

「貴様、土師法師、なぜ真面目にやらぬ。貴様の一挙手一投足にわが父の進退がかかつておるのだぞ！ 無位の外法師めが小才を鼻にかけおつて この期に及んで策の立たぬなどと申してみよ、決してこの屋より生かしては返さぬ……………」

片膝立ちになり、太刀に手をかけ、長恭は齒を剥いて季満を恫喝

した。たおやかな青年の突然の豹変に、制しようとした道説の動きが阻まれたかのごとくに止まった。肩にかけようと伸ばされた手が、大仏の施無畏印のようなかたちで凍りついている。

（おちやらけとつたんが裏目に出たな、こら。道説以上のカタブツや）

季満は出し抜けに青年に向かつて額ずいた。まったく突然に土下座された長恭は暫時、気を吞まれてその動きを止める。

「ご無礼をいたしました！ 真面目にやらさしてもらいまっさかい、何とぞ命ばかりは……！」

無論、道説が仲裁に入ることを見越しての芝居である。案の定、お人好しの大男は大手を振って二人のあいだに滑り込んできた。

「待て、待て！ 大臣が御殿を血で穢すつもりか」

「妙法先生、なにゆえこのような者に肩を入れるのです。このいかに不誠実で卑しい」

「そなたの悪しき癖だ、長恭」長恭の言い募るのを遮って、道説はそう呼び捨てた。「木を見て森を見ぬ。なにゆえ判断を急ぐ、

我らは門外漢ぞ。これがかようおちやらけて見えるのも、なにがしかの理由あつてのことかもしれないか」

「いや、とてもそのようには」

「見えぬゆえ断ずる、というわけか。よし結構！ これが護法に失敗したなら、煮るなり焼くなりそなたの好きにするがよい。だがその前に、そなたにこれを紹介したおれを斬つてからにせいっ！」
対屋をゆるがす大音声。渡殿の方から板の間の軋る音が近づいてくるのは、すわ何事かと舎人が駆けつけたものであるうか。

「……努めよ、土師季満」しばし恥じ入ったように俯いていた長恭が、おもむろに顔を上げ、こうなったのもすべて貴様のせいだと言わんばかりに季満を睨まえた。「我が父の行く末は貴様の腕に、貴様の首は我が太刀に委ねられた。努めよ、土師季満」

長恭が太刀を下ろし、居住まいを正すとすぐ、前の舎人が足音たかく戻ってきた。迷惑げに眉を聳やかし、

「何事です、声が高つていまして」と
と囁いた。

Returning arrow VI

三月四日 戊寅 子二刻

じちのえとちねのじうく

「……いま、動いたな」

「気のせいやる」

「いや、わたしも動いたような気がする」

舎人に呼ばれて母屋の庇に陣取ってより、はや一刻が経とうとしている。

三人の視線は、奥の間と庇を分かつ几帳の前に据えられた、七十二文銭を積んで造られた塔に注がれていた。彼らはこの一刻の間というものまんじりともせず、折ふし銭塔が動いただの動かないだのとささやき交わしては、いつ来るかもわからない「なにか」を待っているのだった。

「尾筒丸、なんも見えへなんだよなあ」

聞かれた尾筒丸はあらぬ方をくるくると見回したのち、ウンと頷いた。三人から少し離れた位置で、なにか粘土のようなものをこね回している。

「……季満や、尾筒丸は最前からなにをしているのだ」

「形代をこしらえてんにや。尾筒丸、できた？」

アイ、と呟きながら尾筒丸が差し出したのは、米粉を水で練った糺である。手のひら大の、白っぽい人のかたちをしたそれは、烏帽子を象つたものか頭頂を尖らせてあつた。

「うまいえ、尾筒丸。もいっこお願いな」

「土師法師、なぜかような童をここへ？」

懸命に人形をこねる童子を、長恭は訝しげに眺めている。

「留守を任かせるには、いくらなんでも幼すぎようが。なあ尾筒丸」

道説が代わりに答えてにっと笑った。が、尾筒丸はどうも笑いか

けられたとは思わなかったようで、へびに睨まれたカエルのような怯えを見せるに止まる。道説はひそかに傷ついた。

「……尾筒丸はお前の弟かなにかかの」

「友達や。な、尾筒丸、友達やなあ」

童子は作業を続けながら赤くなつた。

「孤児には見えぬな、貴様などよりよほど様子がよい。どこ

かの貴族の屋から攫つてきたのでなければよいが」

底意地の悪いひと言に、しかし季満はどこ吹く風といった顔でけりりとしてゐる。どうも目の上から馬鹿にされたり蔑まれたりするのに慣れてしまつたふうがあるようで、むしろ隣人の道説などのほうが、そういった他人の受ける中傷に敏感なくらいであつた。

「軽々にそのようなことを申すでない。しかし、長恭どのが言葉ももつともだ。卑しからぬ家の子と見受けられるが……なぜお前の破れ屋におるのだ」

「そらお前、ひとりで御飯たべてもあじないやろ」

「そういうことではなくてな」

「妙法先生、お静かに」

道説のほうへ手のひらをかざしながら、いつの間にか長恭が几帳のほうを注視していた。彼の視線の先には小刻みに震える、七十二文銭の塔がある。

「尾筒丸いそいで。道説、弓弦はつて。いつでも射れるようにしとき」

「お、おお」

四者それぞれの中に、にわかには緊迫したものが訪れたとき、ふいに几帳の奥から小柄な老人が現れた。どうやら彼の歩みが板の間を震動しただけのようであつた。

（何者だ……佐世さまではない）

翻つた几帳の向こうに一瞬、御帳台とおぼしき影が垣間見える。

白一色の単衣物のみを着、闇に溶ける立烏帽子を頭上にいたadaki、両手に樋箱を抱え、老人はあたかも立つたまま眠ってしまったかの

ように黙っていたのだが、ややあつて「お……」と呟くと、庇に会した四人をもの珍しげに眺めだした。

「おお……あれじゃ……亜相どんの言うつった者じゃな。でかいのう」

（この方は……太政大臣！）

奥の間の御帳台が、この屋の主人の在処を明かしている。この日本国という船の櫂を握る、その老人は従一位太政大臣、藤原基経に相違なかった。

「なにを食うたらかようになるのじゃろ。お、これな」

板の間を揺るがして額ずいた道説の鼻面に、漆塗りの雅な樋箱が突きつけられた。どうも捨ててこいということらしい。

「う、初見参つかまつります。これは左衛門府が下臈、管少尉にて、御殿を汚すご無礼はひらに 季満」

素早く季満の膝に樋箱を置く。

「あ、おん前……あつ、あかつ、あかん！」

あやうく中身が零れそうになるのを、間一髪で受け止めたときには、道説はすでに背を向けて頭を垂れているのであった。

（許せ、季満）

「ふうん。亜相どんにも石佐にも、大事ならんとは言つたんじやがの。まあ、遅うまでご苦労じゃのう。ううむ」

「あのう、ひよつとして、石佐ゆうのはこちらはんの家司の？」

そう言いながら、季満は尾筒丸のほうへ樋箱を渡そうと見せかけ腕の伸びきる寸前で長恭の膝元へ滑らせた。八コの中のナニかがちやぽんと危つい音をたてる。

「……………！」
季満の狡猾なる手管に、はたして長恭の双眸は殺意に燃え上がった。

「わかるか。石頭の佐世じゃからして、石佐じゃ。あれも前には大学頭などやっておつての。頭はよいのじゃが、よい分だけ融通が利かぬ。ううむ、なんじゃ、かわゆい顔をしとるのう……………」

樋箱を押し付けるあてを捜していた長恭が、はたと尾筒丸の顔を視線の先にとらえた。童子は今にも泣き出しそうな顔をしている。

「ん、そちは……見たことがあるのう。たしか年始の節会せちえの折、琴など弾いておらなんだかの」

「あ、はっ！ つたなき手ゆえ、かえってお耳に残ったものかと。これは大納言藤原良世だいなごんふじわらのよしよが息そく、長恭と申す下臈藏人げんじやくくわうじんにござりまする」

ハコを申し送る相手を見つけれぬまま、長恭は仕方なしにそれを携えたまま頭を垂れた。傍目はためにはまるで樋箱を下賜かされた一場面のようである。

「亜相どんが息で長恭とな。ああ、そちが蘭夕郎らんせきろうか！ なるほどのう、うむ、近くで見ると一段と美形じゃのう」

「……勿体なきお言葉」

長恭はそう言つて形ばかり一礼すると、立ち上がつてやや無愛想ぶあいせい気に背を向け、樋箱を手に背後おくの階はしへと降りていってしまう。今ほど褒められたばかりの美貌には、しかしかすかに恥のような色が刷はかれていた。

「あ、これ、長恭どの！ これは失礼を」

詫びながらも道説は内心、あの青年のために頭を下げるのはこれで何度目であろうかなどと、忿懣ふんまんやる方ない心持ちでいっぱいであった。基経もとつねは特に気分を害した様子もなく、「よいわえ、アレを捨てに行つたのじゃる」などとあつげらかんとしていたのだが。

「ま、なにも起こらぬじゃるうて。左大臣ひだりのおとども石佐もやたらに『御身おんみたいせつ大切おんみたいせつ、御身おんみたいせつ大切』などと口をすっぱくして言いおるが、たかだか夢の話。なに、ただの気のせいよ」

「大臣おんたいには、今宵けしやいなにも起こらぬと仰せになられまするか」

基経のなかば呆れたような口に、道説がやんわりと反駁はんぱくした。百官ひやくくわんを統すぶる重き身の言葉としては、いささか浅慮せんりよとも受け取れる。夢をゆるがせにできぬ重大な予兆と信じ、夢解ゆめたがきや夢違ゆめたがえなどの占うらないに繁しげくかかる人も珍めづしくない世にあつて、大臣の言葉は身を軽ん

じすぎているように聞こえる。

(まこと御身大切よ。高貴な人々こそ、身を憂えて一層につつしむべきである)

というのが道説の考えであった。

「起こらぬとも。夢に運命が左右されるなど、馬鹿げた考えよ。かようなことはこれまでに幾度となくあったわ。そのたびに石佐がそちらのような者どもを連れてきた。ほどこしのようなものじゃで、今日もその続きに過ぎぬ」

道説がさらになにか言い募ろうとした矢先、季満が彼の膝をつついた。代わりに口を開いて、

「いや、ありがたいこととす。ほんまに大臣のような有徳のお方がおらなんだら、わたしらのようなもんは食べてゆかれへんどすな。ところで、そのお首のものはなんとすやるか」

へいこらしながら言った。

薄闇に眼をこらせば、大臣の単衣の首には、白いなにかの小片を金鎖とおぼしきもので綴った瓔珞が下がっていた。彼が身動きするたびに、かすかにさらさらと音をたてて波打っているそれは、寝所にいた人間がつけるものとしてはいささか奇妙にも思える。

「これか。これはの、左大臣が御守りにと言ってくれたものじゃ。なんでも靈験あらたかなる仏舍利じゃそうで、寝るときも肌身離さずつけていなければならぬそうな」

「はあ、靈験どすか」

基経はいかにも馬鹿馬鹿しそうに、しわの寄った鼻をふんと鳴らしてみせた。話の内容に反して、彼はお骨の「靈験あらたか」さなど全く信じていないように見える。

「よい歳の男が真面目くさって『これは御仏が靈験すぐれたるものにて』などと……なにも左大臣に限った話ではないが、まったく童子のごとき呆れ果てたる物言いよ。外間もあるゆえのう、これもお勤めと思つて付き合つてやらねばならぬのじゃが」

道説は思わず瞠目した。どうやら基経は神仏や靈障のたぐいをま

「たく信じない質らしい。神代の昔から連綿と続き、帝をして神の末裔と崇めしむる朝廷にあつて、こういつた考え方はけだし珍か極まるものである。それも百官の頂点に立つ身、並びなき『一の人』をして、である。」

（我が身と引き比べるなど畏れ多いことだが……あまりにも違つかねて切望しながら、いまだに我が身に備わらぬ觀念を、このお方は無価値なものとして洩もひっかけないのだ！）

感心と狼狽にかすかな嫉妬の入り交じつたものが、つかのま大男の胸に去来した。本当に見知らぬ山奥に迷い込んだような気さえしてくる。

「そうどすか、お優しおすなあ大臣は。いやなに、黄金は古来より陽のものや謂われとりまして、この陰たる夜半に身につけるのんは、ともすると五臓調和の乱れを引き起こしかねまへん。御寝にならるんどしたら、外しておいたほうがよろしいかと」

季満はとくに感じ入った様子もなく、相変わらずへいこらしていた。が、平素おちやらけ放題なのが、とにもかくにもそれらしいことを話したので、沈んでいた道説もふと思いを新たに、

（うむ、大臣には大臣のお考えもあるうが、ならば尚のこと、陰陽道に長けたこの男を連れてきたは正解であつたのだ。見よ、ちゃんと話すべきことを話しておるではないか。まったく長恭の目も見えない）

前に季満に対して疑問を抱いたことなどすっかり忘れて、道説はしきりに感心した。

基経は欠伸をしながら聞いていたのだが、季満の話が終わるや否や、さもおかしげに含み笑いつつ、

「やれやれ、そちも石佐や左大臣がごとき口を使う。この歳になればの、五臓調和の乱れなど珍しいことではないわい。それをやれ身につけた物のせいだの、やれ歩いた方角が悪いだの、やれ肉を食うたせいだなどと、さような些事のせいにされてはたまらぬ。そちが生業のことゆえ、あえて強弁するでもないがの。迷信じゃ

よ、さようなことは」

恬として言い放った。

「へえ、まことに仰せのとおりで。大臣のお言葉の通り、なにぶん生業のこつとすさかいに、こんなことでも言うっておかなんたら仕事にならへんのどす。お気にせんといてくれやす」

あつさりと言を翻す、季満の日和つた物言いに、道説はふたたび瞳目せざるをえない。

（いつときでも感心したのが間違いであった……！ いかにも申し上げ難しとはいえ許せぬ、お前には矜持というものが無いのか、季満っ！）

ここが基経の家宅でなかったなら、目の前のちびを大声一喝したことであろう。ひそかに身を揉む道説を措いて、基経はひとつ満足げに頷くと、

「ではな、わしはもう休むぞ。大事なく朝を迎えれば、石佐からなにがしかの褒美も出ようほどに、気楽にやらっしやい」

などと言いながら奥へ戻っていつてしまった。

「ミツキメ、こつち」

「なに？」

「いや、なんでもあらへん。独り言や」

季満がぼそつとなにかを呟いてすぐ、几帳の向こうで「あつ」という声が聞こえ、次いでなにかごそごそするかすかな物音が聞こえてきた。

「……季満よ、見損のうたぞ。大臣が身の上を慮るのなら、なにゆえ阿つて持論を曲げる。大臣が身のことだけではない、それはお前の為にもならぬ」

几帳の向こうが静かになった途端、道説は声をひそめて季満をなじった。この男、ひとに阿るのも阿られるの嫌いなのであるが、それに況して嫌いなのは「ひとがひとに阿っている姿」なのであった。言うまでもなく、その面は仁王のそれである。

「ただのデタラメや、あら」

「なつ……お前、いい加減に　！」

「ちよう待て。　はい、ご苦労はん」

みたび瞠目する道説を一顧だにせず、誰にともなく^{ねま}労いの言葉を吐くと、季満は自らの脇の下へ手をやり、

「ふふん、これ、なんやと思う」

そこから一筋の長い毛を取り出し、道説にひらひらと示してみせた。

「なにと言つて……髪^{かみ}の毛のように見えるが」

「うん、おじいちゃんの毛エヤ」

「おじ……大臣のことか。いつの間に……」

「これをな、さっきの形代に結びつけて……」

尾筒丸を手招きして、先程こしらえた頭の尖った人形を受け取ると、季満はその首に大臣の髪^{かみ}の毛を巻きつけ始めた。あまり器用なほうではないらしく、人形の首をねじ切つて「あかん、縁起わるいなあ」などと呟^{つぶや}いている。

「……季満、なぜデタラメなど申し上げた」

ややあつて、道説が低い声でぼつりと呟いた。

「ん？　そうしたほうがそれっぽいやる。　ダメや、ようせん。

尾筒丸に頼もか」

「こちらを向け、季満」

「なんや、おつかない力才して。ほんまお不動はんやな、ほら尾

筒　」

「季満」

道説が本気で怒っていることによつて、季満はにやにや笑いを引つ込めた。黙りこくつた両者の様子を、尾筒丸がおつかなびつくり窺っている。

「……おれは失望しかけているぞ、季満。長恭どのに言つたことは嘘ではないが、以降も真面目にやるつもりがないのであれば」

道説はそう言つて、おもむろに太刀を膝元に引き寄せた。偶然か否か、^{たかとうだい}高灯台の火が一瞬、道説から逃げるように揺らめいた。

「これにものを言わせるより他ない。どのみち大臣に万が
一のことあらば、籐大納言さまが縁者たる長恭どのは措くとしても、
下臈げろうのおれやお前が責を問われずに済む道はないのだから」

季満はいらえずに再び尾筒丸を手招きし、「お願いな」と人形を
返すと、ひとつ舌打ちをした。

「要するに、や。おれが大臣をなんとかできひん思とんにやな、
お前は」

「そうは いや、欺あざむくまい。そうだ」

「そうか、そらあかん」長恭が出て行った階のほうを、季満は
なにを見てもなく眺めている。「……ほんまはな、あんまり真面
目にしいひんほうがええにやが、仕方あらへんな」

「どういう意味だ」

「お前もゆうたやあらへんか、おちゃらけとるのんに理由がある
かもわからんって」

道説ははたと言葉に詰まった。確かに言うことは言ったのだが、
それは長恭をなだめる為の言葉であって、本当にそう思っていたの
かと言われれば否定せざるをえない。

「おれ流やけどな、四角四面しかくしめんにやるとよくないねん。真面目にす
るゆうことは、深刻やからゆうことや。 少なくとも周りで見て
るモンはそう思つやろ」

「まあ、そうかもしれぬが、それとこれとどういう」

「それがあかんにやわ。そやけど、お前に能力を疑われるのんは
もつとあかん」

「……なにゆえだ。それがことの成否に関わるとでも言うのか」
「そうえ。 ちなみにあのおじいちゃん、もうしばらく放ほかし
としても問題あらへんさかい。ああゆう手合いは呪やら術まじやらがえ
るう効きづらいよって」

「ええ待て待て、お前の言うていることがさっぱりわからぬ。一
から説明してくれ」

道説はいらいらしながらも一方で、

(木を見て森を見ぬのはお互い様であつたのやもしれぬ。おれはひよつとして、季満の仕事の邪魔をしているのではなからうか……)などと、軽々に口を挟んだことを後悔しだしていた。

「一から説明してる時間はあらへんが……そやな、おじいちゃん
が呪に強いゆう訳はな、信じてへんからや。だからお前はおれ
を信じへなんだからあかん。わかつた？」

「わからん。わからんが……そうすることが必要なのであれば、
信じるしかあるまい」

「……どや、尾筒丸」

唐突に話を振られた尾筒丸は、ちよつと眇すがめに道説の顔を窺うと、
ややあつてウンとひとつ頷いた。

「よし ほんまは黙つとこ思たんやが、お前には話しとこか」
言つて、季満はにわかにも見え、口を閉じているだけで人とはこれほどにも
変貌してしまうものなのかと、道説は思わず場違いな感慨を抱いて
しまう。えくぼの浮かぬ、齒を見せぬ白い細面ほそおもては、それだけでなる
ほどどうして、長恭に負けず劣らずの美貌である。

「あの瓔珞けいらく、怪しいえ。詳しくうはわからんけど、なんや良うな
い呪が籠もつとるように見えてん。この件と関わりあるかもわ
からん」

「それであるような……いや待て、そう思うのならなぜ大臣にそ
う申し上げぬのだ」

「ゆうたかて聞かへん。さっきの聞いてたやろ、おじいちゃん、
ソツチの話は信じひんえ。そやさかい、ちよう荒けない手エ使
わさしてもるたけど」

「……というと」

季満は手刀を首にあてる仕草をしてみせた。

「鎖を切つといた。外聞がいぶん云々うんぬんゆうても効能じたい全然信じてへん
さかいに、たぶん直してまた首にかけることはしいひんやろ。とり
あえずは、ちよう安全になつたゆうわけや」

「……ということとは、だ。それで終わりにはならぬということか」
「もちろん。お前にも働いてもらうえ」

階の向こうの闇から足音が聞こえてくるなり、季満のかんばせはたちまち元のいやけたものに立ち戻った。

（あの瓔珞、左大臣が御守りであつたらしいが……まさか左大臣まで何者かに狙われておるのであるうか）

腕を組んで思考にふける暇もなく、長恭が階から庇へ上がってくる。「どこに捨てたものか迷ってしまひまして」と言つて座つた青年に、季満が軽薄な声をかけた。

「よつちゃんお帰り。えろう遅かつたなあ、よつちゃんもついでにしてきたのんか」

「対屋に吟師を控えさせてある。他はすべて抑えだ、こちらには回せない」

「無用、吟師も回されたい。たかだか外法師の二、三人で、陰陽寮をどうにかできるとは思えぬ」

「廿人だ、言師。これだけの数を集めるのにいささか時を要したが、呼師達を加えて廿と三人、方々に散つて神祇官と陰陽寮の気を散らしている。無論、哭師もその中にいる」

「……………」
言師は無言のまま立ち上がり、眼前の祭壇に奉ぜられた桃弓を手に取つた。それを頭上に頂いて膝を折り、一心になにごとか祈つて

いる。
丹念に拭き清められた板の間が、言師と別当の間に据えられた高灯台の、灯明の明かりを反射している。一間に設けられた白木の祭壇には、折敷に盛られた塩、胡麻、李、餅、干鮑に黒酒、白酒などの神饌が献ぜられ、その奥の幣のあいだに、小さな骨とおぼしき小片がひとつと、蘆の矢が三筋、神籬を擬して祭られていた。

「少数でやるに如くはない。ないが、お前にはすでに一月の猶予を与えた。これ以上の時間をかけるのは、もはやお前の無能力を明

かすことにしかならないように思える。露見する危険を伴ってでも

「今宵だ」

頭上に大弓を頂いたまま微動だにせず、言師はひと言、自身に満ちた声でそう遮った。

「今宵、決着はつく。つかぬときは、せめてけじめはつけよう。それよりも前の約定について、改めて二言なきを約されたい。この呪詛相成ったあかつきには、私を他の者どもに先んじて官人に取り立てると」

言師は音もなく振り返ると、儀式めいた挙作で弓弦を張りはじめた。折々その双眸に光るものが見えるのは、灯明の火の映るだけばかりではあるまい。

「……六位を約す。それ以上は、少なくとも二、三年の内には罷りならない。職能にこだわるのなら陰陽権助の職を。財を欲するのなら……少し遠方になるが、越前の国司を差配できよう」

任官を望む言師の眼に、しかし物欲の卑しい濁りは見いだせず、ただ相手の嘘を看破せんとする厳しいいろが隠れもなく見えるのみである。いちど弓をぎつと引き、かんと鳴らすと、

「御辺が嘘をつかぬと信じている。さらば、お下がりあれ」

そう言つて祭壇の矢を頂き、それをおもむろに桃弓につがえた。

「奸臣藤原基経、天刑星の裁きあれ」

Returning arrow VII

三月四日 戊寅 子四刻

ふいに尾筒丸が、猫のようにあらぬ方をついと向いたなり、几帳の前の銭塔が派手な音をたてて四散した。

「尾筒丸、どつち？」

季満の鋭い問いに、童子は階からやや左よりの方角を小さな指で指し示し、「アッチ」と呟いた。道説と長恭は、ばらばらに散った銭を眺めながら凍りついている。

「よつちゃん、そこ退き。道説、弓の準備」

切迫した声で指示を飛ばしながら、本人は尾筒丸のこしらえた二体目の人形を引つ掴み、階のかたわらに静かに据える。長恭の「来たのか、土師法師」という問いかけは完全に黙殺された。

「道説、さつきゆうた通りや。人形を射る思うのんやあらへん、その向こうにいる悪者を射る思うのんえ」

「うむ……しかしまことにかような」

「道説、こつち見い」一度どんと床を踏みならすと、季満は怒ったような顔をしてみせた。「ええか、信じへなんたら、どんな簡単なことかて成功しいひんにや。これからお前のやることは難しいことやあらへん、お前の矢はぜったい相手に当たる。おれを信じい、自分を信じい」

しばしためらいつつ、弓の具合を確かめるように二度三度と弦を引いていたのだが、ややあつて「応」と短くいらえると、道説は几帳の前に立ちはだかつて檀弓に征矢をつがえた。

（季満、お前を信じるぞ。お前の言うとおり、この矢は当たる。）

この矢は当たる

「太政大臣に仇す輩、我が一矢を以て報いなさん。この矢当たれ」
弓弦も切れよとばかりに引き絞り、かんと射放った征矢は

たして人形の手前でこつぜんと消えたのだった。

言師ごんしが「うっ」と唸ったなり、後ろに控えていた別当べっとうの顔すれすれに、一筋の征矢が突き立った。土壁の半ばまでを貫いた矢は飴色に焦げ、薄い白煙ときな臭いにおいを漂やがらわせている。

別当は特に驚いたふうもなく、その矢柄やがらに手をかけた。

「……いずこかの外法師がぼうしか。手は打ったのだが　うまくいかなんだようだ。言師、止やめるか」

矢は容易に抜けない。別当は仕方なしに矢柄をへし折ると、微動だにしない言師の背にそう水を向けた。言師は頬をなでなで首だけを振り向け、低い声で、

「今宵だいいしこの大事をしくじれば、もとより生きて朝を迎えることはせぬ　さよう、牛頭天王ごずてんのうに誓願した。相手が誰であろうと何人いようと、私は弓を引くのみ」

と決意のほどを示す。

別当の目がつかのま、眩まぶしげに細められた。

「正直これは成らぬと思っていたが……見上げたものよ、言師。

この大事成就に命をかけたか」

言師が自嘲気味に鼻をならす。

「……まこと、御辺ごへんの言われるとおりよ。私はもともとそれほど術に長じおるわけではない。これ以上時間をかけても、地金じかねをさらすことにしかならぬであろう。　なればこそ」

（この正業につくまたとない機、逃のがすわけにはゆかぬ。我が為に、妻さいが為に！）

祭壇から二矢目を頂き、ふたたび桃弓ももゆみにつがえる。言師の瞳には、呪殺などという禍事まがごとを行うものにまったくそぐわない、清々しい澄んだような光さえ宿っている。

それはまさしく、命を捨ててかかるものの覚悟の光とも言えようものであった。

「天刑星てんけいせいよ、牛頭天王ごずてんのうよ、照覧しやうらんあれ。この忌矢を以て冥罰みやうばつとせん。

奸臣庇うものあらば、この矢当たれ」

空気を切り裂くかん高い音のみを残して、言師の射放った蘆矢は祭壇の手前でかき消えた。

（あの矢はどこへ行ったのであろう、本当に季満の言う『悪者』に当たったのであろうか。なにがしかのいかさまを弄したようにも見えなんだが）

季満を信じると言い、また真実信頼して弓を引いた道説であったのだが、いざその結果を見るにつけ、湧いて出てくるのは疑念ばかりであった。

なるほど、面妖にも矢は消えた。が、その後人形はびくともせず、それきりいたって何事も起こる気配はない。道説と長恭はいきおい所在なく、つい先程などは困惑の態でその辺りをうろつこうとして、季満にひとくさり怒鳴られたりしていた。

尾筒丸は相変わらず、縁の下のネズミに耳をそばだてる猫よろしく、一方を見やりながらぴくりとも動かない。長恭が事態の説明を求めるも、季満はいちど不機嫌そうに舌打ちをしてよりのち、ぶつぶつとなにごとか呪文めいたつぶやきを発するのみで、こちらもまた黙殺されるに止まる。

すでに護法が始まつている以上、長恭もいつもの傲岸ぶりを發揮することは躊躇われるらしい。仕方なしに道説と二人、菩提講に連れてこられた童子のごとく縮こまっているよりほかなかったのであった。

「季満や、状況がわからぬ。矢は当たったのかな」

季満のむつかしい貌は、まさか成功を示すものではあるまい。が、不安と疑念に苛まれながら黙然と座っていることに、道説はいいかげん倦んできていた。渋い貌をされるのを百も承知で、つとめて朗らかな声をかけてみる。

「……ダメや、外した。方角がずれとるかもわからん。ちょう黙つとき」

季満は早口にそれだけまくし立てると、もとのぶつぶつに戻ってしまった。平素の愛想のよさとは違って変わって、まったく取り付く島もない。

「土師法師、それで、今はなにをしているのだ。 なにか私に

手伝えることがあれば言っただけいい」

「……………」

「これ、土師法師」

長恭の言葉はみたび無視される。今回はいくらか譲歩のいろを帯びた申し出であったので、袖にされた青年は柳眉を逆立てて憤慨した。

「……………まったく、おのれの腕の悪しきが招いた事態であるのに、説明もひとつもせぬとは」

「長恭どの、お静かに」ふと、前に言われたことを思い出して、道説は手をあげて長恭の繰り言を遮った。「季満、邪魔をするが、大切なことぞ。おれも長恭どのも、現状がどうであるのか説明してもらわぬことには、お前を信用しようにも信用できぬ。それが事の成否を分かつのであろう」

我ながら上手いことを言ったと内心得意になる道説に、季満の切れ長のきつい眼差しが注がれる。

ぶつぶつが止まる。

「……………あのな、すぐに」

と、言いかけた瞬間、なんの前触れもなく季満の体がかき消えた。姿を探す間もなく、庇と母屋を分かつ柱の、ほぼ天井に近いところで、なにかが猛烈な勢いで激突したような音が起こる。

「あつ……………季満！」

音のしたほうへ首を振り向けた時には、ちょうど季満の体が手足をばたつかせながら、板の間に落ちゆくところであった。墜落する転瞬、二度目の激突音に屋敷中が鳴動し、ややあつて柱に激突したときに脱げたものか、季満の烏帽子が遅ればせながら主人のうえへ落ちてくる。

「季満、無事か」

「……………！」

したたかに背中を打ったせいから、季満は呼吸ができない様子で、獣のようななり声を上げながら板の間を転げ回っている。介抱しようにも手がつけられず、そうこうしている間にも、大臣や家中のものが音を聞きつけてやってくるのではないかと、道説と長恭は一緒になって周章狼狽するよりほかなかった。

「ミ、ミツキメ、大丈夫なんか……………！」

苦しい息のうちから、季満はそんなことを呟いた。道説たちがそれを不審に思う暇もなく、

「尾筒丸、見とつたな、どっち！」

咳き込みながら矢継ぎ早に怒鳴る。床に這いつくばった季満をこわごわ窺っていた童子は、しかし半ベソをかきながらおろおろするばかりである。ようよう口を開いても吃りがきつく、口数が少ないのも手伝つてなにを言っているのかわからない。

「尾筒丸、早う……………！」

「土師法師、落ち着け。お前がそれでは萎縮するばかりだ」

焦れる季満を、長恭がそう諭す。道説に「土師法師の介抱を」と言つて立ち上がると、彼は尾筒丸のかたわらに席を移した。

「……………季満、大事ないか」

介抱と言われても、なにをしたらよいものやら見当がつかない。とりあえず華奢な肩に手を置いてみると、季満は人が変わったように「さわんな！」と目を剥いた。身をよじって肩にかけられた手を払う。

長恭は少し離れたところで、尾筒丸の頭に手を置いて、なにごとか言い含めているようだった。声が小さく話の内容は聞き取れないのだが、漏れ聞こえるそれは地の高さと同相まって、なんと女のように優美である。

（かような声と顔とで今様でも謡われてみれば、それは女どもが放っておくはずもない。天は不公平よ……………）

思わず場違いな想念が胸中をよぎる。季満に引っぱたかれた手をふりふり、道説は少なからぬ羨望をもつて長恭をうち眺めた。青年はほどなく腰を上げ、階のかたわらに据えられた人形を手に取り、尾筒丸の指さすほうへと位置を微調整している。

「道説、準備せえ。大臣を、護ってるのが、ばれとる。次は人死にが……出るかもわからん」

息を整えながら、季満は切れ切れにそう言った。

「最初の矢を外したせいだな　すまぬ」

「お前って……」

荒い息がひとしきり乱れる。なにが可笑しいのか、季満は笑っているようであった。

「……お前のせいやあらへん、でも、次で決まらへんだらな、大臣放かして逃げるえ。おれを狙うのんならまだしも、お前かよっちゃんでも、狙われたら、防げへん」

「それは」

「土師法師、いいぞ」

長恭の言葉に、季満は「道説、次が来る、早う射れ」と言い置き、自身は几帳のほうへ這っていく。大臣の髪を巻きつけた人形を少し、それを口に入れて向き直った。

「季満、ひとつだけ教えてほしい」ふいに頭の中に浮上してきた疑問を、道説は思いつくまま尋ねた。「この矢は……相手を殺すであろつか」

「……向こうは殺す気イヤ。お前も殺す気イヤでやらへんだら、呪は返せへん。返らへんだら、この四人のうち誰かが死ぬやろ」

そう言っで目を閉じると、季満はふたたびぶつぶつを開始した。

「妙法先生、次は当たると、尾筒丸も申しております。ご存分に」

長恭も尾筒丸も、弓箭を携えてたたずむ大男を無言で見詰めている。相手の命の心配をしている場合かと、道説は己の弱気を戒めた。
(では、殺そう。生かしてはおけぬ、大臣が、この三者のうちい

ずれかが、そうしなければ死ぬというのなら 殺す)

「応」と低くいらえて、道説は鏃の先に人形をとらえた。弓弦をぎりつと引き絞り、

「呪箭の者、この一矢を以て誅せしめん。この矢当たれ」
かんと征矢を射放った。

言師は三矢目を桃弓につがえていた。

(手応えはあった。次の一矢で、太政大臣は悶死するだろう)

ふたたび邪魔は入るまいと、言師は確信していた。

命をかけた必殺の矢である。複数の腕利きが一心不乱に加持するのであればまだしも、当面の脅威である陰陽寮はすでに抑えてあり、洛内の陰陽法師への斡旋も、別当がどうやってか遮断していた。この急場に寄せ集められるようなにわか法師ごときに、

(我が一世一代の呪詛、破れようはずもない)

知らず口角が上がるのを感じた。

「別当、越前は遠い。陰陽権助の職を賜りたいが、禄はいかほど頂けようものか」

思考はどうしても目前に迫った報酬へと向かってしまう。むしろ己を奮発させるつもりで、言師は背後へ声をかけた。

返事はない。

「ご案じ召さるな、今宵巨悪は」

「オンセンエンシヤテンドウソワカツ！」

凄まじい気合とともに、別当が一步前へ踏み出し、右手に結んだ刀印を突き出すようにして、祭壇のほうへ向ける。が、その挙動の終わらぬうちに、言師の体は脚を上にして、まるで魔物に掴みあげられたかのように天井へと消し飛んだ。

「言師！」

言師の体は垂木をかすり、化粧屋根の野地板を突き破らんばかりの勢いで天井に激突し、盛大な埃を従えて板の間に墜落した。悶絶する彼の大腿には、弓摺羽までを射通した征矢が生えており、その

矢疵の辺りだけが、まるで炎に炙られた生木のようにぶずぶすと燻べっている。

「ひとりではなかったか……」

別当がひとりごちた。さすがに物音を聞きつけたものか、対屋のほうがにわかに騒がしくなっている。

「言師、齒を食いしばれ」

「待て……手出し無用……！」

矢に手をかけようとした別当を、言師は血を吐くような声で止めた。臍腑を損じたものか、真実その口の端からあごにかけて、涎まじりの血が滴っている。

激痛を噛み潰さんとして、その体は瘡のごとくに打ち震えていた。

「言師、お前は失敗したのだ。もう弓は握れまい」

言師の右腕はあらぬ方向へと折れ曲がっていた。天井をひと巡りしてきた代償はそれだけに止まらず、とくに矢の突き立った右脚は酷い。骨が膝から突き出ており、真っ黒な血が布袴をしとどに濡らしている。

「まだまだっ！ まだ二筋、残っている！ まだっ！」

別当の手を振り払うと、瀕死の獣のような唸り声を上げながら、言師は祭壇の前へと這っていった。

「……残った矢は一筋、先に基経を殺れぬ以上、もはやお前の打つ手はない。潔く」

別当は言葉を切った。気でも狂れたものか、言師は低く笑っているのである。

「ある、いま一筋、ここに……！」

震える手で大腿の征矢にふれる。言師はなんとかこうとか身を持ち上げ、祭壇の前にいびつな正座をした。

（油断した……が、ここが先途！ しくじるわけにはゆかぬ……！）

「……謹んで勸請し奉る、武塔神の荒御魂やどらしめ給え。冀くは我が誓願成就せさせ給え」もはや言師の面に、前の清らかな様子

はみじんも窺えない。まさしく呪いを吐くといったふうが続けて、

「矢よ矢よ返れ、この矢返って射手が五臓を剝らん、この矢
腿ももの矢を掴み、絶叫とともに引き抜く。」

「返れ！」

血の糸を引くそれを、言師は祭壇に向かって投げつけた。

Returning arrow VII I

三月四日 戊寅 丑一刻

「妙法先生、人形の脚が……！」

長恭の驚きの声は、辺りを憚ったのことが、押し殺したような響きをともなった。

見れば、いつの間にか梁の人形はいびつに形を崩し、その右脚は千切れて落ちていた。が、それが呪の成功を示すものなのか否か、道説にはなんと判じかねた。

「うん、成功え、道説。ようやったなあ」
季満が破顔する。

「……そうなのか」
季満のお墨付きを得て、道説はようやく檀弓を下ろす。たった二度、弓を執っただけなのに、大男の体は常にならない疲労で充ち満ちていた。

（呪とは存外、体力を使うものなのか）
膝に両手をつけて息を整えながら、道説はあらためて几帳の前の法師をうち眺める。今宵、おのれが生涯わすれ得ぬであろう体験をしたことに、遅まきながら気付く。

（おれは呪の片棒を担いだ、術を行うたのだ。目に見えぬ世界、肉から乖離した世界は やはりあった）

道説は静かに膝をついた。無事に為果せた達成感とともに、なにか新鮮で澄明な感動のようなものが、体を貫くを感じる。久しくその存在を疑いながら、それでいて常に自らの価値観を刺激せずにはいなかった、あの世界へ触れた感動。道説にはそれが、おのれと他人との差異を埋めるための、鍵となるように思えるのだった。

「季満よ、死んだかの……」
ふと、前に射た矢がどのようなことを招いたかに考えが及んだ。

今ほどの感動が殺人のうえに成り立っているのだと思えば、後ろめたさはぬぐいようがない。

「死んだ？ ああ、たぶん。おれがやっても、ああはならへなんだる思う。お前、才能あるかもわからんえ」

「……そうか」

「妙法先生、お見事な腕でございました。 土師法師も、妙法

先生のお助けありとは申せ、よく努めた」

「尾筒丸もな」と言つて、長恭はかたわらの童子の頭を撫でた。

いつものとおりの傲岸さではあつたが、その面は肩の荷の下りた安堵に彩られている。父親の名誉を保ち得た喜びが、その麗貌から十分に窺いしれた。

「やあ、とにかく一安心や。ご褒美が気になるとこやけど なあよつちゃん、よつちゃんのお父はんからもらたらええのんかいな？ なんや大臣は石佐はんが呉れるとかゆつたはつたけど、ひよつとして両方からもらえるのんか」

「おそらくはそうなるだろう」ちよつとムツとしたのもつかのま、長恭の貌はじきに元の笑顔に戻つた。「父は出し惜しみせぬひとであるし、この度お前に窮地を救われたは事実であるからして、報酬も満足のゆくものになるはずだ。 大臣の謝礼は措くとしても、な」

「いやあ……こら楽しみやなあ……お足もろたらなに食べよか、尾筒丸」

季満と尾筒丸は手を取り合つてきやつきやと喜んでいる。

「こたびの功一等は妙法先生と言つても過言ではありますまい。報酬の件、わたしから父にかけあつてみましょう。金子がよろしいのでしようが、馬なども良きものが」

「オンセンエンシヤテンドウソワカツ！」

季満が突然、悲鳴のような声で陀羅尼を叫んだ。

「な、土師」

「道説イ！」

ばたばたと板の間に水をこぼすような音がする。道説が弓を取り落として嗜血し、板の間を揺るがしてくずおれるところだった。

「妙法先生……一体なにが……」

「ダメやった……ダメやったんや、なんでやあ！」

「退けっ！　妙法先生！」

尾筒丸が火がついたように泣き出す。季満と長恭は先を争って道説のもとに殺到した。

「妙法先生、お気を確かに　土師法師、説明しろ、なにがあった！」

「わからへん、わからへん、道説しつかりせえ、死ぬなあ」

「この無能者……貴様のせいだ！」

季満に掴みかかるうとする手を、血に濡れた道説の手が掴んだ。なにか喋ろうとして、ごぼごぼと濡れた咳を繰り返している。

「道説、大丈夫か？　どこ痛い？」

「ふ……拭け、拭けっ」小刻みに震えながら、道説は「拭け」を繰り返す。「お、大臣が屋を、血で、穢すな、拭けっ」

「あほか！　自分の身イ心配せえ！」

「誰ぞある、斎雄っ、参れ！」

背後であがった唖れ声に、二人は弾かれたように振り返る。

いつの間に庇へ入ってきたものか、灰白単衣の背が、こつぜんと几帳の前にうずくまっていた。騒ぎにまぎれて起き出してきたのであるうか。

「これを使い、血を止めよ」

几帳の帷を二、三枚、手早く筆取り、基経はそう言って二人に投げてよこす。錯乱して凍りつく季満と長恭を尻目に、いつぞ憎らしいほどの落ち着きようである。

「……摩訶不思議なこともあるものよ、かような有様は初めて見るわ」

「大臣……お目覚めになられていたとは」

「あれだけどたばたされて、寝てなどおられようものか。一部始

終を見ておつたが　なにをしておる、早う手当せなんたら廷尉えんいどんが死ぬるぞ」

「そ、そや、怪我、道説、どこ痛い？」

見れば、最前から道説は腹部の一方所を手で押さえていた。倒れたときに折れたのだらう、半ば折れた矢柄やがらが、腹から斜め下へと突き出ている。

血に染そんでこそいるが、鷹羽たかばを矧はいだそれは、まさしく前まへに道説が射たものに相違ない。

「返矢かえしやや……」

季満の声音に絶望の響きが混じる。

「……返矢とは」

いかにも値の張りそうな絹地を引き裂き、長恭は慣れぬ手つきで大男の腹に巻きつける。矢を引き抜くわけにもゆかず、手当らしい手当はそれくらいしかできそうにない。

「返矢を受けたモンは……絶対に助からへん。おれの陀羅尼じゃ、ほんの少しずらすのが精一杯やった。　どうしよ、どうしよ、道説が死ぬう」

季満はとうとう、尾筒丸と一緒になつて泣きだしてしまった。

「馬鹿な……馬鹿なことを！　妙法先生が死ぬなどと……」

そうこうするうちに、渡殿わたのどののほうから複数の足音があわただしく聞こえ、前に季満たちをもてなした舎人とねりが庇かばに入ってくる。

血溜まりの中にうずくまる大男を一瞥いちめつするなり、

「ご、御前ごぜん、これはいかなる……」

そう言つて肝を消す。

「斎雄、サカムネの家宅は北辺きたのへだったかの」

泣きごと繰りごとを応酬する季満と長恭を措いて、まるで世間話でも振るように基経は問うた。斎雄と呼ばれた舎人は狼狽もあらわに、ようよう口を開く。

「サカ……高宗たかむねさまのことでしたら、さようでございます。たしか西洞院川にしのだういんがわの」

「よし、そちはこれからこれを担いで、サカムネを訪おとなえ。さだめし酔いつぶれて高いびきをかいておろうが、たたき起こして診みるように申しつけよ。この基経を診るがごとくに診よとな」

「は……いえ、それは構いませぬが、これは一体……」

いきなり呼びつけられて血の海を見、説明もなしに怪我人を担いで夜道を走れと言われた斎雄の困惑は、甚だしいものがある。

「もうダメや……なにしても無駄や、道説は」

「だまれっ！」

長恭の鋭い平手が飛ぶ。季満は横面を張られて床にまろぶ。尾筒丸の泣き声はいや増す。嘆に激に猖獗しやうけつをきわめる庇のしたで、基経だけが平常のこころを保って周囲から浮いていた。

「それ斎雄、急げ。道の中で死ぬれば、そうじゃのう、耳敏みとがわ川にでも捨てよ。西洞院川に流したらここへ戻ってくるゆえのう」

基経の冷たい声に、長恭の目が据すわった。ふらふらと道説の檀弓を拾い上げ、横倒しになったやなくいからおもむろに征矢ていやを引き抜く。

充血した眼が、ぴたりと基経の面に向けられた。

「太政大臣」

「なんじゃね」

その声音にも瞳にも、全まったき殺意が籠められているというのに、老人は怯えも咎めもしなかった。打てば響くように、静かな返事を返すのみである。

穴も空けよとばかりに凝視していたのもつかのま、ややあつて、青年はなにかを断念したように頭かしらを垂れた。

「……菅原道説に代わり、この藤原長恭ふじわらのながよしめが身命を以て、護法あい務めまする」

俯うつむせた頬には紅涙が伝っている。前に尾筒丸を諭さとした折のごとく、それは細く透き通った声であった。途端、部屋の隅すみっこで丸くなつて咽むせんでいた季満が顔をあげた。

「よっちゃん、あかん」

長恭は応えない。気負いも怖じ気もなく、彼は自然体で人形に向き合った。

尾筒丸がぴたりと泣きやんだ。高灯台の灯が揺らめき縮まる。長恭の華奢な背から、なにか黒い禍々しいものが放射されている。

（殺す、殺す、殺す！ ひとならぬものならなんでもいい、この身がどうなるうとも構わない。一度だけでいい、我が祈願感応あらせ給え、我が心願成就させ給え！）

青年の美貌は、正視に耐えぬ鬼相にすり替わっていた。ほそい手指で弓弦を引き、力なく征矢をつがえる。檀弓は元の持ち主の半分も撓まない。

「あかん！ 長恭、止めえ！」

「いづくにあらん、神よ仏よ魔羅よ。菅原道説に仇せし者に、この矢当たらしめ給え。天に坐せば霹靂もちて打たしめ給え、地獄に在れば業火もちて灼かしめ給え。長恭の喉からほとばしったのは、とうてい呪いの言葉とは思えぬ、朗々とした謡いのような声であった。」「しからずんば我打ち灼き給えかし！」

灯がかき消え、辺りの虫の音までが鳴りをひそめる。季満がとびかかる寸前で、青年は檀弓の塗弦を引き、征矢を射放った。弦は琴のごとく、音楽的な響きをともなつて切れた。

「この矢当たれっ！」

閃光と轟音が辺りをなぎ払った。

「別当、いい、矢を」

ぶるぶる震える手が、抱き抱えようとする吟師の腕を力なく振り払う。

常ならぬ気配に、たたらを踏んで対屋を飛び出した吟師は、母屋についたなりなんの説明も貰えずに、言師の介抱を命じられていた。別当はその背後に立って、手伝うでもなくその様子を傍観している。

「やい言師、こんな時間に手エ煩わせやがって、いってえ何事だこの有様ア」

せめて胸中の心配を気取られまいと、吟師は寝起きの不機嫌を装っている。

一瞥して命の危険を直感させるほどの重傷であった。右の手足はとんでもない方向を向き、露出した肌のそこかしこは、黒い痣と裂傷とで覆われている。最前から首が据わらないのは、ひよつとすると首の骨も折っているのかもしれない。

（言師、失敗したんだな）

「別当、必ず、必ず、為果せるゆえ、べつどう」

言師は言葉を詰まらせ、吟師の胸に真つ赤なものを吐き戻した。吟師のことを別当だと思っっているようだった。

哀れみがつる。

眼を背けたのは、服を染めた血塊を怖れた為ではない。すでに手当など及ぶべくもない容態なのは、素人目にも明らかであった。

（こんな状態の人間を、この男は黙って眺めていたのか）

別当は恬然と腕を組んでいる。言師に助勢したのか否かはわからなかったが、見た限りかすり傷ひとつ負った様子もないのが、吟師には無性に腹立たしい。

「おい、てめえ、薬のひとつも持ってきたらどうなんだ。なにぼさつと突っ立ってやがる」

いらえはない。その眼はじつと祭壇に釘付けになっている。もはや言師には一瞥もくれない。ややあって、祭壇を見据えたまま、

「吟師、もういい。こちらへ」

待ちくたびれたような声音で言った。

「もういい」のなにか「いい」のかに、一拍置いて見当をつける
と、

「てめえ、なにがもういいってんだ。動けなくなったから、もうこいつはお払い箱だってえのか。ひとの命をなんだと思っつてやがる
！」

憤然と食ってかかった。

別当はちよつと眼を見張った。はからずも意外なものを見た、と

いった面持ちである。

「無論、お払い箱になどするつもりはない。それとは別だ、いいから表へ出る、吟師」

なんとこんな状況下で、別当はうつすらと笑っているのである。

（こいつ……おれたちを使い捨ての道具だとも思っているのか！許せない、どうでも一発殴ってやらなければ気が済まない！）

吟師は別当について階を下りながら、骸首覚悟で拳を握りしめた。

「別当、屹度、約定は、果たされような。まこと、越前は遠いゆえ……ああ、かやこ……」

言師のかぼそい声が追いかけてきた。言師が自分の体を借りて殴るのだと、吟師は怒りを新たにした。

裸足のまま、二人は小体な庭に出た。別当は足早に前を歩く。

初春に小さな紅い花をつけていた椿が、濡れたような玉葉を茂らせている。対屋からは、その葉叢にうえに三日月が臨めたのだった。今は築地のうえにも屋根のうえにも、その姿は見いだせない。いつの間に雲が出たのだろうと、吟師はほんのいつとき怒りを忘れた。

「吟師、もう少し母屋から離れる」

（月なんかどうでもいい。はやくこいつを黙らせて、せめて言師を看取ってやろう……）

肩をまわしながら、椿の根元に立つ別当に近づく。彼我の距離が五歩まで近づいたとき、吟師は歩みを止めた。

別当の手に、白木の短刀が握られていたからである。

「てめえ……なんのつもりだ」

及び腰になるおのれを叱咤して、吟師は踏みとどまった。

（こいつ、まさかおれまで始末しようという腹では……）
今宵、呼師たちが急遽別口の命を受けたことに思い当たる。

（実力の伴わないと判断した法師を、間引くつもりか！）

「吟師、そこを退け、邪魔だ」

焦れたような声が飛んだ。　　どうやら突きかかってくる気配は

なさそうである。昼日中であつたなら、勘違いに赤面するのを見咎められたであらう。

短刀を頭上に掲げながら、別当はかつかつと叩齒を始めた。十二遍。どうやらなにかしかの術を行う腹積もりのようだ。

「なにをするつもりなんだ、おい」

ぶつきらばうに言ってから、我ながら照れ隠しのようだと、吟師は赤い顔をさらに篤くした。なにを言っても藪蛇になりそうなので、すくすくと別当の視界から退散する。

「甲上玉女、甲上玉女、我が身を護り来り、百鬼をして我を中傷せしむることなし。我を見るは以て束薪と為す」

ぶつぶつと述べたあと、別当は手に持った短刀で九字を切った。それが終わると、

「我はこれ、天帝の使者なり。執持しむる所の金刀は不祥を滅せしむ。この刀は凡常の刀にあらず、百練の鋼なり」

おもむろに短刀を振りかぶり、さきほど吟師が立っていた辺りに投げつける。

「急々如天帝太上老君律令」

はたして、地面に短刀の柄が生えた。なにも起こらない。

「いつてえなにを」

「吟師、姿勢を低く」

なんで、と問おうとした瞬間　世界が真っ白になった。音が消える。

音が戻って最初に聞こえてきたのは、おのれ自身の叫び声だった。そのときになって初めて、吟師は自分がずっとわあわあと声を囁らしていたことに気付く。

白一色だった世界が元の彩りを帯びるなり、吟師は叫ぶのをやめて絶句した。

別当の短刀の向こう、つい先程まで闇に横たわっていた母屋には、巨人の足跡のごとき大穴があいていた。つい先程まで吟師たちがいた祭壇の間は見事に炭化し、もはや祭壇も床も柱も見分けのつか

ぬほどである。

深更の大落雷に肝を消したのだろう、築地の向こうのそこかしこから、ひとの起き出す気配が感ぜられる。眼の端に数人、雑舎から水を張った鍋桶を携えた舎人が、押っ取り刀で駆けつけてくるのが見えた。

別当の舌打ちが聞こえる。

「……ひとの身で神鳴りを喚ぶとは、よほどの腕利きか無知か、やぶれかぶれか。あれ一人には荷が重かったようだな」

「言師……」

とうに雲は晴れたようで、白々とした月明かりが、屋根にあいた穴に落ち込み、ほんの寸刻前まで言師と呼ばれていたものの姿を、炭化した床のうえに明かしていた。もはや衣服と肌の境目も定かではなく、黒焦げになった表面のところどころに裂目がつき、赤ぐるい肉がその隙間から垣間見えている。

誰かを呼び止めるように手を伸ばしながら、言師は虫のようにこごまって死んでいた。

「吟師」

「……」

「吟師、雑舎を一軒あける。あれを放り込んでおけ」

「……あれって」

「あの死体だ」

吟師は応えずに立ち上がると、ひとでなしの白面に向かって殴りかかった。が、渾身の一撃は無造作に打ち払われ、お返しに三つも拳を頂戴してもとの地べたにのめった。

「今のは見なかったことにしておく。が、振る舞いには気をつけよ、吟師。わたしは今、すこぶる虫の居所が悪い」

「……ひとでなし。弔いも、させてもらえねえのか」

そのとき向けられた別当の壮絶な笑顔は、吟師の胸の裏に焼印を押しつけるように、決して忘れ得ぬものとして残った。

「ひとでなし！ひとでなしか。そう言うおのれは何様のつもり

だ。おのが立身の為に呪殺の片棒をかつぐ、そのお前がひとの倫理を云々言うとは！」

「……………」

「……………吟師、お前は間違ったことを言っただけではない」別当は夢から醒めたように、笑顔を吹き消した。「わたしはひとでなしよ。あれなる言師も、お前もだ。ひとたらんとするなら、ここから去れ。人外を討たんと欲すれば、ひとはひと以外の何者かにならねばならぬのだから」

落雷の小さな残り火が、炭になった母屋の端々をちろちろと舐めている。駆けつけた舎人たちがおおわらわで消火に追われるのを、吟師は尻餅をついたままぼんやりと眺めていた。

ひとでなし 自らの投げつけた罵声は、誰に向けたものであったのかと、吟師は去りゆく別当の背中を打ち眺めながら思った。

The wailer I

仁和三年 四月朔 甲辰 巳一刻

塩を焼く蒸気が、曇天をめざして煙っている。籬の島は恒例の熱気につつまれている。

「しばらく会わなかった。息災であったか」

背を向けた浅黄いろの直衣が、振り返らずにそう言った。襟と烏帽子のあいだの項に白いものが目立つのは、年相応と言わざるをえないのだから、背は旗竿を入れたようにすっと伸びている。

二人の佇む、島の中ほどに設えられた四阿は、古代を装ってか朽葉色の褪せた意匠に仕上げられていた。藻塩焼を見るともなしに眺めるこの老人の趣味で、見渡せるかぎりの家屋はみな一様に、この河原院には貴族の屋にしかるべき華やかなものは見受けられない。

（いくつにおなりだろう、このお人は）

「……あのほうで忙しいのか。お前の働きには期待しているが、体はいとわねばならぬ。ん？」

返事のないのに気が差したのか、直衣はそう言いながらようよう、首だけで振り返った。老いにそぐわぬ、その高くすつきりと整った鼻の向こうに、衣を汗みずくにした男たちが数人、鹹水を塩竈で煮詰めているのが見える。

二人にとつての共通の原風景。まがいでこそあれ、それは懐かしい陸奥の眺望であった。

「上衣は、やはり着けぬがよろしいかと、わたしは思いまする。

……御前はいかに」

竈に鹹水を足し、かたがた這いつくばって火加減を見、バツタのように烏帽子を上下させる男たちは、みな一樣に神事の折の白衣のごとき単衣物を身につけている。大変な重労働で、上には何も着ないのが本来のだが、老人は「品下がる」と言って着衣にこだわる

のであった。

老人は黙ったまま、薄くただよって来る湯気を檜扇ひいあひではたばたと煽あおっている。

「……御前、折を見て、母の墓参りに来て頂けませぬでしょうか。会つたたびにそのように言うのも、これで幾度目か覚えていない。そして返事はいつも決まっているのだ。」

「左大臣さだいじんの重職にあるものが、みだりに陸奥のごとき遠方に赴くわけには参らぬ。按察使あせちであつたかつての頃とは違ふのだ、母御ははごも解とつてくれよう」

体のいい言い訳であつた。そして言い訳であると感じるようになったおのれが、たまらなく悲しい。

「御前、厚かましきお願いがござりまする。お聞き届け下さりませようや」

「……申してみよ」

いつもならこれで引き下がるのが、意外にも食い下がってきた為に、老人の声はにわかに警戒のいろを帯びた。

「母の、母の形見がございませう。墓参りが叶わぬのであれば……どのように小さくとも構いませぬ、せめて御手ずからあれを祭り、以て母の追善として頂ければ、母もどれほど」

「あれはの、盗まれてしまった」

「盗、まれた……いつの、いつのことで」

「さよう、ひと月も経とうか」老人の声は常と変わらない。昨夜の献立を聞かせるような口ぶりである。「わたしにとつても大事なものだ、ここに置いておいては物盗りに遭うやもと、嵯峨野さかのみのほうへ移しておいたのだが、それが裏目に出たの。まことに残念なことだが」

「……………」

呆然としているあいだに、老人は大儀そうに立ち上がった。

「わたしの不注意だ。相あいすまぬことだが、これに気を落とさず、いつそうに励んでおくれ。ことの成つたあかつきには、そのときは

もちろんお前と二人で、母御の待つ陸奥へ出かけていこうではないか。供養も盛大にやっつてやるう。のう」

「……お佑けします、御前。なおいっそう、お佑けしますゆえ、御前」

「うん、うん、期待しているぞ」と言うと、老人は指貫をするすると鳴らして退出していった。

鈍色の雲空がごろごろと唸った。男たちは変わらず、藻塩焼に精を出している。

ひとりで見るとその景色が、みるみるうちに歪み、曇っていった。色のない懐かしさであった。思えばかたわらに誰かがいた記憶など、両の手指にすら欠いた。細波に舫う小舟の中で、怒濤に洗われる切岸の上で、まさに今日のような、泣き出さんばかりの曇天の下で、彼は膝をかかえて瞬きを忘れた。

おのれの孤独を癒さんがために。浦津の苦屋のひとつに至るまで漏らさず、脳裏に焼き付いたその記憶が　なんとという皮肉、その記憶が、孤独を想起する呼び水になろうとは！

塩を焼く蒸気が、曇天をめざして煙っている。籬の島は恒例の熱気につつまれている。

「……御前、それにしても、この景色はまこと、塩竈津を思い起こしまするな。かたわらに、母のいないのが、なにやら不思議でなりませぬ。なあ、御前。　父上」

薄縁に涙を落とす青年に、男たちが気付くことはなかった。

四月二日　乙巳　辰四刻

「道説、お前は基経の犬か」

「道説は……だれの犬でもありません」

「魚腸剣は上が為の剣、皇なる万世一系の甲、金枝玉葉を覆う楯。魚腸剣を執るお前が、君側の奸臣が為にはたらくことなどあっては

ならぬ。道説　「

「わが剣は……田夫野人の剣……わが剣は」

「道説、お前は基経の犬か」

うつすらと開いた眼に、注ぐように寝汗が流れ込んだ。汗と涙で歪んだ世界は、しかし明るかった。

「道説どの、悪しき夢、でしたな」

顔の上から、低い、玲瓏たる声が落ちてきた。見てきたかのよう
な、確信めいた声である。

「ようよう辰四つになりましたようかなあ、外はよいお天気でございますよ」

始めこそ戸惑いを隠せなかったものだが、たおやかな女の声に起こされるのも、このごろはなんとはいない心地よさすら感じるようになって
いる。おのれの自堕落を責めてみるのも、はや飽いた。

（夢に定省さまが現れたか……おれは、気にしているのだろうか）

「……和妙どの、水を頂きたい」

目をこするついでに、そのまま脂じみた顔を袖でぬぐう。ややあって耳の端に、腕に当たって跳ねるこまかい水の音が聞こえてきた。湿った夜具に左手を差し込んで傷を探るのも、起伏しに際しての新しい習慣のようになってしまった。いい加減に撫でなれた下腹の
一カ所は、皮膚がよじれ、抉れたようになっていた。感覚もそこだけは余所より敏感で、まだなんとも頼りのない、まさに薄皮一枚と
いった感触である。治りつつあるようでも、本復にはいま少し時間
がかかりそうだ。

（傷も、良くなってきてはいる。懸念ごとが夢に出てきたのは、
あるいは肉体の心配が薄れたからなのか……）

太政大臣藤原基経の屋敷において、菅原道説が致命の返矢に倒れ
てより、ひと月ほどが経っていた。

ひところは非常に重篤だったようで、担ぎ込まれた先の主に難色
を示されたのを、道説は朦朧とする意識のなかで聞いている。助か
るまいと諦めた命を救ったのは、

「道説どの、お水を」

と言つて杯を差し出した、この女であつた。

基経の紹介にかかる医師、葛城高宗の妹で、自らを称して和妙という。本名を名乗らぬのは、なんでも葛城の家から放逐された身であるからなのだそうな。

和妙とは、神御衣の料たる絹を指している言葉である。かつてなにかの神職にあつたものか、あるいは今もあるのか、身にまとう衣はいかにも幣神の似合いそうな、その名にふさわしい絹の白衣白袴であつた。

どのような理由あつてのことか、その面はほとんどが布面で覆われている。面妖ではあつたが、そこからのぞく両の眼は優しい。

道説は杯を受けとると、せめてはしたなしと思われぬよう、渴きを気取られぬようにゆっくりと口に運んだ。体裁ぶつた大男の挙作に、和妙が親しみを含んだ忍び笑いを漏らす。

「道説どの、のどが渴いておりましよう。ぐつとゆかれませ、ぐつと」

「……いや、そうは申されましてもの」

「なにをご遠慮なされたものやら」と、和妙は娘のような笑い声をあげた。「道説どのの『すべて』をこの眼に映したわたくしに向かつて、いまさら繕うべきどのような体裁が残っておりますな」

「……………！」

「このうえはわたくしを母とも姉とも思いなして、お寛ぎなされませ。ここは貴方さまが家宅にござりませぬか、さあさあ」

道説の彫りのふかい顔が、真つ赤を通り越して赤黒くなった。手にした杯がぱきつと割れる。

（幾度思い返しても……痛恨！ この妙齡の女性を前に、よりにもよつて素っ裸で大の字になつていたなど……！）

治療の為だつたとはいえ、考えるだに総身が発火炎上せんばかりである。無論、命あつての物種であるからして、恨む気持ちなどさらさらないのであるが。

（助かる為には、そう、助かる為には、見られなければならなかったのだ。うむ、そうだと、よいではないか道説、減るものでもなしに……）

「しかしまあ、眼福でござりましたな。なんとご立派なものを

「和妙どのっ！」

「ほうら道説どの、激してはお傷の治りに障りますぞ。ほほほ声をひっくり返してわめく道説を、和妙はまったく慈母の笑みで宥めた。道説よりも確実に歳下であるはずなのだが、ここ数日のあいだ、大男はこの布面の女に翻弄されっぱなしであった。

なお始末に負えないことに 道説自身はどうやら、そのことがそれほど嫌ではないらしいのだ。

「ほ、庖丁！ これ、客に給仕をさせるやつがおるか！ どこで怠けておる、出てこい！」

屋敷が震えるほどの大声で、道説は下僕を呼ばわった。単なる照れ隠しの八つ当たりである。

「庖丁どの是最前から、道説どのの御膳を誂えておりますよ。前にご自分でお命じになったのではありませぬか」

「う……」

「それと、わたくしは道説どのを診るために、この屋に間借りさせて頂いているだけで、客ではござりませぬ。ここへ上がらせて頂いた折、説明もうしあげましたな？」

「……………」

道説、返す言葉もない。和妙は相変わらずにこにこしながら、声も高らかに、

「さように大きな声を出されては、治るものも治りませぬ。大臣に兄に任された御身を万が一にも損のうたら、以後わたくしは外へゆくにも顔を隠してせねばなりませんので。道説どのはこの和妙を京の物笑いになさるおつもりか？」

「……………顔は今でも隠

「おつもりか？」

「いえ……」

「道説どの」

「はっ」

布面からのぞく眼が、三日月形に撓たわんでいる。和妙は膝でいざつてちよつと移動すると、「御膳ごぜんが参りましたよ」と、含み笑いながら言った。

折敷おしきを捧げ持った下僕が、ちよつと部屋に入ってくるところだった。

「おお庖丁、今日の馳走ちそうはなんだ」

下僕の顔をひとめ見るなり、さきほど怒鳴りつけたこともころりと忘れて、道説は厳いかつい顔に喜色をみなぎらせた。

和妙の診立みたてで目下、床とこに釘付けになっている道説にとって、一日の中の楽しみといえは食事の時間くらいであった。最近彼は「庖丁」と呼ぶこの下僕が、朝な夕なに膳を仕立てているので、このごろでは顔を見るだけで反射的に涎よだれが出てくる。

「雉きじですな。まあおいしそつだこと」

猫背ぎみの下僕は、おどおどとずれる烏帽子を押さえながら、「雉なまの膾かにございます」と呟つぶいた。

鮎あつものの羹ご、昆布ひじめと大根の汁、落ふきを刻んだ未醬みそめえ壺ひ、柑子かんじ、汁粥かゆは鯉節こいせつの汁で煮て、少しだけ蒜ひるを入れた。下僕は折敷のうえの椀わん、盤ばんなどを順々に示しながら、ぽつぽつと説明を入れる。

「ほんに、こちらの庖丁どのは料理がお上手。おつらやましいことですか……」

下僕のこしらえた膳ぜんを見るたび、和妙は毎度まいど感に堪たえないといった口で褒めるのだった。彼女は葛城の家を出ているということなので、あまり旨いものを食べる機会がないのかもしれない。

「うつむ、お前はなにをやらせても今ひとつ足らんが……こちらの方は抜群だの。どれ」

さつそく箸を取り、膾かの一切れを口に入れてみる。

「うむ……」

旨い。隠し味の梅の香が鼻をくすぐった。この下僕の料理だけは、終日ほとんど動かない身でも実に美味に感ぜられるのだ。

「うむ……うむ……」

無心に膳をむさぼる道説を見て、和妙は指を啜えんばかりにして「おいしそうですなあ……」と呟く。もつとも、下僕はたいてい和妙の膳もともに用意していることがほとんどなので、雉の膾のご相伴にあずかれることを、彼女は疑っていない。まさか女の身で「はらがへったからおれのもたのむ」などと口が裂けても言えないので、ちよつと鈍い下僕が気を利かせるのを待っているだけであった。「それにしても……豪華だの。ま、座れ」ふと箸を止めた道説が、中腰のまま畏まつていた下僕にそう言った。「今日のこれは、どちらさまからだ」

「あ、はい、ええと、橘さまでございます」

「……広相さまか？」

「ええと、そうですございます、多分」

道説はいちど鼻で溜息をつくくと、箸を止めて枕元に視線を転じた。年季の入った長方形の枕のそばに、白木の三方が置かれている。

そのうえに穴が空き、ごわごわに赤茶けた文が六通、丁寧にたたまれて鎮座していた。和妙いわく、その文こそが道説の命を救ったのだという。

「道説どの、お気になさらず、好意は素直にお受けなされませ」道説の考えていることに見当をつけたものか、和妙がそう言って勧めた。「滋養のつく食べ物召し上がって、つつがなくご本復することこそが、珠子どのに対するなよりの御礼となりましょう」

「……以前にも、同じようなことを言われた気がいたします」

「そうですございましょうと。道説どのはお堅つございますからなあ。それにしても、おいしそうですなあ」

和妙はちろちろと下僕の顔を窺っている。彼は一向に気付く気配はない。

のちに和妙から聞いた話では、道説が葛城邸において施術を受け、絶対安静を命じられていた折、橘家の訪ないが幾度となくあつたらしい。道説も一度、寝耳に遠く珠子のものとおぼしき金切り声を聞いたような覚えがある。

『道説さんの凶報を耳にしてより、食も喉を通らず寝るもならず、もしかしたらと悪いほうへ考えるたびに気を失うこと十度に余り、涙川に泳ぎ疲れてはや二貫目も痩せてしまいました。このうえは神仏だけが頼りと、櫛笥をうち捨て鏡を覆し、髪ふりみだして朝夕に数珠を繰り、ために糸の切れること三度を数え、韋編三絶ならぬ数珠系のみたび絶つとはなどと、父をして驚倒せしめるありさまにて

いま現在は厳しく禁足を食っているようで、毎日のように手紙の来襲があるのみであったが、それに付随して高価な食べ物や金品を使いを持たせて来るのにはさすがに閉口した。代理を立てて「お心遣い構えて無用」の旨、先方には伝えてあるのだが、結果は金品が薬に代わっただけである。

「ありがたきことだが、できうる限り遠慮するのだぞ。まさかに催促などいたしておるまいな」

下僕はちよつと考えたのち、「はい、遠慮いたします」と答えた。

道説は眉根を揉んだ。

(これも今少し頭が回ればよいのだが……)

当初は「贈り物はすべてお断り願え」と厳命していたのだ。がこの下僕という男は、わざとやっているのか忘れていいのか、先方がよしなにと手渡すものをあれこれ構わず貰ってしまう。ひどいときには貰ったことすら忘れる始末である。二度三度と雷を落としてみても、行いが改まることはなかったので、道説はこの頃ではすっかり諦めている。

ほかのものに対応させようにも、この下僕のほかの使用人といえ、耳の遠い老いた連れ合いが雑舎に住まっているのみ。少々あたまが足らなくとも、身体健康で真面目なこの下僕を頼みにするより

ほかはなかったのである。

(雇い入れたわけではなし、誰かの紹介あつてのことでもなし。

こんなものなのかの……)

下僕は使用人というより、居候いこうに近かつた。年の初めに泥だらけでこの辺りをうるうるしているのを老僕らうぼくが見つけ、行くところもな
いと言つのでなんとなく置いてみた、というのがことの全てである。
まだ廿足じふぢうらずで、若い働いき者が来てくれたなどと喜んだのが、遠い
昔のこともうにも思える。

「……なにか忘れておることはないか？ このあいだのように夜
中になつて『そういえば土師はじどのがお見えになりました』では困る
ぞ」

土師季満はじのすえみつが帰つたあとにそれを言われたときは、さすがの道説も
堪忍袋かんにんぶくろの緒をねじ切つて床を蹴撥けはねたものだったが、その折は和妙
の制止によつてことなきを得ていた。

「……………ええと」

「そうですね。庖丁ばうていどのはなにかお忘れになつております。ふた
つあるはずがひとつしかない、といった類たぐいのことで」

和妙も口を挟んだ。道説にはなんのことを言っているのかさつぱ
り解らなかつたのだが。

「あ」

「おお、なんだ」

「そういえば、泰はたどのがお見えです。お見えでした」

「……………いい、わかつた。膳ぜんを下くだげろ」

大男はひとつ長太息ちやうたいそくすると、ふと思ひ立つてふたたび傷の具合を
探つた。

(立つて歩くくらいは差し支つかえあるまい)

和妙の了承りやうを得ぬまま、道説は床を退けてそろりと立ち上がった。
こころなし悄然しぜんと俯うつむいていた和妙が慌あわてて顔を上げる。

「あつ、道説どの、いけませぬ」

「いやいや、和妙どのよ」構かまわずいちど伸びをすると、道説は和

妙に向かつてひらひらと手を振ってみせた。「こう横になっているばかりでは、かえって体によるしくない。存外、支障はなさそうですし　これ、庖丁、着替えを持って参れ」

「ご自愛なされませ、命に関わる傷ですぞつ」

和妙の細い眉がきつと逆立った。彼女は高眉を引いていなかった。「無論です。なに、無理はいたしませぬ。ひとと話すだけで

和妙どの、着替えますゆえ、ご退室願えませぬか」

そそくさと上衣の紵紐をほどこきながら、道説は早々に和妙を追い出しにかかった。庖丁が彼にしては機敏な動きで、狩衣の入った乱篭を丸ごと抱えて来る。

和妙はしばらく座ったまま眼を瞑っていたが、ややあつて「わかりました」と高い声で宣った。

「仕様がありません。道説どのの申しようも一理ありますからな、今日は許可いたします。さ、お心おきなくお着替えなされませ」

「いや、見られておつてはその……」

「なにをご遠慮なされたものやら。道説どののアレを」

「和妙どのつ！　なぶるのも大概に」

「ま、これは正当な医療の一環でござりますよ」心外そうに言う和妙の瞳は、しかし好奇心に爛々と輝いている。「ちょうどよい機会ですのでお裸、いえお傷を改めさせて頂きましょう。さあさあ」

「……………！」

そうと言われては返す言葉もない。庖丁を手伝わせて、道説は仕方なしにのろのろと着替えを始めた。

（この女子には敵わぬ……高宗さまと代わってくれぬものだろうか……………）

せまい別棟の間から、賑わしい話し声が聞こえる。

（佑だけではないのか。季満も一緒か）

庖丁はちゃんともてなしたのだらうかと、不安げに中を覗き込む。はたして、思いもかけない人物と眼が合った。

「おお、菅家判官！ 起きてもよいのか」

「あ、吾妻！ 貴様もおつたのか！」

驚く道説に、隣の泰佑が笑顔で会釈する。櫃が二つと、几帳がわりの衣架がひとつあるだけの殺風景な板の間に、囲炉裏をあいだにして二人の人間が座っていた。

「や、佑、よう来てくれた」

「おつたのかとはご挨拶だな、いつもの若いやつに訪ないは入れたぞ」

吾妻と呼ばれた男、茨田重行が機嫌を損ねたふりをしてみせた。

（こやつめ……こたびは二段構えで忘れおつたか）

無言で背後の下僕を睨まえる。下僕は塩を振りかけた蛞蝓のように小さくなった。

「お久しぶりです、道説どの。ひところは非常な重態とお聞きしましたが、歩き回っても障りはないのですか」

佑の言葉は挨拶のやりなおしというより、縮こまる下僕に助け船を出すようなころあいで飛んできた。

「なに、もうかなりよくなつての。床に伏せてばかりでは体が腐つて

あ、こら吾妻、貴様それは酒ではないか」

「おお、いかにも」

重行の手には瓶子の首が握られている。杯もなしに直接くちに運んでいる様子である。

「なにがいかにもだ慮外者め、どこから持ち出した。いや、それ以前に貴様、ひよつとして勤務中ではないのか」

見れば重行の背後には、衛府でよく使われる重藤の弓が投げ出されている。道説の言葉を肯定するような機で、屋敷の外から馬の嘶きが聞こえた。

従六位下茨田重行の官職は、道説と同じ左衛門少尉。つまり、彼

は道説の同僚であった。

「貴公な……わしが持ってきたものだとは思わぬのか」

「誰が思うか。おのれの胃を瓶子と勘違いしておるような輩だ」

なんだか一年も会っていないような気がして、同僚を冗談半分になじりながらも頬ほおがにやけてくるのを感じる。久方ひさかたぶりに自由に動かせる五体の開放感と相まって、道説はいまこそ本復したかのような錯覚すら覚えた。

「つれないなあ、ま、座れ。なに、いつものことだな、うちあのかみさんがなかなか呑ませてくれぬ」

（また『吾妻』が始まったわい。相も変わらず尻に敷かれておるようだ）

道説は苦笑を隠さなかった。彼のあだ名『吾妻』は言うまでもなく、その口癖くちくせに由来いひゆいしている。

「ま、それはそうとしてだ。今日たまたま見舞いに貴公を訪のうたら、これな法師ほっしどのに行き会あうてな、話すところによれば土産に酒を持参したということだが、道説どの中には毒やもと言うて要は佑の見舞いを食らっていたということである。」

「な、なんと呆れ果てたるやつよ……」

つい今ほどまでの懐かしさうれしさは、たちまち鳴りをひそめてしまった。同僚の素行そこうもさることながら、自分宛あてに持参された酒を横取りされたのがなんとも癪しゃくである。静かに席についた道説の顔は、邪鬼じやくを威嚇する仁王のごとくに変貌していた。

「あ、道説どの、重行どのの言われることはまことです。つてきてしまつてから、いくらなんでも怪我人に酒はなかるうと愧はじていたところです。わたしが頼んで呑んで頂きました」

「う、佑、そなたという男は……」

「ううむ、わしからこのようなことを言うのもなんだが……懐が深いなあ、そこもとは。うちのかみさんに爪の垢せんを煎じて飲ませてやりたいわい」

重行が水を向けたのはほぼ確実と思われたが、ここは佑に免じて許してやることにした。

（それにしても……この佑のように気の利く使用人が、そのあたりに歩いてはおらぬだろうか）

庇で縮こまったままの下僕をちろりと見て、道説は溜息をついた。「……で、見舞いに来たのなら吾妻、見舞いの品も持ってきていような」

どうせ手ぶらだろうと、道説は高をくくって言った。無論、期待もしていない。むしろ持ってこられるほうが恐縮であるし、正直、この同僚が顔を見せに来てくれただけでも、実を言えば嬉しかった。「ん？ おお、あるとも。うちのかみさんが持って行けと尻を叩くのでな、持ってきたぞ」

「おいおい、本当にあるとは……」
重行は瓶子を下ろすと懐を探り、麻の袋を掴みだして道説に示した。じゃらりと金の音がする。

「銀だ、費えの足しにしてくれ。貴公も小禄の身で、養生もままならぬのであるうが」

医療費食費はすべて太政大臣持ちで、毎日のように珍味が届けられ、あまつさえ妙齡の女が四六時中看護に付き添ってくれているなどと言ったら、小禄はお互い様であるこの男は、

(どのような顔をするであろう……いや、言うまい)

道説はわざとらしく空咳などしながら、ありがたく銀の袋を押し頂いた。

「済まぬ、恩に着る。奥方によしなに言うておいてくれ」

「なに、いらざること。ときに貴公、その傷、噂によると太政大臣を庇うて受けたものだとか」

ひやりとした。顔に出なかつたかどうか、自信はなかつた。

「誰に聞いた。さような話を」

「誰と言つてもな……」

重行は言葉を濁すと、話をうながすように佑のほうを向いた。

「強いて言わば、皆です。そうですね……三月の中旬頃には、少なくとも陰陽寮ではすでに珍しくない話になっておりました。鬼退治の衛門尉が、大臣の命を狙う外法師と刺し違えて重傷を負った、などと……道説どの？」

大男の面がみるみるうちに苦り切つてゆく。佑の言葉は段々と尻すばみになつていった。

（この件を漏らすものがいるとすれば……長恭ながよしどのであろうな。さだめしおれが為になろうとの計はからいであらうが……）

はつきり言つて迷惑きわまりない。ましてこの一件は、そのあたりの不良公卿ふりよつぐきみが痴情ちじやうのもつれで呪われるなどといった話とは次元が違つ。その性質上、特に秘すべきであることは明々白白めいめいはくはくであるのに、手柄話てがらばなしにすり替へてしまふとは何事なにごとであらう。

（よし、こたびばかりは、がつんと言つてやらねばなるまいな。思えばおれもちと甘すぎた。そうとも、じき自由になつたあかつきには、位階いがいの差を乗り越えてびしばしものを言つてやるう）

「で、まことなのか、菅家判官」

「……おお、なにがだ」

「なにがだではないわ。怖ろしい力才ちからさいしおつて、子供が見たら泣くぞ。噂はまことかと聞いておるのだ」

「うむ、まあ、あまり人に話して貰もろうては困るが、そつだ」

道説はしぶしぶ認めた。

「困るもなにも、知らぬものなどおらぬわい。それ、あの因業爺いんごうじいも口を極めて褒めちぎつとつたぞ。『さすがは我が眼かに適あつた漢かんよ！ 若き頃を思い出すのう』とかなんとか」

重行の言つ『因業爺いんごうじい』とは、文室ぶんむろ巻雄まきおのことであらうと察さつせられた。

そもそも重行は『魚腸』の前身である『剣ノ妙法』を道説とともに興おこした、というよりは『なんとなく始めた』ひとりであつた。が、じきに入つてきた藤原長恭ふじわらのながよしが、大して使えもしないのに居丈高いたけたかに次席を主張し始め、さらに巻雄まきおが足しげく辞儀松じぎまつに通つてやいやい言うようになつてからは、

「やかましくてかなわん、勝手にやつてくれ。わしはいち抜けた」
ある日を境かきにすつぱりとやめてしまった。爾来こゝろ、彼は巻雄や長恭を疎そつんじ侮あるようになつてゐる。

「あの蘭夕郎も一緒だったらいいな。ま、あれは一足先に本復したと聞いたが」

「ん、本復？ なにかあったのか」

「さてなあ、何分、どうでもいいことだな。直接本人に聞いたがよからう」

さて、と重行は投げ出してあつた藤弓を掴むと、瓶子の残りを忙しげにあおつて立ち上がった。空のそれを囲炉裏の縁に置いて、

「察するとおり、勤務中だ。ひとり欠けておるうえに、この頃は妙な命令が下つておつてな、忙しきことこのうえない。もそつとゆつくりしたいところだが、これにて失礼する。道説」

いそいそと身だしなみを整えながら、重行は改まつた声をかけた。

「なんだ、重行」

「干柿が貴公をご指名だ。なにかの盗難事件と聞いたが、傷が癒えたのなら、近いうちに行つて聞いてみるといい。ではな、菅家判官。次はうちのかみさんも連れてくるぞ」

階の前でいちど弓を引き、かんと鳴らすと、重行は足早に出て行つてしまった。

「……お仕事ですか。干柿、とは」

「うむ、左衛門佐さまのことだな。いや、ばたばたして済まぬ。久方ぶりだというのに話もできぬで、あれが来ておるとは夢にも思わなんだ。見舞うてくれてかたじけない」

鞍上の重行が辻を曲がるのを見届けたのち、改めて道説は礼を述べた。

「仲がよさそうでしたな。重行どのと申されましたか、面白いひとだ」

「……年から年中、妻の尻に敷かれておる男でな」重行の消えていった辻を、道説は眩しげに眺めている。「いつであつたか、どこぞの公卿どのに手ひどく擲掬されたことがあつたが、『そこもとが尻軽妻どもはいざ知らず、吾妻が尻の敷かれ心地はまた格別ゆえ』などとやり返しておつたな。面白き男よ」

「ひよっとして気を遣わせてしまったでしょうか。日を改めたほうが良かったやもしれません」

「いや、重ねてよう来てくれた。おおそうだ、これ庖丁、丁度よい、お前が料理の腕を見て貰おうではないか。前の献立まねでよい、すぐに支度いたせ」

いきなり声をかけられた下僕は、あたまに染み渡るのに数秒かかるのかすぐには動かず、道説のほうを見て黙然もくねんと突っ立っている。

「いえ、わたしはいいのですが 道説どの。唐突ですが、これから出かけられますか？」

「ん、おお、特に予定はない。ヒマでな」

ふと、和妙の布面顔が脳裏をよぎる。彼女には内緒で行こう、と道説は思った。

「で、どこへだ。あまり遠くへは行けぬが」

佑の細い眉が、ふと憂うれわしげに翳かげった。

「季満の家へ、見舞いに。あいつ、もう十日ほど寝込んでいます。今日はそのお誘いうかがに伺いました」

The Wailer II

四月二日 乙巳 午二刻

(あれからわずかひと月、よくもここまで回復したものだ)
言師の呪詛がそれほど強力でなかったのか、あるいは土師季満にこちらが思っている以上の力があつたのか、いずれにせよ、結果的に言師の死んだのは無念極まることだつたが、

(季満が、このひとが死ぬような結果にならなくてよかつた)
心の底から、泰佑はそう思った。

「うむ、こうして歩いておつても、痛くもかゆくもない。和
妙どのも大袈裟に過ぎる、これなら今すぐにも吾妻の助勢にゆけ
そうではないか」

菅原道説がそう言つて鼻を鳴らした。屋敷を発つてよりすでに、
「和妙どのは大袈裟」発言は五回目を数えていた。

「重行どのが仰天されますよ、ご自愛ください」
久しぶりに外へ出たのがよほど嬉しいのか、道説はなんとなしに
はしゃいでいるように見受けられた。早足に歩く二人にやや遅れて、
葛の負櫃と平包とを携えた下僕が、ふうふう言いながら追いつがっ
てくる。

まるで昨日今日に上洛したおのぼりさんのごとくに、大男は朱雀
大路をそぞろに歩き、脇見をしながらさかんに話しかけてきた。路
の脇に繫いであつた牛馬に激突しそうになつたり、牛車の不慮の落
とし物を踏んづけそうになつたりするたびに、佑は親切の押し売り
にならない程度に加減しながら、彼の袖を引いてやらねばならな
かつた。

朱雀大路を下る、二人の影は短い。正刻が近い。

夏のかかりであるこのごろは、日毎に肌寒かつたり蒸し暑かつた
りと天気の場合も一定でないのだが、今日は天照大神のご機嫌も麗

しいようで、珍しいことに穏やかな南風が吹いてさえいる。

「佑、季満はよくないのか」

ふと、道説は夢から醒めたように静かになった。自分がこれからなんの用事でどこにゆくのかを思い出したのだろう。

「さて……医者ではないのでなんと　わたしにはただの咳疫せきいのように見受けられましたが」

「うむ……それにしても、十日間もか。金ならたんまり貰うておるはずだから、薬を買いにひとを走らせるなりしてもよいものだが」

「……彼には身寄りがいませんから」

心配そうにしている道説から視線を切ると、曖昧あいまいにそう言つて、佑は向かい風のなかで眼を瞬しばたかせた。ふと、遠回しに非難されたのだろうかと邪推じゃすいするも、

（ばかなことを……このひとはそんな陰湿いんじつじゃない）

思い直した。道説は背後の下僕をちろりと振り返つて舌打ちをし

藤原基経ふじわらのもとつね呪殺じゆくを阻止した者の名前は、事件後ほどなく明らかとなつていた。

誰が調べたわけでもない。ほかならぬ太政大臣たいていだいじんそのひとが、彼らの働きを称揚しょうりやうし、人づてに吹聴ふいしやうして回つていたらしい。平素かいらき怪力乱心のたぐいに毫しほどの興味も示さなかつた大臣おんていの、掌てのひらを返したような変わりようは、彼の頑かたく々な性格を知悉ちしつしている者たちにとって、かえつて少なからぬ説得力を生んだようだ。彼ほどの者をしてそうまで言わしめるのなら是せか、ということである。

「いったい幾ら頂いたと言つておったかの……黄金十両きんじゅうりやうに絹十疋きんじゅうじちに、そうそう、吹玉ふきたまの小刀こがたななどという宝物たまたままで賜たまつたそうな。幾度か見舞みまひいに来た折、見せびらかしていきおつての。あやつめ」

さすがに太政大臣たいていだいじんの報礼ほうれいともなると桁が違ちがう。黄金十両きんじゅうりやうといえば、庶人しよじんの生活費せいかうひ数年分に相当する。季満は一夜にして、当分は寝て暮らせるだけの財産を手に入れたということになる。

「道説どのにはなかつたのですか？ 謝礼は」

「ん……勿論あつたとも。今もその栄に浴しておる」

「？」

「命を救つて頂いた。左衛門府へ無期限休職の旨、取りはからつて頂いたのも、そのうちに入るうな。このあいだ初めて聞いたのだが、なんでも左衛門佐さまと太政大臣は御兄弟であらせられるそう
だ。虎の威を借る狐のようで、心苦しき限りだがの」

そう言つと、道説は立ち止まって振り返り、「これ庖丁、急げ。平包をよこせ、おれが持つ」などと遅れている下僕に声をかけた。

（欲のないひとだ）

と、佑は他人事ながら慨嘆せざるをえない。

道説のように、ちゃんとした医者に傷病を診てもらえる人間といふのは、実はしごく少ない。庶人や下級官吏は大抵、その家々に伝わる調薬や施術で治療を試みるか、寺へ出かけて平癒を祈願してもらつか、二つにひとつであつた。無論、その効果のほども疑わしさが残る。

対して、道説の傷を扱めたのは典薬寮の侍医という話であつた。典薬寮とは内裏の貴人たちの傷病を診るための官衙であり、侍医は帝のための御薬を調ずるほどの、医道の達人である。

当然、それらの世話になる者のなかに、内裏への昇殿も許されないような下官の入る余地はない。その意味では、太政大臣の計らいは褒賞とも言えるだろうが、

（より高い官位を望めば叶うかもしれないのに……）

佑にはわがごとくのように口惜しく思えるのだった。

「案外けろりとして、飯でも食らうておるやもしれぬな」

「わたしが様子を見に行ったのは一昨昨日ですから……そうですね、庖丁どのの足労も無駄に終わるかも」

二人とも笑つてその話は終わつたが、道説が心にもないことを言っているのはよくわかつた。向こうも同じであろう。まともな医療を得られない庶人の病死は、その理由がただの咳病であつても珍し

いことではなかった。

「庖丁、なにをたらたら歩いておる、走れ走れ！ ええ負櫃おいびつもよこせ、まったくなんとのろまなやつよ」

（ああ、このひとは）

ふと、佑はおのれの思い違いに気付おめてき、面を赤くした。道説は急いでいたのだ。

ながあめ霖を吸った土と草のいきれは、彼女には物慣れない悪臭としか感ぜられなかった。

衣も髪もどろどろの水浸みずびたしだった。頭といわず肩といわず、総身を生暖かい雨が打ち続けている。どうどうという早瀬はやせの音に混じって、前方から下生したはえを踏み分ける、濡れたような足音が迫ってきた。

（ああ、またや、またや、またや！ やめえ、ミツキメ！）

身動きは取れなかった。はるか上から伸ばし降ろされた腕が、細い両肩をしつかりと縛しまめている。

食い込んだ大人の指から伝わる湿気しつけた体温が、彼女に無条件の安心を与えていた。彼女は今まで、自分より大きな人間には可愛がられたことしかなかったので、酷いことをされるかもしれないなどは露つゆも思っていなかった。

（もうたくさんや、やめえ、やめてえなミツキメ……）

足音が止まった。稲光いなびかりが真つ黒な巨人を葦原あしはらに浮かび上がらせた。目の前に立った人間の目鼻立ちは明らかでなかったが、彼女はそれに向かつて「ちちうえ、おきがえ」と呼びかけた。彼女は濡れた服が不満だった。

（やめえ、やめえ！ このひとでなし！ 自分の子オやるが、なんでこんなことすんにゃ！）

横からもつふたつ、別の腕が伸びてきて、彼女の左手を取って水平に伸ばした。これも常のことなのでされるがままであった。その掌の妙に熱いのが、気になるといえば気になるのだったが。

（捨てるくらいなら、殺すくらいなら、なんで作った！ 奴畜生ごちくしょう）

！ なんてお前らはいつともそんなに勝手なんやあ！

肩口あたりをトンと叩かれたような感触があつて、前にいた男が踏み出した音と、その持っていたなにかが勢いよく土に食い込む音と、彼女の左手を持った男が尻餅をつく音と いろんな音が一緒に聞こえたあとに、足の甲に熱い飛沫を感じた。

(殺すからな、絶対、おれは忘れへんから……)

今度は右手が同様に伸ばされた。右手を持つ男の掌はなお熱く、震えていた。足下に降り注ぐ赤い雨は、彼女の左の肩口から迸っていた。

もう一度「おきがえ」と言ってみたが、男は黙って手に持ったものを振り下ろしたただけだった。衣は乾きそうになかった。つま先の近くで通りがかりの蝸牛が一匹、赤い雨に打たれてのたうっていた。

(もうやめて……ミツキメ)

背中を強く蹴られて、彼女はとどろく河の激湍に身を躍らせた。

もがこうとしたのだが、それに応える両の腕はなかった。

水の中は苦しかった。

うつすらと開いた眼に、注ぐように寝汗が流れ込んだ。汗と涙で歪んだ世界は記憶のとおり、薄暗くてひんやりとしていた。

ひどい悪寒がする。眠りにつくたびに、むしろ悪化しているような気さえする。仰向いたまま涙をすすり上げたたん、季満は体を反らせて激しく咳いた。

(おれ、このまま死ぬんやるか)

尾筒丸を探して頭を横に倒すと、ちょうど目の前に死体いるの脚が飛び込んできた。

「……ミツキメ、まだえ。まだや」

水浸しの単衣の裾から広がった水たまりが、横臥する季満の体をすっかり囲んでしまっている。衣の背中も後頭部もぐっしりと濡れている。悪寒の原因はこれだったのかと、季満は肩を抱いてがたがた震えながら得心した。

膝をかかえるように脚をたたんで、ミヅキメは季満を見下ろしていた。いつもは堅く閉じられている瞼が片方だけ開いており、黒茶いろに濁った不気味な目がそこからのぞいている。シーシーと思案するような呻きを漏らしながら、童女は床に散らばった銭をつま先で弄んでいる。

(そうやった、尾筒丸はおらへんにやわ。おれひとりやった。

いや)

「ミヅキメも、いるもんなあ……」

思いがけなく弱々しい声が出た。我ながら、死にゆくひとが最後に出す声はかくもあろうかと感心するほどの声である。ミヅキメは両目を撓めてヒツヒと笑っている。

(いやや、まだ死ねん。まだ死にとうない)

耳の中に冷たい水が入ってきた。

「誰かあ、いやへんかあ、助けてえなあ。……誰かあ」

出てきた声は小さかったが、空きつ腹には靦面に響いた。たとえ家のすぐ外に誰かがいても、これでは聞こえまい。季満自身にも、助けを呼ぶ声というよりは、誰にともなく咳くただの愚痴にしか聞こえなかった。

(……お館さまんとこにいたら、こんなことにやらへんかったやろなあ)

突如、脛にするとい痛みを感じて、季満は反射的に右脚を蹴り出した。それから逃げるように、一匹の黒っぽいネズミが視界の端から現れる。そろそろ食べごろだと踏んだのであろうか。

「おれはまだ、死んでへんぞ。あっちいけ、こっちくん」

大きさは六、七寸ほど。艶のない毛並みはところどころ禿げ、その瘦けた面長の顔が卑屈っぽく、ひくひくと床の木目を嗅ぎ回っている。まさに「貧乏ネズミ」といった風情である。

貧乏ネズミはその場に二本脚で立ち上がると、小さな両手をすり合わせるようにして季満を拝みだした。

「まあそんなこと言わずに、もう何日も待ったんですぜ。貧乏腹

減りはお互い様、ちよつとは嚙らせてくれなきゃあ
「

とでも言っているかのようである。

「どっかいけ。くそ、おれは食べ物やらへんぞ。近づいたら掴まえて食べ　いったあ！」

今度は右脚と尻を嚙られた。水たまりの中で必死になって体を揺ると、前の貧乏ネズミの傍らにもう二匹、今ほど季満を嚙ったとおぼしきネズミが整列する。どうも仲間連れであつたらしい。

「お前……妻子持ちやつたんなあ」

ほんのつかのま、季満は痛みを忘れて面をほころばせた。新しい二匹は貧乏ネズミよりもいくらか小型であつたので、彼らは一見して家族のように見える。咳をすると、ネズミは一家なかよく後退つた。が、逃げる気配はない。一等ちいさいのが、前に親がやつたように立ち上がつて季満を拝んだ。

（なんやろ、今度は念仏でも唱えてるのんか）

と思つた途端、まつたく唐突に涙が溢れてきた。

もしいま自分が死んだら、この一家のほかに誰が念仏を唱えてくれるだろう。誰が死を惜しんで泣いてくれるだろう。このネズミだつて、季満の肉に舌鼓を打つて鳴くかもしれないが、涙を流してはくれまい。

ネズミに情けをかけられる我が身の眞の孤独を思えば、涙はとめどなく溢れた。

「うう……くそ、どっかいけ！」床に散らばつていた銭を数枚つかんで、季満は一家に向かつて投げつけた。銭はあらぬ方向へ飛んでいった。「おれは死なへんぞ、念仏なんかやめえ……」

短い念仏が終わる。ネズミたちは肅々と季満の顔めがけて忍びよつてきた。

ミツキメがアーと欠伸のような声を漏らした。

「どうした、佑」

「……足駄がないんです。留守かな」

階かゝしの前で、佑は足を止めた。この一帯の荒れようが珍しいのか、下僕はここへ来る途中から、さかんに辺りをきよきよると眺め回している。

（それにしても……これほどに荒れた屋だったかの）

いやに重い負櫃を足下に下ろして、道説は唸うなった。どこが以前より荒れたかと言われれば断じようもないが、とりあえず屋全体がより西向きに傾いていることは遠目にも確認できた。端はしの欠けた階につづく上がり框かまちは腐って崩れ、その穴の中に蛞蝓なめくじりが数匹、新たな住居を吟味ぎんみするかのごとく思索しあかんげ気に這い回っている。

「佑、ちと」

しばらく破れ屋の様子を窺うかがっていた道説が、なにかを見咎みとがめて佑の肩を押しつけた。

「……草履の足跡だ」

ところどころ穴の空いた廊下に、土足の跡が見て取れた。複数のものとおぼしきそれは、そのまま廊下の奥へと続いている。

（物盗りか……!）

「道説どの」ひらりと簀子縁すのこえんに飛び上がると、佑は切迫せつぱくした声で大男を促つながした。「前に来たときはあんなものはなかった。なにかあったんです」

「応」と応えて、ひらりと簀子縁に飛び上がると、道説はもの見事に床板を踏み抜いてつんのめった。「ひらり」と飛ぶにしては、彼は重すぎた。

「た、佑。いい、先に行ってくれ」

「いえ、手を」

佑が戻って手を差し伸べかけた途端、廊下の奥から十匹あまりのネズミが一斉に飛び出してきた。どうも道説が床を蹴破けやぶった音に反応したらしい。

佑は息を呑んで、ネズミが這い出してきた曲がり角を見つめて凍りついている。

「……ネズミ」

「……ネズミだ」

道説は勢いよく廊下に飛び上がると、走りだす佑を追い抜いて季満の部屋へ殺到した。

（まさか……季満！）

The Wailer III

四月二日 乙巳 午三刻

「季満！」

飛び込んだ部屋は、そこかしこに穴が空いているというのに、異様なほど薄暗かった。空気も外気よりよほど涼しく、雨を疑うほどに湿気ている。

がらんとした室内の隅っこに、壁にすがりつくようにして横たわる土師季満の姿があった。

「季満、これ！」

「季満！」

抱き起こした季満の衣は、奇妙なことにびしょ濡れだった。嫌な臭いが鼻をつく。佑がくずおれるように道説の脇に膝をついた。

「季満、しっかりしろ、これ！」

なかば髪の中に埋もれた顔は、垢でまだらになっている。道説は構わずにその横面を引っぱたい。

「いった……なにすんにや……だれや……」

うつすらと目を開けると、季満は蚊の鳴くような声でそう呟いた。

道説と佑の安堵の吐息が重なった。

「……道説？」

「おお、おれだ、生きておったか」髪を梳きあげて、狩衣の袖で顔を拭つてやると、道説は無理に笑顔を浮かべて見せた。「……幾日か寝込んだと聞いてやってきたが、なに、具合は良さそうではないか」

「……おん前、ほんまもんの馬鹿力やな。今ので……ほんまに死ぬかと……」

ふいに横を向いて激しく咳き、咳ながら季満は子供のようになわわあと泣き出してしまった。

「おい、なんだなんだ、泣くやつがあるか。　これ庖丁、負櫃
を持ってこい」

言われると、下僕は存外機敏に部屋を出て行った。途中で何かを
踏み抜くばきばきという音が聞こえてくる。

「季満、なにがあった」

「た、佑……うう……やられたあ」

しゃくり上げながら、季満は二日前に物盗りに入られたと呟いた。
(そういえば……以前よりさらに殺風景になったような)

殺風景というよりも、その部屋にはもう本当になにもなかった。

ただ中央に囲炉裏が切られ、湿った灰が入っているだけである。以
前に来たときは鉄瓶が火にかかっていたし、部屋の隅に厨子がひと
つあったはず。

季満は身をよじって号泣している。

「では、大臣から頂いた金子も？」

「みんな盗られた……全部のうなったわい！」

「なんと……」

佑と道説はそろって絶句した。季満は一夜にして富裕になり、一
夜にしておけらとなったのであった。

「そ、そうだ、季満、尾筒丸は？　前に来たときはいたけど」

この状況でなんとか明るい声をひねり出した佑を、道説はひそか
に尊敬した。それはなんとも苦しげな、引き攣ったような声ではあ
ったのだが。

「尾筒丸は……尾筒丸ウ……」

道説の袖で涙をかむと、季満は支えつつかえ話しだした。

件の物盗りに入られた夜、尾筒丸は季満の容態を心配して、この
屋に泊まり込んでいたらしい。

「いつもは通って来てん……そやけど、よりによって一昨日は……」

深更の闖入者には、二人ともすぐに気が付いた。が、季満は折悪
しく高熱を発していたために、這い回って部屋の隅に逃れることし

かできず、十にも満たない尾筒丸にいたっては、ただその場に凍りついて震えていることしかできなかった。

あえなく、部屋の中の乏しい調度は火箸一本に至るまで洗いざらい運び出され、尾筒丸は棍棒で一撃されたあげく、絹の良い衣を着けていたせいで身ぐるみ剥がされてしまい、素っ裸で震えていたところに季満の病が伝染ってしまった。送ってやることもできず、おのれの水干の上衣を着せて、家に返るように言った。どうなったかわからないが心配である。季満はなおも泣きながら、このようなことを語った。

「病なおつたらなに食べよかゆうて……尾筒丸と毎日、相談してたのんに……なんや、お足どころか、おれ……衣もあらへんようになつたやないかあ！」

見れば確かに、季満の体をつつむのは小袴のほかには、薄汚れた単衣がひとつのみである。

「なんともはや……」

「うう、む……」

「あんまりやあー！」

季満は道説の腕の中でたうっている。

「まあ、でも、よかつたよ。命を取られなかっただけ、まだね」

「よかないわ、ここ蹴られたえ、ここ！」

季満は言いながら、腰のうしろのあたりを撫でさすった。貧しく薄汚れた態をしていたせいか、病身であったせいか、物盗りもさすがに季満を襲うことはしなかつたようである。

ふと顔を見交わせば、道説も佑もお互い似たような苦笑を浮かべていた。弱りきって身も世もなく泣いてはいるが、季満はいつも通りの季満であった。

「これ、季満や、安静にしておれ。佑、火を熾せないか」

季満の体は異様に冷たかった。気の毒なほどに痩せた肩が、道説の掌の下でふるぶると震えている。唇も真っ青で、顔色はまるで紙のようである。

「火、ですか。火と言つても……」 囲炉裏のほうをちよつと見るなり、佑は大男に向かつて眉を寄せてみせた。顔には「望みなし」と大書してある。「熾もきもありませんし、燧ひきりもありません。その、ついでに言えば、焚たき付けも薪も、あ、乾いた灰も」

「いい……わかった」

と、投げやりに言つたあと、ふと思ひ立つて、

「佑や、そのなんだ、お前の術まじなとか呪まじないとかで、こう、『ぼつ』

とか……できぬものかな。陰陽道おんやうどうにはないのかな、そういう便利なやつは」

なかば期待しながら、道説は提案してみた。が、佑の呆れ顔には前さきと同じように「望みなし」と大書してあつた。

「よく勘違いをなさる方もいますが……」と、佑は前置いた。「神や仏ではないのですから、そんなに都合よく火だの水だのを出したりはできません。空を飛んだり動物と話したりもできませんし、死んだひとを生き返らせたりもできませんので」

「……さ、さようか」

「悪しからず御料ごりょうけん簡かんください。ご期待に添えず、申し訳ないのですが」

そう言う佑の表情は、いつもの微笑からにわかには硬質のものへと変貌へんぼうしていた。彼の反応を見るに、こういった興味本位の質問はされ飽あいているようである。

「とすると……参つたの。こう濡れておつてはなあ」

抱き上げて引き寄せると、季満は力なく抵抗しながら「やめえ、さわんな、暑苦しい」と喚わめいた。

「暑苦しいが聞いてあきれるわい、冷え切つておるぞ。それにしても、雨が漏もっているわけでもなし、なぜかように床が濡れておるのだ。小便か？」

「どあほ！ なんぼ悪いかで、こんなところでようせんわ！ さわんなくつつくなあ！」

「ええ観念くげんせいこのちびめ、少しは病身であることを自覚しろ。

安静にしると言うただろうが」

「……本当だ、濡れてる」

いまさら気が付いたのか、佑が身を乗り出してきて、季満の横たわっているあたりの床に手をついた。もつとも、この屋の床はおしなべて湿気て黒ずんでいるので、少々水がこぼしてあってもほとんど目立たないのであるが。

ふいに、佑の眉根が寄った。ふやけた板床のあいだになにか挟まっている。

「これは……」

揉み合う二人に、佑は拾い上げたものを示して見せた。右手につままれた数枚の銭には「饒益神寶」と彫られていた。

「あ……それ、おれのや。返してえな」

ずいど手を差し出した季満の顔に、はや涙は見受けられない。その面にはかすかな動揺が刷かれていた。

「盗られなかったのか、これ」

「……懐に入れといたから」

「ひと世代まえの、これを？」

「本当だ。これではなにも買えぬぞ」

道説の合の手が入った。佑のただでさえ細い目が、糸のごとくになっっている。

佑の言う「ひと世代まえ」とは、すなわち「価値がない」ことを指していた。

饒益神寶は貞観元年、水尾帝の御世に鑄造された銅銭で、現在流通している「一文」、貞観永寶の十分の一の価値しかない。これは朝廷が貨幣改鑄に際してたびたび施行してきた「お約束」で、人々にはおしなべて悪法と認知されていた。

要するに、「新しい銭は古い銭より十倍の価値がありますよ」という法なのだが、たとえ朝廷の言い分とはいえ、まさか市場がそんな手前勝手に都合のいい話を呑むはずもないのである。単純な発想の転換によって、改鑄後にはたいがい旧銭の価値は急落した。貨幣

制度の流通を阻害する主だった要因のひとつである。

貨幣、分けても安価な銅貨は、その原価にくらべてずっと高い価値を付与することができる。ために朝廷は、久しい以前から増収を期待して錢貨の流通を奨励しているのだが、こんなことがあるたびに、錢の信用は墜落の一途を辿っていた。実のところ洛中であつてさえ、錢をなにかと交換できる「お力ネ」と見なす者は少なかつたりする。

「季満、これは呪いに使ったものか」佑の声は、質問というよりは確認の含みがあつた。あらぬ方を指し示して「あれが原因か？」言つて示したのは、なんの変哲もない部屋の角である。黒々と腐り、白っぽいかびが散見できるが、この部屋においては「変哲」の範疇には入りそうにない。

「……………」

「佑、あれとは？」

急に押し黙つておとなしくなつた季満を抱えなおすと、道説がそう言つて訝つた。彼の視線の先には痛んだ板壁しか映されてはいない。

佑の見透かすような視線を避けて、季満は大男の胸に顔を伏せた。

「季満、あれが原因なら」

「違う」と、なおも佑の顔は見ずに、季満は呟いた。「あれはあれがここに来る前からいた子オヤ。病とはなんも関係あらへん」

「なら被つても問題ないわけだ」

間髪いれず、佑が言い募る。季満の言い分を端から信じていない言い方である。季満の応えはなかつたが、傍目にもどう断つたらいのか考えているようにしか見えなかつた。

「………… 佑や」見かねた道説が助け船を出した。「おれにはなんのことやらさっぱりわからぬが、これは嫌がつておるように見えるぞ」佑が季満の嫌がることをしようと思つたわけではない。おそらく道説には見当もつかぬ、彼にしかわからないなにかの理由で「被う」などと言つていふことは理解していたが、

(この男のよいところだ。よいところだが……あまり理解はされまい)

数ヶ月の付き合いのなかで、道説は道説なりに佐の性格を分析していた。彼はおのれがそのひとの為になると思ったことを実行する際、対象の感情をあまり考慮しないのである。これに自分勝手という評価は中らない、と道説は思っている。いわばそこにあるのは、「礼を言われるためにやるのではない」という克己かうきと無私であった。

(一本気なのだ、この青年は)

「道説どのは門外漢もんがいかんでしょう」と、佐はにわかに関心の赴おもむくままといった声を出したが、すぐさまそれを恥じたように「……申し訳ありません、無礼な口を」と呟つぶやいてしゅんとなった。

「ま、ま、よいさ。今日のところは門外漢にもわかる話をしようではないか。そうとも、季満や、お前に旨いものを食わせてやろうと思うて来たのだ」

すっかり暗くなった雰囲気を打ち壊すように、大男は明るい声をあげた。

「……んまいもの？」

季満の声は物憂ものうげであったが、腹の虫は歓喜の声をあげた。さだめし病を得てからろくなものを食べていないに違いないのだ。

「おお、旨いぞ。我が庖丁どのの手になる絶品よ。あの膳ぜんを食らえば、お前のひよわな病魔などたちどころに消え失せるわい。

そうだ、佐の分も用意させよう」

「いえ、わたしは結構です」

「まあひとくち食うてみよ、今ほどの言葉を後悔するぞ、うむ」
あわてて固辞こじする佐の面を、道説は含みをこめて睨にらんでみせた。彼みずからの経験より鑑かんがみるに、食事というものは、相伴しやうはんするものいたほうがより美味になるものなのだ。まして病身で孤独に伏せていた季満にはひとしおであろう。

気を遣われていっそうしゅんとする佐を措はないて、道説は廊下のほうへ「これ庖丁！ ぐずぐずするな、急げ！」などと声をかけた。

声に追い立てられるように、ばきばきと廊下を踏み抜く足音が戻ってくる。

「あ、道説どの、そういえば火がありませんが……」

佑が肝心なことを思い出して、ためらいがちにそう言った。

「あつ……いかん、そうであつた。どうしたものかの」

必要なのは火だけではない。物盗りに入られたおかげで、目下のところこの屋には、鍋はおろか土器一枚見当たらないのである。下僕には材料を用意するようにとしか言いつけていなかった。

（ええくそ、気が回らぬのはお互い様ではないか……）

今になつて考えてみれば、たとえ物盗りに遭わなくても、この屋に満足な器具の揃つていようはずもないことくらい察して然るべきであつたのだ。季満は道説の貌に「望みなし」との文言を見たのか、落胆もあらわにしくしくと泣いている。

季満の腹が恨めしげに鳴った。道説は溜息をついた。にわかになその腹の中には、季満への憐れみと 自身への譴責の念が生まれつつあつた。

この度の護法にまつわる事件、正直心中では「貧乏くじを引いた」と思つていたので。季満は大金を賜つたし、それは長恭も同様である。さだめし太政大臣の覚えもめでたくなつたであろうから、あるいは内々に除目についての御沙汰などもあつたかもしれない。自分だけが大怪我を蒙つて床に伏せ、養生という名の軟禁生活を送つてゐるのだ。毎日に庖丁の作る膳だけを、おのれへのささやかな報酬として。

（しかし蓋を開けてみればどうだ。少なくとも季満は今現在、おれなどよりもよほど不幸ではないか。これほどに苦しむ友を一顧だにせず、おれはおれ自身のささやかな不運ばかりを慰めて不貞寝していただ。そうとも、おのれのことしか考えぬ、ひとを妬み嫉んで顧みぬような人間にこそ、あの矢は飛んできたのに違いあるまい。おれのごとき鼠輩に当たるは必定であつた……）

「……道説」

季満が細い声をあげた。

「おお……なんだ」

「カオ……無茶苦茶おそろしいんやけど」

「……………」

「道説どの、庖丁どのが来ていますが……………」

振り向くと、佑はこころもちのけぞるように体を引いた。どうやらよほど怖ろしい顔をしていたようである。彼の後ろに突っ立っている下僕などは、顔を見ただけではや叱られたように縮こまっている。

「あのう……あのう、旦那さま、ええと、膳は三つで……………」

「……おれは前に食ったではないか」

「ええと、そうでした。では二つで」

おっかなびっくりそう言うと、下僕は持ってきた負櫃の蓋を開けて、中をこそごと漁りだした。

「せっかく持ってきてもらったのに相すまぬことだが、庖丁よ無理くり表情を和らげて、大男は下僕に向かって謝罪とも労いとも取れぬ沈んだ声をかけた。「この屋は折あしく物盗りに遭つての、鍋も刀子も、盤の一枚もないのだ。膳はこしらえられぬ……………」

「んまいものおー！」

季満は道説の腕の中で顔を覆って泣いている。

「よしよし……また近いうちに持ってくるゆえ」

下僕が負櫃から小型の鍋を引つ張り出した時点で、道説は言葉を切った。佑も頬を張られたような顔で下僕のほうを見つめている。

「……………これ、庖丁や、ひよっとして食器の類も？」

「あ、はい、これに」

下僕の手によって、板の間のうえに続々と雑多なものが並べられていく。鍋、刀子、脚付きの俎、薄錆びの浮いた足鼎、大小の金鉢、焼串に須恵物の食器。道説の家でもっとも高価な塗の椀まで軒げ出してきた。

「こ、これ、庖丁！ お前というやつはなんのためにこのような

……！」

道理で重いわけである。どうやら下僕は道説の家にある、調理に
関係するものすべてを持ってきてしまったらしい。

「お前……こういったものをこちらで借りようなどは思わなん
だか」

「え……あつ」

「……………」

下僕はまったくくいま思いついたように、感心したような声をあげ
た。結果としてよかったとはいえ、この男の粗忽そこつぶりには開いた口
が塞ふさいがらない。喜んでいいのか悲しんでいいのか　道説は改めて
佑のような使用人を求める気持ちを強くしたのだった。

「あ、庖丁どの、ひよつとして火などは……お持ちでないですよ
ね、いえ、なんでもありません」

佑の言葉は、例によつて助け船の色合いを帯びていたのだが、自
分で言っておきながらさすがにそれはあるまいと思つたものか、彼
は途中で完結してしまう。下僕はその様子をちろりと眺めただけで、
ふたたび負櫃ひつのなかへ頭を突っ込んだ。

「火でございますか。火、火……」

「……まさか本当に」

負櫃ひつの中から生還した下僕は、蓋が網状になつた小さな筥はこと、古
びた木の櫃ひつを取り出した。

「ええと、泰はたどの、その平包ひらひらを持ってきてください」

「あ、はい。　軽いほうで？」

「いえ、そつちの重いほう」

言いながら、自身は櫃と筥とをかかえて囲炉裏の際にしゃがみこ
み、櫃の中身を濡れた灰のうえにぶちまけた。中身は乾いた灰であ
つた。

「杉葉ですよ、これ。　あ、炭もある」

「埋火いけびを熾いしますから、その杉葉をちよつとください」

下僕は受けとつた杉葉を灰のうえへ放ると、小さな匙さじのようなも

のを使つて網管の中から灰混じりの埋火を掻き出し、灰を飛ばさな
いように細く息を送つてあつという間に火を熾した。粗忽など
と断じたのは早計であつたようだ。彼は少なくともこの分野にかけ
ては、用意も手際も一人前であるらしい。

「庖丁どの、わたしも手伝います。水が要りますね？」

「あ、はい、その金鉢をお使いください」

「ちよつとそこの井戸まで」と断つて、佑は部屋から出て行つた。

「……ええと、旦那様、二人前でよろしゅうございましたでしょ
うか」

「おお……うむ、頼むぞ、二人前」

道説はようようそれだけ呟くと、なるべく下僕の邪魔にならぬよ
うにそろそろと囲炉裏の端まで移動し、火の傍に季満の体を横たえ
た。下僕が無言で熾に炭を足した。

「んまいもの……なんやらな……お腹すいたなあ」

言葉の途中に、嫌な響きの咳が混じつた。季満の顔は相変わらず
青い。

（今日、おれと佑が訪れなかったら、こいつはどうなっていたで
あろう。返すがえすも、おれはおのれのことしか考えておらなんだ
……）

病身の弟をあばら屋に捨てて顧みなかった男の後悔 今の彼の
心境を強いて言い表すとしたら、この辺りが近いであろう。

「うむ、雉肉の膾だ。できたら起こすゆえ、ちと眠れ。これ

庖丁や、おれもなにか手伝えぬかな」

「……旦那さまが、でございますか」

下僕は夢想だにしなかつたといった面持ちである。傍目にもどう
断つたらよいか考えているようにしか見えない。なんとなく既
視感を覚えた。

「……いい、忘れる。おお、そうだ、忘れておつた」

言つて立ち上がり、部屋の隅っこに放つてあつたもうひとつの平
包を拾つてくると、季満の前でそれをほどいて中身を広げてみせた。

大男の手からどさりと垂れ下がったのは、丈の異様に長い、厚手の衣が一着。

「冬用に作らせたもののだが、縫子が尺を間違えおつての。おれの身丈よりさらに一尺も長い、衣の化物ばけものになってしまった。夜具やぐに使う分には差し支えあるまいと思つて持つてきたのだが……」

道説は言いながら、不器用な手つきでそれを季満に着せ掛けた。

「……暖かい。暖かいなあ、道説。おおきありがとうなあ」

季満の声は、柄にもなく濡れていた。

「うむ、いい、眠れ」

「道説……お前、出歩いてもええのんか」

「見ての通り、もはやなんともない。お前のほうがよほど酷いぞ」

「……お前は返矢かえしやを受けた。助かるはずはないんやが」

じつと見つめてくる。道説は視線を避けて、なんとなく下僕の手動きを目で追つた。彼は刀子を器用に使つて鯉節かつおじしを削っている。

「そういえば、和妙にぎたえどのが言つていたな。珠子たまこどのの文ふみが楯たてになつたのだと」

「へえ……ぎつちゃんか？」

「うむ。』この文が道説どののお命を救つたのですぞ』などと

なにせとびきり分厚いのが六通もあつたのだ。珠子どのには相すまぬことだが、ちようどよい矢避けになつた」

「……たまこちゃんに感謝するのんえ、道説」物憂げな声で呟きながら、季満は目を瞑つむつた。「多分、たまこちゃんがお前に惚ほれておらなんだら、助からへなんだ思つ」

なにか引つかかりのある物言いである。理由を問いただそつと思つたのだが、今は休ませたほうがよいと判断して、道説はみたび「眠れ」と言つに止めた。

「道説」

「うむ」

「よつちゃんのこと、聞いたか？」

「……いや」

そういえば、茨田重行が「蘭夕郎が本復した」などと話していたのを思い出した。

「なにか、あつたのか」

季満はすぐに応えず、道説に背を向けるようにごろりと横臥した。そのまま眠ってしまったかと思つたほどの沈黙のあと、

「……よつちゃん、右腕、失えたのんえ」

ぼつんと呟いた。

「道説どの」

声をかけられて、道説は面を上げた。佑は俯いたまま鍋をかき回している。

季満の静かな寢息と、下僕の落をきざむ規則的な物音だけが、がらんとした部屋を支配している。黙々と刀子を上下させる庖丁の背後には、庇から差し入る光の境界が忍び寄りつつあった。正刻を過ぎて二刻ほど、といったところであろうか。

「……お悩みですか」

「……」

「顔に書いてありますよ」

鍋の縁に杓子を打ちつけて滴を落とすと、佑は下僕に「これくらいでいいですか?」と言ってそれを手渡した。今ほど佑が煮ていたのは、鮎の羹の代わりの品ということらしい、熨斗鮑と鮭の楚割を戻した熱汁である。下僕は急ごしらえのこれに「手抜き汁」という名前をつけた。

「……旨そうではないか、庖丁。おれは鮎より鮑のほうが好きだな」

佑の言葉には応えず、道説は下僕にそう言って話しかけた。彼は泣き笑いのような、いわく言い難い表情を浮かべている。自分はまだ怖ろしい顔をしていたのかと無理に笑ってみせると、はたして下僕は見てはいけないものを見たような迅速さで顔を伏せてしまった。

「……まあ、鮎も好きだが」

今ほどの行為を糊塗ことするように、下僕はそのまま鍋に顔を近づけて匂いを嗅いでいる。ややあつて、金椀に入れてあつた昆布ひもめと大根をその中に足した。汁物じゅうものを一品へらす腹積もりらしい。

「季満は眠りましたか」

「ん、うむ。寝たな」

それを聞くと、佑はおもむろに居住しすまいを正した。

「道説どの、このような場所でなんですが、お話があります」

「……うむ」

「この度の事件で、太政大臣を庇かばわれた、ということですが」

「うむ」

下僕はわれ関せずといったふうに、耳を傾ける気配はない。

「ご忠告申し上げます。今後、藤原北家ふじわらほくけとお関わりありませぬよう」

そう言うなり、佑はどのような意図いとあつてのことが、道説に向かつてふいに弾指だんしした。道説の濃い眉が疑わしげに顰ひそめられる。

藤原北家とは、平たく言えば太政大臣藤原基経たじよったいじんふじわらのもとつねの血族を指す。こ

こ数十年のあいだ、朝廷で実際的な権力を握っている一族で、太政大臣の職などは今現在、彼らの世襲のごとき様相さまさうを呈ていしている。

「なにゆえだ」

「おわかりのはず。彼らに与くみせば、否が応でも権力争いに巻き込まれます。季満も……」そう言つて、佑は憂うれわしげに季満の寝顔を見る。「……多分、物盗りに入られたのも、それと無関係ではありません」

「……というと？」

「太政大臣は、事件に関わつた三人、つまり道説どのたちの名前を広く知らしめてしまった。菅原道説すがわらのみちときと土師季満はじのすえみつは藤原北家が手の者である』とでも言わんばかりに。この季満の災難について言えば、いわば『西京さいけいに住む土師季満という呪い師は大金を持ってある』と泥棒に知らせて回つたようなもの。そしてこれ以降、かの一族をこころよく思わぬものたちからは、仕事の依頼など来なくな

ることでしょう」

「しかしそれは……太政大臣からの御愛顧が期待できるではないか」

「甘い。彼らは飽きますよ、じきに」と、佑は鼻を鳴らした。にわかにながれ変わったような印象すら受ける。「道説どのご進退とも不可分ではないのです。なるほど、確かに人事の要を握る太政大臣に取り入れれば、ご出世もともすれば叶うやもしれません。ただ

無礼を承知で言わせていただけば、それは聖上、ひいては万民への背信と言えましょう。奸臣に阿つて位を購う、汚らしい行為です」

藤氏に聞かれでもしたら刺されかねない暴言である。佑の物言いを吟味してみるより先に、道説は知り合つたばかりの知人をゆえなく罵倒された義憤にかられた。

「一介の学生に過ぎぬそなたが、聖上の御宸襟を測り奉るなど無礼も甚だしい。そもそもそなたは太政大臣に見えたことすらなからう。寸刻ではあつたが、その警咳に接したおれにはわかる。あの御方は決して奸臣などではない」

剣幕に驚いたのだらう、佑はほんのつかのま意外そうに眉根を寄せたが、すぐにたたみ掛けるように言い募つた。

「頭の受け売りです。が、心あるものは、みなそう思つておりますよ。政を私するものに与して得たものなど、失うのもまた一瞬です」そこまでまくし立てると、佑の声は急速に沈んでいった。「可哀想なことですが、格好の例がそこに横たわっている」

「……藤原長恭どのは、利き腕を失つたそうですね。あわれその美声も墓のごとくになつたとか。彼もまた北家が一員です」

長恭の名前を聞いたとたん、道説は打ちのめされたように頭を垂れた。前に季満からその消息を聞かされてからというもの、彼はずっと自責と後悔の重しに圧されていたのだ。

打ちひしがれた大男を見る、佑の口元がほころんだ。

「申し訳ありません、道説どの。苦しめたくて言つたわけじゃあ

りません」

囲炉裏の足鼎のうえには、いつの間にか前の「手抜き汁」に代わって、薄茶いろの汁粥かゆがぐつぐつと煮立っていた。それを匙でなにをするでもなくかき回しながら、

「……おれ、道説どのが好きだ。季満もです。正直、前の事件の折は肝が冷えました」

佑はぽつりと言った。

「佑……」

「道説どのは重傷を負い、季満は家財を失い、また藤原長恭どのは片端かたわとなった。その原因がなにであったのか、それさえわかっていただければ、もうなにも言うことはありません。それだけです」

言うなり、佑はみるみるうちに赤くなった。口を開きかけた道説を遮おさって、

「さ、さあ、もうできましたよ。できましたよね、庖丁どの」

下僕の応えも待たずに、勝手にいそいそと汁粥を椀によそい出す。そうこうするうちに、季満が寝惚ねぼけ眼で「ええ匂いする、もうできたのんか？」ともぞもぞし始めた。

「包丁、季満の膳を先にな。どれ」

季満を介抱して抱き起こしてやる。人心地こころもちついて落ち着いたのか、抵抗はなかった。

「季満や、おれたちは佑に礼を言わねばならぬぞ。ずっと心配してくれていたのだそうだ」

「あ、お止めください、蒸し返さないでください！」

佑は茹ゆでタコのように真っ赤になっている。

やがて下僕がふたりの膳を整えると、和やかな食事が始まった。道説も「手抜き汁」の相伴に預かり、あらためて彼の「庖丁」の腕前を褒めそやし、また膳を賞味したふたりも口を揃えてそれに和わす。やはり食事は大人数で食べるほうが旨いようだった。

「道説、うで疲れた。食べさせてえな」

「吐かせ、箸を繰るのも食事のうちよ。 ええあさましい、少

しは優雅に食えぬのか。 佑のあの箸さばきを見よ」

「季満、おれを見本にしないほうがいいよ……」

佑はあわてて箸を匙に持ち替えた。

「佑は奥ゆか」

ふいに言葉を切つて、道説は箸を取り落としてしまった。 その様子をはかの三人が不思議そうに眺めている。

「どした、道説」

「いや、なんでもない。 我が庖丁どのが料理の力よ、言葉を

失うとはこのことだな」

下僕は茹でタコのように真っ赤になっている。 季満と佑の追撃がそこへ加わった。

（今のあれは……気のせいか）

談笑が続いている。 その後、道説は前に見たものを探して、食事のあいだ中たびたび部屋の隅へ視線を向けたのだが、ついぞそれは現れることはなかった。

（目の錯覚であろうか、それにしては……）

それは憎悪に貌をゆがめた、両腕のない女童めわらわに見えた。

The Wailer IV

四月七日 庚戌 巳二刻

かのえいぬ みのにこく

(別当?)

堀川の汀からの帰るさ、吟師は頭のうえを走りゆく網代車になんとなく気を向けた。

別に確証があつたわけではない。ただ牛飼童だけを伴つて、やかましく足を急がせる様が、前に一、二度見かけた彼のやりようを思い出させただけであつた。

彼は塵を捨てに来ていた。

夜のうちに少し雨が降つたようで、河の増水はそれほど気にならなかつたが、土手は甚だしくぬかるんでいる。露を結んだ下生えを掴んで、吟師は滑りすべり苦心して堀川小路へ這い上がった。牛車は今し辻へと滑り込むところだつた。

(まだ午前だろう、別当だつたら珍しいな。ひよつとしてまた罫を変えろ、なんて言うのじゃないだろうな)

あの朝末きの引つ越しの慌ただしさときたら！ いまだ記憶に新しい、ひと月ほど前の荒行を思い出して、吟師はげんなりした。

新しい罫は、彼の上がつてきた堀川にほど近い、五条大路から野寺小路を折れてすぐのところにある。左京は四条錦小路の屋敷からここまで、あまたの荷物を担いでいったい何往復したものやら、

(あれだけ歩けば伊勢にだって着いてしまふ。斎宮を担いで行つた先が、せめて大神宮ならよかつたけど……)

左京の罫は使い切れないほど広がつたが、新しいほうはそれに比べるべくもない慎ましさであつた。どうやら分限者であるらしき別当も、さすがにあれほどの屋敷を二つも三つも世話するわけにはいかないようだ。壊滅した母屋へは工匠の手が入つたということだが、建て直すであろうことに疑いはない。すぐに直るものなら追い出し

たりはしないであろう。

(言師……そういえば、雑舎ざつしゃに置いてきたままだった)

水干すいかんの泥を手で撥ねながら、吟師はとぼとぼと帰路につく。小路には彼と同じ目的で、堀川へ降りてゆく人びとが散見された。枯木のごとくに痩せさらばえた老人をずるずると引き摺っていくものま
でいる。老人はぴくぴく動いていた。

「蒸すな」

と、吟師は独りごちた。野寺小路の辻を折れる。日が翳かげると、蒸し暑さはいや増しに募つった。

ふいに吟師は舌打ちをした。ちょうど彼の傍かたわらを横切っていった男が、怪訝けげんそうに振り返った。

はたして、塹えんの前には牛車が駐まっていた。

「……いきませんか」

「……じゃない。哭師こくしが……」

(哭師?)

まぎれもない、別当と呼師こしの声である。反射的に築地塀ついでいに背をつけて、吟師は聞き耳をたてた。草履を脱いですると声のするほうへ忍び寄る。彼らは家の前で話し込んでいたようだった。

「あれの落ち着いた先には、行ったんでしような」

「無論だ。歌師かしは? ここにいるな?」

「おりますが、おりませんわい。ちよいと目を離れた隙に……あれでさあな、ちょっととした副業ふくごってやつで」

「認めた覚えは」

「わかっとなります。わかっとなりますが、あれもなんか思うところがあるんでしようなあ。切りますかい」

「いや、無理なんだ、事情が変わった。代わりが……」

(別当、なにをしに来たんだろう)

築地を介しているせいなのか、別当の言葉は籠もりがちに、こころなし性急に聞こえる。

「とにかく、探すんだ。吟師は? あれはどうした」

「あいつア塵を捨てに行つたんで、じき帰つて」

「そんなことは端女はしためにやらせる！」

ふいに別当が痾声かんこえをあげた。小路をゆく人びとのいくたりかが、声を聞きつけて何事かと眉を顰ひそめて通り過ぎていく。いきおい、その傍らで築地にべったり貼り付いている吟師も注目を浴びる次第となった。

吟師は裸足でそろそろともと来た道を引き返し、辻の辺りで草履を履くと、踵かかとをずるずる引き摺りながら家の前まで取って返した。足音を聞きつけたのか、二人の話し声がびたりと静まる。

「よう、ご苦労さん。へえ、珍しいこともあるもんだ。この昼日ひるひな中に別当さまの御到来とはねえ」

棟門むなもんを入つてすぐのところに控えていた牛飼童が、とりあえずとといったふうふうに軽く頭を下げた。別当は吟師の薄笑いを射るようように睨にらんでいる。

「吟師、どこへ行つていた」

その声は平生へいせい通りの、冷静きわまりない声である。前の取り乱さわしようなど毫ちひほども見受けられない。

「どうやら盗み聞きには気付いていないようだ。」

「どつかだよ」

「特に用事がないのなら、家から出るな。ただでさえお前は外出が多い」

「明るいうちから束縛されてたまるかよ。文句があるなら切りな咄はな嗟さに言つてしまつてからひやりとしたのだが、幸い別当は舌打ちをするに留まつた。そういえば先ほど「事情が変わつた」などと言つていたが、

(その事情とやらのおかげかな)

なににせよ、言い負かしてやれたのは気分がいい。言師の一件以来、別当にはいい感情を抱いてはいない。

「呼師、探しておけ。これも使え、家事などさせるな」

物を指すように吟師を指さして、別当は足早に棟門へと歩いてい

ってしまつ。どうも大した用事ではなかつたようだ。呼師がその背に確認するように声をかけて、

「承りまして……それでは、歌師のやつめに、お咎めはなしといふことでは？」

「……いい。ただ、これからは首がかかるとだけ言っておくように」

「はい」

丁重に頭を下げた。牛飼童が牛車へ飛んでいって、掌で牛の黒い背をぺちぺちと叩いている。牛は人間が寝言を呟くような声をひとつあげた。

「……なにしに来やがつたんだ、あいつア」

「哭師がのう、ちよいと行方知れずらしい」

ややあつて、牛車はがたごとと車輪を鳴らしながら、慌ただしく走り去つていった。門のうちから、その非常の速度を見咎めるように、音のするほうへ首を振り向けながら歩く人の姿が垣間見える。

「へえ、あいつの下で働くのが嫌になつたんじゃねえのか。」

あいつアひとでなしだからな」

「ま、そう言つてやらぬことだ。とにかくのう、探さねばのう」

「呼師」

家に戻りかけた老人の背を、吟師が呼び止めた。

「なんだえ」

「……やけに親しげだつたじゃねえか」

「……」

呼師は応えずに、その面に人好きのする好々爺然とした笑みを浮かべると、

「ま、どこの何様であろうとな、若いやつはじじいを頼りたがるのさ。身に覚えがあるうがい」

わかつたようなわからないようなことを言い、吟師を手招いた。

「吟師や、起きてからこつち、肩がこつてたまらねえんだ。たまには労つてくれや」

「ああ、この子オはほんまに……呼んだら返事くらいいいや！
なにかあつた思たやないか！」

部屋に入ってくるなり、延然は直綴の裾をわさわさいわせながら
喚いた。季満は寝転がって黙ったまま、もぐもぐやっている口を指
し示す。唇の先からは鮭の楚割が生えていた。

「……………坊さんようお越し」

「ほんまや、ようお越しやで。ああしんどしんど……………ここまで伸
すのんも大儀や、ええよつこら」

ふうふう言いながら、季満の傍らに腰を下ろすと、延然は肩越し
に部屋の入口に向かつて手招きをしてみせた。

「お入りな。むさくろしいとこやけど」

「ありや、坊さんだけやなかつたのんか」

見れば、今ほど延々が通ってきた部屋の入口に、十をいくつか超
えたくらいの少女がもじもじと佇んでいる。もう一度「お入り」と
手招かれると、彼女はなにか低い渡し木をくぐるような、縮こまっ
たちよこちよこした足取りで延然のもとへ滑り寄り、彼の横に正座
した。延然の荷物であろう、その両手に紫色の平包を携えている。

「ええと……………どちらはんどすやる。坊さんの子オ？」

「どあほ。この子オはまあ……………わかるやろ、悲田の子オや」

延然はあえて「孤児」という言葉を避けた。なるほど、そうと言
われなくても、その粗末な態を見れば一目瞭然である。

巨僧はしばらくのあいだ、険しげに眉を顰めて部屋の中をと見こ
う見していたが、ちようど季満の胡乱げな視線に気が付くと、

「で、どや、具合のほうは」

病人を訪ねるのにいかにも常套な、ことさら明るい口調でそう言
った。

「ちよぼちよぼどす。いつものことやし」

「そやかてな、今度のんはまたえらい長病みやないか。あんじよ
う食べとるのんか」

「うん。食べ物なら、友達が持つてきてくれましたさかい」
季満が指さした先には、葛で編んだ大振りの負櫃が鎮座していた。
その下の板の間がゆるやかに撓んでいる。さだめしかなりの重量が
あるのだらう。

「実丸が見舞いに来てくれたんどすえ。あと色々、平法師も来た
し」

「ああ、平法師！生きてたのんか。ぜんぜん顔出さへなんだか
らに……元気そうやったか？」

「うん、太つとつて、今は副業でやってた桧物造りで食べとるゆ
うてました。もう呪いはやらへんつて」

桧物とは曲物 桧や杉などの薄板を円形に曲げて作る器物のこ
とで、桶や柄杓などがこれに当たる。「呪い師」などというあやふ
やな生業に比べれば、だれ憚ることもない、よほど堅実な商売と言
えよう。

「そうかあ……勿体あらへん話やな。またほんまもんがひとり去
んでもうた。最近では売手市場やのんに、まかない手のほうがぜ
んぜん足りひんのや。当節はうちこの僧たちかてものにならへん
のやからなあ」

「はよう病なおして稼がなあかんえ」と言つて、延然は少女から
平包を受けとつた。

「うっへえ……陀羅尼助やおへんか。また持つてきはつたんどす
か……」

「いつもこれで治つてたやあらへんか」と、巨僧は心外そうに眉
を顰めた。「拙僧が研究に研究を重ねて作り出したな、特級謹製の
陀羅尼助やで。そんじよそこらの陀羅尼助とは陀羅尼助がちがうち
がつ」

延然が平包から取り出した小さな面桶の中には、毒々しい緑がか
つた黒っぽいなにか 陀羅尼助が詰まっている。

陀羅尼助は密教僧が修行の折に常備する、飴状の内服薬で、幾度か味わったことのある季満に言わせると、

「死ぬほど苦い。死んだあと生き返るほど苦い。薬やらへん、苦行用」

とにかくかなり苦いのだそうな。

「どんな病魔かていちころや、ほら」

「ええと、坊さん、おれいま食事中で……ゲツホ！」

延然は面桶に節くれ立った指を突っ込んで、まったく善意の面持ちで季満の鼻面へ持つてくる。

薬というより、まず毒を連想させる匂いがする。藻に墨を混ぜて煮詰めたら、あるいはこのような色になるつか。黄蘗を主に種々の薬草を煮詰めたこれを、延然は万能薬と讃えて憚らないのであるが、（病魔と一緒におれまでいちころやで……念仏あげに来たのんかこの坊さん）

季満はやんわりと延然の手を押しわけ、

「そ、そや、坊さん坊さん、その子オの名前は？　なんで連れてきたのん？」

「可愛らしいなあ」と、彼の隣に座っている少女に笑いかけた。少女はあまり人馴れないといったふうに、ぎこちなくはにかんだ。最前からなにをするでも聞くでもなく、ただ黙然と座っているだけである。

「ん、ああ、この子オはな……」

と言いながら、延然は部屋の隅に置いてある負櫃まで這っていくと、蓋を開けて件の陀羅尼助を律儀にしまいこんだ。どうやら持つて帰るつもりはないらしい。今度ネズミ避けに使ってみようと季満は思った。

「薺蒿、ゆうのんえ。愛らしい名前やろ」

延然の声音には、なんとはない誇らしげな響きがあった。ひよっとすると彼がつけた名なのかもしれない。

「おはぎちゃんか。　おはぎってなんやろ」

「花や、花。この子オみたいに可愛らしゅうてな」

「へえ おはぎちゃん、よろしゅうな」

齊蒿は曖昧な笑顔を浮かべたが、返事はしなかった。

「……この子オな、聾啞やねん」ふと、延然は笑顔を浮かべたまま、器用に沈んだ声を出した。「なんも聞こえへん、なんも喋れへん」

「……………」
「そんな顔したらあかん。この子オはなんもわからへんからこそ、よう見てる」

言われて、季満は咄嗟に少女の顔を窺った。前のはにかんだ笑顔に遭遇した。それは却って、二人が話していることを理解しているために繕ったもののように思われた。

「……なんでこんな子オを？」

「チュウがようなるまでな、世話さしたる思うてな。心配せ

んかて、この子オの食べる物は別に用意してきたよって」

「なんも聞こえへん喋れへん子オが、病人の世話なんか務まるのんどすか」

「よう見とる、ともゆうたえ。ほんまによう氣イのつく、ええ子オなんや。それはじきにわかる思う」

なにか言いかける季満を遮って、延然なおもいわく、

「それにな、アレや。拙僧の言いたいこと、わかるやろ」

巨僧の示した指先には、齒を剥いて来客を威嚇するミヅキメの姿があつた。

「わかるやろ言われても」

「ちよう近うなつたけどな、拙僧かて警やない。今まで四度、

チュウの見舞いに来て、そのうち三度、世話人をつけたやろ」

「……………」

「みいんな大怪我して帰って来よつた」

「あれは転んで」

「このくらいの女の子オならどやろ思うて連れて来たのんやが、

どうも正解らしいな。あの子オ、最前から拙僧しか見やらへん」

「なにゆつて」

「今までの長病みとも関係あるんやろ。 チユウや、もしわか
つてへなんだらゆつておくけどな、アレは障るモンやで」

「……坊さん、見えとつたんどすか」

季満の声には驚きよりも多く、裏切られたような非難の色が濃か
つた。

「ぼんやりや、はつきり見えるわけやない。 まだ小さい子オやゆ
うのんはわかるけど」

「……………」

「……自分の死んだのんが、わからへんのやなあ」 延然の声は濡
れている。 ふたたび平包の中を漁りながら、「可哀想になあ、昔こ
の屋敷に住もてた子オやろか。 チユウはなんか知らへんのんか」

「坊さん、放かしといてえな。 坊さんには関係あらへん、迷惑も
かけへん」

片手で咳を隠しながら、季満はおもむろに板の間に直った。 薺蒿
が二人のただならぬ様子を察知して、きよるきよると上目遣いに両
者の顔色を窺っている。

「チユウや」

「なんどすか」

「あの子オな、拙僧が調伏するゆつたらな、おまえどうする」

季満の貌がたちまち凍りついた。 口の端が憎々しげに持ち上がった。
た。

「……………黙つて見とる思たら大間違いやで。 おれはこんなやけど、
口さえ動けば坊さんの邪魔くらいでける」

困り果ててもじもじする薺蒿をよそに、二人はしばらく不動のま
ま睨み合っていた。

菖蒲小路を横切る、ひとの足音がざくざくと近づいてくる。 簀子
縁で羽を休めていたカラスがひとこえ鳴いた。 それが羽ばたき去つ
て静寂が戻ってきたところに、延然はようよう視線を切つて苦笑を浮

かべた。季満も鏡あわせのごとく、一拍遅れでそれに倣った。

「坊さん、あの子オは ミヅキメはええ子オなんや。そのおはぎちゃんとなんも変わらへんのどす」

「この子オは人に仇したりしいひんえ」

「……………」

「……………ミヅキメ、ゆうのんか。花の名前かなにかやるか」

「お食べな、ミヅキメや」と言つて、延然は平包から取り出した小さななにかを放つた。ミヅキメは威嚇の声をひときわ高くしたが、足下に転がった小片に鼻面を近づけて、犬のようにふんぶん匂いを嗅ぐことしばらく、急に甘えるような声をあげて小片を舐りだした。

「坊さん……………あれは？」

見れば、延然は目を潤ませながらその様子を眺めている。ひとつ涙をすすると「蘇や」と呟いた。

「お乳が恋しいんやな。ほんまに稚い子オなんや」

福々しい面を慈愛でいつぱいにして、延然は何度も頷いている。頷きながら思い立ったのか、傍らの薺蒿にも蘇の小片をいくつか配つてやった。事態の流れがつかめない薺蒿は、目を白黒させながらも、押し頂くといったふうに両手でそれを受けとつた。

「こらえろつ値が張るさかい、あんまり持つてこれへなんだけどな。折々ちよつとずつ切つて散供してあげたらええ。多分、間接的にチュウの病にも効果あるはずや」

延然の言つとおり、蘇は貴重な牛の乳から作られるために、たいそう値が張る。市井に出回るような代物ではなく、おそらくは知り合いの貴人などに頼んで譲つて貰つたものに違ひなかつと思われた。薬にする目的で持つてきたのか、元よりミヅキメに与えるつもりであったのか、いずれにせよ、各い彼が土産に持つてくるものとしては、これほど不自然なものはない。

「あ、こらどうも……………」

てのひら大の蘇ひと切れと共に、延然は一枚の符を渡してよこした。

「御守りどすか、これ」

「……北斗符ほくとふや。肌身はたみはな離さず持つといてやな、よく晴れた夜は北斗を拝むのんえ」

「坊さん」

「ええ、ええ、言わへんかて。ゆうたやろ、拙僧は瞽やないんや」

「ほなら……ありがとう頂きます」

「……どや、お父はん、見つかりそうか」

季満は首肯しゅくくわんするように俯うつむき、延然えんぜんの符に目を落おとしている。前まへに睨にらみ合あった時のような気まずい沈黙しんもくを過すくしたのち、

「ちよぼちよぼどす。でも」

と言いつて、季満は顔を上げた。延然えんぜんの顔から目を逸よこらして、キーと板の間を転まげ回まわるミツキメを見つめている。なにか笑わらいたいのを懸命けんめいに堪たえているような、含こみありげな色いろをその面おもてに刷はいて。

「おおかた見当みあたはついてますのんや。今年中ことしなかくちに会あえるやる思おもとります」

朱雀門すざくもんから衛士えいしが下くだりてくるのを、軽かろく頭あたまを下くだげてやり過すごした途端とたん、

「あつ、管少尉かんしょうじゆう、お待ちを」

と、呼び止められた。無視むしされたと思おもったものか、背せ中に飛とんできた声こゑは硬かたい。

（管少尉かんしょうじゆうか。右衛門うえもんだな、この衛士えいしは）

道説みちとせは殊勝顔しゆしょうがほで「何用なにようかな」と応こたじた。

出し抜ぬけに「管少尉かんしょうじゆう」とは、なにも礼れいを欠かいた言い方いりかたというわけではないが、それにしてもいささか穩当うんたうとは言いいかねる呼び方よびかたであった。左衛門府さえもんぷのものなら「少尉しょうじゆうどの」「道説みちとせどの」などと呼よぶし、同僚どうりょうや上司じょうしなど、顔見知かみじりの間まではおしなべて「菅家判官かんげはうがん」で通とっている。

身も蓋もない呼び方は、この衛士個人というよりも、左右衛門府の間に横たわる、なんとはない屈託くつたくのなせる業わざとでも言えようか。

(いつも通り、待賢門たいけんもんから入ればよかったかの……)

彼の目の前に聳える楼ろう、朱雀門より内を大内裏だいだいりという。

朝廷おあやけの諸官衛しよかんがおよび官舎のきなどが軒を連ねる、この日本国の枢軸ひのものとくに

は、前の朱雀門を含む十四の門があった。内重閤門うちの内ごもんを衛る近衛府、

中重宮門なかのえきゆうもんを衛る兵衛府ひょうえふとならんで、この外重十四禁門とのえじゆうしきんもんを衛護するの

が衛門府えもんふの主な任務である。この限りでは、左右に不和など生

じようがない。

要因はどうかやら、衛門府に兼任させられる「検非違使けんひいし」の職務にあるようであった。

「右京うきやうのほうがより治安が悪いため、兇徒追捕きょうとつうぶの頻度もそれに比例して高い。衛門府はヒダリよりミギのほうが仕事をしている」

右検非違使うつけびいしのいくたりかには、どうもこのような考えが念頭にあるらしい。加えて「吉事尚左、凶事尚右」という老子の「左」尊重の教えもまた、右衛門検非違使うえもんけんひいしたちの癪かんをそれとなく刺激する一因であるのかもしれない。

衛士などの末端まつたんは、検非違使の職務と関わり合いはないはずなのだが、そこは口さがない上司などに言い含められているのだろう。まして道説だせきは前の事件で顔が売れてしまっているようなのだ。

「至急、縁えんの松原まで参られませ。王侍従おうじじゆうさまがお待ちです」

「……王侍従さまが、おれにか。何用か伺うかがってはおらぬか」

「存じません」衛士のいらえはにべもない。「もう幾日も前から日に二度二度とおいでになつて、『菅原道説すがわらのみちとせきが来たら松原まで』とそればかり仰おほせです」

(ちようどよいのか悪いのか……これはますます足が重くなるわい)

彼は他ならぬ、松原は辞儀松じぎまつに用事があつて来ていた。久しぶりに魚腸ういせつちゆうに顔を出すため、というのは建前で、本当のところは長恭の消息を確かめる意図がある。

「お早く参られますよう」

衛士は言うだけ言うと、門前に立ち尽くす大男を尻目に、さつさと持ち場に戻っていつてしまった。

（今日はよくない日なのかもしれぬ。佑にでもひとつ占うてもらうたほうがよかったか……）

そもそも、今日は出発からまずかった。こつそり家を抜け出す折、運悪く和妙に見つかってこつてり油を絞られていたのである。すでに幾度か前科があるので申し開きのしようもなく、したがって彼女の猛りようたるや筆舌に尽くしがたい、生半可なものではなかった。

「もうもう道説どののお傷のことなど保証いたしませぬ！ 次に同様の仕儀と相まりましたなら、お坊様をお呼びいたしますからな！ この和妙が御身を負うて化野までゆきますからな！」

加えて間の悪いことに、彼女は下僕が食材の仕入れを怠ったために水漬けしか食っていなかったらしく、ために本日の機嫌はありていに言つて最悪の部類に入っていた。彼女はどうも腹が減っているとぶりぶりする質らしい。今や和妙の機嫌のよしあしは、ひとえに下僕の腕如何にかかっているのだった。

（ここまで来て、まさかに帰ることなどできまい。 帰れば和妙どのが目を吊り上げて待つておるだろうしなあ）

溜息混じりに衛士に挨拶して、大男は朱雀門をくぐった。衛士からのいらえはなかった。

「おおい、淑野か！」

なんだか妙に懐かしい顔を見つけて、道説はそう言つて声をかけた。松原の際で身を寄せ合つて話し合つていた二人が、同時にこちらを向いた。

「あ、道説さま、お久しぶりです。その節はどうも」

「おお、久しいな。全くその節はどうもだ、お前のおかげでえらい目にあつておる。 お前もコレか、忠岑」

太刀を振るう仕事をしてみせると、忠岑と呼ばれた青年は「ええ」と折目正しくお辞儀をした。

「お久しゅうございます、道説さま。お怪我をなすつたと聞きましたが」

「ま、見ての通りよ。かすり傷でな」

大男に挨拶を返した二人、藤原淑野ふじわらのよしと壬生忠岑みぶのただみねは、共に魚腸の一員であつた。

「忠岑はともかく、お前が来るとは珍しいな」

京識きみしの仕事に忙殺まじされるようになってから、淑野が辞儀松を訪おもなうことは絶えて久しくなっている。忠岑との取り合わせもしくごく珍しい。

「ええ、まあ。でも来てみたまではよかつたのですが……」

「辞儀松に蘭夕郎らんせきろうのが ご覧あれ」

口ごもる淑野の代わりに、忠岑が言葉をつないだ。遠慮がちに指し示された松林の向こうに、指先ほどの大きさの長恭ながよしが太刀を振り回している姿が見える。

片腕で、である。

姿をひと目みた途端、ここ数日でようよう練り上げた勇気が跡形もなく崩れ去るのを、道説は感じた。その音さえ聞こえた気分である。

（ああ……いかぬ、だめだ！ どの面つらさげて見ゆることができよう！ 畢竟ひつき、おれが斬り落としたに等しいというのに……）

とても話しかけて来し方かたを聞き出すことなどできそうにない。長恭の麗貌れいぼうがこちらを見たような気がして、道説は慌てて黒松の幹に体を寄せた。そのまま膝を落とす。足は根が生えたように動かかなかつた。

「先ほどまで経足つねたりも共にいまして、まあ、ああいう性格ですから遠慮えんりょ会釈えいしやくなしに声をかけていたようなのですが、無視されたと言っておりまして。 なにかあつたのでしょうか」

そらとぼけてはいるが、忠岑はまず間違はなく「なにかあつた」

ことを確信している。それも道説が一枚噛んでいることにも。

今や、長恭は完全に太刀に振り回されていた。主のいない右の袖が、ぱたぱたと力なくはためくたびに、青年の太刀はあちらの松を噛み、こちらの岩をかすりといった態度で、傍目には逃げ回る太刀を必死に離すまいとしているようにも見える。

元々、彼に天稟はなかった。体つきも華奢で、腕も細い。打ち合えばおそらく、淑野の足下にも及ばないであろう。弓馬の道もようやく人並みにこなせるか否か、といったふうで、そもそもが荒事には向かぬ質であることは疑いようがない。

自分の不得意な道に熱を上げるのは、それだけ得意な道への天分周囲からあれほどに賛嘆を惜しまれなかった、諸芸能への才覚から生まれる自負があったからであろう。彼は魚腸にあつて剣が不得手でも恬然としていたし、ことさら武骨を装う一方で、巻雄のような芸能に疎い人間を小馬鹿にしていたふしがあった。

(だが、それももう……)

長恭は利き腕を失い、美声を失った。腕なくして舞は舞えぬ、筆も執れぬ、樂も奏せられぬ。声がなければ詩歌も音にならぬ。名誉ある蔵人の職務にも大いに障ろう。蔵人は禁色を赦され、唯一六位にして禁裏昇殿を赦される、名家の若い子弟にとっては羨望の的とも言える職である。あるいは不具を理由に遠からず解任されるかもしれない。

まこと、藤原長恭の失ったものは計り知れない。彼はまさに全ての道を閉ざされたのだった。

「あ、道説さま」

「……………」

「道説さま、王」

「道説、立て。なにをしている」

淑野、忠岑の呼びかけを遮って落ちてきたのは、いつの間にかやってきたのであるうか、源定省の声だった。

「……………」
「定省さま」

「待つたぞ、道説」

言つて皮肉っぽく微笑する。少し息が切れている。定省はそのまま顔を上げずに「淑野、忠岑」と二人を呼びつけた。

「すまぬが、少し外せ。こやつと話がある」

「我々に聞かれては障りのあるお話でしょうか」

間髪いれず、忠岑がずかと聞いた。彼にはこういつたとき盲従を潔しとしない、妙に硬い骨を持つ側面があつた。淑野がその袖を引いて「おい」と窘めた。

「わたしにもわからぬ、だから外せと言つた」

「諒解いたしました。では」

それだけ言つと、忠岑は松原に背を向けてすたすたと歩き去つてしまつた。淑野が一拍遅れで「あ、それでは失礼いたします、王侍従さま。道説さまも」と断つて、その後が続く。

ふいに、かつんという音が松原にこだました。見ればちょうど長恭が、松に食い込んだ太刀を外そうと孤軍奮闘しているところであつた。

「定省さま……道説になんのお話でございましょう」

「それよ。ま、少し付き合え。以前にお前を見舞うたときのことだが」

金属の弾ける音に、二人はふたたび松原へ面を向けた。長恭の太刀は二つに折れていた。

『道説、お前は基経の犬か』

前に見た夢を、道説は思い出していた。

The wailer v

四月七日 庚戌かのえいぬ 午二刻うまのにじく

なにか言いあぐねるような様子を見せたあと、定省さだみは溜息まじりに「少し離れよう」と言った。

この場合の「離れる」は、ここ松原に掛かるものではあるまい。彼もまた見ていて辛いのであろうかと道説みちせきは思った。

「なんとなくな、お前が来ていそうな気がしていた」と言つて、定省はどこへともなく歩き出した。小柄な体軀たいくにややあまる太刀を挿んで、落とし物を探すように目を伏せている。「先日まで平野に梅宮に祭事つづきであったが、病を得たと言つて供奉くがせなんだ。

侍従じじゆうにまじきことよな」

侍従はその言葉のとおり、つねに帝の御側おそばちかくに侍り従い、平時にあつては話し相手や相談役を、有事の際には護衛をつとめる高貴な職である。正五位下源定省しやうごいげみなものさだみ きんしやうは今上の第七皇子、世が世ならば親王のうと呼ばれるやんごとなき血筋であった。

今上は即位にあたって子らを臣籍しんせきに降ろしたため、定省は源姓げんせいを賜り、今はその皇族たるを失っている。が、周りのものたちはその素性から、彼を皇族の侍従を指す「王侍従おうじじゆう」と呼んだ。

「どうだ、その後」

傷のことを言っているのだと気付いて、道説は「は、ほぼ快癒かいゆしたものと」と答えた。

定省のいらえはなかった。黙つたまま早足で歩き、歩きながら今度は、後ろ手に腕を組んで松の枝葉を仰あおいでいる。

（定省さまらしからぬ様子だ。見舞いにきたときの話などと言つていたが……）

なんとなく、定省は落ち着かなげに見えた。慌あわてているひとが外面上落ち着きを取り繕つくろわんとしているような、厚壁をへだたてて聞こ

えてくる喧騒けんそうのような、静かな焦燥じやうそうが背を透すいて見えるようでもある。

「舅いしやうどのが心配しておったぞ。娘が尼になるのではないかと気がでないそうだ。罪な男よ」

不意をつかれて、たちまち大男おおおとこの面おもてが赤くなった。

「あ、いえ、それはその……弱りました。そのようなことまでお聞き及びとは……」

定省の言う「舅」とは、橘たちばなの広相ひろさきのことであろう。久ひさしい以前から彼の学問の師であり、娘のひとりひとりを彼の室に入れている。広相ひろさき相当人ひらさきあたりのひとが知らせたものか、それとも珠子たまこが姉に文を送ったものか、

（広相さまか、いや、珠子たまこどのであるうな。なにもかかる言わでものことまで漏らさずとも……）

「妻が妹のことだぞ。彼女も妻も、よほどお前の身を案じていた。太政大臣おおきやうだいじんに葛城高宗かつらぎのたかむねを紹介されたそうだな」

「はい」

「このほどは患者の脈をとる手も震えるそうな。酒毒しよどくの病よ。あのようなやぶを頼らずとも、わたしがいくらでも腕のよい医師をさがしたものを」

言つて、定省はようやく立ち止まった。振り返つて「遠慮したのか？」と笑う。

松原の外周とおぼしき、若松のぼつぼつと散見されるそこからは、外縁部の緩やかに湾曲した真言院しんごんいんの甍いづかが見えた。二人はどうやら内裏うちに向かつて歩いてきたようだった。

「……ひとを斬るには、さて、どうやるのだったかな」

おもむろに腰の太刀を抜いて構えると、定省は独りごとのようにそう呟いた。いつにない突飛とつびな拳動こぶしどうに言動。やはり常の彼とは思えない。

「……腋わきを締めて、いま少し。手打ちになりますれば、斬れぬ上にも手首を痛めます。もっと、振るう時も腕は伸ばさずに」

まともな答えが返ってくるとは思っていなかったものか、定省は

ちよつと笑いを堪えているような妙な表情を浮かべている。

「ふん、こんなにくつつけては……これはよほど近づかなければならぬな」

「さようございます」得意な方面の話題である。いぶかりながらも、道説の舌は知らず饒かに動いた。「剣は多く防禦にその主眼を置きますれば、これにて並居る敵を打ちのめさんなどと考えるは下策にございます。近づけばそれだけ、害される危険も増しますゆえ。くれぐれも下手に斬りつけようなどとはお考えになられませぬよ」

「魚腸の主催者たるお前が、太刀にて攻め撃つを下策と申すか」「下の下にて。太刀とはどう言い繕おうと畢竟、命の遣り取りには向かぬ代物。道説が剣とは、加えられた危害を禦ぐためのもの。その刃にて相手を威嚇し、戦意を挫くためのものになります。そう……その太刀には刃が付いていない、そう思われませ」

「……初めて魚腸にきたとき、同じような事をお前に言われたな。『生き物を殺したいのなら弓を習え。剣は練りがたく扱いづらく損じやすく、殺しにくい。間尺に合わない』などと。覚えておるか」

「はい。今もその考えに変わりはありませんね」

「……長恭にはわかっておらなんだようだ。気付いていたか？」

「……………気付いておりました」

誘導であつたのかと、道説は背中に嫌な汗が流れるのを感じた。

「あれの顛末は、聞いたか」

「いえ……………」

定省は拔身を手にしたまま、佇立する大男の周りをゆっくりと巡りだした。

「お前が葛城高宗の屋敷へ運ばれたのちのことだ」と、定省は前置いた。「夜明けから午前中までは、少なくとも身体上の異変はなかったという。だが昼になるとにわかの高熱を発し、ほどなく意識を失った。原因はわからぬ。総身は黒色を帯び、物の怪だった様子

で悲鳴のごとき讒言をわめき散らし　　夜半に及んで右腕が骨ごと腐って落ちた」

「……………」
「穢毒が全身に及ぶかと、一時は家中のものもみな絶望視したそうだが、夜が明けぬうちに小康を得、明けてよりのちはまったく平素の通り、体調も不思議と旧に復したという。失った腕と、声を除いてな」

「……………」
「診察した医師は、最後までなんら効果のある医療は施せなんだ。病昂じるに至って呼び寄せた僧は、魔羅の成したる禍事などと判じた。付き添っていた土師某とかいう法師の見立ても、似たようなものであったらしい。お前が紹介した法師ということだが」

「さようございます。土師季満と申すものにて……………あれが長恭どのの屋敷に？」

「うん、褒美を受け取りに来ていたらしい」ちょうど大男の体を一周して、定省は彼の正面に立った。太刀は抜いたままである。「御父君の籐大納言さまが、息子の重態に甚く悲憤なされてな、さんざんに鞭うって追い払ってしまったということだが」

「季満が……………」
（無念……………この身が呪わしい！　なにが貧乏くじを引いただ、一等しあわせにのうのと暮らしておったのは貴様ではないか、道説っ！）

道説は齒齧みしてうなだれている。しばしの沈黙を過ぎたあと、にわかにかい含みの声で名前を呼ばれた。面を上げると、はたして定省は微笑を浮かべていた。

「おのれを責めておるな。お前のようにひとの痛みを我がものとする義士は、あるいは上古の震旦などにはそれなりにおったのかもしれぬが、当節にはしごく珍しい。若輩が知ったふうなことを、などと思つかもしれぬが、狐狸の化かし合う平安京にあってはなおのこと、そう感ぜられるのだ。実感だ」

「買いかぶりにございます、道説めは」

「そう、お前はそう言う。言うし、真実そのように思っていることはわかつている」と、道説の言を熱くぼく遮つてなおもいわく、「そういうお前をわたしは買っているのだ。お前に初めて会ったときから、逐一お前の言説、行動をつぶさに見てきた。ことお前的人格見識について、わたしに見誤りなどあるはずもない。道説、そのお前が、この度は太政大臣に……基経に肩を入れたな」

（ああ……これが目的であつたのか！ 夢か現か定かでなかつたあれは、やはりまことの記憶であつたのだ……）

定省の表情から、とうに笑みは消え失せていた。代わりにそのうりぎね顔を占めているのは、怒りの色。それも手ひどい裏切りの果てに募らせるような、深いところに根ざすものである。

「この日本国を病み衰えさせているのは、正しくあの者よ、道説。応天門の騒動で汚らしい陰謀をめぐらせてより、かの一族の手に不当に握つた政権を恣にし、久しく聖上の聖明を壟断し奉つてきた塵心の亡者！ 君側の奸臣！ 禁中の巨悪！」

まるで親の仇を語るように、定省は唾を飛ばして放言する。口を極めて罵倒する。道説は言葉もなく佇むのみだつた。ひとがひとをこれほど憎悪もあらわに罵るさまを、彼はかつて見たことがなかつた。

「知つておるか？ 清和上皇は彼奴に弑されたのだという噂がある。讓位を無理強いしたあげくの、神をも恐れぬ非道よ。要職の人事を掌握しおる彼奴めならば、仕人や医師を通じて御物に毒を混ぜることくらい造作もないに違いない」うろろると行きつ戻りつし、拔身をいらいらと振り回し。定省はまことらしからぬ、狂人の態である。「前帝におかれては、お勞しくも御幼少のみぎり、右も左もおわかりにならぬまま彼奴に擁立せられ、長じてよりのちは乱れた政道を正さんと御新政に望み給うやいなや、それを阻み奉らんとしたあやつめによって一方的に廃位せられた。自らの意志に沿わぬものは、たとえ天子といえども容赦はせぬ。御稜威にまつるわ

ぬ、あの不敬極まる奸夫！」

（あの太政大臣が……にわかには信じがたいが……）

「それほどの悪に、お前は肩を入れた！ 命を救った！ 釈明は聞かぬ。あの者の命を狙うものが、性いやしきははずはない。それをお前は阻んだ。結果を見る、一体だれが幸福になり、どれほどの人間が不幸になった。たとえいかなる理由あつてのことでも、お前の犯した罪は重い……！」

まさしく道説がさきほど説いたように、定省は腋を締め、大男の体に肉薄し、その首に太刀の切っ先を擬した。

ふいに佑の言葉が思い出される。

『ご忠告申し上げます。今後、藤原北家とお関わりありませぬよ』

『聖上、ひいては万民への背信です。奸臣に阿つて位を購う、汚らしい行為です』

普段の彼ならば、たとえ相手が定省であつても滔々とおのれの正義を語ることができたであろう。しかし、

（おれの行いが間違つたものであつたとは思えぬ。思えぬが、長

恭どののは、季満は……）

彼の太いはずであつた骨子は、にわかには揺らぎ始めていた。

「ああ、道説、道説よ」

と、定省は急に落ち着きを取り戻した様子で、そう言った。ちょっと芝居がかつた仕草で、太刀を握つた手をもう一方の手で押さえつけるようにして太刀を降ろし、

「すまぬ、許せ。取り乱した。お前にいま話したような事情を理解できていたわけではないのだ。お前はただ頼られて応えただけなのだ。お前はそういう、義理堅い男だ」

再び熱っぽく語る。道説にはなんとなく、定省が自分ではない別の誰かと話しているように思えた。

このような感情はたびたび体験している。たいていは道説のことを「頼もしい」とか「清廉実直」とか「律儀である」などと誉め上

げる人間に対して勃起するものであった。

（おれに学がなく、見てくればかりが立派であるからだろう。みなおのれの推量のうちで、もっとも単純で、いちばん簡短で、いつとう高潔な……そういったものとおれを結びつけたがる。おれには考えごともはかりごととも似合わぬから。むつかしいことは考えられぬと思われるから）

全ては誤解である。が、その誤解の住みよい家に安住することに慣れきってしまった彼に、いまさらどうしてそこを出て行くことができたであろう。事あるごとおのれに学がないと断ずるのは、実のところ格好の言い訳にもなっていた。自分に向けられた偽りの好意の目を塞いでやるだけの勇気がないことに対して、そして自分がありのままに評価されないことを忝なく思おうとする、自らの良心へのせめてもの慰めに対して。

道説はようよう「買いかぶりにございます」とだけ答えた。

「道説、お前はわたしを失望させてはならない。もしわたしが」と言つて、定省は思い直したようにいちど言い淀んだ。

聖上にも幾度か、お前と魚腸のことをお聞かせしてある。いとも御叡感あらせられたご様子で、畏くも『尚武の風や良し』との御褒詞まで賜つてな」

「聖上が、この、道説ごときに……」

一天万乗の身が七位の下臈に言葉を賜るなど、普通では考えられないことである。いわば太陽が突然、自分に向かって口を利いたようなもので、御簾越しにすらその姿を目の当たりにしたことがない道説は、すっかり畏れ入って内裏のほうへ向き直った。そのまま最敬礼する。

「聖上はお前の忠信を嘉せられておる」大男の様子を満足げに見やりながら、定省はようやくやく屈託のない笑顔を見せた。「お前がこの先よこしまなる者の甘誘を遠ざけ、魚腸剣をもって公辺の憂いを除き、最大の敬信をもって大御心に沿い奉るなら……聖上は、わたしは、必ずやそれに報いるであろう。禁裏に昇り、聖上にお目通り

かなう身分に、お前はなれるのだ。道説」

定省の声は、すでに親王のそれである。臣籍に降りたとはいえ、「王侍従」の言葉にはいまだ薄れぬ皇族の後光が耀いでていた。

「……勿体なきお言葉にございまする」

「道説、今後ふたたびあのようなことはしでかしてくれるな」

と言つて、定省は握つたままの太刀を決まり悪げに収めた。

「それとだ、いま聞いた話は」

「いたしませぬ。何人といえども」

「うん、それでいい」道説の肩を伸び上がつて叩いて、定省はふと思いついたように空を仰いだ。「ああ、もう正刻か。引き留めてすまなかつた。大内裏へはなにか所用あつて参つたのか？」

「は、いえ」と、とつさに答えたとたん、それまで意識の外に追いやられていた、長恭にまつわる懸念ごとが息を吹き返した。そもそも彼は長恭の消息を窺いに來たのであった。「……はい。長恭どのの噂を、知人が耳に入れましたもので」

定省は口角をあげて「吾妻か」と笑つた。

「おわかりですか」

「うん、あれにも久しく会つておらぬが……それはいい。こたびの長恭がことについては、あまり気に病まぬがいい。お前がいよつといまいと、あれはああなつたであろうゆえ。惜しいことだが」

「……長恭どのは、藏人を解任になりますか」

「……あれはすでに仮寧を申し入れ、受理されている。今はお前と同じく休職中だ」

定省が言葉をはぐらかしたのを聞いて、道説は暗澹となつた。はつきり言わないのは、肯定しているも同然であつた。

長恭のあの松を咬んだ太刀　その折れる音が、ふたたび耳をついたような気がした。進むべき道を閉ざされ、寄る辺をなくした彼が取りすがつた幽き希望の糸。凭りかかれなるとわかつていても、彼はそれを掴んで引くよりほかなかつた。傷つけられた自尊心と、その由来を失つた自負とが、彼に「何もしない」という選択肢を選

ばせない。

若く性急な彼にとって、時の経過とは常に軟膏ではなく、海水のようなものであった。それに晒されれば、彼の芯鉄は錆びて朽ちてしまうのである。

「ではな、道説。体を厭えよ。前にお前は快癒したなどと言
うたが、嘘であることくらい調べはついているのだ」

捨て台詞のように言い置いて、定省は踵をかえした。道説がその
華奢な背を無言で拝すると、

「そうそう。そういえば……何月であったかな、お前の兄が帰京
するのは。舅どのと共に久方ぶりに酒席を設けようと思っておつて
な」

それに気が付いたように、数歩あゆんだところで振り返り、青年
は朗らかにそう言った。

「どうだ、お前も」

「はあ？ 兄が、で、ございますか？」

人目をつくるう余裕もあらばこそ、道説はまったく素直に仰天し
た。晴天の霹靂であった。

（兄上は昨年、伊予洲へお下りになったはず……）

「京を偲ぶ歌を聖上に贈り奉ったとかで、いつとき帰京が赦され
たということだが お前、ひよっとして知らなかったのか？」

「あ、いえ、少々聞き間違いを……も、申し訳ありませぬ、道説
も詳しい日取りは、存じませぬもので」

胸がどうしようもなく痛む。後ろから何者かに刺されたような気
分である。彼はなんの報せも受けていなかった。

（本家は……義姉上は、おれに知らせまいと……）

感情のいろを消して佇立する大男をいぶかしげに見やって、定省
は「本復まで無理はすまいぞ」とふたたび背を向けた。

「兄上が、ご帰京なされるのか。そうか……」

聞こえなかつたのであろう、定省が振り返ることはなかった。

The Wailer VI

四月七日 庚戌 申二刻
かのえいぬ さるのこく

「あー、こら降りまつせ」と、囁く声が耳をかすめて、道説はふと俯けていた顔を上げた。後ろから追いついて来たのか、すぐ横を見知らぬ男が追従しているのに卒然と気付く。

男の言葉通り、空は見紛いようもなく雨気を帯びている。午前の陽気などすっかり鳴りをひそめ、一様に暗い棚雲を敷き詰めた曇天の、その一角がわずかに、太陽のありかを示して仄明るんでいるのが覗かれる。

天気が自分の心を代弁している……などという繊細な憂愁に囚われるような男ではなかったが、彼の心は湿気ていた。

「左衛門の旦那はん、ぼーっとしてどないしりましたのんや」

「……どこかで会ったかな」

妙に親しげに声をかけてきたのは、あちこち接ぎの当たった帷子で矮躯を包んだ、鬢の白味がかった初老の男である。物売りと思しい、その背に小さな蔓編みの目籠を負っている。

見覚えのない顔だった。が、記憶の糸を手繰ろうとするまでもなく、じきにその正体は知れた。

「いやあ、会ったことおへんのやけんど……ほら、九条のもんどすかな」

(で、あろうな)

時刻柄、朱雀大路の往来に人は減りつつあったが、その中であつてさえ、大男にちくちくと向けられるなどはない奇異の目は感ぜられた。件の鬼退治騒動より三月、珍奇な動物を見るような眼差しには、はや免疫じみたものが出来つつあった。

そしてそのうちの幾人かが声をかけてくることにも。

「よくおれがわかつたな」

「ああ、旦那はんえろういこおすさけ、一町はなれとつても見えはりますわ」

と、男は無邪気に笑った。

(……で、あるうな)

自らの上背うづせに劣等感を抱いてより、すでに久しい。久しすぎて平素ひらに評ぜられれば、機を得たりとばかりにその存在を主張しだした。彼はさらに心を暗くしたが、男はなにも間違つたことは言っていなかつたので、反駁はんぱくのことは浮かんでこなかつた。

「どこ行かはおつもりや知りまへんけどな、こら一雨いちあめきまつせ。これから帰るとこや言わはるのやつたら、いらんお世話どすけど」

大男の眼下がんごを行きあう人びとの中には、男の「こら一雨いちあめきまつせ」との推量すいりょうに基づもとづくものであるう、菅笠すががさや藁蓑わらみのを具するものが散見された。声をかけてきたのは単純な親切からのよう、道説に兩具の用意のないのを妙に思つてのことだつたらしい。よくよく見れば男の態度には、以前に話しかけてきた有象無象うしやうむしやうの人びとがおしなべて浮かべていた、用もないのに声をかけてしまったことへのささやかな後悔のいろは見られなかつた。

(用もないのに、か。お互いさまだ。その後悔のいろこそ、とても比べられるようなものではないが……)

男の脚の長さを慮おぼつて、道説はこころもち歩を緩ゆるめたが、止まることはしなかつた。彼は五条坊門小路ごじょうぼうもんこうじは菅原邸すがわらていへ向かう途中であつた。

義姉ぎしを問た質たしに、である。少なくとも本家を目指すに当たつて、そのような指標しひひょうのごときものがあつた。思い立つて朱雀門すざくもんを出るまで、ではあつたが。

(いったい何年お目にかかつていないと思つている？ あの本家を、義姉上あねうしえを、問た質たすだと！ 相手は淑野しよしのではないのだぞ……)

ふだん万難を排して敬遠している、菅原本家は道説にとつてましく鬼門であつた。一步ゆくごとにあやふやな指標は透きゆき、今ではただ自虐的に、なんらの益なくしていたずらに神経を摩滅まげんしているかのようにも思える。それでも踵かかを返さないのは、ひとえに兄を慕うがゆえであつた。

「お前も……用意がないではないか。その態なりでそんなものを担いで、雨天あまなに商あきなうつもりか」

心中の湿気に倦うんで、道説は手っ取り早くかたわらの男へ逃避をこころみた。

「うちは帰るとこどす。やあ、背エの菓子かしが笠かさに変わつてくれればゆつことおへんのやけんど……」

道説に示すようにして、男は横を向いて背を軽く揺すつてみせた。いまだ熟し切らぬ覆盆子いちじが甘にじほど、蓮はちすの葉を敷いた目籠めかごの底にわだかまつている。

（会あつてくれるだろうか、義姉上は。今日は雨が降るのか。いつぞやのように、日が落ちるまで門の前に立っていないなければならないのなら……参つたの、これは）

こころみるまでもなく、逃避は失敗に終わった。覆盆子の果肉の淡紅色が、華へたのまわりの艶めいた白が、菅原邸に好んで群植ぐんしょくせられた紅白梅こうはくばいを想起させた。見るもの何もかもに、今つとめて考えていたくない事柄との何かしらの共通点を見いだしてしまう。小男の浅黒い顔だつて、じつと見ていれば兄のように見えてきたことだろう。

「朝からイチゴイチゴゆつて声張り上げとるんどすが、いや売れへん売れへん……」言つて、器用せいなに背の籠かごから一粒つまみ出してにっと笑つてみせる。商売しょうばいつ気の垣間見える仕草で、どうやら声をかけてきたのはまんざら親切からというわけでもなかったようだ。「旦那だんなはん、おひとつどうぞっしやる。朝摘あさとんだばつかで古いことおへんし、ちよう細こまいけどおいしおっせ」

（義姉上は菓子など召し上がるであろうか……）

「うむ……貰もらおうか」

道説はなけば思考停止のまま懐を探り、十文の銭を手渡した。彼の心境からすれば、これから訪^{おも}なうひとへの土産^{みやげ}、というよりも、訪問の正当性をいくらかでも濃くするための投資、とでも言ったほうが正しい。小男の足に合わせていても、菅原邸への道である五条坊門小路の辻^{つじ}。道説の鬼門は、否応なしに近づいてくる。

「旦那はん、全部お買い上げで？」

「うむ……」

道説はうわの空で生返事^{なまへんじ}を返した。

「……十文じゃ足りまへん、もう十文」

「うむ……」

道説は生返事を繰り返して、もう十文を掴みだした。

「……籠も要りますやろ、もう十文や」

「うむ……」

道説は言われるままに、さらに十文を手渡した。これが手持ちのすべてだったのだが、彼には目下^{もっか}、刻一刻と近づきつつある鬼門の辻しか見えておらず、自らがおけらになったことになど気付きもしなかった。

「いやいや太っ腹な旦那や、ほならおおきにどうも」

「ううむ」

腰^{いちへつ}に下げていた袋に素早く銭を仕舞^{しま}い込むと、もう小男は道説に一瞥^{いちへつ}もくれなかった。極めておざなりに礼を述べるや否や、木の実を抱えた栗鼠^{りす}かなにかのような、非常な素早さで雑沓^{ざつとく}に飛び込んでいく。あんがい若かったのかもしれないなどと、道説はとんちんかんな感想をもつてその健脚^{けんぎやく}を見送った。

（そう、兄上はよく柿を召し上がったな。義姉上はどうだったであろう。菓子など召し上がったかな……）

大男は籠を両手で抱えたまま、五条坊門小路へと折れていった。

「よくお聞き。このまま目をつむってまっすぐ歩いて行って、百歩を数え終わったら目を開くんだ。そうして最初に目に入ったお家^{うち}

が、今日からお前のお家になるんだよ。いいね」

耳の裏に遠鳴りのような声を聞いて、道説は足をとめて立ち竦んだ。

(どれほどの時を過しても、あれを忘れてはくれぬのか。この学才に乏しい頭の、しかし記憶力だけが達者であるとは！)

廿年以上前に聞いた、それは母なるひとの最後の言葉であった。彼を圍繞するすべてのものが、古い記憶のなかの風物そのままに高々と聳ゆく。この通りへ差し掛かるたびに襲われる、虚しくも憂わしい郷愁のような情感。たちまちに自らを五、六ほどの童子に立ち返らせてしまふ、この呪いのような記憶が、彼をしてこの小路を避けさせる最大の原因であった。

彼は庶子だった。

母に背を押された足で、幼い彼は目と瞼のあいだの闇をさまよい歩いた。その果てに紅白梅の咲初める菅原邸が見えたときには、

(しばらくは目が離せなんだ。幼心にも、こんな家に住めたら言うことはないと思うた)

棟門のかたわらで、わななく膝を叱咤する童子を目の当たりにした家の主は、ちよつと考えるふうをして見せ、じきに諦めたような顔つきをした。恐らくは彼にも誰の子か判じかねたのだろう。

「上げなさい。人が見るから」

これが父なるひとの第一声である。童子の手を取った中年の舎人は憐憫を隠さず、なにくれとなく彼に話しかけながら簀子縁に抱き上げてくれ、手ずから真つ黒に汚れた顔を拭いてくれた。

「今日からここがあんたのお家だぞ。よかつたなあ、お優しい旦那さまで」

(思うだに、過分な扱いであった。そしておれは幼く……なんと愚かであったことだろう)

それから誰に目通しされることもなく、彼は屋敷の南側にぼつんと孤立した、下屋のような体裁の小屋に連れて行かれた。童子を陶然とさせたあの梅の木は、池を挟んで遠く母屋にあり、なんだか裏

切られたような心持ちを覚えたのが思い出される。

道説はむしろ人目を気にして、物思いに耽りながらとぼとぼと歩き出した。童子の足で百歩を数えた道のりも、大男には目睫の間である。

彼は厚く遇されることこそなくとも、決して下人のようには扱われなかった。なにをせよと言われることもなく、衣食も足り、ごくたまにはご機嫌取りのように玩具も与えられた。実際、菅原邸で暮らすようになって二年ほどは、母がこの家の人間に言い含めたからそうしていられるのだと信じて疑わず、いつになったら自分を迎えるに來てくれるのだろうなどという、無邪気な考えのままに過していたのだ。

彼はその素性からか、単に住まいの立地のせいか、家の中のあらゆる階層の人びとから敬遠され、意図して遠ざけられていたようだった。虐待の石礫は飛んでこなかったが、親しげな言葉ともまた無縁であった。彼は終日ほとんどひとりで過した。話し相手といえ、恐らくは彼の世話を命じられていたのだろう、抱き上げて顔を拭いてくれた件の舎人と、その妻だという端女のみであった。

彼の置かれている正しい座標を詳らかにしてくれたのも、また彼らだった。よかれとの配慮からそうしたのだろうことは、しかし十にも満たぬ童子の理解には余った。

自分が実は、この家の人間であったのだという真相はさておき、母がもう二度と逢いに來てくれぬであろうことを説明されて、幼い彼は悲憤した。泣き喚きながら舎人を打った。ただうなだれて、ひと言の弁明もなく、一打の反撃もなく、童子のなすがままになる舎人。彼はがむしやらの打擲の果てに、自分の中に怒りと悲しみ以外のものが兆すのを感じた。前に説明された、自らの素性。彼はこの屋の主人の息子で、舎人はその召使であるとの認識が。

道説は恥に打ちのめされて、再び立ち止まった。ふと目の前に植わっていた一本の柳に、奇妙な既視感を覚える。この小路に來るたびに似たようなことを考えるので、いきおい立ち止まるのも同じよ

うな場所になつてしまふのだろつ。

（鬼よ天狗よと罵られたのも詮なきことよ。おれは確かに、さよ
う嘲られるだけのことをしてきたのだから……）

明くる日、彼は手製の棍棒ひとつを提げて池を渡り、こころみに
目につく人間を片端から打つて回つた。誰も彼も逃げるだけで止め
には入らなかつた。味を占めた童子は実験の最終段階として、父の
妻（彼の母はあんなに着ぶくれているはずはなかつたので）が可愛
がつていた猫を打ち殺してみた。

「賤女腹め！ お前のような鬼子は旦那さまに言つて、すぐにも
この屋から放り出させてくりよう！」

父の妻は青筋を立てて童子を面罵した。実のところ何を言つてい
るのかしかとは解らなかつたのだが、彼を皆が言つような「お前さ
ま」以外の、「しずのめばら」と名前をつけて呼んだのに、童子は
たいへん気をよくした。

結局、彼は家を追われることはなかつた。咎めるものもいなか
つた。父なる人が叱りに来はしないかという、かすかな期待があつた
が、甲斐はなかつた。ともあれ 童子は自らの特権を自覚した。

その日から数年ののち、左京五条に一帶の貧しい子らを率いて練
り歩く、賤丸を名乗る少年が現れた。徒党を組み、通行人に難癖を
つけて小突き回り、腹が減れば恐喝まがいのことも平気でやる。小
狡い集団で、大人が本気で乗り出してくる一步手前をわきまえてい
た。近隣の人びとの、賤丸を恨み憎む心は日増しに募り、その言の
端にはひそやかに、五条三坊の屋敷に住まふ公卿、正四位下菅原是
善の名が繁く上せられる次第となつた。

（父上もどれほど、おれを恨みに思つていたことだろつ。 つ
いぞ叱言のひとつだに頂くことはなかつたが……）

家の誰も制することができなかつた童子 賤丸の倨傲は、ある
日だしぬけに粉碎されることになる。

いつもどおり、たまたま遊び半分で突つ掛かつた僧に、賤丸ひき
いる卅人あまりの少年たちは悉くぶちのめされたのである。二度と

悪さをしでかす気の起ころぬようにと、一人ひとり丁寧に左腕の骨を折って回る周到さであった。

「他のもんはな、九条は施薬院へ行って、事情を説明して診てもらたらええ。そやけどおめえは別や。おめえみてえな糞餓鬼の芯は、腕一本へし折った程度じゃ折れたりしいひん」

身丈にまるで合わぬ、擦り切れた直綴を身につけた巨僧は、そう言つて賤丸の首根っこを引つ掴むと、菅原家へ断ることもせず音羽山へと拉し去った。のちに聞いた話では、近隣住民の訴えに業を煮やした父が、彼をむりやり僧籍に入れんとしてはかったことであつたらしい。

音羽山での生活は、実に二年を数えることになる。今までの自由と暴力に占められた暮らしは、代わつて説教と検束に彩られた。棒きれを握つて幾度、僧を殴殺せんと打ち掛かったことだろう。そのつど僧は似たような棒きれ一本で、それこそ賤丸を足腰の立たぬくらいに打ち据えた。

「おめえは腕力の使い方を見く間違つとる。特に得物の使い方なんざ目も当てられへん。棒きれ握りゃあ強うなれる思とんのやるけどな」

僧は賤丸のすべてを否定した。彼は自らにつけた「賤丸」の名でさえ呼ばれず、

「頭もあらへん、力もあらへん、ひとの落とし物をついばんで生きて、生かしてもらつてもることに気が付かへん。おめえは犬畜生と同じや。いや、犬かて呼ばれりゃ返事くらいしよるわな。ほならおめえは雀や」

賤丸は「チュウ」なる不名誉な名前を貰つた。呼ばれて返事をしなければ容赦なく打たれた。叱られたことも打たれたことも、大人の言葉に従つたことすらもほとんどなく、同年代の阿諛追従を喰らつて肥え太つた彼の自尊心は、日を追つて萎びていく。

山に連れてこられて二月目、賤丸はとうとう泣いて許しを乞い、家に帰してくれると僧に訴えた。僧は聞き入れなかつたが、にわか

に態度を軟化させ、

「この山で座学と練行を修めてな、雀が人間さまに生まれ変わるくらいの努力をおめえが見せたなら、そのときはちゃあんと京へ戻したる」

と請け合つた。

（妙法先生……今はいずこにおられるだろう。来し方の礼を述べたいものだが……）

「下睦まじく、夫唱えれば婦随う。外にては傳訓を受け、入りては母儀を奉ず。諸姑伯叔あり、猶子児に比す」

道説の目の前には、懐かしい菅原邸の棟門が口を開けていた。まだ声変わりのしていない、黄色い子供の声がいくたりか、千字文を素読しているのが聞こえてくる。菅家廊下 邸内に設けられた講筵には、いまだ幾人かの生徒が残っているようだ。

「孔だ懐うは兄弟なり、気を同じうし枝を連ぬ。友に交わるに分を投じ、切磨箴規せよ」

「孔だ懐うは兄弟なり、か」

十五歳の秋、賤丸は僧に伴われて菅原邸へと帰宅した。

あれほど帰してくれと懇願していた彼は、しかしいざ帰宅する段になって、山を下りるのを躊躇した。いったい彼を迎えてくれる、どんな人間がいるというのだろうか。自分が今までしてきたことを思えば、自らの帰還を喜ぶものいようはずがないではないか。

少年の煩悶には取り合わず、僧は菅原家へ訪ないを入れた。賤丸を迎えたのは千字文の素読ではなく、見知らぬ男であった。

「このたびは愚弟がいかにお世話になり、感謝のしようもございませぬ。ご面倒をおかけ申しました」

事態の説明を求めるでもなく、追いつ返すでもなく、男はそう言つて烏帽子が地面にくつつくくらいに深々と頭を下げた。今にして思えば、兄は恐らく父を問い質すなりして、事の次第を把握していたのだろう。

「おれはなにもしとらへん。この子オはほんまに手エのかからん、

ええ子オやったで」と、僧は眉ひとつ動かさずに嘘をついた。「この旦那はんからはな、この子オは人間の言葉がわからん鬼子や、さっさと得度とくどさせて清水きよみずのお堂に入れたってくれ言われてなあ。

そやけどちよう話してみればなんや、普通の子オやないか」

男は「返す言葉もございませぬ。すべては私どもの監督の行き届かぬがゆえに」と、顔を伏せたまま詫わびた。僧は責難せきなんの色を隠さなかつた。

「あんたを悪しゅうゆうわけやあらへんけどな、あの一連の悪事はな、なんもかもお家のせいや思いまつせ。まるで教育がなつてへんのやから。最近はてめえの指導の悪さを棚に上げくさつて、手エに追えへん子たちを片端からぼんぼんぼん寺に放り込もうとする、おつむりの中に糞くその詰まったような馬鹿野郎が増えましてなあ、ほんまにかなんのどすわ」

ぺらぺらとまくし立てると、僧はそれを捨て科白いっせに、賤丸に別れのひと言もなく去つてしまった。彼の言った「ええ子オ」のひと言が、賤丸の聞いた最初で最後の誉め言葉であつた。

男は無言で、去りゆく背せなにもう一度あたまを下げた。他ならぬ自分のことで、他人が頭を下げるのを見て、賤丸は甚だしく奇妙に思つた。彼の行為を代弁する人間など、生まれてこのかた目の当たりにするのは初めてのことだったので。

それからどれほどそうしていたことだろう、ようよう頭を上げた男は、いきなり賤丸をぶん殴つた。殴られるのにすっかり慣れていた賤丸をして悶絶もんぜつさせるほどの、それは凄まじい一撃だつた。

「菅家かんげの子がよくもあれほどの狼藉ろうじやくを行つてくれたなっ！ 兄として情けない！」

拳骨に況まして衝撃的だつたのは、賤丸を「菅家の子」と宣のたまひ、自らをして「兄」と称した男の言葉であつた。

殴られた頬が、焼印を押し付けられたように熱かつた。僧に百度打擲されようと流すことのなかつた涙が、母との別離を説かれたときより、再び流れまいと思われた涙が、そのとき滂沱ほうたと溢れ出た。

かつて、かの舎人たつたひとりだけが彼に与えたもの 賤丸が菅原の人間であるとの約束を、兄は拳に乘せて彼に贈つたのだつた。

「さあ立て、お前をこのまま家には入れぬぞ！ まずは詫び行脚だ！」

いまだ往来のある時刻であつた。騒動に好奇の目を向ける人びとを一顧だにせず、兄なるひとは声を嚙らして泣く賤丸の首根っこを掴んで立たせ 夜が更けるまで彼を伴つて、近隣の家々に頭を下げて回つたのだつた。

「賤丸のしずは、賤女のしずか」

兄は、詫び参りの中途にそのようなことを問うた。

「父上がつけたのか、いや、母上か？ なんにしる酷い名だ」

自分でつけた名前だったので、賤丸は少しがっかりした。兄はちよつと思案氣に首を傾いだあと、

「お前はちびだから、そうだな、よし、お前の名は阿高城としよう。音羽山とまではゆかずとも、お前が丈高く立派になるように。」

今日からお前は高城丸を名乗れ」

彼の頭に手を置いて、「高城丸」と呼んでくれた兄 菅原道真

との出会いは、道説が菅家の門を叩いてより、実に八年後のことであつた。

The Wailer VI (後書き)

月一連載はまずい、せめて隔週にしたい……。

The Wailer VII

四月七日 庚戌 申三刻 かのえいぬ かののさんこく

門を潜るのをためらうことしばらく、道説みちとぎはふいには横合から、明らかに自分を目指してやってくる足音を聞いて取った。軽やかな双足と、細い杖の石突とが土を突く音は、その主がこれから彼に言わんとすることを予言しているかのように忙しい。

(田達音先生 でんたつおん)

「たきか。何をしに来た」

道説は数歩さがつてあたまを下げた。

「田達音先生、御無沙汰をいたし」

「挨拶はいいのだ、とにかく、それ、もうちつと離れなさい、門から。中から見えるから。ほらほら」

犬を追い払うみたいに手の甲を振りふり、田達音は大男に衝突せんばかりにすたすたと歩を詰めてくる。道説は詰め寄られるぶんだけさがつて「申し訳も、申し訳も」とあたまを下げた。自分はこのではいつまでも童子のままなのだ、彼は改めて情けなさに拉ひがれた。

(おれもいいかげん変わらぬが……先生も一向にお変わりがない) 最後に会ったときも、田達音は今に変わらぬ白髪頭しろがたまに立烏帽子たちえぼし、歳ほどの皺もなく、竹の杖を振り回して唾を飛ばしていたように記憶している。最初に会った頃は「随分と老けたお人だ」などと思つたものだが、十余年を経ても初見の印象に変化はない。四十前後とおぼしき顔は、しかし五十をとうに過ぎたはずで、こうなってみれば「老け顔」にあらず、「若作り」とでも形容できようか。

「ここへ顔を出せばどういうことになるか、考えの及ばんきみではあるまい。いったい何をしに来たというんだ」

厨ぢやくに猪を見いだしたような、予測外の出来事にうんざりしたよう

な言い方である。慌てるということを知らぬひとなので、おそらく本当に猪が暴れていたとしても、同じようなことを言っいて諫めたに違ちがいない。

「は、いえ、あのう、義姉あねい上の、御機嫌ごきげんうかがいに」

「……考えが及ばんのは、ぼくも同じであつたらしい」

老人が眉根を揉み出す。自分はなにか妙なことを言つただろうかと、大男は身を硬くした。

「はあ、さようで……それであのう」

「きこは会わんよ」と、田達音は早口に機先を制した。きこは宣来子のたまの謂いで、道説にとつては嫂あしな、田達音にとつては娘に当たる。

彼にはひとの名前を自分の呼びやすいように崩して呼ぶ、変な癖があつた。「会わんとも。そのくらいのこと、わかるうもんじゃあないか。きみの顔を見ればいつだつて真つ赤になつて怒りだす。喚わめく不機嫌になる。そのあとあれを宥なだめるのもまつたく一苦労だよ、きみはなんだつていつもぼくのいるときにこのこやつてくるんだ、況まして今はこまもおらんだよ、こつちの身にもなつてみたまえ」

「はあ、相あいすみませぬ」

「今日は廊下に顔を出しがてら、孫の顔を見に来たのだ、きみにかかずらつているヒマはないぞ。　なんだね、それは」

老人が杖の石突で目籠めかみを指した。

「はあ、義姉上あねいが召し上がるかと」

「ふーん……覆盆子いちじくか。きみに、あれのご機嫌ごきげんを取ろうといふ魂胆こんたんかね」

「いえ、まあ、はあ」

「以前よりは進歩したようだ、結構なことだ。もつとも、きみが手ぶらで来たことを、あれは怒つたわけじゃあないが」

「はあ」

「そのあたりの物売女ものうから買ったんじゃあなかるうね。あれらは平気で三日四日も経つた青物を売りつける。市に並べてあるのだつていいかげん土埃をかぶつてどうしようもないのがあるが。青果は

自分で育てるか、育てている知己ちぎから譲ってもらうか、二つにひとつだ。薄給取りのきみだからして、そこまでの要求はせんが」

「はあ、申し訳も」

道説と田達音の会話は、たいていこのような遣り取りに終始する。老人のほうが一方向的に喋りまくって、大男のほうはただ背を屈こめて「はあ、はあ」と相づちを打つのである。

「きみにかかずにらっているヒマはないぞ」などと宣のたまったわりに、田達音は一向に道説を解放する気配はなかった。口ほどにもなく厄介えきがいごとが大好きで、以前の訪問に際してたまたま居合わせた折も、暗くなつて棟門むなもんが閉められるまで、彼はああだこうだと義姉に口を利いてくれていた。

美濃介みのすけに玄蕃頭げんぱのかみを兼ねる碩学、田達音こと嶋田忠臣しまだのただおみは歴とした殿上人のひとりだったが、任国美濃には目代もくだいを置き、唐や渤海ぼっかいなど海外使節への対応を任とする玄蕃頭としての職は、その性格上いそがしさに斑むらがあるようで、彼はあまった時間を廊下での講義などに充あてていた。娘家族に会えるのも一石二鳥で、時間が取れればたいがい菅原家のあたりをうろろしているのである。

老人の止めどないおしゃべりの隙ひまを縫ぬって、菅原邸からはふたたび、かすかに千字文せんじもんの素読が聞こえてきていた。前に上さきがっていた子ども特有まはの疎まばらな斉唱ではなく、小さくしんとした女の子の声である。

「そういえば、最初の質問に答えてもらってないな」

ひとつ咳払いして言って、老人はようやく饒舌じょうぜつを打ち切った。透けて見えでもするのか、その目は菅原邸の築地塀ついでいを穿うがたんばかりに注視している。道説のほうを向いていないので、答えを督促とくそくしておきながら、一方で聞きたくないと拒絶されているようでもある。この老人に対して常にそうであるように、道説は結局ことばを選びあぐねて「はあ」と気の抜けた返事を繰り返した。

千字文の素読がはたと止んだ。田達音はむつかしい顔を背けたまま、

「孔懷兄弟。同氣連枝」

抑揚ゆたかに呟いた。「は？」と、道説の巨体はいよいよ困惑きわまつたというふうに縮こまつた。

「……兄のことを聞きに来たのだろうか？　こまが帰京すると、誰かに聞いたのだな」

老人は面にひと刷けの笑みを浮かべて、いちど鋭く舌打ちをした。「は、王侍従さまに」

道説の受け答えは短くひかえめである。田達音というひとは、あたまの良すぎるせいなのか、はたまた性格に奇妙なものがあるのか、笑いながら怒ったり仏頂面で喜んだりすることがしばしばあるのだ。（おれなどにはとうてい理解できぬ、なにか深遠な理由あつてのことであろうが……）

学者才人に盲目の尊敬を抱く道説も、亡き父の愛弟子であり、兄の師であるこの碩学には、予てよりいささか与し難いものを感じていた。職務上、渤海交易商や遣日本使の通辞などもこなしているせいか、ところどころに彼の理解できない言葉が顔を出すのにも閉口を禁じ得ない。

「王侍従、知らんね」と、田達音の言いようはにべもない。「たしかに、こまは遠からず帰京するよ。それを知らせてくれなんだことに意趣を持つたかして、きみは平素忌避するところのここへ来たというわけか」

「いえ、忌避などとは露も」

「きこは忌避しておるよ、きみを。この屋の半分、いや、けつこう出入りがあつたから、今は三分の一くらいかな、それくらいの者たちも未だにそうだ。きこは父親に似て聡明だから、仕人どもの信頼は篤い。あれの言うことはおしなべて真実として聞くから、きみを嫌う人間はあれ以上減らんだろう」

「……はあ」

「きこは聡明で器量よしだが、せまい世界でちやほやされるのに慣れきってしまったから、頑迷で、狭量で、遠くを視る目を持って

いるにも拘かかわらず、とかくそれを細める労いとを厭いとうきらいがある。井蛙シウ不可ウァブウク以エ語コト於コ海カイ者シヤ、拘シユウ於コ虚シユイ也エ。そうだ、蛙かえるに海を語からせるとあんな感じになる「自らの娘を高調たかちょうし子しにこきおろして、田達音ただねはさも楽しんであとを続けた。「懨なまじの才があるから、自分は世の中のあらゆる事象に通じていると信じ、知らぬ事柄は並なべて虚なろであると考えるふしがある。だからひとの話をあまり聞かない。況してそれが嫌いな人間のものなら尚更だ。反駁はんぱくのことは一見理に叶っているようにも聞こえるが、ちよつともものわかった人間が聞けば、童子が両耳をふさいでわあわあ喚わめいているのとたいして変わらない」

「……………はあ」

(ご自分の娘をこれほど悪しざまに評されるとは……………過去に遣り込められたことでもあるのかな)

「まあ、それもこれも、父親を範としたあの子の不運だ。我が身の不徳のいたすところ……………というやつさ」

はたして同意していいものやら、道説は暫時返答に悩んだが、けつきよく「はあ」と相づちを打った。老人の面にかすかな陰の走るのを見てとって、大男は今ほどの判断を早々と後悔することになった。

「詩歌ししかであれば佳作かさくのひとつやふたつも捻ひねってみせようがね。ま、子どもを育てるといふのは、いまひとつうまくゆかないものだ。きみももうちよつとすればわかる」

「はあ」

「話が逸れた。それで？」

「はあ。は？」

不意を突かれてへどもどしていると、老人は卒然そつぜんと門のなかに向き直つて「おひろ、行きなさい。ほら入つてなさい！」と声を飛ばした。

「衍ひひ、ですか？」

道説の問いかけには舌打ちが返ってきただけである。

「じじさま、だあれ？ だれかきたの？」

はたして、棟門の影から小さな尼削頭あまてあたまがちよこんと飛び出してきた。

「あー！ あにさまだ！ あにさまだ！」

道説の姿を認めるなり、放たれた矢のように駆けてきたのは、牡丹の夏汗衫なつかきみに切袴きりばかまとといったいでたちの少女であった。兄の娘で、名を衍子ひろこという。

「おお、久しいなあ、衍や あ、これ、離れなさい。籠を持つておるのだ、ぶら下がるのはやめなさい。これ！」

気難しい故老ころうと相對しているのに疲れ果てていた道説にとって、姪の衍子の登場は思いがけぬ救いとなった。どうも前まへに千字文を読んでいたのはこの子であつたらしい。

「衍や、今はお祖父様とお話ししている最中だから」

「あにさま、これなあに？」

「これが。これは……お前のお母様にお土産に買つてきたものでな」

「すっぱい」

「これ、食うては……すっぱいのか、これは」

「うん、すっぱい」

衍子は「じじさま」そつちのので、きゃっきやと道説の足下をよちよち駆け回り、彼の背によじ登ろうとしたり腕にぶら下がったりしている。齡十二とわい、三ほどになるはずだったが、いまだに稚氣ちねの抜け切らぬ子であった。道説はふいに珠子たまこのことを思い出して、

（たしか珠子どものも同じ年ごろであつたはずだが、これはいったいどちらが年相応なのやら……）

首を捻ることしきりであつた。

黙つて二人の遣り取りを眺めている田達音は、不機嫌を露わにしている。なにかお気に入りお気に入りの玩具を取り上げられた子どものような、拗ねたようないろが見える。

「きみはおひろのお気に入りだな」

との科白せひもどことなく投げ遣りである。木石ぼくせきに烏帽子を乗せたよ

うな道説も、ようやく老人の機嫌を取る必要に思い及んだ。

「あ、いえ、田達音先生には及びも……おおそうだ、衍はお祖父様に学問を見て貰うておるのだったな。うむ、いかい精だしておるようだな」

「ううん」

衍子は首を横に振った。冷や汗が出てきた。

「せ、先生ほどの才人は、この京のどこを捜してもおるまい。衍はこれほどの得がたい師に教えを授けて頂いておるのだから、お言葉は心して聞かねばならぬぞ」

「……見聞きしたことが悉く口から出る、ぼくのようなのを才人とは言わんのさ。小人シヤオレンチイシユエイエルフアエチユフコウ之学也、入乎耳出乎口。才人とは佳よく聞いて寡すくなく話す、きみのようなのを言うのだ」

その言葉も、いったい本気で言っているのか皮肉で言っているのか、たいそう解りづらい。とりあえず機嫌が直っていないことだけは理解できたのだが。

「じじさまはよくわからないこと言うからいや。衍子あにさまと勉強する」

脂汗が出た。衍子も衍子で、「あにさま」を窮地に追いやるようなことばかり言う。

「こまが帰京のことをきみに知らせるなど言ったのは、ぼくだ」
突然、なにを前置くこともせず、田達音はぼつりと言った。

「……………」

「方々の親戚にもそう言つて回った」

「あにさま、こまつてなあに？」

「衍、降りなさい」

「こまつて」

「降りなさい！」

衍子は降りなかったが、道説の剣幕におどろいて大声で泣き出した。衆人の目が門前の三者に注がれている。衍子を降ろして肩を押すと、彼女は両手を目に当てて泣きながら、田達音の背後に隠れて

いった。

（先生はおれに含むところがあつたのか。味方ではなかつたのか！）

「なにゆえでございます。あまりにも無体ななさりよう、道説は承伏いたしかねます」

「無体だと思つかね」

「無論でございます」

「じゃ言わなかつたとしよう。またぞろきこがきいきい言い出すぞ。あれは他人が考えたことには、たとえ全く非の打ち所がなかつたとしても生返事しかしないが、自分で言い出したことは徹底するから、この機会に今後いつさい出入禁止などと言い出しかねない。

こまはこまで、ああいう短気で血の熱い性格だ。こと道理の通らないうことに關しては、一步退いたり宥めたりなんてことは考えもしないから、おのれの舌の及ぶ限りの大舌戦を繰り広げて妻をこてんぱんに打ち負かすだろう。きみはそうなつたあとのこの家がどのような様相を呈するか、想像できるかね」

「は、いえ」

「縦しきこが忿懣やるかたなくも、きみがこまの帰京をと共に祝うことをうべなつたとしよう。さて、きみは前にぼくの言つた三分の一の人間と、きみを汚物かなにかのように考えている嫂と一緒に酒を呑み、食べ物を食べ、詩歌のひとつも捻ることになる。きみはそういう席に進んで出たいと思つているのかね。自ら白けず、座をも白けさせない自信があるのかね。もしぼくがきみの立場なら、そうならないようにしてくれる氣の利いた友人のひとりでも、前もつて作つておくが」

「……は」

道説はすでに前の考えを撤回して、自らを罵るありつたけの言葉を探して煩悶している。田達音は婉曲に、道説への一風かわつた友情を仄めかしているのである。

「こまにはきこに知られないように、あとできみを訪なわせよう

と思っていた。　　ぼくのささやかな謀りごとは措くとしよう。きみはここへきこを問い質しに来たのだな？」

「さように、ございます」

「帰りたまえ。あれは会わんし、聞かん。こたびばかりは力になれんね。ぼくの入れ知恵には違いないが、それはあれも考えていたことだ」

「ひと言でようございます。お詫びとお祝いを」

「きみも会うとは思っていない、そうだろう。このままおとなしく帰ることだ」

「……それでも、ひと目、お目通りを」

「……何度も言わせんでくれ。帰れ」

「……………」

田達音はいちど溜息をつくとき、大男を「豎子め！」と一喝した。

「きみのそういう我を張った行為が、どれだけこの家の平和を乱すと思つている。きみには学習能力がないのか！　誠意を見せさえすれば翻意がかなうなどと、まだ青臭いことを考えているのか！

以前にあれほどの騒ぎを起こしておいて、今またこんなくだらん用件である子の神経をすり減らそうというのか！　この大馬鹿者つ！

道説は恐懼して飛び退る。はずみで目籠を取り落とす。いまだ熟し切らぬ酸い覆盆子は、彼の青い誠意は土にまみれた。嘉納されなかつた。

「……まったくもつて、返す言葉も」

忸怩に堪えかねてうなだれているあいだに、田達音の言う「あの子」が、義姉のことを指しているのだということに遅まきながら気付いて、道説は眩暈のするほどの自己嫌悪に陥つた。

田達音は道説の立場にたつて便宜をはかつてくれたのではなかつた。一片の友情から、あるいは同情から　ひよつとすると純粹な迷惑から、道説と菅家の調停をしてくれていたに過ぎなかつた。なんのことはない、我と我が家族を悪し様に評してみたのも、単に孤立している道説に気を配つたに過ぎなかつたのだ。

（豎子よ、貴様は。いたずらに馬齡ばいを重ねるばかりの、貴様はけつきよく賤丸しずのまるであったのだ。ひとの落とし物をついばんで、生かして貰もらっていることにも気の付かぬ……）

もういちど溜息をついて、田達音はうって変わって穏やかに話しました。声を荒らげる田達音が珍しいのだろう、後ろで祖父を見つめる衍子の眼はおどろきに見開かれています。

「きみは馬鹿だが、いい男だよ。いい男だが、この家では依然として平和を乱す邪魔者でしかないのだ。事情が理解できたのならすぐに帰りなさい。ここへは二度と来てはならない」

「は」

田達音の顔を見ることもできずに、道説はそのまま踵を返して足早に歩き出した。その背に「あにさま、また来てねえ」と衍子が呆ぼうけたような声をかけた。

「父上エ、なにことがございましたか」

（義姉上）

田達音との会話を聞きつけたのだろう、遠ざかりゆく菅原邸から聞こえてきたのは、義姉の間延びした声であった。

「なんでもないよ。ちよっと物売りが通りがかったのだ」

「珍しゅう声をお荒げになつて」

「ああ、こんな青い覆盆子を十文で売りつけようとするもんだから、怒鳴りつけてしまった。ちよっとすっぱいが、どうだね」

「いえ、わたくし覆盆子は好きませぬので。父上も衍子も早

うお入り下され、降つて参りましたよ」

衍子が明るい声でなにか言っているのが聞こえる。二人が門のなかの団欒だんらんに入っていく気配を感じ、生暖かい雨粒が狩衣かりぎぬの肩に浸しむのを感じた。涙がこみ上げてくるのを感じた。

（使庁しちやうへ行こう。仕事に戻らなければ。公務から離れたおれに、生きている値打ちなどない）

歩いているうちにも雨は刻一刻と激しくなって、はからずも彼の涙を隠す体裁ていさいとなった。憂鬱ゆううつに思っていたものが思いがけぬ救いに

なるものだ。道説はあたまのなかの妙に冷めた一隅で、そんなことを考えていた。

雨足はいよいよ繁しげく、大男の歩みを急いそがす。

四月八日 辛亥 未一刻 かのとい ひつろふじいん

背後でどよめきが起こったかと思う間に、「非違ひいあらた検めエ！」との怒声いかりこゑが四条大路しじょうおおじに響き渡った。

(まずい！)

吟師ぎんしは身を硬くして、大路の中ほどに突っ立っている。人の波に紛れて路肩に寄るべきだったが、機いっを逸した。人びとの視線が痛い。どたどたとやかましい足音が近づいてきて、佇たまたむ吟師の傍かたわらを走り抜けていった。疲れ果て、それでも止まることのできないひと特有の、焦燥をそのまま音にしたような足音である。次いで十数人規模の、群れなす小型の肉食動物然とした足音がそれに追いつがる。こちらは検非違使けひいしの手先たる放免ほうけんのものである。

両者は縮こまる吟師を無視して駆け去り、一町も行かぬうちにひとつになつた。

「たすけてえ！ たすけてえ！」

「なあにが助けてじゃ。この、食らえい」

組み伏せられた小太りの男は、太い声できやあきやあと女のような悲鳴をあげている。放免どもがその体をさんざんに打ち据すえる。殴る蹴るの暴行は捕り物にあつては茶飯事で、ことに放免は犯罪捜査の手足として働く見返りに罪を免まぬかしている、はつきり言えば犯罪者の集団なので、そのやりようは自然と荒つぽくならざるを得ない。ひとしきり殴られまくって男が血だるまになつたころ、騎乗した検非違使が放免の駆けてきたほうからとことこやってきた。

「退のけい」

言つて、道ばたに佇んでいた吟師の肩を、検非違使のひとりが携えていた弓の本弭もとはすでぴしりと打つ。一行は騎馬ばかりが五人である。
（おれではなかったか……外出は控えたほうがいいのかもしれないな）

畏れたふうを装つて、吟師はこそそそと人垣のなかへ分け入つた。塹ねぐりを出しなに、呼師が「大路には出るな」と言っていたのを思い出した。

洛中の陰陽法師の取り締まりが苛烈かれつを極めているのだという。

「右検非違使少尉、平輔広である。神妙に縛につけ」

「あ、あ、あほか！ おれがなにしたつちゆう　！」

「ちゆう」のところで放免の蹴りが入つて、男は「ちゆう」と悶もん絶ぜつした。

「呪まじない師、自称平法師。先月某所にて外法無頼の者どもと会合し、公辺を呪詛じゆそせしめんとしたと明白である。相違そつゐないか」

「はああ？　なんやら法師なんて聞いたことあらへんわ、人違いや！　おれは　」

言葉の途中で検非違使のひとりが顎あごを振つた。ふたたび男の体に放免どもの足の裏が降りそそぐ。

「相違ないか」

「た、平法師ゆうて名乗つたのんは、半年も前の話やあ！　今はただの職人や、悪さなんかしてへん！　たすけてえ！」

股間を蹴られて、男は「きゃー！」とひとつ叫んだ。放免の暴行は続く。それきり男が言葉を継ぐことはなかった。

「よし、引つ捕らえよ」

男が動かなくなつたところを見計らつて、馬上から縄が投げられた。両端が輪になつているもので、手を縛つて歩かせようという考えなのだろうが、男は死んだように横たわつてぴくりとも動かない。

仕方なく形ばかり両手を縛られ、彼は数人の放免に嫌々かつがれて大路を退散していった。

（あれは……）

気の毒な男を後目に見送る最中、吟師はふいに人混みのなかに見覚えのある人間を見いだした。人目を避ける意図か、首までをすっぽり覆う尼のような頭巾を被り、その腕はかたわらの男の腕に絡められている。えらの張った厳つい面で、中背だがかがしりと幅のある、ちよつと浦人のような屈強の男である。

なにごとか潜み話でもしているのか、ときどきその男の耳元に顔を寄せているのは、紛れもない哭師であった。

「みなみな聞け！　もし呪い事を生業とするものが身边にいたなら、速やかに京識ないし検非違使庁へ連絡されたい。なお協力者には些少の報謝あり、また知って庇うものには今ほどのごとき手厚い報いのあることを知れ。このたびの追捕は右検非違使少尉平輔広が為業なり」

ひとくさりがなり立てると、鞍上の輔広は配下をともなつて馬首を返した。前に吟師にそうしたように、弓を左右に振りふり「退け退け」と呼ばわりながら、検非違使の一行は右京へと引き返していった。

（哭師……そりやあないだろう。言師が死んでひと月しか経ってないっていつのこに）

ややあつて夢から醒めたように、大路の路肩に寄っていた人垣はめいめい用事を思い出して散っていった。哭師と件の男も連れだつて、吟師の猜疑のまなざしに背を向けて歩き出す。

腕を絡めて肩を寄せあう後ろ姿は、いかにも睦まじげに見える。吟師はやるせない想念に囚われた。彼女はついこの間までは人妻であつたはずだ。

追いかけて問い詰めて、不実を詰つてやろうかとも思ったが、彼は結局あきらめて帰路につくことにした。いまだに言師のことを考えると胸が詰まるのに、その上かつての妻から言わでもの弁解など聞きたくなかつた。

（そういえば、別当が捜しているのだったか。　儘よ）

別当は嫌なやつで、今や哭師もその仲間入りをした。わざわざ駆

けていって事情を説明する労など厭わしい。恐らくはここ最近の取り締まりに鑑みて、自重をうながす腹積もりなのだろうが、

(どうにでもなれだ。せっかく新しい情夫とよろしくやってるのに、邪魔なんかしないと。別当も哭師もせいぜい困ればいいのさ) 捨て置くことにした。

官職をえさに別当の元で過ごすようになって数ヶ月を数えるが、その目的はいつもあやふやで、「誰々を呪詛せよ」などと命じられるのではなく、いきなりなにかの呪物らしきものを持ってくるなり「これに念を籠める」とか、深更に叩き起こされて「あちらへ向かつて加持しろ」とか、とにかく訳のわからないことばかり言われるのである。尤も、吟師に力がないと判断されて、そのような雑事を回されているだけなのかもしれないのだが。

今やすでに仕事に対する情熱も冷めつつあり、陰陽師になる望みなど半分あきらめている。専らただで飲み食いができるから居るのであって、今さら別当の手足を忠実に演じる気などさらさらなかった。

(それにしても、女ってやつは)

「 言師も草葉の陰で泣いてらあ…… 」

と小さく呻いて、吟師は踵を返した。それが聞こえたかのような頃合で、遠ざかり行く哭師がついと振り返ったのに、彼が気付くことはなかった。

The Wailer VIII

四月九日 壬子 酉一刻

(五条……樋口……六条坊門小路)

日が傾きつつある。

ぶつぶつ呟きながら、ぬかるむ西洞院大路をふらふらと往く壺装束がひとり。笠をうつむけ杖にすがってあちらこちらに揺れながら、珠子の足取りはいよいよ乱れる。

明け方からしとしと遣りだした雨のやんだのは、午後のかかりのことであつた。

「臥身に障ろうから」との理由で、父に道説を訪なうことを厳に禁じられてより、珠子は怏々として楽しまぬ無聊の日々を過していた。このあいだまでは日に三通も認めていた文も、返信が間遠くなるにつれて「ご迷惑かしら」と筆を置きがちになり、就中この頃ただでさえないがしろにしがちであつた学問には、日を追つていよいよ身が入らなくなつてゐる。父はしきりに心配して、先だつてなどは張り切つて礼記の幾巻かを持つてきたのだが、結局それらは繙かれることなく唐櫛笥の底で不如意を託つていた。数珠をこねまわして経をうんうん唸つてみるのにもいささか飽いた。

なんといつても彼女は若かつた。ついでに折悪しく恋をしていた。他のことを考えるゆとりなんかないのである。「男女七歳にして席を同じくせず」とか言われても「十有五年にして笄す」などとやり返すのであつた。もつとも彼女はまだ十四歳なのだが。

それでも最近は消閑の夕に、木彫りの小さな仏像を造ることを覚えた。親しい女房のひとりが仏道と称して、下手の横好きでやつていたのを勧められたのだったが、ひそかに思いびとの顔に似せて造ることを思いついてからは俄然たのしくなり、慣れぬ手つきでかりかりやつてゐるあいだ中、覚えずにたにたして傍らの女房を気味

悪がらせたりした。

もつともその腕前のほうは、名匠鞍作止利も紗冠を投げだすほど……とは到底ゆかない。「道説さん」の顔は脳裏に焼きついて離れないのに、できあがる仏像はたいいてい毘沙門天とは似ても似つかぬ蛙のごとき珍相に終着するのである。

(今は五条……次は樋口……その次が六条坊門小路)

まずまずの出来で蛙の彫りあがったところ、にわかには雲間から太陽が顔を出した。雨は静やかに終熄し、女房は急に元気づいてお庭の躑躅がどうのこうのと言いながら部屋を出て行く。珠子は一息つくと、唐櫛笥のうえに並べてあつた蛙仏の群れに新入りを加えた。通算にして十二体目である。壮観であつた。

(蛙の十二神将だわ)

こんな益体もないことを考えてけらけら笑いながら、ふと「道説さんは今頃なにをいらつしやるかしら」などと桃色吐息をついたとたん、珠子は卒然と真顔になつた。

桃色吐息ならぬ青息吐息であつた。あたまの中で彼女に「珠子ちゃん」と呼びかけたのは、なんと身の丈六尺に余る蛙だったのである。信じがたいことだが、どうも道説の顔を思い浮かべて蛙を彫っているうちに、道説の顔が蛙のそれへとすげ替えられてしまったようなのだ。

そののち橘邸から珠子の姿が消えるまでに、四半刻とはかからなかつた。女房の緒太を失敬し、嵐のように着替え、そよ風のようによちよち歩いた。

(五条……樋口……ああくるしい。でも、お怪我をなすつた道説さんはもつとくるしいのだから。貴女がこのていどのくるしみに堪えられないわけではないわ。貴女はまだまだ頑張れるわ……六条坊門小路)

家を飛び出て四半刻ののち、ようやく道説の家宅を知らぬのに気付いた。道説が衛門府の役人であつたのを辛うじて思い出し、大内裏は左衛門府の仗舎を訪ない、検非違使庁にとって返して住所を聞

き、例によつてさんざん道に迷い 珠子はかれこれ一刻ちかくも平安京を逍遙しょうぎょうしている。

少女の細い脚は最前さいぜんからがたがた震え、すでに面おもてはうつむき、食事を撰とつてこなかつたのでしきりに腹が鳴つた。疲労困憊たいの態である。通りすぎる人びとの視線をまれなく集めながら、珠子は西洞院川へ滑落しそうになる。しなだれる柳糸りゅうしに突つ込む。笠から下ろした垂衣たれきぬは滅茶苦茶になる。蛙十二神将かわすじゅうにしんしょうの崇りを疑わずにはいられなかつた。

(五条……樋口……六条)

「ちよつと、ちよつとあんた」

(坊門小路……五条……樋口)

「ちよつと、おおい！」

(大炊御門……冷泉……二条……二条?)

「おいつて ああつ！」

ちよつと疑念が持ち上がったのと、前方から大声が上がつたのと、珠子はようよう物思いから立ち返つて顔を上げた。いったん立ち止まると途端に疲れが噴き出して、足のうらに根が生えたような心持ちになる。

「あんた、聞こえなかつたの？」

声の主は心持ちこちらへ手をかざすようにして、今し駆け出そうとするような格好で凍りついている。

(誰かしら……へんなかつこうだわ)

珠子は膝に手をついて息を整えた。声をかけてきたのは見知らぬひとである。

瞼まぶたのやや厚ぼつたい、眠たげな眼の下に、形のよい小鼻と薄い唇が置いてある。全体にやせ気味の顎あごのほそい顔かたちは、見る人によつては美人と評するものもあるだろう。紛れもない女であつたが、姿は垂首たたくびの水干すいかんに指貫さしぬきという奇態。男装のつもりであるうか、ご丁寧に烏帽子えぼしまで戴いている。長い髪の毛の結わえたものを前に回して、襟のなかへ入れ込んでいる。衣の上からでもそうとわかるほど

の豊かな胸が目についた。

異様な、偉容である。

（まるで傀儡子のひとみたい……傀儡子なんて見たことないけれど。傀儡子のひとに知り合いなんかいたかしら。でもこのひとぜつたい傀儡子のひとだわ、へんなかつこうだもの）

ふうふう言いながら、胡乱気に男女の体を眺めまわすことひとしきり。記憶の底を浚つても似たような顔は浮かんでこなかった。

「あーあ、災難だったねえ」

男女は珠子の足下に目を落として、こちらへ歩んでくる。

（傀儡子つてなににするひとだったかしら。胸が大きいわ）

「おいつたら、聞こえてる？ もしもし」

「はい、はい、聞こえております、なんでございましょうか」

珠子はあわてて八の字を開いた。

「うんち踏んでる」

「きやあー！」

珠子はあわてて八の字を寄せた。足下に円座大の糞が落ちていて、そのど真ん中をみずからの右足が踏み抜いていた。

どうも牛車の落とし物らしい。午前中に雨ざらしになったせいか、はたまた生みの親の栄養状態に起因するものか、適度な粘性と剛性を兼ねそなえた傑作で、足を退けても緒太の底にしっかりとへばり付いてくる。苧麻の紗ごしには土くれにしか見えなかったのだった。路傍のささやかな変事に、二、三の忍び笑いが通り過ぎていく。

疲れ切っていたところに糞まみれの緒太を持てあまして、珠子はいつそしやがみ込んでしまいたい衝動に駆られた。蛙神将の靈障ここに極まれり、といった塩梅である。

「……ほら、脱いで、草履」

「え、うわ」

珠子の打ちひしがれるのを黙って眺めていた男女が、ややあつていかにも業を煮やしたというふうにして彼女の足下にしゃがみ込んだ。そのまま足首を掴んで、糞まみれの緒太を引っこ抜く。

「片足で立つて。そう。足あずけて、ここに。ここ、あたしの膝」
「はあ、はい、あのう、あのうお手が……」
「汚い？」

珠子の困惑顔を見上げる男女の面には、ちよつと侮り含みの慈愛に満ちた笑みが刷かれていた。が、不快のいろは窺えない。緒太を縦にして路面にはばんばん打ち付け、落ちなかつた汚物についてはなんのためらいもなく指で刮げていく。

珠子はふいに、自分が幼い童子になつて、母親に履物の世話をしてもらっているような心境に陥つて赤くなつた。そのいでたちにそぐわぬ、男女にはひとの世話をするのに慣れているようなふしがある。

「牛のならね、そんなに汚くなんかないのさ。人間のは汚いけど」
「あのう、申し訳もありません。行き摺りのお方にこのような」
「見てらんないよ。あんた、いいとこの子だろう。態みりやわかるよ」

男女の言う「いい」がなにに掛かるものなのか、珠子はちよつと判断に迷つた。

「はあ。あのう、お礼をしたいのですが、あいにく今はなにも持つておりませんの……」

「ほうら、いいとこの子だ」

緒太を土で清めながら、娘みたいな無邪気な笑い声を上げる。

（このひと、いくつくらいかしら。ほんとうに傀儡子のひとかしら）

瞥見程度では、若いようにも年増のようにも、下人にも貴人にも見える。妙な格好をしているせいで歳も身分も生業も定かでないが、どうやら人となりのほうは信用できそうである。はきはきしていて快活で、立居振舞には強い母性と、男の態をしているからであろうか、ちよつと父性のような絶妙な硬さをも備えている。女好きのする女でも言おうか、珠子の身の回りには見つきりそうにない性質であつた。

「……あのう、日を改めてお礼をさせていただきたいのですが、お住まいはどちらになりましたでしょうか」

土で手指をごしごしやっていたのがはたと止まった。前と同じような、侮り含みの微笑みが珠子を見上げている。

「あのね、あんたね、そういうことは滅多に言うものじゃないよ」

「まあ、何故でございますか」

「いくら要求されるかわかんないよ。それにね、あんた気付いてなかったかもしれないけど、ついさっきまで後ろに二、三人、柄の悪そうなのがくっついてたんだ。ちっと用心したほうがいいと思うけど」

「まあ。気付きませんで」

あの蛙神将は焼いてしまおうと珠子は思った。

「あたしみたいなのに声かけられたらね、今度は無視するんだよ。履物を脱げなんて言われたら、大声だすくらいじゃないとだめ。あんた隙だらけだから」

俯いて素っ気なく言っているのだが、決してお座なりには聞こえない。心配して言っているのが却ってわかりやすかった。普段は過敏に反応する子ども扱いも、この女にされてみるといつそ心地よいくらいのものである。知り合ったばかりのこの女を、珠子は早くも好きになってしまった。

「よし、ほうらだいぶましになった。ちよつと臭うかもしれないけど、草履のひとつやふたつ、お家に帰りや新しいのがあるんだらう？」

「はあ」

（これが盗品だなんてお知りになったらこの方……どんな顔をなさるかしら）

実のところ、珠子は履物を持っていない。外の用事は女房たちが万事こなすし、外出はすべて牛車である。今日などは例外中の例外、已むに已まれぬ窮状から考えなしに飛び出してきたのであって、自分の脚でどこかへ出かけたことなど、そもそもが指折り数える程度

しかない。貴人の女にあつては常識以前の事柄であるからして、どうやら男女はさほど身分のある出ではないらしい。

「あんたみたいな子がお使いかい。ま、なんたつて無茶なことさせるもんだ。あたしがちよつと目端めはしの利く男なら、どこかの小径こみちに引きずり込んで身ぐるみ剥がしちやうね。たぶんさつきの男どもも、そんな魂胆であんたをつけ回してたんだらうさ。いいもの着けてるもの」

「ま」

「市いちにでも行くの？　今は冗談じちんだけど、もう日が傾いてるからじきに冗談じちんじゃ済まなくなる。お止めやよ、危ないよ」

忠告をありがたく思う一方で、珠子はなんだか既視感のようなものを覚えた。

「いえ、市ではないのです。あとう、ご迷惑ごめいわくついでに、もし知つておられましたらでよろしいのですが……」

道を聞いてみようと思ひ立つたのは、べつに迷う恐れがあつたからではなかつた。近くまで来ていることだし、すぐに方角を見失う自分でもじきに到着できるとは思うのだが、

（なんだか離れがたいわ。もう少しお話しして、お名前なづかひを伺つて、できればお友達になつていただきたい……そうだわお礼れいもしくちや）

「なんだい」

「あとう、六条坊門小路むじやうぼうもんこうじの、菅原道説すがはらのみちいさきというお方のお住まいを存ぞんじでしようか。詳しい住所がわからなくて」

端はなから知っているとは思わなかつたが、ひよつとしたら一緒に捜すと言つてくれるかもしれない。祈るような気持ちで、珠子はできるだけ哀れを誘うようなほそい声を上げてみた。

「菅原道説すがはらのみちいさきイ？　あんた、あれの知り合い？」

「ええっ？」

珠子は瞠目どうもくした。それはこちらの科白せりふであつた。

「あとう、あとう、道説さんとはどのような関係で」

「ええ？ ちょっとそりゃこっちの科白だよ、知り合いなのかい」
「いいえそれはこちらの科白ですわ、さあきりきりお答えになつて」

「さきに聞いたのはこっちじゃないか、なんだい急に元気に」
「まあ！ ひとの前で開陳かいちんするに忍びないようななにかがおりになるでもおっしやるのでございますかあなた！」

このように息急いきいせきききって詰め寄るのも、そもそも「知っているか」などと聞いている張本人の返答としてはいささか自然を欠くのだが、彼女はのぼせ上がるとたいいてい、こんなふうにして幼い地金を晒ひらした。それも恋という暑くるしい太陽の反射でやたらとぎらぎらしたやつを、である。

（ひよつとして、ひよつとしてこの方……でもお歳のころからいえば不自然では……ああもうどうしまししょう道説さんったら！）

珠子は心中、顔だけ蛙とすげ替えられた大男の、不実を詰なつて身悶もえしている。こちらはそもそも、別に愛人でも良人でもないのだから、そんなことをする義理も権利もないのであるが。 件の蛙

神将は焚刑ふんけいにするまえに寸刻すんきやくみにしたがよかるうと珠子は思った。

「関係つてねえ……そうだねえ、気になるひと、といえはそうだけだねえ」

「まあ！」

男女の返答は聞き捨てならぬも、齒切れのわるいものであった。

珠子が悶々と、しかしある方面において甚はなはだ貧困な空想をたくましくしていると、男女は「でもあんたが思ってるようなのじゃないよ」とつけ加えた。

「関係だなんだって、まだ会ったこともないからね、あたしは」

「あら」

「実を言つと今日はね、そいつに会いにここまで伸のしてきたんだけども、どうも留守みたいだね」

珠子の肩がしおしおと萎なびた。

「はあ、留守なので、ございますか。でも道説さんはお怪我で

「でもね、変な女がいたね。下女には見えなかったけど」

「まあ！」

珠子はたちまち肩を聳そびやかした。

「まあね、なんにせよ今日はいないみたいだし、お帰りな。悪いこと言わないから」

「でも、その変な方が……」

「一日くらい放ほつぽつといたってなにか変わったりなんかしないよ。なんにもなけりやそれでよし、ねんごろになつてりや今さらだろ」

「ねんごろ」

「あらいやだよ、そう繰り返すもんじゃあない。それにさ、あんた好いたひとがもてるのって、まんざらでもないだろう」

「まあ好いたなんてわたしそんなことひと言も」

「そんならそんなでもいいよ。とにかくさ、今日のところはお帰り。それでまた明日来りやいいのさ。来てあいつを掴つかるなり女の尻を蹴飛ばすなりすりゃあいいじゃないか」

男女の言う「下女に見えない変な女」については大変気にかかるところではあったが、空はようよう茜あかねいろに染まりつつあり、足はたいそう痛く、腹はたいそう減っている。なにより臭におう緒太で彼のひとを訪なうのにはかなり抵抗があった。ここは男女の言うとおり大人しく家に帰って、再度緒太を失敬する手立てから考える方が利口のようでもある。

「わかりました。お言いつけのとおりにいたします。それではまた明日以降、伺うことにいたします」

「そうそう、聞き分けがいいね。あ、そうだ、ちょっといちおう聞いておきたいことがあるんだけど」

自分の名前か住所であろうと、珠子が「はい、わたしの名前は」と言いかけると、

「いや、それはいいんだけど、あんた土師季満はじのすえみつって知ってる？

件の菅原道説ってやつ知り合いらしいんだけど」

(……季満すえみつどのになんのご用かしら)

一瞬ためらったあと、彼の仕事のことと考えが及んで、珠子は「はい、季満どののことなら存じております」などと請け合った。

(それにしても、季満どのはきつとたいそう有名なのだわ。なんだか知り合ったひとがみなあの方のことを知っておられるのですもの。最初は謙遜けんそんしてばかりいらっしやっただけで、やっぱり人格がお出来になっておられる方はみなそうなのよね)

「きつと腕のほうも抜群なのだわ」と、彼の友人を自負じぶする珠子はちよつと鼻が高かった。

「ああ、ほんとにちよつとよかったよ。その土師季満の住所、わかる?」

「ええ、簡単な絵図を書いてさしあげましょうね。ええと矢立やたてはどこかしら お仕事の依頼でございますか?」

「ああ、そうだよ」
「季満どのは洛中でも随一の腕前ですよ。ちよつと事情に明るいひとは、みなあの方を頼りにいたしますわ。お目が高くていらっしやるわ」

珠子の鼻がぐーんと伸びた。彼以外に仕事を頼んだことは無論ない。ただの知ったかぶりである。

「そうだろう、やっぱ頼むんなら信用できるやつにしなくっちゃ へえ、右京九条うきやうくじょう! こりやまたとんでもないところに住んでるんだねえ。見つからないわけだ」

男女は「助かったよ、ありがとうねえ」と言うなり、それまでの親身な振る舞いからはとうてい信じられないほど、あっさりと珠子に背を向けた。あんまりそっけないものだから、珠子は男女がどこかへ行こうとしているとは考えずに、なにか見つけたか通行人を避けたかしたのだとばかり思いこんだ。

「あ、あ、あら、あのう! もうし!」

よつやく自分から離れようとしていることに気付いて、大声をあ

げる。男女は一向かまわずにすたすた歩いていつてしまつ。このま
ま名前も知らずに別れるのではあんまりである。珠子は「お待ちを、
もうし！ もーし！」などと、周囲のひとの訝しむほどに大きな声
をあげて、去りゆく男女の翻意を促した。

「お名前を！ お名前をお教えくださいませ！ あとご住所と

」

男女は首だけ振り返つて「茅子だよ、じゃあね」と手を振つた。
が、立ち止まつてはくれなかつた。

（わたし、なにかお気に障ることも口にしたかしら。 行つ
てしまわれたわ）

「もうし……」

かすかに寒色を帯びはじめた小暮空の、辰砂の夕陽が道ゆく人び
との横顔に朱を投げかけている。彼女 茅子と名乗つた女の姿が、
小さくなつてひとに紛れて、やがて烏帽子の揺れるのが見えなくな
るまで、珠子は西洞院川の際に茫々然と突つ立っていた。

四月十一日 甲寅 辰一刻

大内裏は真言院の裏手側、あまり日当たりのよくない小圃を前に、
老人の蹲るのを見いだしたのは、辰の中頃のことである。

巻雄はちよつと眼を見張つた。

「……行平さまに？」

老人は刺客に遭遇したようにはつと向き直ると、「巻雄か」と咳
いてひとつ息をついた。声はまつたくの平生どおりであるが、日陰
を戴くせいであろうか、直衣の肩は削ぎ落とされたように悄然とし
て見える。

「これはしたり。在中納言ともあろうお方が、国政を論ずるを惜
しんで花を丹精なさるとは」

「まだ咲かぬ。いや、このようなところで果たして咲こうか」

冗談めかしたつもりだったが、行平はにこりもしない。表情が動かない。なにか屈託を抱えているようにも察せられる。

「朝議ちやうぎにおいででは、ないのでござるか」

巻雄は水を向けるつもりで、言わでものこを聞いた。在原行平ありわらのゆきひらは正三位中納言しょうみいなかみちのなごんの重職、この時刻には外記庁げきちょうに出仕しゅっしして然るべき身である。が、実直方正じつちよくほうせいの彼が朝議をすっぱかしたことにま況して、このような人気がないところで寂しげに土をいじる姿にこそ、巻雄は驚きを隠せない。

「……老いぼれが朝やることとしては、国の舳みよしを左右するなどよりよほど相応ふたわらしかろう」

「常つねの行平さまが言とも思えませぬな」

「そなたとてここにこうしておる」

「恥はづかしながら、拙せつめは職とてなき散位さんいにござれば」

「散位とて散位の務めがあるう」

役職を持たぬ散位にも、一応の仕事はあった。散位寮さんいりょうへの出仕しゅっしがそれであるが、内実は閑職かんしよくもいいところで、現今げんこんでははや形骸けいがいか化して久しい。況して文室巻雄ぶんやのまきおは当年もって七十八。おそらくは大内裏、いや洛中、いやさ畿内における最長老であると言つても過言ではないだろう。

「日本ひのこ広しと雖いえとも、坂大將軍はんたいしやうぐんに撫でて頂いたおつむりは、もはやこの首のうえにしか残つておるまいて。グハハ」

などと吹聴ふいごしてまわる高慢こうまんちきの因業いんごうじじいに、ああせいこうせいと指図さしずできるものなぞいないのである。英雄坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろの御手が触れたこうべと言われてみれば、なんとはなしに後光も射して見えようというものだ。もっとも証拠があるわけではないので、実のところあまり信じて貰えていなかったりするのだが。

「愚拙読書人ぐせつどくしょじんにあらず、膝を畳たたんで筵むしろを暖めるは本意ほんいにござらぬ。楮毫ちゆうごうの振るうに慣れぬとあらば、せめて弓箭きうせんの鳴らすを老残らうぜんの使命と心得申す」

「……よつまわる舌だ。そなたは昔から読書を好まぬくせに、口だけは人一倍達者であった。老残の使命と申したか」

「さよう、拙めごときにもそれはござる。況して三位が御身におかれてはなおのことと愚考つかまつる。かような繰言も常なれば、むしろ行平さまより承るたぐいのごとにござるな」

行平は声を出さずに笑っている。

「まこと、その氣力壮者のごとしか。わたしよりひと回りも上とは、到底信じられぬ。案外、そなたのごとき氣骨者のほうが、政には向いておるのやもしれぬ。言葉が文にもならぬうちより漢籍の岨を登り、明法の洋を泳ぎ、牙笏の杖を曳いて無窮の政界をさまようたが……」

尻すぼみの言葉を飲み込んで、老人は汚れた手を懐に差し入れた。掘り返した黒土のうえに蒔いたのは、花の種であろうか。

「顧みてわが一生、烏有の道のりであったような気がするよ。体は病んだ。眼は霞んだ。脚は萎えた。老体を支えるための杖ひとつのほかに、いつたいなにがこの手に残ったというのだろう。叶うことなら弱冠たりしおのれに、ひとめ会って言うてやりたい。書なんかつまらんから焼いてしまえ、弓をやって体を鍛えて、政なんぞに関わるな……」

巻雄は先頃から瞠目しっぱなしである。彼の愚痴を聞くのは幾十年の付き合いのなかの、まさに今が初めてなのだ。巷間不屈のひとなどと言われる彼は、その手の弱音を吐くのも聞くのも嫌っていた。なにかあつたのだと、巻雄は確信した。

「……そうして、弟御がごとく風雅の道に励まれますかな」

無礼であろうかとためらったが、巻雄は勇気を奮った。行平にあって弟の話は喜ばしいものではなからう。それでも彼の人生を肯定する材料として、これ以上に恰好なものは見つからない。

果たして行平は怒らなかつた。笑いさえした。

「風雅だけならよかつた。女色に溺れてもよかつた。並の女どもが相手であれば」たちまち笑顔が吹き消える。ひとつ長太息を吐

いて続ける。「あれは、業平はまこと好き放題に生き、勝手気儘に死んだ。わたしはあれのように生きられぬ。生きぬ。したが、あなたのようにはなれたやもしれぬな。いや、ちよつと丈が足らぬか」「行平さま。なにかござったか」「ずかと聞いた。蹲る老人は初めて面をあげた。

「……なに、恥には思わぬが、ちと寒い」

「寒うござるか？ 日は昇ってござる」

「懸命に体のほうを合わせようと思うたに、ついぞ着こなすことはできなんだ。それでも、あれほどに着心地の悪い裘でも、脱いでしまえばいささか肌寒い」

(寒い？ 裘？ なんのことやらわからぬが……)

「恥、とは」

「そなたが言った。職なき身を恥ずる、と」

「……なんと仰せか」

ひやりとした。ここまで言われれば巻雄も愚物ではない、その意味は知れた。

「もはや引き継ぎも、滞りなく済んだ。あれほどに仕立ての悪い衣でも、中納言などと名前のつくからには、喜んで袖を通すものもたくさんいよう。すでに權は我が手より離れた、わたしがいなくとも船は動こう」

「それでは、致仕を？」

それはいつさいの官位俸禄を捨て、いち地下人に墜ちるといふことである。

「このたび、冬緒どのともども許された。幾度も請うた末のお許しよ。彼のひとと 마찬가지로遣り合つたが、このうえは位官とともに遺恨をも返上しようではないかなと言われたの」

嬉しそつにしている姿が、巻雄には少し癪であった。在原行平は三位中納言といえども、籾氏、分けてもかの太政大臣の権勢によく抗する、いわば「反藤原」の重要な要害であったのだ。齢七十八にして豊鑠としてゐる巻雄にしてみれば、七十の老齡まで踏ん張った

行平を激賞したい気持ちも勿論あるのだが、それでもやはり「歳若い」ものが弱音を吐いて尻尾を巻くのは癪であった。

「……これで堀川はなおいっそう、その水嵩を増しましような。

京内外の民政を以て鳴らした行平さまが、なんと治水の理を損なわれるとは」

「……………」

巻雄の口調は、どうしても皮肉を帯びたものになってしまう。堀川大臣こと藤原基経にしてみれば、河口にでんと居座って久しくその流れを割っていた岩が、自ら転がっていったようなものである。

「あえて無礼を承知で申し上ぐるが……行平さま、あなたさまの蒔かれた種は、そのようなところに埋まってはござらぬ。芽がなかなか出ぬのに根を負かしては、それは端から蒔かぬのと同じではござらぬか。行平さまの種は秋咲きのやも知れませぬぞ」

「そなたにはわからぬ」

「……………」

斬るようにひとこと言われて、巻雄ははたと黙った。

「そなたは知らぬのさ、あのあまりにも巨大な花圃を」と、巻雄を横目に、行平は前に種を蒔いた孔に丁寧に土を被せた。「耕ずるに儼しき敵を。汗水を注ぎ、心血を注いでなお潤すこと能わなかつた土を。あまりにも強固に根を張った、あの大輪の藤の花を」

そうと言われれば黙らざるを得ない。巻雄の位も、その多くは武人たるを以て、あるいは父祖代々の功績に鑑みたものである。外記序の椅子に腰を下ろしたことは一度もないのだった。

「巻雄よ、わたしもはや七十の声を聞いた。そなたには未だ及ばぬが、もうもう限界だ。疲れてしまった。もう腕が上がらない、膝が立たない。歩けないよ」

巻雄はすぐさま、言わでもの皮肉を口にしたことを悔いた。行平のそれはまさしく、足腰のおぼつかぬ老翁が歩きに歩いて、弱って弱って弱りきった拳句にあげるような、すべてに伏して潔しとせんばかりの、まこと哀れを誘う声であったのだ。

「そうとも、この手になにが残ったというのだ。肉を刮こそげて血を絞り、臟腑ぞうふを剗おひつて朝廷おあやけに尽くした。なにが残った。七十年の流光に晒ひされた白骨だけだ。巻雄よ、それだけだ。のう、もう捧げるとものはなにも残っておらぬというのに、まだ足りぬのかの。骸骨を乞こつて墓石を探すいとまを、余人よじんは未だわたしに許さぬのかの」

「……行平さま、おいたわしゅうござる」

「巻雄よ」と、老人は莞爾かんじと微笑んだ。「わたしの下野げやするはずでに決まったこと。決して考えなしに、思いつきで成したることではない。今さら掘り返してくるな。さあ、終わったぞ」

杖すがに縋すがつて、行平はよろよろと立ち上がった。気にならないのか、その両手は土に汚れたままである。

「ご無礼つかまつった。浅慮せんりょにござった」

「いい、いい、そなたの浅慮は慣れっこだ」

行平は真つ黒になった手をひらひら振って笑っている。腰を直角に折つて頭を下げる巻雄に比べれば、まことにあっけらかんとしたものだ。

「これでもう、大内裏に用事はないな。ときに、それ、巻雄

よ、その手に持ったそれはなにかの」

「最前さいぜんから気になっておった」と、老人は眼を細めて、巻雄の右手に握られたものを注視している。

「これは……そう、なにと見えまするかな」

「なにと言うて、そうだの、太刀、にしてはなんと細いの」

「御意。いかにも、これは太刀にござる」

瞥見べっけんしたところ、それはたしかに太刀であった。柄つかがあり、鐔つばがある。鞘のうちには刀身があるう。が、各々の意匠は普通のそれとかなり異なる。柄は両手で握れぬほど短く、鐔はほんの小指ほどの張り出しがあるのみ。刃の幅などを見れば、太刀というより針と形容したほうがふさわしい。

「どうぞ、試しに抜いてござれ」

「……なんと、軽いのう。これならわたしでも振り回せそうだ」

子どもみたい喜んで、針もどきを戯れにぴゅんと振ってみせた。乾いた、鋭利な音がする。

「したが……わたしは素人だからなんともわからぬが、これでの役にかの役に立つのかの。とてもひとを切れそうには見えぬし、受ければただちに折れようが」

「さようにごさる」と、巻雄はあつさり肯定した。「造りは切先諸刃にて基部には及びませぬゆえ、見てくれよりは丈夫にごさるが、それでもまあ、まともに受ければ折れましような」

「両手に握るには丈が足らぬ。反りもない。なんといても細すぎる。これは太刀でのうて……言ってみれば細刀だの」

「サチ、ふうむ、言い得て妙でござるな」

「ううむ、したが、これでも恰好は付くの。わざわざ造らせてくれたのかの」

どうも行平は、巻雄が自分のために持ってきてくれたものだと思つたらしい。少々気が咎めたが、巻雄は訂正しなければならなかった。

「いえ、申し訳ありませんが、行平さまがために造らせたものはござらぬ」

「あ、そうか。うむ、ちと残念だの。ではそなたが使うのか」

「いえ、蜂の尻にくつつけてやらんと思ひましての」

「蜂？」

「いかにも」

行平は首を傾げている。巻雄は呵々と笑っている。

「おりましたのでござる。ぶんぶんちくちくとまことうるさき蜂が。しかしそのぶんぶんがいなくなってみればどうしたことが奇妙なことに寂しくも感じる。これは針をなくして悄気ある、その小蜂にくれてやるつもりで持ってきたものでしてな」

「蜂針の細刀か。それ、なんと申したか、そなたが入れ込んでおる剣術の。あすこにおるのかの、その果報者の蜂は」

「さようにごさる。傲慢無礼なる慮外者にて、さだめしありがた

く頂戴ちやうたいなどとは言わぬでござろうが」

「ふうん。官を辞したのちは、奨学院しょうがくいんにでも顔を出そうかと思うておつたが、ちよつと興味が湧くのう。それ、なんと申した」

「魚腸ういぢやうにござる」

「そう魚腸。なんとも珍妙な名前だが……どれ、ひとつわたしもやってみようかの」

と言つて、行平は大笑いに笑つた。

「なんの、笑いごとにはござらぬぞ。拙めの見たところ、行平さまは脚の萎えたるがゆえに杖を突いているではござらぬ。杖を突くがゆえ、脚が萎えたのでござる」

「なんと！ まことによう回る舌だわい。それではあべこべではないか！」

二人はしばらくのあいだ、ともども腹を抱えて笑つていた。笑つているあいだに日の境界は移るい、前さきに行平の蒔いた種のうえを明るく照らした。土は黒々として、肥沃うかかに覗うかがわれる。

「なにを蒔いたのでござるか」

と、巻雄は聞いた。行平は我が意を得たりと微笑んで、

「唐葵かあおいだ、秋咲きの花よ。わたしは咲かなかつたが、うん、これはきつと咲こう。大内裏おうちの一隅いちくなりとも、これはきつとわたしのいに染めあげる。それでいい」

はればれと言つのだつた。

The wailer VIIII (後書き)

か、隔週は無理……。

The Wailer IX

四月十一日 甲寅 巳一刻

「おはぎちゃん、もうええよ」

と、季満が呼ばわると、齋蒿は聞こえているかのように垢をこする手を止めた。裸の背のうしろで畏まる彼女に、季満の口の動きは見えないはずのだが。

「やあ……おはぎちゃんのお蔭で久しぶりに人心地ついたえ。痒うてかなんかつたにやわ」

首だけ振り向くと、齋蒿ははにかんだ笑顔でこれに応えた。始めはもの馴れなさから繕っているのかとも思っていたが、どうやらこれが地の顔らしい。手に握った襦袢を、湯気たつ鉢にうやうやしく濯いでいる。

「聞こえへなんでもかまわんから、なにか言いつけるときは必ず声かけたってな。この子オ繊細やし、片端あつかいすると傷つくのや」

というのは延然の言である。聞こえないのだから意味がないと言ってみても、彼は「この子オはよう氣いつくから」の一点張りであった。が、

（聾啞は聾啞やけど、この子オちよつとぶつうやあらへんなあ。坊さん、知っててあんなことゆうたにやるか）

なるほどどうして、背中に声をかけてみると三度に一遍はついと振り向くではないか。本当は聞こえているのかも、耳元で「わーっ！」とやってみたこともあったが、当人はどこ吹く風である。どうも声に反応しているようでもないらしい。

齋蒿は濯いだ襦袢を絞って、ふたたび季満の背中を拭きだした。今度はこするのではなく、拭き清めるといったふうである。その手つきもなんだか貴人に対するそれのようで、むずむずしたがひどく

心持ちがいい。ついこのあいだネズミに食われそうになったことなど嘘のようであった。

(……ええ子オやなあ、この子オ。おれこんな大事にされたことあらへんもん)

延然の言つとおり、齋蒿は万事に気のつく働き者であった。延然に連れてこられたその日から、なにを指示されるでもなく粥を炊ぎ、水汲みに駆けずりまわり、そのあたりの廃屋から萱をむしってきて、手箒を編んでできばきと掃除を始めた。寸刻もじつとしておらず、屋内でやることが尽きればぱつと外へ出て行く。四半刻もすると心配になつて、季満が「おはぎちゃん、おはぎちゃん！」と呼ばわる。するとすわなにごとかと簀子縁すのこえんに飛び上がってくるのだが、その両手にはどこから拾ってきたものか、燃料になりそうな小枝や葉っぱが山をなしているのだった。卒然と肩を掴まれて「な、なんや、どした」などと目を白黒させていると、そのまま按摩あんまを始めたこともあつた。

そしてそれらは偶然か否か、季満が内心求めるときになされることがよくあつた。なんとなく腹が減つたと思えば、彼女はすでに穀物つものを洗っている。喉がかわいたと思えば水を張つた椀を捧げ持つてくる。今ほど体を拭いてもらつているのも、あるいはその類かもしれない。幾日も伏せていたせいで、痒いの臭いのはいいかげん我慢がなくなつてきていた。

肩をつつかれて振り向くと、単衣ひとえを着せ掛けられた。どうやら拭き終わつたらしい。

(ミツキメも大人しいな。まあ、坊さんもただもんやあらへんゆうことか)

手渡された縄で腰を結ぶ。帯は洗つて陰乾し中である。

ミツキメに蘇そを与えるようになってから、病が日ごと快方へ向かうのが体感できた。屋内もなんとなく明るく、心持ち湿気が退いたひような気がする。いつものように部屋の隅すみに蹲すくまつて唸うなっているときでも、齋蒿のことは目に入っていないのか、気に留める様子も

ない。

延然の推察はおおむね正しい。ミツキメが害を及ぼすのはあるていど歳経た男だけで、尾筒丸などはその幼さもあって彼女の癩に障ることはなかった。況んや少女の齊蒿においてをや、というものだ。(坊さんの土産がのうなる頃には、病も治つとるやる。そういえば尾筒丸、どうなったやる。あれきり訪ねて来いひんけど、病なおつたやるか)

「……おはぎちゃん、臭う?」

齊蒿が自分の肩のあたりをくんくんやっているのに気付いて、季満は汚れはてた衿をつまんでみせた。汚いから洗いたいという意味表示もあるのだろう。季満もまったく同感なのだが、ほかに着るものもない。

(貸した衣、返してくれへんかなあ。代わりあらへんもんなあ。

道説が来たら頼んでみよか。またご飯づくりに来いひんやるか)

道説の庖丁がこしらえた料理はまことに素晴らしかった。道説は七位の下官ということだったが、その彼でさえあれほどのものを口にできるのだから、珠子などはもう毎日ほつぺたが落ちて拾うのに忙しいに違いあるまい。

季満がかの庖丁のこしらえた「鳥肉のなにやら」の味を思い出して陶然していると、齊蒿がとつぜん立ち上がった。汁粥でも煮てくれるのかしらんと傍観しているあいだに、ぱつと簀子縁に飛び出していく。

「な、なんやおはぎちゃん、どした!」

縁端で一度しゃがみ込むと、その手には石が握られていた。それを菖蒲小路にいた人間に投げつけ始めたのである。石の当たることはないが、投げつけられた人びとは慌てて走り去った。

夜具をはね除けて立ち上がると、ぐうつと眩暈がした。齊蒿はいまだ縁側に陣取って、石を投げる相手を探して小路を睨めまわしている。「なにしとるの、ひとに石投げたらあかん!」と小さな肩を掴むと、とたんに力は抜けた。なにか訴えるような目で見つめてく

る。

「どしたの、気にいらへんことでもあつたの？」

齊蒿はまさしくいきなり立ち、いきなり縁側へ出て投石の拳に及んだのであつた。季満には癩癩かんしゃくを起こしたようにしか見えなかつた。やはり聞こえているかのように首を振つて否いなんで、彼女は両手に持つていた石を元の通り縁端に転がした。捨てるつもりはなさそうである。しゃがんだ小さな背の領頸えりくびが、今ほど季満の掴んで縋よれでもしたか、ちよつと開はたけてしろい肌を露出している。

(あれ……痣あざや)

季満はとつさにたしなめる言葉を飲み込んだ。

染みのような痣くしきわが、おそらく背中から昇つてきているのである。髪際くしきわをやや下つたあたりにまで広がっている。経験上、殴打によるものらしいことはすぐに見当がついた。

(……衣に隠れるとだけ狙うとる。子たちの為業やあらへんな) 思わず彼女の来歴を考え出して、すぐにやめた。叱る気も失せた。もう一度やったら注意しようと気を取り直して、季満は部屋の中に戻つた。そのまま床には入らずに、道説の置いていった負櫃おいびつの蓋を開ける。たしか湯に溶いてすぐに食べられるようにと、彼の庖丁が糯黍粉もちきびこを用意してくれていたはずだつた。

「おはぎちゃん、ちようおいないやあ」

季満が負櫃に頭を突っ込んでいるうちに、齊蒿はとぼとぼと部屋に上がってきた。

「おはぎちゃん、お腹へつたなあ」

黍粉ちびこは二重の、それも目の細かい袋に入れてあつたのに、湿気のせいかぼろぼろとダメになっていた。齊蒿は季満の言葉に機敏に反応して、床のかたわらにあつた鉢を拾つて、中身を簀子縁の向こうに撒まいた。これを空けないと水が汲めないのである。

「ええよええよ、今日はおれがやつたるさかい」と言つて、季満は汲み置きの桶に走ろうとする齊蒿を呼び止めた。「きれいにしてもろたお礼にな、今日はおれが糯黍もちの餅もちさん作つたる。旨んまいえ」

薺蒿は例によつてはに cand、しかし聞こえたのか聞こえないのか、そのまま入口に置いてある桶に走り寄つた。今まで気が付かなかつたが、腿ももの裏にも同じような痣が見て取れる。幼くしてこれほどに気が回るのは、あるいは育つた環境の影響なのであるうか。いずれにせよ生得しやうとくのものだけというわけではないらしい。水を張つた鉢を手に戻つてきた薺蒿は、にこにこ笑つていた。

(あ、やっぱり通じてるにやわ、この子オ)

けつきよく料理はなし崩しに分担となり、黍餅きびもちは合作となつた。

湿気しつかけて粉が悪くなりそうだからとたくさん作つたので、思い立つて鹿の脯かたひを戻したものを醬ひしおで壅おえて餡あんにして、ふたりで仲良く焼いて食つた。

(尾筒丸、そろそろ良うならへんかな。あの子オ人見知りやし、おはぎちゃん見たつたら驚くやるな。仲良うなれるやるか)

作り終わつたのは半刻も過ぎたところで、腹一杯がんばつてもいづつか余つた。焼きたてをひとつミヅキメにも振る舞つて、残りは袋に入れて負櫃ひつにしまった。間に合えば尾筒丸に食わせるつもりである。

「おはぎちゃん、今はいやへんにやけどな、きつとじきに尾筒丸ゆうちびが来よるにやわ。たぶん恥はぢずかしがつてぜんぜん喋らへん思うけど。しつかりして優しい、ええ子オやさかい」

あぐらをかいて頬杖ほおぢえをついて、季満は囲炉裏の鉄瓶に向かつてひとりごとのようにぼつぽつと言つた。こういう場合、普通のひとなら聞き逃すくらいくらいの小声でも、薺蒿はちゃんと「聞き分け」るのである。これは彼女の得うがたい美德のひとつだなど、季満はぼんやり考へた。薺蒿は首肯うづうして、湯の入つた椀を差し出した。

「仲良うしたつてえな、おはぎちゃん」

椀を受け取つて啜すする。彼女の痣あざのことがふたたび頭を過ぎつて、ふと薺蒿のここへ連れてこられた本当の理由に、おおまかな見当がついたような気がした。

四月十三日 丙辰 午四刻

左京桃花坊は検非違使庁舎。

堀川寄りの濡れ縁に、世界の終わりを迎えたような陰気な顔

鳥瞰的に表すると、たいそう怖ろしい顔をした大男が、庭を目の当たりにぼんやりとしている。道説に寄り掛かれた高欄は危ういほどに撓つて、長大息をつくたびにめりめりと悲鳴をあげた。

躑躅もえたつ小体な庭は、折からの糠雨にけぶっている。

(空がおれのこころを代弁しおるわ……)

この男、意外と繊細な一面もあつたようである。彼は暫時気をよくして、似合いもしない憂愁にちよつと酔つてみよう、

「空がおれのこころを代弁している」

わざわざ声に出して言つてみた。あまりにも陳腐に聞こえる。惨めさはいつそう募つて、「ええくそなにが代弁だ、貴様などには大便あたりが相場だ」などとますます腐ることになった。腹立ちまぎれに欄を拳骨で殴つてへし折つてしまった。さだめしあわれな欄氏は傷害事件を訴え出たかつたであろうが、あいにく検非違使庁の職掌に木材の訴訟の受付は含まれない。

(うつつ、和妙どの……おれが間違つているのか)

考えれば考えるほど鬱の地隙に足を取られて、道説は折れ曲がつた高欄に額をあずけて唸つた。

和妙が道説の家宅を出て行ったのは、ほんの今朝のことであつた。傷病恢復につき御役御免、というのでは無論ない。

二日前の晩、道説は和妙に使庁へ復帰する旨を打ち明けていた。なんと言おうか迷つたあげく言葉すくなに、それも部屋を退きしなにぼつんと言つたせい、

「おお、その心意気でござります！　これから少々の無聊ぶりょうなどお堪こえになつて、お体を損ねる外出など厳につつしんでいただかなくてはなりません。さもなければお仕事への復歸おほじかなど覚束おぼつかのうござりますぞ」

はたして和妙の応えはこのようなものであつた。その場で言葉の内容を吟味してみるでもなく、ただ和妙が喜んだのに気をよくして、道説は釈然つむとしないながらもつきうきと床を取つた。が、さて目を瞑つむつてみればつらつら考えるまでもなく、和妙の言葉はなにからなにまでおかしい。正しく伝わっていない。もやもやするのに倦うんでえいと立ち上がるも、刻ときは非常の子なの闇中。この時刻に彼女の寢所かものやしの几帳きちやうをかき分けるのは、道説にとつては賀茂社の本殿をあばくにも等しい難事。「いざ致さん」「いや早まるまい」と板の間をうろのしのし遣やつているうちに、すわなにごとかと下僕がすりこぎ片手に様子を見に来たりする。

（和妙どの、今はどこでなにをしておられるのか……うう、和妙どの……）

結局、まんじりともせず夜を明かし、朝の挨拶と診察にまかり出でた和妙を、大男は充血した目で迎えた。「おや、お目が赤うござります。道説どの夜更かしはいけませぬぞほんにもう」などと言われて、つい目の端にしわを寄せるおのれを、道説、できづることなら領頸えりくびつかんで殴り倒してやりたい心境であつた。

こちらの言わんとすることが十全に伝われば伝わつたで、猛反対されるのは火を見るより明らかである。思い悩んで一日おいて、ようよう「和妙どの大事なお話が」と切り出したのが昨夜きののこと。

「和妙どの。唐突な話ですが、道説は近々に復職するつもりです」と言えば、和妙は「ええ、先だつて伺うかがいました」とけろりとしてい

る。「大変よろしいことですぞ。とかくなにごとも目標がなければ為し果せ難おきもの。ご決意の真澄まのごとくあれば、なんの道説どのの復職はを阻はむものがありましようや。必ず傷はよくなります。と

りあえず、外出は別してお控えくださりますようにな

やはり正しく伝わっていない。口論はしたくないが、言わずにおけることでもない。すでに左衛門府および検非違使庁へ赴いて、復職の願いを届け出てしまっている。もしかすると早まったかもしれないと、道説はおのれの行動力をすこし悔いた。

「いえ、そうではないのです。 和妙どの」

「はい。なんでござりましょう改められて」

「お平らかに、決して激せられぬよう、お聞きあれ」

「ほほほ、まあなんでござりましょうな、道説どのも気をお持たせになつて」

「道説、実はすでに復職の願いを届けております」

部屋の中に怖ろしいほどの沈黙が去来した。

「……届けたと言つて」

「明日にも、使庁へ出仕する予定」

「……出仕すると言つて」

「なに、傷もあらかた痛まぬようになりましたゆえ、そろそろやれようと……その、報告が事後になってしまいましたことはまことに……和妙どの？」

「……………」

「にぎた」

「なあんですつてえ！」

和妙は卒然と大爆発して立ち上がった。道説はあぐらをかいたまま一尺も飛び退り、廂に控えていた下僕などは吃驚して正座したまま一丈も飛び上がった。怒髪天を衝く形相 といつても布面で顔は見えないのだが、そのように表現せらるべきほどの、それは凄まじい怒りの発露であった。

「あれほど……あれほどわたくしが再三ご注意も申しあげてきたにも拘わらず……いったいぜんたい道説どのはお自分のお体をなにもと思し召すかつ！ 命に関わるとあれほど……！」

「お、お平らかに！ 和妙どのの申されようは重々承知しており

ます！　しかし道説が身は道説が一等知悉しおることもまた事実にて、その道説がさよう判断　」

「きい！　知悉が聞いて呆れまする！　かくも己が身体について警なる御方は古今東西かつて聞いた試しがござりませぬ！　こと金瘡においてはいささかの知識もお持ちになられぬ道説どのが、なにゆえ医者のお申すことに聾でやれるやれぬの判断を下せますのか！　それとも道説どのはこの和妙めを端からご信用くださるんだかつ！」

「げ、激されずに！　道説、お言葉は身に沁みて感じおるところでございます！　信用いたさぬなどということは毫ほどもこれなく、しかし惟みるに公器たらぬおのれにいかほどの価値のあらんやという　」

「きい！　詭弁は大概になさりませ！　価値よ公器よなどと、命の綱をしつかりと握ったあとでいくらでも論じなさるがいい！　死んでもうては元も子もないのですぞ！　傷の破れて万事に休する事態と相なりましたなら、わたくしは大臣に兄にどの顔を曝してお詫びすればよろしいのか！」

このあたりまで来ると、いささか高いところにあるために血の昇りにくい道説のあたまにも、既にしてそれなりの量が巡ってきている。「和妙どのは大臣や高宗さまへの面目だけで、おれの傷を診ていたのか！　好意ではなかったのか！」などと裏切られたような心持ちになる。大男は板の間を揺るがして立ち上がり、而して下僕はふたたび宙を舞った。

「見たまま聞いたままを告げられるがよろしい！」と、道説は怒鳴った。「道説はすでに十分の診療を受け平癒相なり、もうこれ以上は欲しておらぬと。無論たとえ何人に尋ねられようともこの道説しかとそのように受け合い申す。さすれば和妙どのとて大臣にも高宗さまにも面目は立ちましよう！　それで気もお済みでしょう、それでようございませうが！」

「なんと……なんと……この和妙がさような心構

えで、心構えで」

和妙、うわずって言葉もない。その隙すきにさらに道説はたたみかけて、

「和妙どの、これまでの親身なる介添かいぞえ、切に御礼申し上げる。しかしこれ以上は無用！ この上どうでも大臣に高宗さまに対し面目を施さんと欲せられるのなら、お一方へ直接談判なさるがよろしい！」

言い放った。和妙は涙に濡れた布面をひきむしって「わあっ」と部屋を駆け出ていく。一拍遅れて「わあっ」と、今度は下僕の声がする。どうも廂の途中でふたりは衝突したらしい。

しばし呆けたあと、道説はおもむろに座した。

言ってやった、負かしてやったという満足感は、ものの数秒と保たない。考えてみるまでもない、理は彼女のほうにあるのである。そんなことはそれこそ反駁はんぱくしている最中ですらわかつていたことであつた。

「……ええと、旦那さま、和妙さまが」

「だまれ話しかけるなっ！」

主人の特大の雷が落ちて、あわれ下僕はみたび宙を舞う。

その夜は後悔と自己弁護けんごに汲々ききじつじつとし、床を転々として道説は寝付けなかつた。夜が明けたら詫びようと思ひ立つたときには既に遅く、早朝の屋敷内に彼女の姿は見当たらなかつたのである。

（怒鳴りつけるつもりなぞなかつたのに……恥ちずべきくだらぬ意地だ。おれはこれほどに矮小わいしじょうなる人間であつたのか……）

空になつた和妙の部屋を見るにつけ、喪失感が大男を棒立ちにさせた。しばらくはなにをやる気力も湧かず、使序おとを訪なうのを午後ごごに繰り延べにしなければならなかつた。下僕はすっかり畏縮いしゆくしてしまい、虎にお伺いをたてる鹿のごとき態度に終始する。たつた一夜を明かしたただけだというのに、そこはもはや別の屋敷のようであつた。

「大便よな、大便よ、貴様など……」

いっとう腹立たしく情けないのは、和妙が出て行ってしまったとたん、今まで彼女の言に従わなかったこと、就中復職などを願ったばかりに、彼女が出て行く直接のきっかけを作ってしまったことに對して、激しい後悔を催すようになったことである。

（貴様は貴様なりに考えたうえで、さよう決断したのではなかったのか……情けない。まことに情けない。女子一人の心変わりにすら、おれはこれほどに引き摺られる。和妙どの……）

大男の鬱々としている間にも糠雨は止んだが、彼の感傷に満ちあふれた心象風景は依然として雨模様である。いや、それどころではない。顧みれば季満、長恭の不幸に関する自責に始まり、先だつての田達音翁に喝破された折の自省に加えて、このたびの和妙失踪に纏わる悲嘆が重なったのである。かつて羅城門を倒壊せしめた大風にも勝らんばかりの大嵐が吹き荒れていた……くらいに言っても過言ではなかっただろう。

「菅家判官」

「……………」

背後で呼ぶ声を道説は聞き流した。最前から足音が聞こえていたので、後ろに誰かいるのに気はついていたのだが、陰々滅々とするのに忙しくて応答どころではなかった。

「菅家判官、経足のやつが来たから」

「……そうか」

「おまえ、なんかあったのか」

「なにかあったように見えるか、宣永」

問いを問いで返されて、大男を菅家判官と呼ばわった男、藤原宣永は「見えるさ」と間髪入れず応えた。

「それならなにかあったんだらう」

道説、振り向きもせずに向う。

「大便がどうかしたとか言ってたな」

「措け」

「そういや、まだ聞いてなかった。傷はもういいのか」

(いいわけなかつ。和妙どのがそう言ったのだ。いいわけがない)

「おお……大分いい」

「うるわしの珠子どのはうまくいつてるか？ こないだ使庁に来てな、えらい騒ぎになった」

(珠子どのか……さいきん文がめつきり来なくなつたな。興味も薄れたのかの……)

「うむ……会つておらぬ」

「吾妻が前歯を折つたの、聞いたか」

「いや、知らぬ。なんだ事故か」

「本人は捕り物のどさくさで蒙つたとか言つてたが、つまらんから誰も信じん。細君の肘鉄をもらったというのが皆の一致した見解だ」

「さもありなん」と、道説はちよつと笑つた。「そのほうがずつと真実味がある」

「菅家判官」

ふたたび呼ばれて、道説はようよう宣永に向き直つた。

「しゃきつとしろ、行くぞ」

「干柿から説明は受けたんだつたな」

「物盗りだらう。水玉の瓔珞」

いま現在、検非違使庁が特別任務として追つていゝ事件がある。

平安京の北西、嵯峨野とはある貴人の別邸から盗まれたという瓔珞の搜索がそれだ。

「あんまり聞かない話だけどな。おれたちが洛外の事件に首を突つ込むなんて」

「相当数を動員しているという話だが」

「ああ、尉が二の志が四」

「左右でか」

「ヒダリとミギでそれぞれな。別口だけど京識も独自で動いてる」

「……それほどの手勢を出して、洛中のほうは機能するのであるうか。賀茂祭も近いというのに」

衛門檢非違使の役職にあるもののうち、檢非違使として実際に洛中を警邏するものの内訳は、大まかにいって左右それぞれ少尉五名、少志十名ほどである。彼らはそれぞれ護衛官である火長を五名ほどと、実際のな手足として凶徒捕縛などに当たる放免を十数名ほど率いる。単純にひとりあたり部下十五名、アタマを足して一班十六名とすると 実に二百名弱。ちよつとした勢力である。

「ま、なんとでもするさ」

「……こたびの物盗り、そのなんだ、ものは左大臣が御所有にかかるものであるとか」

先導して簀子を軋ませていた宣永が、首だけ振り返って「そう、そう、聞いているのな」と言った。

「被害にあつたのは嵯峨野の棲霞觀つていう……ま、別荘さ。なんだつてそんな離れに置いといたんだかわからんけど」

嵯峨野は平安京から三里も行かない位置にある。近いことは近いが、貴重品を保管しておく場所として適当かと言われれば首を捻らざるをえない。かといって貴重品でないのかと思えば、

「いずれにせよ、よつほどの値打ちもんさ。なんだつてぜんぜん関係ないおれ達まで煩わせようつてんだから」

ということである。

（奇妙も奇妙よな……いかに左大臣が訴えとはいえ、そのようないち私事に庁宣が下るとも思えぬが……）

宣永に続いて庁務所の一画にはいったとたん、吾妻こと茨田重行が「よう菅家判官、珠子ちゃんよろしくやっておるか」と手を挙げた。空の文机が目立つそのあたりには、彼のほかに数名の男が座している。

「羨ましいのう、そこへくるとうちのあみさんなどは何ともはや……やはり結婚せぬうちが花よな。珠子ちゃん道説さんなんぞと呼び合っておるそうな」

「ええいこつぱずかしいやつよ貴公という男は！」と、重行は髭をもじやもじやさせながらしきりに膝をぴしぴし打っている。道説出会い頭のご挨拶にたちまち真つ赤になった。

「き、貴様どこでそのような……」

隣で一緒になつて笑つていた青年が割り込んで、

「その珠子ちゃんが来たんす。おれとかミネさんとかにまでぺこぺこ頭さげちゃつて、かわいいっすね。あの子トキさんのなんなんすか？」

調子をくれた。上司を「トキさん」呼ばわりとは、とても火長が少尉を呼ぶやり方として礼に適つているとは言いがたい。彼、直経あたいのつねたりにしじゅう足は廿そこそこの若輩であつたが、富裕な地方豪族の一粒種ひとつぶだねということも手伝つてか、かなり礼儀に疎うといところがあつた。

「……これ経足、言うておくが、かの方は文章博士橋広相さまが御息女だ。無礼な口は利くまいぞ。おお昆博、見舞うてくれて

以来だの。忠岑ただみねはこのあいだ会つたな」

宣永と道説が円座わろつたを取ると、呼ばれた二人、中原昆博と壬生忠岑は揃つて頭をさげた。

「道説さま、お怪我の塩梅は」

と、昆博が口火を切つた。

「ん、もう大分いい」

「それはようございですが……あれだけ重篤じゅうとくであつたものが、高々ひと月と半ほどで治りましようものやら」

「看護についてくれたひとがよかつたのだ。そのひとのお蔭だ」

昆博は依然として愁眉しゆつひを開かない。

中原昆博は道説が左衛門少志の時分から部下として従つてきた男で、検非違使けびいし下司としてはわりあい古株にあたる。道説よりすこし歳上で、軽輩ながらよく情理をわきまえ、道説を官職を得て間もないころから陰日向かげひなたを問わず扶たすけてきた忠義のひとである。

「……忠岑ただみね、そつといえは澄世すみよが見えぬが」

「澄世さんは右衛門です。移動してすでに半年を数えます。お忘

れですか」

「あつ、いかんそうであった。ええまったく、ずっと臥せっておるとこのザマだ、惚けていかん」

「……休職する前から言つてたじゃないすか。『スミヨ、スミヨが見えぬ』つて」

「黙つておれ経足。貴様の烏帽子に孔を穿つてくれるぞ」
経足は「ミネさあん」と忠岑の背中に隠れた。

壬生忠岑は経足より二、三ほど上の若者であるが、歳に似合わぬちよつと老成ぎみの硬骨漢で、若輩に付きものの浮薄の風のない代わりに、いささか愛想にも欠けるきらいがあつた。弓馬も剣も巧みにこなす一方、衛府武官という武張つた職にいささかそぐわぬ、和歌にも嗜みありという変わり種である。

「左衛門佐さまは？」

道説が誰にともなく聞くと、重行でかい声で応えて、

「午前にはおつたぞ。干柿のやつめ、最近は人手が足りぬとかおれ達が怠けるとか適当に理由をつけての、どうしていると思う、なんと自分の馬を引つ張つてきて尉志の真似事を始めおつた」

愚痴を打ちだした。

「誰もお止めせなんだか」

「言つて止まるような柿ではないわい。もうおれはさいきん床にはいる前に必ず、願わくばどこぞの凶悪な殺人犯の廿人も、あの干柿めに遭遇せさせ給えかしと神仏に祈願しておるくらいだ」

「……貴様もよくよく不遜な輩よ」

「干柿の話なぞどうでもいい。おい貴公、珠子ちゃんどこまで行つたのだ。しかし貴公もあれほどに幼い」

「おい吾妻、珠子ちゃんはいいいから引継ぎをちゃんとやれ」

それまで黙つて円座の毳をむしっていた宣永が顔をあげて、重行の髭面を睨めつけた。ついでに小声で鋭く「大尉どのが聞いている！」と注意する。

案外しつかり聞こえていたと見えて、部屋の片隅で文机に座して

いた中年の男が「お構いなく」と笑った。

「わたしに気を遣わず遠慮なく。ああ道説君復帰おめでとう、遅くなっただけだ」

道説はあわてて「あ、いえご挨拶が遅れました」と言っただけをさげた。

「おお、有広ありひろどの、その、わしが干柿云々などと言ったのは……食えるほうの柿の話でしてな」

「重行君の言いたいことはわかってます」と有広は受け合った。

「食えない干柿のほうなら、今日は西市ししのかちへ殴り込みに行きましたよ。ここに帰ってくるとしても遅くなると思います」

「さようですか。ありがとうございます」有広へ会釈えしゃくをして、宣永は返す刀で重行の烏帽子頭をぺんと張った。「吾妻、仕事しろ、仕事！」

「やけに張り切っておるのう、宣永は。ま、いい、ちと真面目にやろう。さあて菅家判官、どこまで聞いておるのかの」

きりつと髭面を引き締めた。が、ずれた烏帽子があさつてを向いたままなので、見てくれはたいそう滑稽である。口ほどにもなく本人も笑いを狙っているのだろう。宣永がいまいましげにあごをしゃくり、無言の意を受けた経足がおごそかに重行の頭を整え始めた。

「件の瓔珞くたんだが、先日とうとう市司いちのつかさと京識きやうしきが両市の販売履歴を

突然、重行以外の男たちが有広を含めて全員爆笑した。経足が懐から出した紙で紙縷こよりをいくつか作って、垂直になおした重行の烏帽子に節ふしをつけるようにして結びつけたのである。結果、彼の頭のうちえに塔婆たはの出来損ないのようなものがそびえ立つことになった。

「経足、仕事にならん、止せ！」と腹を抱えながら宣永。

「御利益ごりやくあるつしよう、これ」と得意になる経足。

「あー神饌かみじゆに甜酒あまじゆを献ぜよ、こら、その朴念仁、大いに献ぜよ。一合で構わんから」となおも得意になる重行。

「重行君、宝塔は御仏みほとけ由来です」と含み笑いながら有広。

(やはり復帰したのは間違いでなかった)

つい先ほどまでおのれを伸し潰さんばかりに圧していた鬱の、いつの間にか薄らいでいるのを道説は感じていた。こういうとき精神的な頼みになるのは、やはり親しい他人 仲間の存在であるらしい。もつとも懇意の親戚筋のひとりもいれば、道説も相談相手にしたかもしれなかったが、あいにく孤独な彼に該当しそうな人間はいなかった。

重行と経足の茶々を合間あいまに挟みながら、一刻後に検非違使たちは引継ぎを終えた。一同は円座に畏まり、有広筆をすべらせながら宣つ。

「茨少尉重行は以後特務を離れる。従来のとおり、洛中諸事を務めとせよ。 只今はにわか法師どもの摘発が酷ですな」

「おお、ごつそりと刈り取ってくれん。ごつそりとな」

重行が気焰を吐いた。

「管少尉道説、故障はないか」

道説は胸を張って「ございませぬ」といらえた。

「では籐少尉宣永、管少尉道説。少志たちを束ね、協力して事件の解決に臨め。 市司と京識の仕事はほぼ終わっています。君たちはとりあえず、過去瓔珞を手にしたと思しき商人を総当たりで尋問して、可能であればいま現在の持ち主を探し当ててください」

「それほどのやばいものを、膝元の平安京で捌いたりするものですか」

宣永が首を傾げた。

「このあたりは実際に商人から聞いた方がわかりやすいと思いますが」と、有広は前置いた。「正二位の貴人が躍起になって探すほどのものです。その瓔珞はかなりの値打ちものと断じて間違いはないでしょう。そういったものは、同じく値打ちものが集う平安京でしか捌けない。地方へ持っていても、夷心に本当の価値はわからないし、盗人も食べ物に代えるつもりでこのような危険な犯行に及んだわけではないはず。おそらく盗むより前に、そういった危ない

代物を流す経路を準備していたと見て間違いない。もつとも、この一件が左大臣への怨恨からなされたとすれば、畿外へ持ち出された可能性も出てきます」

「そうなつては……もはや手の施しようが」

「ありませんね。だからそのことについては考えなくてもよろしい。我々は平安京に焦点を当てましょう。検非違使庁とはまったくの別件として、すでに畿内の各駅に往来物の点検を厳にするよう伝令が飛んでいます。万全とは言えませんが、後手の我々が打てる手立てとしてはこれくらいが妥当でしょう」

有広はようよう筆を擱くと、文机から立ち上がって男たちを睥睨した。

「瓔珞は平安京から出ていません。そしてそれを探し出すのは我々左衛門検非違使です。万が一にも右衛門検非違使などに先を越されぬように！」

「よろしいか」との有広の言葉に、左衛門検非違使たちの「おおっ！」という喚声が続いた。

The wailer X

十

四月十四日 丁巳 丑四刻

几帳の帷かたひらを持ちあげて塗籠ぬりかめの内を覗くと、別当べっとうはすでに厚畳へつじやうのうえに端然たんぜんとしている。充血ちゆうけつした目が呼師こしを捉とえて「はやく入れ」と急いそがした。

室内には油皿あぶらひらのひとつとてない。

暗い。暗いのはしかし、なにもこの部屋へやこの屋敷やしきに止とまらない。

丑、寅とらといえは、平安京へいあんきやうも眼まなこを睡ねむる真まの闇やみである。

「こんな夜更よみぎけに穩やすやかじゃねえですな」

「呼師こし、やってくれたな」

言いつて、座まれとばかりに頸あごで自分の向むかいを示しす。円座ゐんざだの用意よういはない。呼師こしは黙もくって板いたの間に腰こしを下くだろした。

青年せいねんの白面しろおもては色濃いろあい憔悴せうすいに充みち満みちている。応おえずにじつと見つめてみると、最前さいぜんから目の端はしがびくびくと攣くるのに氣きがついた。闇やみを見みとおす呼師こしの眼まなこにも、彼の神かみ經みを圧おす荷にの正体せいだいは判然はんぜんとしな

い。
「お疲れおつかれのようで。こここのところ、根ねを詰つめすぎじゃありませんか
んかい」

「大内裏だいないりに鴉からどもを集あめたのはお前まへだろう、呼師こし」

「……………」
「ああいったなんでもないことに、彼かの人ひとびとがどれほど氣きを尖とらせるか、知らぬお前まへではあるまい。あれはなんだ、陽動やうどうのつもりか」

「そんなとこで」

「あれほど大仰だいやうに、わざとらしくする必要ひつがあつたのかと聞いて

いる」と言つて、別当は溜息をついて、子どもみたいに両手で赤い目を擦こすつた。「呼師、わからぬお前ではなかるうが、言つて欲しいのなら言つてやる。これで神官や陰陽師どもに警戒されたぞ」

「警戒つてえんなら、前さきの一件以来、大内裏だいだいりは並なべて警戒の大安売りですな。別けても内裏おうち向きのそれといつたらそりゃあひでえ」

「それで陽動か。本末を転倒している」

さてどう言つたらよかるうと、呼師は頭を掻きかき思案している。

「お前の短慮が万一にも、御前ごぜんの進退に影を落とすようなことになつてみる、なんとする」

「……御令わか、この期に及んでまだ隱密裏にことを運ばつてえ腹で？」

「たつたいまおれが言つたことを、お前はもういちど言わせようというのか。　　まだもなにも、その為の手勢てせだろ。今さらなにを言つ」

別当は鼻を鳴らした。鳴らして、次いで思い出したように「別当と呼べ」と付け加えた。その肝心要の「手勢」が只今かなりの勢いで抜けつつあるのを、彼が知らぬはずはない。呼師は胡乱うごんげな視線をもつて返答に代えた。

(どうにも、こりやちよいと視野が窄すぼまつてるなあ)

呼師は細く息をついた。

このたびの一連の謀事はかりごと、彼の目にはまったくの迂遠うゑんとしか映つていない。それでも今まで、彼が異見らしい異見を口にしたことはなかった。これは「別当」個人の冀望きぼうするところであり、彼は単なるいち協力者を自ら以て任じていたので。また自分たちの相手になるであろう人間たちを、頭から取るに足らぬ小兒然と見なしていたという事実も否めない。彼の好きにさせてやる。自分ではできるだけ彼の力になつてやりさえすればいい。策なんぞあつてもなくても大して変わりはないと判断したのである。が、

(こつちも振り出しから躓つまずくたあ思つてなかつたわい。御令の言うとおりにやつてちゃあ、こりや間違まちがいなく失敗する)

「別当」はどうも呼師の与り知らぬ、なんらかの報いを期待しているようで、とにかく一切の痕跡を残さずにことを為果せようと躍起になっていた。先だつてなどはそのゆえの悪例の最たるものと言つてもいい。苦心して二十余名もの呪い師を集めてなにをするかと思えば、洛中の気という気を無闇にかき回しただけである。それはまだいい。その隙に暗殺者を任じて基経を呪詛するのは、しかし言師たつたひとり。

(その人数をひっくり返しゃあ、まあ足は付いたかもしれないが、向こうさんは確実に殺れたらう。本末を転倒するのは御令だあな) 確かにそれで成功すれば尻尾は掴めまい。呪い師二十余名の、夜を徹しての傍迷惑な方向性のない呪詛のおかげで、その夜洛中では貴賤を問わず、無作為的にかんりの死者が出ていた。従一位の貴人の薨ずると雖も、恐らくは過去に忘れ去られた誰某の怨霊だなどと適当な理由をつけたうえで、例のひとつに数えられた可能性は高かつたであろう。

迷惑なのは韜晦の手段に使われて傍杖を食った人びとである。いきおい鳥辺野や化野に過客は絶えず、洛中の河辺には水揚げされた魚かなにかのように死体が並んだ。細民どもは襤褸を剥いで雀躍し、鴉どもは肥り、ついでに言師は雷を蒙つて炭になった。酔狂である。「それで、なにを探っていた」

「なに、とは」

「とぼけるな。陽動の結果を報告しろ。なにか……目的があつてああしたのだから」

喋りながら別当は、手の甲を口に押し付けて欠伸を噛み殺した。

呼師は黙っている。

「……お前、おれの指示を待たずに動くつもりだったな」

「御令、気に入らねえかもしれませんがね、前みたいなことを繰り返してちゃあ、うまく行きっこねえですわい。遠からず手駒を尽いて手も足も出なくなりませぬ」呼師は立ち膝について斜に構えた。瞠目する別当をぐつと睨まえて、「で、その後どうするお積もりで

？二人して大内裏に殴り込みますかい。おれア勿論付き合いますかね、そうされていちばん困るのはあの若造じゃあねえんですかい」向かいの青年は気色けしきばむ様子を見せたが、結局ふたたび「別当と呼べ」と繰り返すに止まった。

「御令、あの若造になにを約束されたんだか知らねえが、舞い上がってやしませんかい。あのくそ餓鬼がどうなるうと知ったこつちやねえが」

「その不遜ふそんな口を閉じろコキリ！ 御前を虚仮こけにする物言いは許さん」と、別当は真つ赤な目を燃え上がらせて呼師を指弾した。「手段はおれが選ぶ。これはお前の為事じとではない」

「……………」
別当はじきに頭を冷却ひやめして、静かに「報告しろと言ったぞ」と呟いた。

「……………壁蝨たにを一匹、内裏へ忍ばせましてな」

今しあげた大声が何者かを引きつけなかったかと、別当は見えるはずもない土塀の四辺を小心たらしく見回して聞き耳を立てている。彼の衰弱気味の神経が哀れで、呼師はちよつと言葉を切らざるを得なかった。

「忍ばせましてな、ちよいと密奏文を」

「どこのだ」別当が心持ち膝を乗り出してくる。「しかし……………よく網を潜くったものだ。おれも再三ためしてはみたが、うまくいかなかった」

「ああ、ひとを害するくれえのは駄目です。絶対に見つかります。況ましてあんだだけ大騒ぎすりや、まず向こうさんも真まつ先に呪詛を疑ってかかるから、まあ方にひとつも成功しませんな。もつと小せえ、取るに足らねえやつを運ばせましてな。向こうさんにしてみりや肩透しを喰くった体裁ていざいでえとこで」と、呼師はちよつと得意になった。「前もつて蔵人くらひんどもの家宅やかを総洗いにして、その下人しもひとども全員ぜんいんに蟲むしを潜ひそませて、そりゃあ手間でしたが、そのうちの一匹が渡りわたつてめでたく昇殿しょうてん相成あひなつたてえわけです。ご苦労なこつて、

五位壁蝨様々ですな」

「その壁蝨はおれたちよりよほど尊いというわけか」と言って、別当はようやく笑顔を見せた。

「色々やんごとねえ文書を浚さらいましたが、吉報は陰陽の天文密奏もつともこりやひと月ほど前に届けられたやつです。今月の初めだったか、蝕くはくがありましたな。表向きはあれの警告……」

「それで、『裏向き』は」

「朗報。密奏によりやあ、陰陽頭弓削是雄おんようのかみゆげのこれお、陰陽助日下部利貞おんようのすけさかべのとしさだ、神祇大副大中臣有本の大物三人が、多分こないだ撒いた屍鬼しきどもに漸く引つかかったんでしような、四月中隠密裏に京を離れるてえことらしい」

「よしー」

別当は喜び勇んで膝を打った。呼師も笑顔につられて口の端を上げた。さらに続けて、

「神祇伯のおぼっちゃんが残りますが、あんなのAもの数に入らねえ。ただ、これAおれの推測ですがね、三人一遍いっぺんには抜けてねえと思います。にしたって、遣り易いことに違いはねえですが」

「屍鬼は何匹つかったのだったか」

「御令……別当が持つていったやつを抜いて全部。七道の要所と、神社仏刹じんじやぶつさつからなるたけ離れた山中に撒いてあります。五十匹近え数ですから、ちったあ時間を稼かぐでしょう。今月中は堅かえ、と思います」

「駒は手元になし、か」

「幸い先だつての呪詛の副産物で、方々じゃ死人が出てます。あれを造るのもちつと手間を喰くいますが……ま、そのへんは仕方ねえ、また九条あたりのごろつきに集めさせましょう。ちよいと先立つものを工面して貰もらわにやならねえですが」

「それはどうにでもなる」と、機嫌良く言い切った顔が、しかし転瞬たちまち曇くもってしまう。どうも別当は顔色まで忙せわしい。「今月中と言ったな。既に半ばだ、あと半月しかない」

「あと半月もある、と考えなせえ、御令。なあに、あの三人がいなえなら却かえつて詰まらねえくれえのもんです。時間はまだまだある。忙しねえのは御令の顔色だけだ」

言つて、呼師は無理にも明るく笑つた。別当も笑つた。今度は「別当と呼べ」はなかつた。

今月中は堅いと言つた呼師であつたが、実際のところは全く見通しがたつていない。あるいは屍鬼どもはとうに蹴散らされて、前に挙げた三人は今ごろ自宅の枕頭ちんとうに憩いこつているかも知れない。それでもこれ以上、目の前の若者の心労を殖ふやすことに彼は賛成できなかった。

（なんとかかこの機会に一步でも前進せにやなるまいて。 なんとたつてひとりだけじゃねえからなあ）

目下、藤原基経暗殺は最優先事項であつたが、謀事の全体から見ても重きを置くにしろ、それは一部分に過ぎないのである。足踏みもそうそう長くはしてられない。

「御前もきつと嘉よされる。そうだ、お前にも褒美を考えておかなければいけない」

別当はしきりに赤い目を瞬またたかせている。呼師は「なにゆっくり考えときますわい」と半ばうわの空で量はかしておいた。

彼は最前から考えていた。このいささか規模の大きい、それも余所事の隠謀を全まからしめんが為に考え倦あねていた。良さそうな献策のひとつふたつは温めてあつた。しかしそうすることに備えてはいても、そのこととは別方面の障さりから、彼にはこの謀事が成就まじするとはいまひとつ確信できずにいた。別当 彼にとつての「御令」の執着が、その主な懸念けんのひとつである。

皮肉な話である。別当がそういった執着を捨てれば、ことの難易度は断然ひくくなるのだ。それでいて別当が為事の報こいいとして冀いうものは、どうもその執着を抜きにして考えることはできそうにないのである。而してなうお皮肉なのは、別当がそれに気付いていない、ということであつた。

(単独行動は最後の手段。だが、あるいはそう遠くねえうちに使うことになるかも……)

「彼奴らが帰京する前に動かなければ　呼師、哭師は見つかったか」

別当がふいに、まったくいまいましい出したような口調でそう言った。言われたほうもそれまで忘れていたくらいであったので、

「哭師かあ、まあまったく影も拝めねえたあこのことで。洛中ごとく風潰しにしたんですがなあ、どこにもおりませんわい」

ちよつと誇張気味に嘯いておいた。実のところは吟師に任せきりで、ついに搜索の労を執ることはせずに過ごしている。

「あれはもう諦めなせえ、別当。言師の最後がよつほど堪えたに違えねえ、今ごろはもうとつとくに西なり東なりに落ちていった後でさ。あるいは桂川に浮かんでるなんて　」

「止める呼師。わかった。滅入る」
「こりゃ口が過ぎましたかな」

思い兼ねたように俯いて、脂気の乏しい白面を両手でごしごし遣ることしばし、別当は「哭師はもはや当てにすまい」と呟いた。矢場に上げた面は、果たして「別当」のそれに立ち返っている。

「呼師やるぞ」と、若者は奮起した。「歌師と吟師を急ぎ集める。明々後日の……丑、場所はこの屋敷を使う。あの二人はとにかくふらふらし過ぎるから、いいか、絶対に逃がすなよ。このうえあれらまで検非違使どもの手に落ちるのは困る」

「歌師にやよく言い含めて、小遣い稼ぎは已めさせてあります。吟師もまあ、最近は自重してるみてえですし、大丈夫たあ思います。が言つときましよう」

「良く言っておけ。万全を期すために全員の到着を待ってからやる、遅参は今度こそ馘首につながる」と

呼師はつらつと応えて、

「御令こそ次もそんな首を持って来られちゃあ困る。御用向きは大概にして、いい機会だ、ちよいと休みなさるがいい。　ひでえ

貌かおですぜ」

言つてひよいと席を立つた。決が出たとなれば、これいじょう話をして彼の不安のタネをいたずらに萌もやしてやることは避けるべきである。

「呼師、別当と呼べと言つたぞ」

塗籠ぬかごを出る間に言われて、彼はあらためて室内の闇に眼を戻した。別当は疲れた貌かおに靨えくぼを浮かべている。

「夜更かしは止しにして、早うお休みなせえ御令。まったく

そついうとは母親似でいけねえ」

捨て科白しりばをあとに、呼師は肅々と塗籠から退室していった。

四月十五日 戊午 酉一刻

七条大路しちじょうだいちに差し掛かったあたりで、馬上の経足つねたりが「腹へつたつすと打ちだした。

ちようど大路の辻つじに若い物売女ひんかめが三人、桧物ひものの桶を地面に放り出しておしゃべりに夢中になっている。おおかた彼女らを見て寄り道しようとも考えたのだろう。

「買わんぞ」道説みちとぎはにべもない。

「いいつす。おれ買うから」経足はくじけない。

「経足勤務中」冷たく忠岑ただみね。

「小腹の減る時間ですな」取りなす昆博やすひろ。

四人の言い合っている間に、前を歩いていた放免ほうめんどもの五、六人が、わらわらと物売女の辻へと駆けていく。目当ては商品が売りびとの器量か、依然として検非違使たちの前を守る放免の数人が声高に「鏡みたことあらへんのか」などと喚わめいているからには、おそら

く後者のほうであろう。

「こら駄馬ども、務めに戻れ！ 路草くつたぶん刑期を延ばすぞ」
「放免も徒刑には違いない。彼らにとつて「刑期を延ばす」は概ね殺し文句である。道説の喝に従つて不承ぶしよう、放免どもは手を振る女たちから離れた。彼女らも退屈していたのか、あながち満更でもない貌をしていたのだが、最後まで粘っていた放免のひとりがひよいと桶の中のを摘んで走り去るのを見るや、たちまち機嫌を損ねてぶつぶつ遣り始めた。

「どろぼうやあ、饅頭返せえ」

「ほんまやあ、検非違使ちゃうんか、おあし払わんかあい」

「検非違使が饅頭盗つたでえ、鬼退治のいつかい検非違使やあ」とことこ追いつがってくる。仲間の二人も「義を見てせざるは勇なきなり」とばかりにそれに続く。貧しげな放免よりも、銭を持っていたそうな大男に食らいつくあたりが、なんとも狡辛い。

「重行さん、こないだ皆のぶんまでまとめて買ってくれたんす。重行さんなら止めたりしないっすよ」と経足。

「そりや重行さまと道説さまでは、手綱を緩める機というものが違つただから……」と昆博。

「なんだ放免どもみたいなことを吐かすな、真面目にやれ」と忠岑。

「その背の負櫃に糲が入っておるぞ、それでよければ嚙っておれ」と道説。「ええやかましき雀どもよ。それ、これで文句なかるう」
不承ぶしよう懐を探つて、道説は掴みだした銭の十数文を女たちの足下に撒いた。女たちは獣じみた素早さでそれらを拾つて、つぶさに銘を検めだした。額に満足したのか忙しいのか、それきり追いかけてくる気配はない。

（ええくそ、銭の乏しきときに……）

武装した男たちはぞろぞろと大路の流れに乗って、進路を西に取つた。

前を往く放免どもは弓を持たない。みな似たり寄つたりの菱烏帽

子と粗末な布衣ほいとに、飾り気のない腰刀だけを得物としている。辺りを睥睨へいげいしながら練りあるく彼らの後ろには、退紅衣たいこうに五倍子鉄漿ふしがね染めの黒い革脛巾かわははきと籠手こてとで身を鎧よろい、帯びるやなぐいの征矢そや廿筋と必殺の腸繰わたくり一筋、重藤しげとうの大弓と衛府えふだち太刀とで武装した検非違使けびいしのかち火長ようが三人と、彼らに左右後を囲まれた検非違使尉けびいしのじょうが並足に揺られて続く。げにもありふれた検非違使の一行である。

前の物売女などは例外で、大路を徂徠そらいする人びとはあまり彼らと眼を合わせない。道も極めておとなしく、それも行き合わないほどの遠くから譲る。眼を合わせず道を譲って、通り過ぎてから密かに耳打ちを交わすのである。が、これらはなにも彼らの帯する弓箭ゆみやを恐れるためではない。これほどとみに避けられるようになったのは、どうやらここ最近のことであるらしい。

（法師狩りは好意的に受け取られぬようだ）

検非違使の追捕つうぶというものは非常に荒つぱい。彼らは「検非違使」というわりには、ほとんどの場合その場で非違ひつゐを検めることはしない。まずはなにがなんでも引っ捕らえて獄ごくにつなぎ、尋問はそのあとじっくり行う。

追われる被疑者はたいてい、苦使くしや笞たいでは済みそうにもない重犯罪者がほとんどである。捕まったあとの運命をいやというほど心得ているので、従容ぼくと縛ばくにつくことなどしない。頑強に抵抗する。もしそれが身に覚えのない人間だったとしても、獄に連れて行かれるまでの運命をいやというほど心得ているので、やっぱり頑強に抵抗する。

ちなみに痛い目に遭いたくなくてじつとしていても、果たせるかな、そんなことはお構いなしの放免ほうめんどもに頑強に小突き回されるのがオチである。そんなわけで、たとえ晴れて無罪を認められたとしても、たいてい獄を往復したひとつというのは歯が折れていたり鼻血を流していたりするのが常であった。

これが人相凶悪なむくつけき大男であれば宜むなるかな、京雀きやうせきたちも口々に褒めそやそうというものだが、このたびの捕り物である法ほ

師という人種は、言うまでもなく「法師」然としている。つまり、見た目はたいてい人畜無害そうな、あまり肉体労働に向かなそうな時には頭の良さそうな、ひよっとすると偉そうな人びとである。巫女もいる。

真偽のほどは定かでないにしろ、彼らのようなものが泣いて無罪を主張するのを、前述した武装集団が寄つてたかつて蹂躪する景色というのは、なるほどあまり映えるものではあるまい。けだし衆人が道理の那辺にあるやを取り違えがちになるのも無理はない。

「放免どもを甘やかさないほうがよろしいかと」

右手の忠岑が放免どもの菱烏帽子を睨みつけながらそう言った。

「また鹿丸です。あの曲者めこれで四回目です。道説さまが甘くなさるから付け上がっています。制裁を加えなければ他のものどもも増長しますよ」

「そうだなあ」

「トキさん銭ないんだからやせ我慢しないほうがいいですよ。他人に衣なんか詭えてやる余裕あるんすか」

「いよいよ困ればお前の衣を剥ぐわい」

「九条にお知り合いがおられるとは初耳ですな。道説さまのご朋輩はたいがい存じているつもりでしたが」

「んん、最近知り合つた」

折々放免どもの奔放を叱りつけながら、一行は揺々と堀川を渡る。東市を突つ切り鴻臚館を過ぎれば、人士牛馬あい行き交う朱雀大路の雑沓は暮色に明るんだ。人気こそなかなか退かないが、陽は傾きつつあった。

「非違検めエ！ 非違検めエ！」

との喚声を遠くに聞いたのは、まさに大路を横切らんとしたときであつた。

「トキさん捕り物かな」

「道説さま助勢を」

「ここからなら挟撃できますな」

「……あれは」

馬上からは、大内裏の方角からもうもうと塵煙じんえんを上げながら走り来る十余名の放免どもと、それらに追いつがられてひた走る若者の姿が見て取れる。追われるほうはすすいと人びとの合間を縫うのだが、追うほうは誰彼かまわず押し倒す。蹴たぐる。ここに来るまでになにがあつたのか、すでに腰の物を抜いて大いに剣呑ていの態である。

「佑！ おおい、佑たすくかつ！」

大男が馬上で伸び上がって大音声だいおんじょうを放つと、追われていた若者は地獄に仏とばかりに「道説さまお助けを！」と叫んだ。

「者どもあの青年を守れっ！ 昆博忠岑来い、てえっ！」馬腹を蹴る足も荒々しく、大男は真つ先に馬を賣めて佑の前に飛び出た。

「止まれとまれ放免どもおっ！ 左検非違使少尉菅原道説さけびいしのしやうじやうなり！ 左検非違使少尉菅原道説すがわらのみちときなり！ てえっ！」

ただでさえ声のでかい道説が、「止まれとまれ放免ども」のくだりでは大分に声を囂からして怒鳴つたのである。その巨軀きよくとの相乗効果もあつて、言われた放免どもはおるかこちらに駆け寄ってきた佑も含めて、そのあたりにいた人びとのほとんどは、まるで疾駆する虎にでも出交でくわしたかのように「うわあ」と後退つた。

「な、なんじゃ、左検非違使の御大おんたいがなんで邪魔を」

「ええ黙れだまれ狼藉者ども！ 善良なひとを追い回しおつて、貴様らどこの下部しもくだ！」

遅れて火長たちが大男に追いつく。佑は放免どもの人垣に隠された。

「道説さまここは落ち着かれて」

「まずは話を 放免、お前たちの上司じやうしはどこにいる」

「トキさんおつかねえ……」

少尉しやうじどのの貌は言うまでもなく、すでに怒れる不動明王ふどうみやうのそれである。大喝された放免どもは仏罰ぶつばつを蒙かぶつた邪鬼じあくのごとく、すっかり震え上がっている。昆博と忠岑は矜羯羅こんからと制多迦せいたかの両童子りやうどうしよろしく、

お不動さまの袖を左右で掴んだ。

「道説さま、話は私が」と言つて、昆博が一步前へ馬を進めた。

「お前たちはミギか、ヒダリか」

「ミギで。わしらは、あの、平少尉の供で……」

「平少尉……輔広さまか？」

「へい、右京で」

「どうした、なにがあつた！」

突然と声が上がつて、「ミギ」の放免たちがわらわらと左右に散つた。彼らの間から騎乗した火長が五名と、彼らに囲まれた検非違使尉がやつてくるのが垣間見える。

(澄世)

右検非違使の中に見知つた顔がある。目が合うと、よれよれの退紅衣の中年男 浄野澄世がにっと笑つて目礼を返してきた。

「捕らえたのか」

「あのう、こちらさんが」と、「ミギ」の放免が道説たちを遠慮がちに指した。

「……………」

火長たちに「ここで待て」と言い置いて、単騎で左検非違使の前に進み出た男 平輔広が、

「管少尉、委細話して貰えような」

不機嫌を隠さずに言った。

「公務に協力するならいざ知らず妨害の拳に及ぶとは、左検非違使は右検非違使になにか含むところでもあるのか」

(くそ……それはこちらの科白だ)

「委細もなにもなかるう」妨害云々のくだりは無視した。「貴様らの追い回しているのは陰陽寮のひとだぞ。そのあたりの不良法師とひと絡げにする法があるか」

「その男も同じようなことを主張した。が、我らが今まで捕らえてきた法師どもの幾人かも、似たようなことを嘯いて罪を免れようとした経緯がある。詮議なしにそやつだけ逃がすわけには参らぬ」

「おれが保証する。おれは彼を知っている」

「管少尉の保証は当てにならぬ。鬼霊を斬ったなどと吹聴する輩の保証など」

「……………」

「そもそもこの追捕、そやつが公務を妨害したことに端を發している。そのあたりの話は聞いておらなんだか」

「……佑、まことか」

言われて、佑が放免どもの垣からそろそろと出てくる。輔広を睨みつけながら、「無抵抗の女子を齒が折れるまで殴りつけるのが貴方がたの公務だと言うのであれば」と一息に言い放った。

「輔広、貴様の遣り方に問題があるようだな」

「……そうだとして、それは貴様をしてそやつを庇う正当な理由にはならぬ」

道説、齒噛みして右検非違使尉を睨めつける。火長以下も上司に倣う。朱雀大路の真ん中をヒダリとミギに割って、放免同士、火長同士、検非違使尉同士が睨み合うかたちとなった。大内裏からたま輔広たちのあとを慕う形でやってきた牛が二台ほど、うしろであわれ往くも退くもならず、もうもうと所在なげに蠢いている。

「……まずこれだけ言っておこう」と、輔広はあくまで静かに前置いた。「その男が陰陽寮の人間であるという確たる証拠がない。またそれを実証できるのなら逃げる必要もあるまい。仮に陰陽寮の人間であったとして、そのことを以て禍事を企てぬという保証とすることはできぬ」

「ではまず陰陽寮に問い合わせて」

「まずすべきは！」と大声を出して、輔広は道説の物言いに言葉をかぶせた。「そやつに余人が接触できないようにすることだ。管少尉、貴様とて志から叩き上げた非違の一人であろう。情に眼を曇らせてさようなことも忘れたのか」

「……………」

輔広の言い分には一理があった。検非違使が被疑者を問答無用で

獄に連行するのは、ゆえのないことではなかった。

武力を以て庶人に警察力を發揮する検非違使は、ありていに言つてあまり好かれる人種ではない。追捕の対象がどのような凶悪犯であつても、見てくれがそれほど悪くなく、ある程度の演技力を具えていれば、事情を知らない衆人の同情を買つのは難いことではなかつた。検非違使がこれこれこういうわけで逮捕すると宣つても、人違いだ無実だと泣けばそれだけで、検非違使のほうを指弾する人間も出てくるのである。ちくいち理を説いたとしても、庶人、別けても大勢のそれは、自分たちがわからないこと、わかりたくないことは絶対理解しようとしなない。却つて感情的になるだけである。

また大規模な強盗や殺人は、多く単独でなされることが少ない。路端で主犯格を押さえたとしても、えてして周囲に検非違使の目を免れた仲間のいることが多い。彼らが口を揃えて犯人の身の証を立てたとしたら、それらを覆すのに尋常でない時間がかかるばかりか、下手をすると論破されて京雀たちの非難を一身に集める事態にすなりかねない。凶徒追捕は少尉志の為事だが、逮捕の内実を十全に理解しているものは実のところあまりおらず、またその必要もなかつた。実際に追捕の対象を明法に照らして非違を判ずるのは、事務官である大尉志の為事であるからだ。

凶徒追捕の則とはすべからく「聞かず利かせず捕らえて隔離」であり、時と場合によつてはそこに「殺害」の選択肢も入ってくる、かなり一方的なものにならざるをえないのである。

「管少尉、わかつたのならその男を引き渡してもらつ」輔広が下部に向かつて顎をしゃくつた。「管少尉のお知り合いということだ、丁重に縛つて差し上げる」

「待て、待て！」と道説、なおも右検非違使の前に立ちふさがる。「放免ども彼を護衛せよ。輔広、彼の身柄はおれが預かる」

「たわけたことを吐かす前に、まずおのが行為の正当性を証してみせよ、管少尉。検非違使の駄々ほど見苦しいものはない。法の一端を担うものとしての恥はないのか」

(うつくそ、言いたい放題言いおつて……反論できぬ)

道説、ひと言もない。相手の言っていることに非らしい非を認められないのである。討論は彼の苦手とするもののひとつであった。

「いで、管少尉。証すべし」

「……………」

「管少尉」

「…………彼の身柄はおれが」

「話にならぬ」ひとつ舌打ちをして、輔広は腰のやなぐいから征矢を引き抜いた。それを合図に、火長のうち四人が同様に弓箭を執り、放免どもも上司たちに倣つてぱらぱらと腰刀を抜いた。道説以下、左検非違使たちは及び腰である。

「ト、トキさんどうすんすかっ」あわてて太刀を引き抜く経足。

よほど動顛どうつんしているのか、右手の弓にそれを番えつがようと悪戦苦闘している。「いいの？ や、やっちゃうの？」

「澄世さん、輔広さまを止めてください！」忠岑は得物を執らず、しきりに相手方の火長のひとりに訴えかけている。「輔広さまも！

検非違使同士あらそうなんて馬鹿げてる！」

「双方ただでは済みませぬぞ、右検非違使のかたがた」この非常時にも落ち着きを失わないのは年の功か、昆博は泰然として大弓に征矢を番えた。「放免抜け、抜けっ！ これは正当な自衛行為である！」

(まずい、くそ、どうすればいい！)

思わず矢柄に手が行きそうになるのを抑えながら、道説は不安げにしている佑を見る。この期に及んでいまだ表情に乱れたところのない、輔広の切れ長の眼を見やる。忠岑の請願を容れたのであろう、傍らで火長の澄世がしきりに説諭せつゆを試みていたが、輔広はまったく耳に入れていない様子である。

「黙れ澄世。お前にことの善悪の判断のつかぬはずはあるまい、非は彼らにあり」

「いえ確かにあたしも良かないと思いますが、ここで身内同士んごうちうじに

傷沙汰起こすよりやずつとましでござんしょう。ここはひとまずあちらさんに預けて、うしろから一緒について行けばようがす」

「聞けぬ。況しておのれがなにをやっているかもわからぬ愚物の言うことなど、なお聞けぬ。あれらは我らが為事を横取りしたのだぞ。おまけにあの法師め」

「愚物なら輔広さまの目の前でしゃべってる男もそうですて。愚物ならそのあたりにざくざくいますな、賢いひとは愚かものと同じ地平に立つちゃあいけません。堪忍しておあげなさらなきや」

「もういい下がれ澄世。 管少尉、確かにここで刃傷沙汰は馬鹿げている。いるが、こちらにはそうするだけの正当な理由がある。そちらにはない。もう一度だけ言おう、その男を大人しく引き渡せ」

(…… 佑はまぎれもなく陰陽寮のひとだ。引き渡してもいつかは身の証を立てるだろう。 いや、それは保証にならぬとこやつは言ったではないか。法師であることに違いはないのだから、どのみち難詰なんきつを受けることは避けられぬ。それも左検非違使おれたちが絡んだのだ、こやつは仕置するに、きつと大いに怨恨を加味する……)

「…… 管少尉の口は飾りか。ものども脚を狙え、放免どもは刃を返せ」

「まつ、待て」

半ば好奇心から遠巻きにしていた庶人が、両陣営の剣呑を察してあわてて方々へ散る。朱雀大路に緊張が走り、「や、やってやらあ！」と経足が勇み 而して最前からうごごごと所在なげにしていた牛車が、なんの前触れもなく右検非違使たちの尻にのしり突っ込んできた。

「なにやつ」

「御通！ 御通！」

輔広を筆頭に、追突された右検非違使たちのぶつぶつ言い出しかけたのが、牛車の供の警蹕けいぱくにたちまち押し黙った。

件の牛車、真っ赤な蘇芳簾すおうすだれも鮮やかな檳榔庇びんろうひさしに、とろりとした黒塗りの、榻しじといわず棟むねといわず格子といわず、並べて黄金・玉細工

で飾りたてられた絢爛たる造作である。いかな物も知らぬ人間であるうと、それに乗るのがよほどの貴人であることには思い及ぼう。突然のきらきらしい闖入者に双方呆然、水を浴びせかけられた形となった。

「庶人が怯えていますぞ。双方とも、その物々しいものをお下げなさい」

「御通、御通」とがなっていた、舎人と思しきやたらと体格のよい男が、単身ヒダリとミギの間に割って入ってきた。身丈こそ道説に及ばないものの、四角張った顔の下はがっちり太やかな造りで、一見してただの雑用夫でないことが窺われる。

牛車と舎人の登場にいささか面食らっていた輔広が、それでも我に返って、

「……うちにおわす御方、やんごとなき貴頭とお察し申し上げる。路を塞いだは謝罪いたすが、これも公務のうちにござれば、お口出しは無用に願いたい」

堂々と言いつつ。言いながらさりげなく征矢をやなくいに戻した。舎人こたえて曰く、

「民を脅す弓負うを以て鞆負を称されますのか、公務を語られますのか、判官どの。禁門を背に叛人を的とするのが鞆負の公務であると聞きます。あなたの今なすっているのはその類なのでしようか。わたしには同輩と諍って武器を振り回して、公序を濫りにしているがごとく見受けられますが、判官どの。さようなことをする人びとを取り締まるのが、あなたがたの公務ではないのですか、判官どの如何」

弁舌さわやかにして淀みない言葉である。輔広、論破されてひと言をも発せない。口の回らぬためにいいように遣り込められた道説としては、心中大喝采を禁じ得なかつた。

（うつむ、立板に水よなあ。輔広め、よい気味だわい！　それにしてこの男、どこかで見たような）

「御前です。双方馬上よりお降りに」

(たしか、そう、太政大臣おおきおとの御在所ごにしろにいた……名は藤原なんとい
うたか……太政大臣?)

「おつ、太政大臣!」

牛車うしぐるまに坐す貴人の正体に見当をつけるや否や、大男はひとたまり
もなく馬上から転げ落ちた。一拍おいて輔広も同様の手順で道説に
倣い、口を半開きにして事態を眺めていた火長たちも我先に下馬す
る。放免はなまどもはたちまち蛙かわずのごとくに這いつくばり、最後まで馬に
跨またがつてぼんやりしていた経足は速やかに道説に引きずり下ろされた。

「佑、これ、佑! 無礼ぞ!」

めいめい膝をつくなり額ぬかずくなりするなかで、佑ひとりだけが呆
然と立ち竦すくんでいた。道説に注意されるや我に返って平伏したが、
その面は時おり盗み見るように、ちらちらと蘇芳簾へ向けられてい
る。

(そうだ、この青年は藤家とうけに含むところがあるのだったか……)

「斎雄しきお、典章てんしょうどの声がしたの」

ややあつて御簾みすの向こうから、老いた、しかし張りのある声が飛
んできた。「そうだ斎雄だ」と、道説は心中膝を打った。

「はい、ここにおられます」と、斎雄は大男のほうを向いてちょ
っと笑った。声をひそめて、「あなたのことです、道説どの」

(……典章どん?)

「典章どん、なんじゃ、仲違なかつがいしておるのか」

「あ、いえ、お恥ずかしき限りで」

「いかんのう。武器を持つとるもん同士がの、このような往来で
喧嘩けんかなぞしたらの、検非違使けんびゐしに捕もつてしまつぞ」

道説、たちまち押さえつけられたように額ぬかずく。ここに最前から
黙もくっていた輔広すけひろが息を吹き返して、

「恐惶おそおそ、諍じやういの罪は管少尉くだんせうゐのみならず、卑官ひかんとにも等しきこと。

しかしそのゆえはひとえに、あれなる管少尉くだんせうゐが咎人とがびとを庇かばつたにござ
ります」

「畏かしこまつて言った。」

「だれじゃね、今のは」

「は、右檢非違使少尉平輔広が卑見つかまつります」と言つて、
輔広は威儀を正して立ち上がった。「咎人を追い、情からそれを庇
うた同輩と争い合うところ、図らずも大臣の見参を得ました次第。
理を説かんとして矢を手にしたは、これ卑官が非にて、しかし最初
に理非を違えたるは管少尉のほうであると 卑官大臣を偽らざる
を以て申し上げますれば、まことこのように言わざるを得ませぬ」

(くそ、輔広め……)

非常に厄介な展開であつた。相手をさりげなく庇い、自ら至らぬ
ところを陳べ、しかし非はしっかり押し付ける。輔広の口は滑らか
で、かつ間違つたことは言っていない。一方的に悪者にされてい
ても、反駁の言葉をもたない道説は黙るしかなかった。

大臣は「ふうん」と気のない相づちをひとつ打つて、

「その咎人とやらはなにをしたんじゃ。物でも盗つたのかの」

「いえ、卑官が公務を妨害しております」

「路で喧嘩する公務をかの」

「……いえ、正当な手続きの元に行われた追捕にござります。お
おかた仲間のひとりであつたのでしようが」

機とばかりに道説立ち上がった、

「無抵抗の女子を」

「管少尉、今はわたしが申し上げている。今すこし黙したまえ、
すべて話し終えたらわたしはそうするから」

「う……」

逆襲しようとするも、あっけなく抑えつけられてしまった。これ
ばかりは太刀を振り回すようにはゆかない。

「折しも法師摘発を厳にしている最中にて、ましてその男」

「ま、よいじやる、免じてやるのじゃな」

なおも言い募るのを、大臣は煩げに遮つた。心底どうでもよさそ
うな口ぶりである。

「は、しかし明法に」

「免じてやればよい」

「仰せですが、彼奴のみ逃してはこれまで」

「ええ喧しき男よ」と、大臣は大きな声を出した。「わしは免ぜよと言つたぞ。それでもなおどうでもその咎人とやらを連れていきたいと言つたら、証拠を持って堀川院まで出頭せよ。金吾どんも呼んで誰にどれだけ非があつたかとことんまで追求してやるわい」

さすがの輔広も顔色を変じた。大臣の言つ「金吾どん」とは、この場合おそらくは左衛門督 検非違使別当源能有のことであろう。ささやかな捕り物の顛末を審問するというそれだけの為に、事をあの華美の要塞のごとき大豪邸の真ん中で、一位三位の雲上人の前にただひとり畏まるような大事に発展させるのは、たとえどれほど持論に自信があつたとしても「それはそれ、これはこれ」である。

「どうなんじゃ、『卑官』どん。わしはどちらでもいいぞ」

「……いえ、大臣がお心のままに」

輔広は折れた。而して道説のほうへ多分に恨みの込められた眼差しを向けた。さだめし道説と大臣の誼を疑い、依怙の沙汰を疑っているのである。これまた厄介な展開であつた。それが輔広の誤解かと言えば、道説にも否定しがたいのである。

(輔広のやつ、これでなおいつそうおれたちを疎んずるようになるであらうな。大臣もいまだ少し公平にお計らい下さればよいものを……)

かかる事局を打開する手立てを持たなかつた道説ではあるが、大臣の計らいはまったく有難くも迷惑でもあつた。

「さあ、諍いのタネはなくなつたのですから、各々がた肅々と公務に戻られますよう。我らがここに陣取つていては往來の邪魔になります」

斎雄が手を打つて解散を促した。道説を睨んでいた輔広は、視線を転じて佑へ火の一瞥を送り、「ものども使庁へ戻るぞ」とひとこと宣つや馬上のひととなつた。

「管少尉も速やかに公務へ戻られるべし。 佑とやら、二度は

ないと思え」

捨て科白も棘いばらしく、輔広以下右検非違使たちは踵かかとを返した。上司の意を体してか、左検非違使たちを後目しじめに見る、彼らの視線は冷たい。

「……澄世、たまには顔を出せよ」

最後尾の火長は口こそ開かなかったが、振り返って会釈を返した。

「典章どんは検非違使に向いておらんのではないか」

とのひと言を残して、大臣は朱雀大路を下っていった。

「佑、怪我はないか」

「いえ、このとおり」

このとおりもなにも、佑は尾羽おほはう打ち枯らした散々たる態なりをしている。幾度か追いつかれて揉み合っただろう。顔に出たのを見てとったか、青年は道説に向かつて「大事ありません」と両手を広げて見せた。

「道説さま、お知り合いのようですが……」

訝いぶかる火長たちを代表して、昆博が佑の紹介を求めた。牛車が去るまで待つていたのだらう。三人とも右検非違使たちとのいざこざの原因になった青年を、あまり良い目で見えてはいない。放免どもの顔などにはみな一様に「誰だこいつは」と大書してある。

「おお、このひとは陰陽寮の、あー、陰陽師おんようしでな。……それ経足、お前には話したことがあつたであらうが」

「ああつ、羅城門らじょうもんの！へえー」と経足。その瞳にはや不審のいろは見られない。「あれっしょう、トキさんと一緒に、えーと、鬼どもをなぎ倒したんだっけ」

「……いえ、わたしは陰陽師では」と佑、妙に寂しそうにしている。

「佑どのといえますか」と忠岑。経足ほど無邪気にはなれぬよう
で、彼はいまだ一抹いちまつの不審を眉根に刻んでいた。「お考えあつてのことでしょうが、検非違使の追捕を邪魔するのは危険ですよ」

「まあ言つな忠岑、輔広の遣りようも非道ひどだったのであるう。義を見てせざるはなんとやらだ」

「お言葉ですが……」と昆博。道説に言つというより、むしろ佑の短慮たしなを窺うかがめるといった口調で、「輔広さまはやや極端ではありませんが、はきと非違の明らかならぬうちは、決して手を上げたりならぬお人です。無抵抗の女子などと言つておいででしたが」

「ええ、はい、追捕の対象は男のようでしたが、そのあと家から男の娘が引きずり出されてきて……」

「殴られた？」

「ええそれはもう。放免どもが、こう、男の首に刀を擬して、逃げたらこいつを殺すと女を脅すんです。彼は娘はなにもしていない、許してくれと言つて泣いていました。非道い有様だった。女は誰彼かまわず助けを乞つて……」

昆博、しばらく思案氣にしたあと、

「……現場を見たわけではないのでしかとは言えませんが、おそらく追捕の対象はその女であつたのだと思います。男は親と言うよりはむしろ……恋愛関係にあつたのではないのでしょうか。いずれにせよ共犯者、それも親しい間柄の人間ではないかと」

「なぜそう？」

「現場は右京三條ウキョウさんじょうの辺りでは？」

「……右京、三條、ええ、その辺りかな」

「あ、へぎ蜘蛛？」と経足。

「へぎ蜘蛛」と忠岑。

「……佑、その女は逃げたのか」と道説、聞きながら頭を抱える。「はい、逃げました……」と困惑顔の佑。

(もし『当たり前』なら……これは輔広が怒るのも無理がないわい……)

へぎ蜘蛛とは、とある盗賊団の首領と目されている女強盗のあだ名である。夜暗にまぎれて数十人規模で右京を荒らしまわり、久しく検非違使の目の敵にされていた重罪人であつた。首領格が若い女

であることも、右京五条以北（みぎきょうごじょう）に潜んでいるらしきことも、すべて右
檢非違使たちの飽くなき追跡と執念が齎もたらした情報である。

ちなみに名前の「へぎ」とは、手下どもの犯行に及んで女を姦す
ること甚はなはだしき手口からつけられたもので、そのほか強盜傷害殺人
付火治安攪乱とその狼藉きわまって収まることなし。まさに犯罪の
見本市であった。無論、その罪の軽重を問えば「苦使や答では済み
そうにもない重犯罪者」に該当するであろうことは間違いない。と
いうより、見つけ次第その場で処刑されてもおかしくないほどの大
首級である。

「まあ、佑どのも知ってそうしたわけではないのですし、その女
がへぎ蜘蛛であったという確証はありませんし……」

昆博はあわてて、自分で言ったことを自分で取りなし始めた。口
ほどにもなく「当たり」であったであろうことを悟ったに違いある
まい。いくら檢非違使の遣りようが荒つぽいと言つても、親しい人
間を捕らえて「逃げたらこいつを殺す」などと恫喝どっかつするのはよほど
のことである。

「まあ、そのなんだ、大臣がいらしてくれてよかった。おれだけ
であつたら血を見ていたやもしれぬ。佑も感謝せねばなるまいが、
なあ」

道説が「大臣」の話題を振るなり、佑はちよつといやな顔をして
「道説どの、お勤めですか」とあからさまに矛先を逸らした。

「ん？ おお……いやな、勤めは勤めだが」

（やはり大臣を好かぬようだ。陰陽頭さまになにを吹き込まれた
かは知らぬが、こりや根が深そうだな）

「ちと私用で おおそうだ、佑よ、いま時間はあるか」

道説は答えを待たずに経足を手招いて、彼の背負っていた小振り
の負櫃を示した。

「……これは」

佑が櫃の中に見出したのは、麻のひと揃え 下ろしたての水干すいかん
と袴、単衣ひしえに帯、その他若干の干物の類であつた。

「季満すえみつがまだ寝込んでおるだろう。あれが衣を盗られて着るものがないなどと言っておったので、ちと誂あじえさせてみたのだ。それ、広げてみよ」

「トキさん太っ腹」

「黙っておれ。　　どうも、あれの体格がようわからんので。大きくはなかるうかな」

「いえ、こんなものだと思いますが……道説どのがこれを、その、ご自分で？」

「馬鹿を言え」と笑ってほどなく、佑が裁縫云々ではなく代金について言っているのだと気付いて、「ああいや、そうだ。　　代しろは、そうだ」

道説の背後で忠岑が嘖き出し、間を置かずそれに和する経足、昆博の声が上がった。てんでに顔色を変える検非違使たちを見遣って、佑は笑いたいような泣きたいような奇妙な表情を浮かべている。

「その……季満に代わりまして、お礼を申し上げます」

言って、青年は烏帽子頭えぼしあたまを深々と下げた。「あ、これ、またそういうことをする！」と、道説とびあがって大いに恐縮の態である。

親しく言葉を交わすようになったからといって、どうも学への尊敬の念が消えたわけでもないらしい。

「ええお前が頭を下げることはなかるうが、おれもやりづらいら　　こら貴様らいつまで笑っておる！　　経足っ！」

「なんでおれだけ……最初に笑ったのミネさんなのに」

「で、佑よ」ようよう佑の烏帽子を立てて道説いわく、「そのなんだ、お前がこれをあれの処へ持っていってくれると助かるのだが」
「届けばよろしいのですか？　それくらいならお安い御用ですが……」

青年は相変わらず妙な顔をしている。

「うむ頼む。おれも顔を見に行こうと思っておったのだが」

「勤務中すけどね」

「経足あとその口を縫ってやるから覚えておけ。　　なに、前まき

のようなことがあったからな、左おれたち検非違使が右京に行くのは避けたほうがよさそうだ。ひよつとすると彼奴らめ、あとを付けてくるかもしれないぬ」

「そうですね、そうしたほうが」

「では頼むぞ。もしかた輔広めがなにか言ってくるようであれば、大臣が名をお借りするのだぞ。道説にそうせよと言われたのだと、そう言え」自らの口調に得意げなふうを見出して、道説はじきに「我ながら狐借虎威の類ではないか」と恥じた。「……経足、それを佑に」

佑は案外すんなりと道説の提案を呑んだ。が、頬がどことなく意味深に持ち上がっているように見える。道説のささやかなせんしやう僭上を侮ったか、大臣の名を使うことに抵抗あつてのことか。経足から受け取った負櫃を背負ったあと、佑の表情は変わらないままであつた。

「みな、このまま大路を上らん。放免ども先往け。ではな」

「ええ、また」

佑は検非違使たちと背中合せに大路を下っていった。

「トキさん」

「なんだ」

道説は火長のほうを見ず、背中越しに佑の烏帽子が上下するのを見守っている。

「おれの口を縫うって話」

「おお」

「トキさんが、その、ご自分で？」

と、経足が佑の言葉を真似たとたん、ふたたび忠岑が盛大に噴き出した。昆博がそれに続き、そろそろ良かろうと経足が大口を開け、

「あつ……佑、お前までなんだ！ これ！」

道説は背後に佑の大笑いする声を聞いたのだった。大路のど真ん中ではやがみ込んで身をよじって、櫃が横になるのも構わずに苦しげにしている。

「も、も、申し訳も……！」

「腹いてえ！ トキさんほんとに　！」

「ごさかしつ！」

不動明王の大雷撃が若き火長の烏帽子頭に炸裂した。

そののち使庁に戻るまで、直経足あたいのつねたりは通夜つやのごとく押し黙ったままひと言をも発しなかつたという。彼をして「しばらく左目が見えなくなつたつす」と迷懐じゆっかいせしめるほどの、それはもの凄い一撃であつたそうな。

The wailer X (後書き)

次話投稿に五十四日はバツだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1930e/>

たいらのみやこ

2010年10月10日02時31分発行